
セキレイ 翼と拳と恋物語

嘘口 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セキレイ 翼と拳と恋物語

【Nコード】

N9062U

【作者名】

嘘口 真言

【あらすじ】

新東帝都^{しんとつていと}。かつて東京だったその街は、今小さな戦場になろうとしていた。

一人の青年・白羽黒人がそんな街で繰り広げる、小さな恋の物語。

その戦の名は――

セキレイけいかく 鵲鴿計画。青年と少女達は、出会う

べくして出逢うのだった――

はい、気まぐれに書いたから適当にうpしてみた。

ええ、セキレイですよ。そして不定期更新ですよ。

続くかも解らないから期待せず暇つぶしにどうぞ、駄文をどうぞ♪

第零話 青年、語る（前書き）

一応プロログなんだが………こんな初めて書いたから、プロ
ログになってるのかも不安だよ。
さて、原作の設定が2020年だから——これは………使える

第零話 青年、語る

2020年、時期は春。桜が蕾をつける程度に暖くなったこの時期。いつもと変わらぬ光景。

町はいつもの日々。車が行き交い、人が行き交い、ものが行き交い、なにもかもがまじりあい溶け合うこの二十一世紀の大会。そんな街は、今日も今日とて平和だった。

「帝都大学の合格発表か……………若いねえ、あんなに頑張れて」

「今年もダメ、か……………二浪なのに、どうしよう……………母ちゃんになんて言えば……………」

青年はそう呟き、帝都大学の前を素通りする。現在その帝都大学の前には大量の人間が波を作り、大騒ぎになっていた。このうち三割は勝ち組で、五割が負け組、あとの二割は見る組だろう。

青年の視界には、さえない受験生の青年が落ち込んでいる姿が目映った。ああ、青春だなあと。

そんな街、そこは東京だった街——名を改め新東帝都
と呼ぶべきか。

地図としては東京に位置し、国籍も日本に存在するが、この土地は
既にある人物の所有地と化している。個人で所有出来る土地の広さ
ではないが、事実上ここは『彼』の庭なのだ。彼の庭で、彼の家で、
彼の遊び場。彼、その者の名は御中^{みなかひろこ}広人——世界を牛
耳るとまで言われる程に肥大化した企業『M・B・I』の社長だ。
創始者にして創造者、そして稀代の天才の一人である。

M・B・I——正式名『M I D B I O L O G I C I N F O
R M A T I C S』。

製薬会社に始まり今では世界のほとんどにその名を刻む一大企業に
発展した。その本社はこの帝都のど真ん中に位置し、この帝都で一
番高いとされるタワー状の企業ビルであり、外観は塔のようでもあ
る。そして何故かイギリスの時計塔^{ビッグベン}を連想させる。

今やスーパーから食品から運送会社から製薬会社から、なにからな
にまでその名を刻み、ありとあらゆる企業に精通する存在になった
その本社を、一人の青年が見上げていた。

視線を正面に戻すと、なにやら白髪の女性が深刻そうな顔で電話を
かけていた。

「焰か？ 悪い、また光と響がちよっかいを出していてな……………」
頼めるか？ —— ああ、すまん。助かるよ、今度店
に顔出すからその時に。ああ、感謝する」

閑話休題——青年の名は白羽黒人。^{しろはくろじん} 今年の末で二十一歳の美青年、フリーターである。

身長187cm、体重72kg、ビジュアル系っぽい顔立ちで、若干筋肉隆々な身体と肩にかかるくらいの長さの黒髪が特徴。デニムに黒革のブーツ、七分丈の無地・黒シャツを愛着している。

スーパーで昼食の食材やらの買い物を済ませた彼は、自宅への道中にふとこのビルに立ち寄った。

別になんの事はない、ただの気まぐれ程度の事だ。故に気まぐれにその場を立ち去る。

帝都のはずれにある自宅はワリと大きく、豪邸という呼び名が相応しい。一人暮らしには大きすぎるが、見栄を張るにはもってこいのサイズだった。一人暮らしとは言ったが実際は両親もいる——

のだが、世界各国を巡る仕事をしている為に、家に帰るのは年に一回あるかないか程度——が、いないのと同義。

そして余談だが——彼は格闘技と二次元が好きだ。

毎日アニメは欠かさず見るし、週刊誌も欠かさず読む。グッズも買うし、ゲームもする。

一人暮らしだから料理もするし、家事は一人でこなせる。そんな彼がたしなむ格闘技は、ある物語の主人公の武術をモデルにしている。その名を——まだ明かさないでおこう。

今から十年ほど前の話だが、彼はその主人公の武術にえらく感銘を受け、現存するあらゆる武術から利用出来る『オイシイ』動きばかりを抜き取り、その武術を現実的に再現する事に成功した。はやい

話、彼は『二次元を現実に持ち出している』のだ。それ故にその身体は人より抜きん出た筋力と腕力と脚力と体力と、全てが人並み以上に鍛え上げられている。否、そうしなければ空想を現実には持ち出せない。

そしてそんな彼にとって、現実こそが理想であり、理想こそが現実なのだ。

自宅に着くや否やキッチンへ一直線、包丁を取って野菜を切り刻む。油を引き、肉を炒め野菜を炒め、湯を張った鍋に叩き込む。そしてカレールウを落とし、余熱でルウが解けるのを待つ事十数分。そこから彼はのんびりと昼寝を決め込む事にした。

カレーは一日寝かせてからが美味しい、という彼の持論である。そして急だが、彼の家族構成を紹介しよう。

まず父親。名前は白羽 須佐^{すさ}、年齢不詳。息子にすら年齢を教えず、黒人が十五歳の頃に仕事で家を飛び出し、現在はヴァチカン市国にて聖十字騎士団式剣闘術を習っているとの事。

このことから、常軌を逸した戦闘好きで武闘好きが窺える。所属の企業はM・B・I軍需鉄鋼部門の統括。

そして母親。白羽 詠子^{よこ}、年齢不詳の超絶美人。外見は二十代前半である。

父親と同じく戦闘が大好きで、現在はインドにて『プンチャックシ

ラット』と呼ばれる伝統武術を学んでいるとの事。諸族はM・B・I政治経済部門の統括。なお、父親より強い腕っ節が自慢である。

この二人が世界各国を駆け巡ると、その行先は大体M・B・Iの息のかかった国になる。

というか、そのために二人は動いている。そして同時に趣味のためにも動いている。比率は仕事：3、趣味：7の割合。何故かと聞かれれば、御中の指示に従うのが心底嫌だから。M・B・Iで働いてはいるものの、両親は御中とは知人の間柄であり、そして同時に彼の事を心底嫌悪する半ば怨敵のような間柄でもある。

「御中死ね」

が口癖だったのを、彼はよく覚えている。

そしてそんな両親をもった彼は、^{バトルマニア}当然ながら武術に通ずる人間に育っていた。

国内で学べる武術はすべて親の指示で習得し、後々は自分の『理想の武術』の完成の為にそれらを進んで会得していた。そんな事は五歳の頃から続いていた為、当然高校には行っていない。が、学力は大卒レベル以上はあると本人は言う。実際、帝都大学の過去問はすべて簡単だったそう。

ふと喉が渴いたので、コンビニに切れていた麦茶を買いに行くついでに小遣い稼ぎをと意気込んで外に出る。

と。町中に出て五分もしないうちに、何故かボンテージファッションの女性が二人、鬼の形相で街を駆け回っていたのは忘れたい記憶。そしてそのお姉ちゃん達から巫女服を今風に改造した女の子が逃げていたが、彼にとってはまあ全てがどおでもいい事である。一分しただらもう忘れていた。

そんな彼の収入源は、少し変わっている。

カレーを作り置きした後、黒人は帝都の人通りの少ない路地裏——簡潔に言えばよろしくない人間の溜まり場に足を運ぶ。するとまあ溜まっている溜まっている、彼からすればゴミ同然の連中が。その人たちの中に、黒人は堂々と足を踏み入れる。当然こんな異端がやって来たなら、彼らの反応は決まっている。武力による排除、ならず者たる彼らの選択はこれ一択だ。だが——

「ご苦労様不良諸君、よく頑張った。僕に喧嘩を売った褒美として、財布の中身を頂戴してあげよう」

彼らの対峙する青年は、武道に通ずる青年である。

ただの不良である彼らが、まともに太刀打ちできる筈などないではないか。だが売られた喧嘩は買わなければならない、それが黒人の主義である。同時に敗者は勝者に何をされても文句は言えない、というのも彼の思想である。ゆえに、彼は敗者から所持金全てを奪う。これが、黒人の収入源だ。

しかし退屈だった。黒人は心底退屈していた。

何故こんなに弱い人間しかいないのかと、何故この世には自分が愛

する二次元のように馬鹿げた強さを誇る超人はいないのかと。いたなら、何故自分の前に現われてくれないのかと。不良達からかすめ取った所持金を勘定しながら、黒人はそんな事を考えていた。

だが彼は知らない。

この後、彼は自分の欲求が満たされそれ以上が与えられる事を。自分の理想が他人の空想へと刃を向ける事を、そしてその思いを賭けて彼は戦場を駆け抜ける事を。

縁より続く輪廻は、この街『帝都』で、巨大な因果の渦となって愛憎狂乱渦巻く華を咲かせる。

2020年は春、同時に青年・白羽黒人の人生の初恋の年でもあつ

た

第一話 拳乱舞刀

「あーあ、今日はこれっぽっちかー……………足りるかなあ今月」

俯せに倒れているガラの悪い男の身体を座布団に、僕は腰を下ろしていた。

倒れてるのは別に一人じゃない。全員で十二人、キレイに気絶している。誰がやったかと言えば僕だ。

そんな戦鬼^{ほく}の足元には空の財布が幾つも転がっている。安物から高級革財布まで選り取り見取だが、僕が全部を物色してカードやら現金やらを抜き取っている。しかし中に入っていた札束を全部合わせて十五万ぽっち、安すぎるぜ。それを自分の財布に丁寧^{ていねい}に押し込むと、ゆったりと腰を上げる。

家賃は親が払うからいいんだけど、両方出稼ぎだから家にはいないんだよね。お陰でこんなに自由に遅しく、中途半端な不良みたいに成長しちゃったよ。

「てっ、テメエ……………白羽黒人……………このままで済むと思って

んじゃねえぞ！」

さっきまで気絶していた不良っぽい男、年齢は二十代後半くらいか。ジャージに坊主頭、ピアスにイヤリングにリングに、ちよつとはしやぎたい年頃は過ぎたんじゃないのかなあと言いたくなる、そんな男だった。故に、真つ先にボコボコにしたのをハッキリ覚えている。そんなム力つく彼は鼻血を滴ながら頭だけを上げて僕を睨んでそう叫んだ。対して僕は表情も変えず、投げ棄てていた財布から彼の身分証明書を見つけ出す。一番派手だったから見分けはすぐについた。だってミルキイホームズのイラストが入ってるんだもん。そしてその財布から取り出したのは身分証明書——まあつまりは免許証だ。

「端道藁^{はたみちわらま}、二十七歳。えーと職業無職っぽくて、財布には風俗に古市のカードにこれはゲ。ズかー。お、ポイントスゴいや28000ポイント、これもーらい」

「デメエ、あんま調子ノってつと痛い目みるぜ……………もうすぐ俺の最強の僕^{しもへ}が来るから覚悟しな」

「うわ臭いセリフ……………ふうーん、じゃさつさと帰るわ」

「えっ、あ、ちよつと待てってオイ！　こういうのって待つのがセオリーなんじゃないの！！！！？？？」

「痛い事になると解って逃げないヤツはいない」

「あ待って待って行かないでー！　ツツツ！！！！！！！！」

叫び声を無視して僕は颯爽と路地裏を去ろうとした。足取りは軽く、歩みは重く。

そうそう、自己紹介をしておかねば。僕は白羽黒人・二十歳、フリーターだ。

趣味は『二次元』『料理』『家事全般』、特技は『ゲーム』『速読』『模倣格闘』、好きなものは『二次元』『甘いもの』『美少女』、嫌いなものは『三次元』『むさ苦しい男』『努力・根性説』。

ようはダメ人間だ。日々漫画を読み漁りアニメを見尽くし、ゲームをやり尽くし、眠り尽くして生活する半ニートだ。何故『半』と付いたのかと聞かれれば、僕はこうやって定期的で『出稼ぎ』に出てきているからだ。被虐的な自慢だが、僕は昔から親がいなかったから非常にひねくれた性格をしている。いや、捻れ曲がってしまったんだ。

その数百数千の一例として、僕は昔から不良という人間に対してよくケンカを売っている。いや、わざと向こうから近寄るように仕向けるのだ。警察に聞かれても問題にならない程度の挑発、そして不良が襲ってきたなら正当防衛で逆にボコボコにして金を巻き上げて脅して黙らせる。これを二年ほど続けていた。お陰で普通のケンカからマフィアっぽい連中に極道も相手取った事もあったね。血の十代、華が咲くが如し、ってね。平和な生活が最近は恋しいけど、これを止めたら生活費が無くなる。仕事と同義なのさ、これは。

「さーっさーとーんずーらーとーんずーらーだー」……………「っ」と

視界の彼方、路地裏から大通りに出るための一本道。その先に、一人の女の子が立っていた。

少女は別にカバンやリュックなどを持っている訳ではなく、仕事や学校の帰りと言うわけではなさそうだ。なにより、その存在はまるで僕を通すまいと立ち塞がる壁のような気もした。黒い髪に白い肌に綺麗な顔立ち、それにあればメイド服——いや、黒ゴスロリ服だろうか。

そんな身長150cmくらいの少女が僕の行く道を塞いでいた。以上、僕から見た彼女の第一印象。

少女はこちらに歩き出し、僕の隣を通り過ぎると端道の方へ歩み寄る。まるで待ち合わせを待ちくたびれた恋人のように。端道はそんな少女を見ると、ゆっくり手を伸ばす。少女はその手を取り、端道の身体を起こした。

「申し訳ありません、葦牙様。私が遅いばかりに葦牙様をこんな目に……………」

「俺の事はいい……………そいつから俺達の金と、この傷の借りを返してやれ」

「傷って、口の中切っただけじゃん。大袈裟だねえ、君もしかしてワリと貧弱臆病？」
チキン

それにしても葦牙ねえ、女の子に変な呼ばせ方をさせる男もいるんだねえ。

少女は端道をビルの壁に凭れ掛けさせると、こちらを向いて一言。今度は気のせいではない。彼女は明確な敵意を抱いて僕と対峙している。敵意、殺意、いやこれは——貴意だ。きい戦士や騎士が持つそれと同系の、強い意志だ。

鋭い視線が僕を捉え、僕は殺気も覇気もない無気力な視線を返す。

「今すぐお金を置いて一発殴られて下さい。さもないと、大変な事になりますよ」

「つて、君がやるの？」

「ええ、ですからまずは忠告です。そういう『取り決め』ですからね、だからもう一度——お金を置いて一発殴られて下さい。さもないと、大変な事になりますよ」

……これはあれか、痛い病気の子なのかな。主に精神疾患の。

それとも普通に武術に精通してるからの自信なのかな。いずれにせよ、僕は殴られるの前提らしい。二度目の忠告になって、彼女はようやく構えた。右手を前方に、腰を深く落として左手を腰に添える。よくある格闘技の構えの一つだ。

構えられては構えるしかない、僕も構える。足を大股に前後に開き、対になるように右平手を前に、左拳を腰に。小説から得た武術『虚刀流』壱の構え・鈴蘭だ。知ってる人は知っている、知らない人はググるといい。すぐに出るよ」

「面白え、卯月と闘ろうつてのか。いいぜ、やってやれ卯月。半殺しだ」

「……はい。解りました、葦牙様」

さて、どうくるのかな——スタイルは剛か柔か。出来れば見た事のない極地の秘伝の武術がいいな。勉強になるし。『どんな偏屈な武術でも勝てる』——そんな余裕を持っていた。相手は女性だ、多少は手加減せねば。

そう考えてたら『来てた』んだよ——目の前に。

一応追記だが、僕と彼女——卯月との距離は目測10m以上はあった。誤差はほとんどない。だが彼女はその距離を『二秒未満』『たったの一步で』渡りきった。人間が駆け出す際の爪先での小さなジャンプの様に、彼女は10mを一步の『跨ぐ』様に飛び越えた。そして彼女はその『跳ね飛んだ』速度を保ったまま僕と肉薄し、眼前1mに迫った瞬間空中で右へ一回転しながらの側頭部への回し蹴り。当然僕はそれに『咄嗟とはいえ』反応し、仰向けに反って蹴り

を避けた。イナバウアーって感じだよ。必死だからそんな冗談を交える余裕はないけどね。

卯月はその慣性に身を任せ、新体操ばりに僕を飛び越えて二mほど後方でキレイに着地した。『壱の構え』に体勢を戻し、ワリと真顔で僕は彼女に問いつめる。

「……………マジ？」

「参ります」

「やっちまえ……………卯月いいッッッ!!!!!!!!!!」

僕はやむ無く本気で闘う事にした。身体を『脱力』させて緊張を無くし、柔軟性を取り戻す。脱力とは即ち『身体の本来の自由性』を取り戻す事だ。反射・伝達・行動。これらを現状最高の状態に引っ張り上げる。

「……だってそうだろう？」

『人間離れた筋力の少女』が相手なんだ、初見なのに本気以外どうやって戦えと言っんだ。彼女は端道が指示すると同時に駆け出し、またも僕の頭部を狙ってきた。どうやら極力ダメージを避けての気絶狙いらしい。優しい事だ。だが痛いには変わらない。なら――

「……抗う。」

「「じめんなさいッッッ!!!!!!!!!!」」

ビュオンッッッ!!!!!!!!!! と、側頭部を狙った卯月の鋭い蹴り

が迫る。さながら鎌の横一文字か。

鎌とは違いリーチの短いそれを一歩退いて回避し、彼女もそれを確認するとそのまま遠心力を応用して身体を回転させながら僕を追って蹴りや拳を絶え間無く放ってくる。

手刀や脚刀でそれらを往なし、そして理解する。彼女は『人間じゃない人間』なんだと。

僕は『人間らしくなくなった人間』だから言える、彼女は僕の敵だ。瞬間、僕は『対女性非戦闘主義』^{ボリシー}を捨てた。頭の中を戦闘状態^{コロシ}に切り替え、視覚を最大限で攻撃を見切り、聴覚と嗅覚をフルに稼働して彼女との位置や間隔を把握し、触覚で彼女のおよその筋力を測り、回避しながら往^いなしながら、作戦を練って闘う。

そして分析結果――彼女、卯月は一撃一撃がコンクリートを破壊するほどの全身の細く均一な強筋力、感覚機関は人間と同様だがその数倍鋭敏、そして彼女の太股^{ふともも}。彼女が蹴り上げた瞬間見えた、彼女の脚に入れられた刺青^{もんよう}。鳥を横から映したような紋に、その腹に抱く対極図と数字。59と表記されたそれは、まるで焼き鑊^{こて}で家畜に付けたナンバーと同様の――

「スキあり！ はああアツツ！！！！！！」

ズドムツツ！！！！！！ と、思考に頭を持っていかれ過ぎて、深く前蹴りを鳩尾に食らってしまった。

ただのか細い女の子の蹴りなのに身体がくの字になって吹き飛び、5mほど宙を舞ってようやく地上に舞い戻った。蹴りと地面に叩きつけられたショックで身体が動かないし呼吸が覚束ないが、なんとか上体を起こして片膝を突きながら彼女に問いかける。

「ゴホッ！ き……………君の脚の、そのナンバー……………君はまさか、人間じゃないのかな？」

「遠からず近からず、ですね。私を、私達を知る者は私達をこう呼称します——セキレイと」

「セキ、レイ……………セキレイ 鵲セキレイ……………鳥の名前だね。君ひよつとして鳥人間？」

「いえ、私達は——人間ですが、人間の形をした別の生き物ですから」

彼女は僕に歩み寄ってくる。そのブーツの足音が頭の中で反響し、頭痛を引き起こしていた。

——いや、これは僕の身体がたったの一撃で限界を迎えていると知らせているんだ。なにせ『半分は』殺す気でキテルんだから。こつちも殺す気だから文句は言えないけど……………逃げる逃げると頭で理解しても既に遅い、身体はダメージで言う事を利かない。彼女は僕の目の前に立ち——何も言わず胸ぐらを掴み上げ、拳を頭部に向けて構える。

「——おやすみなさい、何処かの誰か、知らない敵さん。目が覚めたら骨が数十本折れてる程度ですから、安心して下さ

い。死ぬ訳じゃありません」

「ぐっ、でも……………起きたら死ぬほど痛いんでしょ、それ」

「男の子なんですから、我慢して下さい」

超ピンチだけど——ヤバい、今の萌えた。

ニヤついているの間近で見られてるけど、関係ないや。お姉さんキラマジヤバい。

「何してンだよ卯月！ さっさと殺れよ、この愚図ッッッ！！！！！」

「……………さようなら」

その一瞬だけ。ほんの、コンマ数秒の一瞬だけだった。だがその瞬間だけ彼女は確実に戦う事を、攻撃するのを躊躇っていた。それは表情に現れて、そしてすぐに消えて。その鉄槌を僕へ向け振り抜き

次の瞬間、僕を投げ捨てて後ろへ跳び跳ねた。

「ぐ——がほっ、ゴホッ！ な、なに……………が……………」

噎せ返る喉を抑えながら卯月を認識する。

何故逃げたのか——それは彼女の身体が語っていた。

それは彼女の右腕、上腕部。そこに、一本の矢が刺さっていたのだ。

時代錯誤もいいところ、ちゃんとした羽根をあしらったそれは、神社や地域行事でしか見る事はないと思っていた、本物の『射殺す為の凶器である』矢。またの名を『破魔^{はまや}矢』。卯月はそれを左手で引き抜くとそのまま握ってへし折り、適当に投げ捨てて俺——

の背後の先を見据える。

建設中の高層ビルとビルの間、仄かに香る鉄の臭い。その長さ二十m強の道の先、救済の射手は其処にいた。

「セキレイが『弱いものいじめ』とは何事ですか！ 恥を知らなさ
い！」

弓に矢をつがえた少女が、僕の先にいる卯月を捉えていた。

改めて認識すると、口調や風貌もさる事ながら、その少女自体が時代錯誤を起こしていた。

——まずは巫女服。赤い袴に袖の部分がカットされた機能性重視の胴着。手には指を保護する為の『ゆがけ』を嵌めて、左手で弓を、右手で弦と矢を引き、構えたまま。姿勢は非常に美しい。足元は草鞋を履いて、彼女だけ時代が二百年ほど遡ったのかと思っただよ。

卯月はその少女を認識すると、僕の時とは違った雰囲気漂わせ始める。これはそう——闘争の空気だ。互いに命や誇り

を賭けて闘い争う空気だ。端道を電柱の影に隠れさせると、卯月は深く腰を落として拳を構える。二人はどうやら戦うらしい。そしてハブられた僕は――その間にゆらりと、ふらつきながら割って入った。

「そこの方！ 邪魔です、退きなさい！」

「申し訳ありません。彼女……セキレイが絡んできた以上、これは既にセキレイ同士の話。ただの一般人の貴方には関係のない事なのです……そこを退いて下さい」

「……………今、弱いものって言った？」

「今、弱いものって言ったよね……………」

私とセキレイの間に立つ彼は、ゆらゆらと立ち上がって私に問いかけてきた。

私も二十mほど先のセキレイも、それには答えない。そんな気は微塵もない。今は目の前の彼女を倒す、セキレイとしてそれだけを考えれば良い——そう思っていた。彼が、そのセキレイに対峙するまでは。

「ちよつ、な、なにをしているんですか！」

「うるさいなあ……………僕は弱いものじゃないのを証明するだけじゃあないか。それに彼女に先に勝負を挑まれたのは僕で、まだ決着も着いてないのに勝負を横取りとは……………中々浅ましいねえ、君」

「——貴方、最初の一撃で肋骨にヒビが入ってる筈です。動きを見れば解りますよ……………そんな身体で戦うおつもりですか？ 私は人間以上の力で貴方を徹底的に叩きのめす事になりますか」

ゆつくりとした調子で彼はセキレイに相対し、彼女と同様少し腰を落として構える。右平手を正面に、左拳を腰に添え、脚を前後に開いた構え。まるで、正面から何かを受け止めるかのような構え方。

「我流拳闘家、虚刀流想像者・白羽黒人——推して参る」

名乗ると共に、彼の空気が一変する。私はまだ知らないがこれが——殺気。もしくは、覇気。

肌を刺すような緊迫感と身体への重圧。彼の表情は見えないが、きつと険しく真面目な表情に違いない。心無しか、私は身震いしていた。武者震いじゃあなく、これは恐怖の震えだ。

「仕方ありませんね……………葦牙様、もうしばしお待ちを」

「おう、お前の頼みなら待つてやる。負けんなよ卯月、お前は最強なんだからな」

「……………はい」

羨ましい——私が敵である二人に抱いた感情。セキレイと葦牙あしかびという存在。

愛し愛され、想い想われる二人。縁えにしより決められたその運命さだめに導かれ、出会うべくして出逢う二人。私もいつかそうなりたいと——らしくもなく、嫉妬してしまう。

だが、自分で言うのもなんだが——私は弱い。

セキレイの中では近接戦闘が不得手と言うのは中々に痛い点だ。セキレイの大半は戦闘向きで近接戦闘を得意とするが、私の得物は弓矢、近接戦闘には程遠い武器とスタイル。これで勝ち残れるのかと聞かれれば否と答えるしかない。

本来ならもっと早くに脱落してもおかしくはない。だが幸か不幸か、私は隠れるのが得意で、ずっと逃げ回っていた。弓兵は目がいいから、人を見分けるのが得意なんです。だからしばらく——そう、葦牙を見つけるまではそうするつもりだったのに。セキレイに戦いを挑む彼を見て——居ても立ってもいられなくなった。彼を、助けたくなったのだ。

臆病な自分よりも弱い、人間な彼を。助けたくなった。

だが彼は満身創痍なその身体で、再びあのセキレイに対峙する。死ぬかも知れないのに、彼は自分が『弱いもの』と言われる方が嫌なのだ。馬鹿馬鹿しい、全く以て馬鹿馬鹿しい限りだ。だが何故だろう——

——そんな彼の背中に、胸が高鳴るのは。

そんな彼の背中を、もっと見ていたいと思ったのは。もっと一緒にいたいと思ったのは。

「セキレイNO・59、卯月^{うしつき}。参ります」

「ああ、来いよ。ただしその頃にはアンタは八つ裂きになってるだろうけどな」

文面をそのまま声に出す。言う側になるとワリと恥ずかしい……………
が、伊達や酔狂でこんな小説の中の絵空事の武術をやってる訳じゃない。これは僕からすれば理想的な武術、剣術、拳術なのだ。今の時代に強者と戦うならば、拳と武器の両方に対応出来なければならぬ。そんな折、この小説『刀語^{カタナガタリ}』がアニメ化するという話を耳にした。

そして見て——直感で理解した。これこそが、僕が求めた武術だと。

以来、僕は主人公『鑢 七花』の動きを現実的に再現し、そして形を造り上げていった。現実でやるとなるとアニメみたく激しい衝撃は出ないが、それでも人間を殺す程度の破壊力は持ち合わせている事に気付いた。

放送していたのは2010年だから、ざっと十年前になるのか。だから僕は十歳の頃にこの武術に、この物語に出会い、これを現実で『完了』させる事を目標にした。母親が格闘技が好きでそれが祟^{たた}つて父親も同類化、そして僕に五歳の頃から格闘技を学ばせたのだ。空手からボクシングから柔道から、身近なものは手当たり次第。その最中にも僕は虚刀流を鍛え続け、そしてひとまず完成した。それが二年前の話だ。学生としての生活の傍らでの武術家生活は中々に厳しく、夜更かししても早起きで鍛錬、アニメを見たらすぐに鍛錬の日々。

それが十年続き、両親は世界を回る仕事兼格闘技巡りの旅に出た。そして今——僕は自分を試される時がやって来たのだと知る。初戦の相手は人外染みた身体能力の美少女、通称『セキレイ』。僕は心身を研ぎ澄ませ、一振りの刀になった。

「はあッッッ!!!!!!!!!!」

卯月は駆け出し、回し蹴りを放った。僕はそれを身体を屈めて回避し、そのまま左手刀で斬り上げる。

技名『雛罌粟^{ひなげし}』、原作なら直に当たれば身体が斬れるほどに鋭い技だが、真人間の僕には無理なのでまあ普通の手刀だ。だが相手は超人セキレイ、雛罌粟を空中で身体を反らして回避しそのまま着地、再び攻めに転じた。

「はあああああああッッッ!!!!!!!!!!」

点である拳が弾幕のように穿たれる。僕はそれを手刀で受け流し、最小限の動きで避ける。

時折蹴りが織り混ぜられたりもするが、それも上体を反らして回避し、防御を崩されても焦る事なく逆に攻め込み相手の不意を突いて手刀による突きの一撃を叩き込む。その全てを腹や首ではなく肋骨や鳩尾ばかりに狙いを絞りと、重点的に攻撃する。

だが流石はセキレイか、これだけの破壊力を持った一撃を放ちながらも未だスタミナが切れる様子は無い。ならばと、わざと一度距離をとり、それなりにらしく『自ら』防御の隙を作る。と、案の定焦りを感じていた卯月はそこに回し前蹴りを放ってきた。

「もらったッッッ!!!!!!!!!!」

「———虚刀流・菊ッッッ!!!!!!!!!!」

それを全力で見切り、蹴りを背中越しに避けて両腕で背中と挟み込むように脚を捉える。

そして後は挺子の原理で———大腿骨をへし折る。砕くつもりで力んだのだが、卯月はそれに間一髪気づき、腕が脚に触れた瞬間に身体を回転させ、俺を遠心力で蹴り飛ばした。身体を捻って体勢を整えてキレイに着地し、再び構える。今度は『式の構え・水仙』だ。

卯月も再び構えを取るが、動いていない僕と違って息が上がっていた。

「はあっ、はあっ……………貴方、本当に人間なのですか。戦闘タイプのセキレイに素手で渡り合えるなど聞いた事がありませんよ」

「おやそうか。なら今日から僕がその第一人者だ。覚えときなさい。……………とはいえ君達セキレイは秘密主義な存在だから、それを知った僕はいずれにせよこうなる運命だったのかも知れないね」

「ふんっ、なら疾く死になさいッッッ！！！！！！」

ドンッッッ！！！！！！と脚で地面を蹴る。ただそれだけの動作でコンクリートが抉れる。

その爆発的な慣性で僕へ向け突進し、打撃——ではなく、体当たりをしてきた。頭部で胸を叩き、両足を持ち上げて身体を倒してきた。知っているだろうか——これは柔道のマイナー技『もろてが双手刈り』だと。

相手を転けさせるにはもってこいの技であり、不意を突かれた僕はそのまま背中からコンクリートに叩きつけられる羽目に。肺の空気が強制的に吐き出されるが、意識は目の前の卯月にのみ向け続ける。僕を倒した彼女は僕の胸に馬乗りになり、拳を握る。

「これなら避けられないし逃げられない……………覚悟です」

「（不味い……………！試合に水を差すようですが、計画で一般人に死なれるよりはまだマシです。良識あるセキレイとしてそれだけは阻止しなければ……………ならせきれいもん鵲鳩紋を潰すしかありません……………御免！）」

巫女服のセキレイは矢をつがえ、卯月の首筋のちょっと下を狙う。
何故解ると聞かれたら、意識の先がそこに向いてるっただけだよ。
僕はそれを左手で拒絶を示す。弓矢を得物にしてるんだから目はい
い筈——案の定、彼女は弓矢を下げた。そしてそれと共に卯月
は右腕を掲げ、ギョツと拳を握る。そしてそれを振り下ろすと——
ヒュボツツツ！！！！！！——という空気の裂ける音が
聞こえた。

「か、ツハ——ッ……………」

「虚刀流奥義——鏡花水月」
きょうかすいげつ

メリツ——と、卯月の鳩尾に僕の掌底が打ち込まれる。

虚刀流奥義『鏡花水月』、腰の捻りと身体の捻りで超高速の掌底を繰り出す奥義で、その動作を差し引いても全奥義中最速の出と当たりであり、僕が最も愛用する技でもある。そして卯月の拳は僕の鼻先数センチのところで止まり、その上体がぐらりと傾いて僕に倒れ掛かる。

まとめると——僕が卯月の拳を喰らうよりも先に彼女に奥義を決めたというだけの話だ。

「…………た、ただの掌底で、セキ…………レイの、私が…………」

「『ただの』は余計だよ。僕の奥義なんだから、馬鹿にしないでほしいね」

「悔しい、ですね…………ああ、初めての闘いで負けちゃいました

…………悔しいなあ…………葦牙様、ごめん——なさい…………

……………」

そう言い残し、卯月は僕の胸の上で気を失った。鏡花水月は殺す気で打ったから死んでる筈なんだが、彼女からはまだ鼓動を感じる。まさしく超人、常識が当てはまらない。これはかりは素直に驚いた。なお一般人に鏡花水月を当てた場合——臓器と骨組織が潰れます。

そして卯月はワリと巨乳だった——彼女の胸に溺れているのも悪くないが、そうし続ける訳にもいかない。彼女を起こし、抱き抱えるとそのまま端道の下へと連れていき、彼の前で横にさせた。

「……………卯月？」

「気絶しているだけだ。いずれ目が覚める」

「……………ふざけんなよ。全部テメエのせいだ、テメエがいなけりゃ卯月はこんな事にはならなかったんだ！ テメエがいなけりゃ、卯月は戦う事なんてなかったんだッッッ！！！！！！」

「キレんなよ」

ガスッッッ！！！！！！ と、端道の頬を殴りつける。結構全力でぶつ倒れた彼の胸ぐらを掴み上げ、面と向かってこう言い放つ。

「少なくとも卯月はお前を守る為に戦ったんだ。ならお前は彼女が勝っても負けても誇るべきだ、褒めるべきだ——負け
ても誇れよ。それが守られる者の義務と責務なんだよ」

それだけ言っと、端道は涙腺が壊れたかのように涙を流し、卯月を抱き締めた。

彼も悪い人間だが、卯月を思う気持ちはホンモノだった、という事

なのだろう。それ故の涙。それが解ると、僕の彼の対する考えは百八十度変わる。『クズな男』から『愛妻家』へクラスチェンジだ。終わった——それを認識し、僕は帰ろうとした。緊張の糸がぶつりと切れると——

どさり。

と、まるで糸の切れた人形のように身体が動かなくなる。

そして共に、肋骨に強烈な痛みが迸る。そういえば肋骨折れてるって言うてたっけ——そんな事を考えながら、痛みから

のショックで僕は気を失った。というかこれ、目が覚めても痛いんじゃない——眠りの中そんな事を呟いていた。

第二話 合縁奇縁

目が覚めたらそこは、一面白の世界だった――
なんて厨二病なことは言わず、素直にここはどこかの病棟だと言っておこう。

僕の腕には点滴の針が刺され、見た事も聞いた事もない薬品が僕の身体に流し込まれていた。覚えている事は、僕はセキレイという超人と戦って相打ちになったという事。そして朧気だが、どこかにへりて運ばれてきた事まで。

辺りには特に何もなく、ベッドと点滴台と僕と――巫
女服の少女^{セキレイ}がいた。黒のロングヘアを肩の辺りで二つに結った、日本人らしい顔立ちの少女。じつと僕の顔を見下ろしながら、ぴくりとも動かない。

人形のようなその雰囲気は、ちょっと不気味だ。そんな彼女は僕が目を見ましたと気付くや否や、僕に覆い被さるように顔を近づけてくる。鼻先数センチの距離は、お互いの呼吸や鼓動が解るほどだった。

「一つ聞きます」

「……………なにかな。出来れば離れてくれると話しやすいんだけど」

「……………貴方は何故、戦ったのです？ セキレイ中でも弱小の私よりもひ弱な、人間の貴方が」

———なんだ、『そんな事』だったのか。

僕はてつきりこう、『貴方は本当に人間なのですか』とか『貴方には貴方の知らない過去があるのです』みたいな超展開を期待しちゃったんだけど、それは無いよね。うん、あつたら我ながら気持ち悪い。しかしその表情は本気そのもので、まるでテストの合格発表を待つ受験生のような感じがした。

そんな彼女に、僕は———真面目に答える事に、真面目に質問する事にした。

「君はさ、戦う理由って考えた事ある？」

「私は……………セキレイです。故に、私は葦牙様と婚^くぐまで、葦牙様と嵩天へと至るまで戦う、そう心に———セキレイの魂^{ほこ}に誓っています。それがなにか？」

「なるほど、理由らしい理由だね。ひどく真つ当な理由だ。素晴らしい」

「……………何が言いたいのですか？」

「昔読んだ本の登場人物のセリフにね、こんな一文があつたんだ——『馬鹿馬鹿しい。戦う理由を考えるくらいなら、そもそも戦わなくていい』——これに僕はえらく共感してね」

「私は貴方の言う……………馬鹿馬鹿しい人間なのですか？」

——別に君の事を馬鹿にした訳じゃない。

僕は理由を考えて答えるのなら、考えずに『素直に』答えれば良いんじゃないか、そう言いたいのだ。

「君達^{セキレイ}はさ——葦牙の事が好きなんだよね？」

「……………ええ、そうですね。好き、愛、友情、尊敬、信頼、畏怖——色々ありますが、結局のところ私達は葦牙様の事が好きなのでしょう」

「……………素直じゃないか」

「『そうあれ』と諭したのは貴方では？」

「……………かもね」

——数秒の沈黙の後、彼女は身体を起こして少し乱れた服を直す。

そして気のせいだろうか。彼女が一瞬微笑んでいたのは——ガチャリと、病室のドアが開いた。

「なんだ、もう目が覚めたのか。流石だな」

白髪の女性が、カルテを手に僕に近付いてくる。少女はぺこりと一礼し、窓際の椅子に腰を降ろした。

その女性の年齢は三十代半ばだろうか、それにしても美人だ。隣のセキレイの少女は可愛いだが、女性は大人らしい色っぽさやキレイさを漂わせている。そしてなにより、白衣はやばい。エロさが五割増しだ。女性は僕のベッドの横に立つと、カルテと僕をにらめっこしながらふむふむと頷く。

「で、話はどこまで？」

「すいません、高美さん。まだなにも話しておりません」

「そうか……………ま、丁度いい。君の名前は白羽黒人、合ってるな？」

「ええ、それがなにか？」

「……………最初に言うておく。なるべく抑えろよ」

……………？ なんの事だろうか？

とりあえず痛み止が効いているので、身体を起こすくらいは出来る。そして念のために、ポケットに忍ばせていた家のキーに手を掛ける。そして彼女がベッドから離れて数分後、再びドアが開き――

「ぱんぱかぱーん！ おめでとうくら」

ヒュンツツ！！！！！！ と躊躇う事なく、キーをその気色の悪い声をあげた男に投げつけた。

「ちょ、これはダメ！ アウト！ いくら私でも死ぬから！！！」

が————キーは扉の横合いから伸びた手に掴み止められ、殺害は失敗に終わる。

男、その名は御中広人。M・B・Iの社長であり、我が人生でこれ以上ないほどに憎みきっている人物。御中は咳払いをすると、若干足が躍っているような気もするが、アハハとム力つく笑い声をあげて中へと入ってくる。

……………投げるものが殴るものはないだろうか。

「うるさいなあ、静かにしないと口にTNT突っ込んで吹っ飛ばすよ。」

「ふふっ、なるほどねえ。これは確かにセキレイを倒してきたって

のも頷けるかな」

声は、病室のドアの陰からだった。声の主は勿体ぶる事無く、すぐに姿を現す。

一言に言えば——黒。どう表現すればいいのかと言えるほどにどす黒い、真っ黒な女性だった。

真っ黒な振袖——なのだが丈は異様に短く、最早ミニスカートの領域——にあまつさえニーソックス。そして袖を通しておらず肩に引っかけた羽織や腰に携えた刀。そして銀灰色の長髪に——

——濁りきったような、穢^{けが}れきって穢^{けが}れしかない澱みなど無い、
きたな穢^{きたな}く澄んだ目。

「からすば烏羽……………」

白髪の女性——高美さんはそう彼女を呼んだ。

銀灰色の髪の女性——烏羽は、笑顔のまま僕に近付いてくる。

目線だけを少女に向けると、少女は心無しか震えているように見えた。烏羽は彼女らにとって、恐ろしいセキレイなのだろうか。僕にはそんな風には見えない。むしろ——

「いやあ、まさか君がこのセキレイけいかく鵲^{セキレイ}計画に関わる事になるとは夢にも見なかったよ」

「僕も……………今後貴方と顔を合わせる機会があるとは思ってもみませんでしたよ」

「社長と彼は知り合いかい？」

「知り合い以上家族未満だよ、No.4、烏羽君。だが、繋がりはいさくはない」

——否定は出来ない。少なくとも、僕はこの男と小さい頃にある用件で関わった事がある。

小さくもあり、大きくもあるなんでもない物語。だが僕には大きすぎて、言葉では語れない物語だ。彼には小さな小事でしかなかっただろう、だが僕にはそれが人生の分岐点とも言えるほどに大きな事だった。そう、まるで夢のような出来事だったんだ。

「ではまずは——君が関わったこのプロジェクト鵺鴉計画の事を話そうか」

「計画………これは実験かなにかの一環なのかい？」

「遠からず近からず。このプロジェクトの名は——ゲーム鵺鴉計画。再び神々の世をこの時代に呼び戻す為の戦記だよ。戦うのは彼女らセキレイとその主たる葦牙、セキレイと葦牙は己が絆と愛を賭けてこの闘いを勝ち残らねばならない………ようはバトルロワイヤルだよ」

「貴方らしい馬鹿馬鹿しい話だね。でも——現実だ」

「そう、これは紛れもなく現実だ。現に、私の隣と窓際の彼女もそうだ。彼女らはセキレイだよ」

改めて彼女ら——セキレイをまじまじと見つめる。

烏羽は露骨にセキレイと解るから仕方がないでしょう、だが少女に
関しては全く解らない。極々普通の女の子、という感じなのに実際
はあの時の彼女・卯月と同じセキレイだなんて、正直信じられない。
そしてこの男の今の話から察するに——これは大人数
でのバトルロワイヤルだ。

「……………セキレイの数は？」

「ほお……………『何故自分が』ではなく『セキレイの数は』か……
……………最早抗う事もしないのかね」

「貴方の言う通りなら、僕は既にこの計画の一員だ。それも『葦牙』
つていう闘わない立場じゃあなく、どちらかと言えば戦う『セクレ
イ』の立場に近いね。如何せん、僕はセキレイを倒しちゃったんだ
から」

そう——あそこで素直に尻尾を巻いて逃げてしまえば良かった
んだ。

不様でも不恰好でも羞恥であろうとも、逃げて普通に忘れてしまえ
ば良かったんだ。

もつと言えば、僕は卯月にあのまま気絶させられるか、少女に助け
てもらえば良かったんだ。そうすれば僕は『ただの被害者』で済ん
だんだ。だが遅い。僕は既に『加害者』『当事者』になつてしまつ
たんだ、僕の周囲を廻りながらも決して触れる事のない『運命の輪』
に触れて、自ら巻き込まれに行つたんだ。

だからこそ、抗わない。受け入れ、認め、理解し、受諾し、学習し、

肯定する。否定は断じてしない。

「ではセキレイの数を教えよう——総数百八羽の小鳥達は今、この新東帝都に羽ばたいている。君の責務は、君の義務はこのセキレイ達と闘い、勝ち残る事だ。そして君もいつか出逢うだろう、出会おうべくして——君のセキレイに」

「僕の——セキレイ……………」

「なるほどねえ……………知らざるは及ばざるが如し——ホントに何も知らなかったんだね」

烏羽は僕にうんと近付いてくる。こう、面と向かって。

言葉の例えじゃなく、向き合っているんだ。目と目、鼻と鼻、顔と顔。そして心と心が。

互いに笑みが自然と溢れて、クスクスと笑い出す事から始まり——最後にはゲラゲラと下品に笑っていた。烏羽はそんな笑い方しないと思ってたけど、これはいいコミュニケーションになるね。そして一頻り笑い倒すと、彼女はそつと僕から離れていった。

「いやあ、こんなに面白い人に会ったのは久々だよ。笑わせてもらった」

「こちらも、だよ。烏羽さん、また縁があつたら」

「そつだねえ、また縁があつたら」

殺し合おう——いつか必ず。

彼女はそう言い捨てて病室を去っていった。似たり寄ったりという言葉が今日ほど愛しいと思った事はない。烏羽と僕がここまで似てるなんてね。求めるが故に、なにかが欠けている。

否——欠けているが故に、失ったが故に。いつまでも無くしたモノを欲し、求めるのだから。

話が反れたね——僕は御中に鵲鴿計画について更に聞き出そうとしたんだが……

「アイツは？」

「済まない、知らん内に何処かに行ってしまった……」

——逃げたな。あのクソメガネ。ヒーロー被れ。

女性——高美さんはなんとも申し訳なさそうな顔で軽く頭を下げてきた。そんな事はしなくてもいいのにと、遠慮の意志を示すと苦笑いで返された。そういえばこの人の事は確か、母さんの話から聞いた事があるようなないような……まあともかく。

「あの、高美さん——でいいんでしょうか」

「ああ、それでいいわよ。別に名前の呼び方なんてあんまり気にしないから好きに呼んで」

「じゃあ高美さん——僕の事はどこまで？」

「一通り。詳しい事は知らないけど、君が御中と幼少の頃から関わってたのは今日知った」

「……………そう、ですか。それは良かった。僕の事を知ったらたぶん高美さん、御中を殺しますよ」

「今でもたまに殺しそうだよ。冗談抜きに。あ、それともう退院してもいいわよ。傷は治ってるから」

治ってる？　そう言われて、肋骨の辺りを擦さすってみる。

痛んだのは左下の二本——　なんだが、触っても全く痛まない。いつもの肋骨だ。

服は戦った時のままで、別に汚れたりはしていない。返り血とかシミとかの意味合いで。靴を履いて身体を軽く動かすが、全く以て支障がない。寧ろ十全万全じゅうぜんばんぜんだ。心なしか、関節や筋肉痛まで治ってる気がする。

「流石に二日も寝るとよく治るわね。もう完璧じゃない」

二日もって……………二日も寝てたんかい。僕の身体弱ッツッ！……………！

「いやいや、これが普通なんだって。セキレイに殴られたら『化物語』の三章三話みたいな事になるかもしれないし。こつ、蹴りで腹に風穴がボカンッ！と開いたり。にしても『化物語』は十年前の作品だけど、あれは面白いよね、作者の言葉遊びが巧いだろう。」

「という事は退院してもいいんですか？」

「ああ、全然OKだ。治療費は御中のポケットマネーから支払う事にしてやるよ。」

「……………ありがとうございます。高美さんの事、好きになれそうですよ。」

「残念だな。これでも二児の母親なのよ。」

2020年、桜の舞い散る春の事。白羽黒人、初恋かもしれないが
——散る。

高美さん母親には見えないんだけどなあ……………どっちかって言えばバツイチ。夫が病気が事故で死んで、若くもて余したその身体を僕が優しく——止めよう。虚しくてバカらしい。なにより未練がましい。

時刻は昼の午後二時。お腹も減ったから作り置きしていたカレーを……………つて、二日も経ってるから腐ってるか。二日振りの自宅での最初の作業は『腐敗したカレーの処理』からか。いやだなあ……………で。も一つ気になる事がある。

「なんで君がいるのかな……………」

「おや、不服ですか？」

僕の後をぴったりとくつついてくるセキレイの少女。三步後ろを同じ歩幅・同じ速度で歩いている。

そんな慎ましい少女の背中には二mを超える『日本弓』と矢の束が布に包まれて隠されている。隠しきれてないのは言うまでもないが、カモフラージュ程度にはなる筈だ。僕が度々ピタッと歩みを止めると彼女もピタッと止まる。振り返ればお辞儀。一歩近寄れば一歩退く。

バカにされてるのかな、これ。それにしては……………視線が『熱い』。

「えっと、もう僕の家なんだけど……………君はひよっとして見送り？」

「……………何を言っているのですか」

我が自宅、地域でもちよつとだけ有名な大豪邸。その洋風の門の前で、彼女を改めて直視する。

が、今回は頭は下げず、静かな足取りで僕に近付いてくる。ああ止めてよ、そんな艶めかしい表情で僕を見るなよ……………ここは現実でゲームやマンガやアニメの世界じゃないんだよ。そんな簡単に恋愛^{ラブ}が立つたらおかしいじゃないか。

「まさかこの状況で、高美さんの話を聞いて尚^{なお}先が読めない、とは言いませんよね？」

「い、いやぁ……………なんの事やらわかりませんの事よ？」

歩み寄ってくる彼女から逃げるように後ずさっていく。

が、背後には家の門しかない。ガシャンツツ！！！！！！と背中から門にぶつかり、逃げ場を無くす。ゲームではこんな状況を『詰み』と言うがそんな生易しいモンじゃない。『死ぬよ』と書かれた看板を跨いで先に進むしかない、みたいな絶望しかない。追い詰められた僕に、追い詰めた彼女はそつと手を伸ばす。左手の

行き先は僕の硬直気味の首裏、右手の行き先は僕の引きつつてる頬。
カミングアウトだが、セキレイには『羽化^{うか}』という現象が存在するらしい。葦牙たる人間のDNAを摂取する事でその葦牙と婚^くぐ——
——つまりは婚約みたいなものと思ってくれていい。
そしてその最も簡単でセキレイの間でも一番オーソドックスな方法は——

ちゅっ。

唇と唇が重なる。暖かく甘い感触。ほのかに香る彼女の匂い――
――彼女からは甘い匂いがした。華の香り、これは百合の香りだ――
――ええそう、キスです。なんの変哲もないキスですよ。
キス、ベーゼ、接吻、口吸い。
科学的に言っなら『粘膜接触』だ。数秒のキスの後、彼女に変化が
顕れた。

「んっ……………」

光の翼、というのが一番的を射た物言いだろうか。彼女の首筋辺りに光が灯り、そこから翼が広がった。

幾重にも羽根を広げた鳥。朱色の光が彼女を包み、数秒後に光は収まり、彼女はなんと幸せに満ち満ちた表情で僕から離れる。先ほどと同じように三歩後ろに下がり、ぺこりと一礼。ななめ45°のキレイなお辞儀だ。

顔を上げるとそこには僕がこの二日――寝てたから実質一日なんだが、その間には見た事のない笑顔を見せてくれた。可愛い、十代の少女の無邪気な微笑みはダメージが大きかったと言っておう。

「No.37、弓のセキレイ・魅^み弦。不束者ですがどうぞ――
――幾久しく」

第三話 数日後、彼氏彼女

「おはよう魅^み弦^{づる}」

「おはようございます、黒人」

「朝は七時だ。けど早速怒ろうか」

「なにを？」

「人のベッドになあに勝手に入っとなんじゃあああああああああ
ああッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

「近所さまがないのはこつても有難いのか。朝っぱらから叫んでも

問題ないね。

卓袱台返しちゃぶだいの要領でベッドの布団を返し、ベッドから魅弦を転がして頭から落とす。しかしセキレイの彼女は何の事は無しに起き上がり、寝起きのぼーっとした目で僕をじっと見つめる。

「そんな庇護欲を掻き立てる顔してもダメエ！ とりあえず正座
！……！！！」

「え、あ、はい」

素直なのはいい。実によろしいね。素晴らしい。

座布団を投げつけると丁寧にキャッチして膝に敷いて正座する。背筋が伸びてキレイだ。じゃなくて。

「はい、白羽家家長・黒人が決定した事項は？」

「えと……『寝床に忍び込まない』『人前であまりベタベタしない』『僕にもあまり肌を見せない』『逆セクハラしない』——
——でしたよね。合ってますか？」

「うむ、間違いない。だが早速最初の事項を破っているね」

「すみません、黒人さま。一度は貴方の寝顔を見なければと、我を忘れてしまい……」

「そこはいい、寝顔を見たいのは女子の本能に近い衝動だから許容しよう。だが——なあんで露骨に着物の胸元やら帯やら足元を

晒してたのかなあ。胸は押し当てて、僕の手を帯に掛けさせて、足と爪先を僕に絡めて……………なにをしたかったのかな」

「いえ、ちよつと既成事実あついあきを……………」

「はいアウトおおおおおッッッ！！！！！！」

スッパアアアアアアアアンツツ！！！！！！と、頭頂部をスリッパではたいた。

一日一緒に過ごして解った事が一つ。この子、ワリとお茶目なのだ。ワリとつてゆーか、かなり。

まず朝はこんな風に自ら浴衣をはだけて朝這いをしてくるし、料理が出来るか試したら微妙な暗黒物質ダークマターが生まれるし、意外とぼーっとしてたり鈍かったり、実はかなりドジっ子だったり、世情に疎いワリに僕の大衆文化にじげんにはいたく興味を示したり。

まあまとめると——スッゴクヒロインっぽいんだよ、この子。

今もジト目ではたかれた頭頂部を擦りながら涙目で僕を見てきたり……………萌えるじゃないか。

「はい、家主としてそんな破廉恥は許しません。罰として朝食抜きだよ」

「えええー……………ないですよお」

「僕のセリフだよそれは！はい今の冗談、朝食作るから手伝いなよ」

「……………」

キッチンへ向かおうとドアに手を掛けると——なにとも言わずにギュッと、背中から抱きつかれた。

胸が当たってるけど、意図的じゃないから了承。むしろ来い。並乳でもふくよかだよ柔らかいよ。そんな彼女はスリスリと背中に頬擦りしてくる。いや、じゃれてるのか、これは。そんな温かい人の感触は、随分と久し振りに感じられた。

「黒人さま、今日も一日よろしくお願いします」

「（やってる事派手なのに言ってる事が普通なんだ……………） うん、よろしく。魅弦」

×

×

「虚刀流奥義『柳緑花紅』りゅうりょくかこう ツツツ！……！！……！！」

空中に放り投げた空のビンが目の前に落ちたとき、拳をそのビンの底面に叩き込む。

するとどうだろう、ビンの中に事前に入れておいた筈の炒った蜆の殻『だけ』が粉々に碎け、粉末状に姿を変えた。拳の衝撃で数秒宙を浮いたビンは再び重力に従い落下、それを爪先で小突いて再び宙に上げて右手でキャッチする。

その様子を見ていた魅弦は、怪訝な目で僕を睨んでいた。

「うぬ、我ながら調子は万全……………日々これ、怠慢墮落はなしだね」

「黒人さま、今のは？」

「我が七つの奥義が一つ『柳緑花紅』。対象の内部のみに衝撃を通す鎧通しという技だね。解りやすく解説するなら、物の中身だけを破壊する技と言えは解るかな」

「なるほど。それで卵を殴ると黄身が先に潰れている不思議な卵の誕生、という訳ですか」

「例え話の例えのレベル小さッッッ！！！！？？？？」

まあ僕も人の事は言えないか……………なにせ蜆のふりかけを作る為に奥義使ってるくらいだからね。
でも美味しいんだよ、これ？ 蜆と一緒に味噌汁にすると、味噌を入れる前に炊いたら蜆の出汁が殻に染みてていい感じに———よ

し、今日は和風海鮮パスタにしよう。蜷アサリと若布ワカメと細く切った木耳キクラゲにこれを振り掛けて……………くくく、美味に違いないぜ。

「黒人さま、そろそろガン。ムの間では？」

「はっ、しまった！ ケーブルテレビで再放送の『ガン。ムUC』……………見逃せんで、ガン。ムッ！」

夕食を放棄、貝殻はキッチンへ。そして……………Blu-ray起動！
白羽黒人、目標の録画を開始する。見せてやる……………M・B・I
の過学力、二百四十倍速の録画を！

ちよつと先日のお話をしようか。これは僕が魅弦と婚くいだ日の事だ。
あのあと魅弦は『お世話になってた人に挨拶してきます』といつて
何処かへ行ってしまった。ならばと黒人は自室の『イケないモノ』
を処理すべく猛ダッシュで部屋に向かうのだが――

悲鳴、絶叫、雄叫びと言ってもいい。その痛みは身体を『とぐろ』を巻いて駆け回り、指先から毛根の一つまで遜色無く『全身』に痛みと灼熱が迸る。壁に身体を叩きつけ、床をのたうち回り、叫び声をあげて暴れまわる。

怒りとかそんな大々的な理由なんて無い。ただ痛くて苦しくて、それだけでここまで暴れられる。

「なん、だよ……………これ、は……………」

起き上がり廊下の突き当たりに備え付けの大鏡で自分の身体をまじまじと見る。

そこには——魅弦と同様の光の翼を生やした、光の翼を伸び伸びと広げた僕がいた。

訳が解らない、意味が解らない、今が理解出来ない、状況が説明出来ない。

とにかくこの痛みはこの光の翼がある事と伴っているようではあった。

それが理解出来たのは、翼が消えると共に身体の痛みが全て^{じつじつ}消え去ってくれたからだ。

平常心を以てようやく理解出来たんだ。

尚更慌てて服を脱ぎ捨て、自室から手鏡を持ち出して大鏡と合わせ鏡の要領で僕の背中を見る。身体を無理に捻る事なくしっかりと見据えたその背中には、正確には首筋の下辺り。そこには、彼女——僕が相対したセキレイ・卯月の脚に描かれていたのと同じ紋様が描かれていた。だがそれはすうっと消えて、そこにはいつもの僕の背中があった。

女性よりも肌の瑞々しさには自信がある、僕の背中。ちょっと筋肉質な、僕の身体。

「これも貴方の仕業、という事ですか……………御中広人」

窓からはあの男がいる巨大な塔、悪のラスボスの城と例えてもいい。それが聳^{そび}え立ち、まるで全てを見下しているようにも見えた。彼はこんな今の僕の事すら逐一確認をしている事だろう。何故こんな事を、なんてテンプレな質問はしない。ここに来てそんな馬鹿馬鹿しい質問はする気にならないよ。

「欲しければ掴み、奪い取れ……………母の教えが活きる日が来ようとはね」

いいだろう御中、人で遊びたいなら僕が相手をしてやろう。
その代わりアンタが負けたら——アンタの命を奪^もってやる。

「か——カッコ良すぎます……………勇者王」

ものつそい目をキラキラさせて、まるで夢見る少年のように勇者王を見ていた。

いやいや待ってよ、君この間まで研究室でインテリちゃんだっただよね？

なのになんでそんなに大衆文化に馴染んでんのさ。しかもDVDの中からわざわざ勇者王を選ぶとか、通過つうぎて笑いそうになる。あまつさえカッコ良すぎますって……………君は女の子でしょーが。せめてプリキュアとかセレクトしてよ。もしくはセーラームーン。

僕はプリキュアとおじや魔女とナージャをわざわざDVD全部買って見たからね。金は惜しまないのさ。

「黒人さま、他には……………他には勇者系ゆうせいはないんですか？」

「残念ながらないんだよねえ……………僕は異端者だから、勇者系ゆうせいで好きなのはガオガイガーだけなんだよ。ジェイデッカーとかゴルドラとかダグオンとかはCATVの再放送で見てたけど」

「そうですか……………残念です」

そう残念そうな顔をするなよ……………いろいろと布教したくなっちゃうじゃないか。

そうだね、じゃあ次辺りは化物語でも見せてみようか……………いや待て、見せたら蟹の人みたいになりかねないぞ。もしくは小学生。毒舌暴言美少女or饒舌小学生……………どっちもいいが、出来れば前者。

「黒人さま、お腹が空きました」

「いや急だね……………ていうか、一時間前にドリア食べたところですよ？」

「申し訳ありません、私こう見えて燃費がとてつもなく悪いんです。でもって大食らいでなんでも食べるんですけど、同じものを一週間に二回以上出されたら暴れまわりますし。そして家事は苦手です」

「デメリットしかない！！！？？？」

「あ。それといい忘れてましたが先日、黒人さまのゲームのデータ勝手に上書きしちゃいました。てへ」

「小娘、表に出ようか……………」

ガシツと頭を鷲掴み、そのまま窓の外へ放り投げる。

幸い庭は広く、端のほうで地味に野菜を育ててたりもする。親の趣味の『武器』をしまう倉庫もあるよ。

しかしあえて石畳の方へ放り投げるのは愛の成せる技。しかし意外な事実が発覚。弓兵の彼女が、割と身軽だったという事。空中で一回転し、落下エネルギーを霧散させて、ふわりと石畳の上に正座。

いつのまに取ったのか、ソファア^{ソファ}の上のクッションを莫^も座^ざに使っている。こんの小娘がア…………

「甘いですね、黒人さま。セキレイたる私をその程度で倒そうなどとは」

「いいや君はダメな方のセキレイだ。それも一、二を争うくらいに」

「よよよ、黒人さまは私をコケになさいますのね……………というわけで、ちよつと出かけてきます」

「嘘泣きからの真顔やめろよマジぶつ飛ばすよ」

瞬間、彼女は足の跳躍力で家の外壁を軽々と飛び越えて、どこかへ行ってしまった。

彼女が敷いていたクッションを取るとその下には何と驚き、さらに新聞紙が敷かれていた。クッションを改めてチェックするが汚れはなく、傷もない。おのれ小娘、出来るようになったな……………とはさておき。

「夕食……………用意しとくか」

こうでも言わねば黒人さまのもとを離れられません。

あの方はおそらく過剰なまでの心配性ですから、ああ言った方がちよつど良いですよ。

というわけで皆さんこんにちわ。セキレイ？37、弓のセキレイ・魅弦^{みづる}です。良しなにどうぞ。今日は先日言いそびれた『下宿先』への別れの挨拶をしに行こうかと思い、飛び出した次第です。言いそびれた理由は、なにやらあの方の城に新たに二人の入居者がやっていた事と、それがあまりに騒がしく関わったらめんどくさそうなのでこの件は後回しでいっか、という軽いノリで決めた事なんですよ。

住宅の屋根を八艘跳びのように駆け上がり、たどり着いたのはM・B・I本社から見て北側、住宅街の一角にそびえるちよつと年季の入ったアパート。名を『出雲荘』——般若^{やしろ}が住んでいる鬼の社です。

「誰が年増ですかあ？」

「ひぎゅおおツツッ！！！？？？？」

背後に猛烈な邪気——もとい怒気を感じ取り、逃げようとしたら足を引つ掛けられてこけました。

おずおずと振り返るとそこには、この『出雲莊』の王にして般若の正体、バツ一の美人家主、浅間美哉あさま みやその人がいた。どうやらお買い物ものの帰りのようです。エコバッグの中はいっぱいです。

「しばらく帰らないから心配しましたよ？ どこに行ってたんですか？」

「いえ、その……葦牙さまに会いまして。婚いだついでに数日泊まってきました……」

「まあ、それはそれは……その方は、良い葦牙さまなのでしょうね」

「ええ、それはもう最高の葦牙さまで……家事が出来て、料理も美味しくて、美形だし、強いし、お金持ちだし……文句なんてある筈がありませんよ。そうですとも」

「………なんだか貴女が巫女服を着ているのがよろしくないような気がしてきました」

なにを仰るやら。清廉潔白、純真無垢、聖人君子とはこの私をおいて他にはいませんよ？

巫女服は勿論、セーラー服も騎士甲冑もお姫さまのドレスもドンと来いなパーフェクトなセキレイですよ？ 似合わない服なんてある

筈がないじゃないですか。長生きしたせいで耄碌もうろくしてるみたいです
ね。

スッパアアアアアアアアアンツツ！！！！！！

「あ痛^いったあツツツ!!!??」

「あまり失礼な事ばかり考えてたらお仕置きしちゃいますよ？」

「雑誌で頭を叩いてから言われても説得力ありませんよ………
………うう」

「というかこの人雑誌とか読むんですね。意外です……………表紙に『今年のカジュアルはこれ!』とか書かれているところから察するに、普段着が着物一枚というのに若干コンプレックスでもあるんでしょうか。」

他は野菜やら果物やら特売のお肉なのに、ギャップというかテンションの温度差に引きかけです。

「葦牙に出会ったという事は……此処を出て行くのですね」

「ええ、だからお別れを……………あと邪魔になるでしょうから荷物

の始末を」

「ふふつ、そう言うと思って先に片付けさせてもらいましたよ。私の部屋に風呂敷に包んであります」

「風呂敷ですか……………ダサイですねえ……………一応主婦だったんですからヴィトンとかGUCCIの一つでも無かったんですかねえ」

「明日は燃えるゴミの日でしたねえ」

平謝り、またの名を土下座。侍が困った時に使うと言われる儀式の一端——らしい。

というのも、この事を聞かせてくれたのは他ならぬ黒人さまなのです。

自信満々に『土下座は奥義だ、必殺技だツツツ！！！！！！』っていつから使ってみたんですけど……………哀れみの目線しか感じないのは何故でしょうか。とりあえず帰ったら黒人さま射つてやる。

「ですが新しい入居者も来た事ですし、丁度いいみたいです。これも八百万の神々の巡り合わせか、はたまた只の偶然ただでしょうか」

「そうですね……………魅弦、困った時はいつでも出雲荘をこゝ」

「有難う御座います……………美哉。おねえさまですが……………私はあの人と、葦牙様と勝ち抜いてみせます。この馬鹿げた闘いを。その時は……………また一緒に暮らして戴いただけますか」

彼女の言葉は暖かい。彼女声は優しい。彼女の全てはまるで母親の慈愛のよう。

護られていればそれはそれは暖かく優しく傷一つつく事の無い日々をおくれるのでしょうか。

ですが、それでは私はいつまで経っても弱いセキレイのまま。彼女に護られなければ葦牙様と生きていく事すら叶わない、弱い者になつてしまふ。そんなのは御免だ。私がまだ小さかった、神座島にかみくらしまにいた頃と同じままだなんて———そんなのは彼女が可哀想だ。私が哀れだ。

『美哉、魅弦も美哉と一緒にみんなを護りたいです！』

『……………貴女はまだ雛鳥なのです。今は私達に護られていても良いですよ』

『じゃあ！　じゃあ私が大きくなったら、その時は美哉と一緒にみんなを護ってもいいですか！？』

『そうですね……………お好きになさい。それが貴女の選択なら、私は何も言うつもりはありませんから』

『はいっ、美哉っ！』

今こそ、あの時の約束を果たすとき。

この人と翼を並べ、この帝都を共に羽ばたき、またあの時のように

……………一緒にいたい。

今度は雛鳥ひなどりとしてではなく、一人の女セキレイとしてこの人と、葦牙様くろとさまと共に。

「そうですね……………お好きになさい。それが貴女の選択なら、私は何も言うつもりはありませんから」

「はいっ、美哉おねえさまっ！」

第四話 初仕事

「黒人さま、お小遣いを要求します」

「なら働けよ小娘^{ニート}。せめて家事くらい手伝いなよ」

昼食の野菜のごった煮を摘まみながら、目もくれずにそう言い放つ。
やあこんにちは皆。空想武術『虚刀流^{きょとうりゅう}』の想像者、白羽黒人^{しろはくろと}、二十歳だ。そして目の前でアジの開きをはむはむしている黒髪の少女・魅弦^{みづる}は僕のセキレイだ。得物は二m超の日本弓。

「そろそろ、そろそろだよ。君にもなにか家事をしてもらいたいんだけどさあ、そこんことどう？」

「とは言われましても……………私、家事は苦手ですからどうなつても知りませんよ？」

「料理でせいぜい暗黒物質ダークマターが出来る程度だろう？　ならそれ以外を
してもらっよ」

「すいません、掃除をしたら余計散らかって洗濯したら服が臭くな
ってしまいますがいいですか？」

「オウノオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！？？？」

尚更やらせる訳に行かなくなっただじゃないか……………クソッ、御中
め。もうちょっと家事の出来る子に調整してやればよかったのにさ
あ……………全くクソメガネめ死ねばいいのに。

「あ、でもお裁縫は得意ですよ？　服からぬいぐるみからお任せで
す」

「どや顔してもデメリット庇いきれてないからね！？　寧ろデメリ
ットに掻き消されてるからね！？」

「ちなみに下着は綿100%で手編みです。白ですよ」

「変なトコで清純派を主張した！？」

と、化物語バケモノガタリみたいな他愛のない会話が僕らの日常だった。

しかし、家事マスターな僕でも流石に毎日『路地裏賭博喧嘩でかせぎ』と家
事を完璧に両立させるのは段々と難しくなっていた。そんな折であ
る。テレビでふとニュースがやっていて、それはなんと摩可不思議
な内容だった。

『えー、私は現在帝都都内にある植物園の上空にきています。ご覧下さい、この草々と生い茂った巨大な木々を！　これらは植物園内で異常繁殖した植物との事で、今日の午後未明に帝都とM・B・Iがこれの駆使に当たることを発表しました。ニュースをご覧になっている視聴者の中で植物園から半径五百m以内に住んでいる方々は、ただちに避難して下さい！』

というニュース。これはええ、間違いなく――セキレイ絡みですよねえ。

そして同タイミングで携帯に一通のメールが。送り主はM・B・I社長・御中広人その人である。ってゆーかアドレス教えてないのにメールしやがって……………高美さんになんか嫌がらせ代行してもらおっかなあ。

それはまあ置いて、メールの内容はこうだ。

『^{アソコ}植物園にとつても可愛いセキレイがいますよ！？　早い者勝ち！？　羽化させられるのは貴方かも！！！！』

という挑発バリバリの内容でしたとき、おしまい――と行きたいんだが、それと立て続けに一通のメールが届く。送り主はタワーを出る時にこっそりアドレスを交換した高美さんからだった。

『悪い、白羽君。御中のアホがまたやらかした………すまないが、君にもアソコにいるセキレイの保護に向かつて欲しい。今は黒服で覆面、炎を使うセキレイ「焰」^{ほむろ}が先に向かっている筈だ。御中の思い通りにさせたくないのは君も同じだろう?』

——その話、ノッた。昼食を食べきり、ごちそうさまをして食器を流しに置いておく。

魅弦も僕の考えを理解してくれたのか、彼女の自室に置かれている日本弓を持ち出し肩に掛け、腰と背中に矢筒を背中と腰に掛けて完全武装モードの魅弦が誕生した。が、中身はバカでありアホ極まらないままだ。

「では、ちょっと食後の運動と行こうか。魅弦、準備はいい?」

「ええ、少しは運動しないとお腹回りや二の腕が余分にぶにぶにしていますから」

「それは由々しき事態だ。では魅弦のダイエットも兼ねて——
出陣」

キングクリムゾン——世界は消し飛ぶッ！

時間を吹き飛ばし午後は三時頃。場所は植物園前のM・B・Iの検問所前である。

銃器を持ったM・B・Iの私設軍部が装甲車で待機している様子を、僕は真っ正面から見ていた。隣には魅弦の姿はなく、彼女は現在ここから数百m離れたビルの上にいる。

ここで追記だが——彼女の弓の射程は『2km』である。遠距離から小型マイクでの通話で、彼女からの情報は逐一リークしている。彼女が『観て射って』僕が『断つ』。これが僕らが^{セキレイ}鵲鴝計画を生き残る為に考えた布陣だ。

「どうだい、魅弦。そこからセキレイの少女は見えるかい？」

『いえ、流石に森の中までは私でも………少なくとも、そこから二百m先の樹木の密集地帯にいるのは確認出来ました。あと五十m後方からセキレイ二羽と葦牙らしき男性が一人、それと一緒に別の葦牙が一人、接近しています』

セキレイの少女の方は直感ですけどね、と付け足したがまあいいでしょ、そのくらい。

後方を振り返ると魅弦の言葉通り、ボンテージファッションに身を包んだセキレイが二羽とその葦牙らしき男性が一人。その背後に青年が一人、引き連れられるように歩いていた。僕は物陰に姿を隠し、様子を伺う事にしたのだが――

ズバアアアンツツッ！！！！！！ と、二人のセキレイから紫色の雷が放出された。

予想してたけど本当にいるんだね、ああいう能力を使えるセキレイ。古今東西アニメやゲームには能力を使用するキャラが多数いる。五行属性や重力や音などの自然能力など、多種多様。そして今回は雷に行き当たったという訳で。彼らは憲兵を追い払い装甲車を適当に破壊すると、堂々と中に入っていた。

「……………魅弦、他のセキレイや葦牙ってあんなのばっかなのかな？」

「そんな訳ないでしょう。あの野蛮な二人を基準にしないで下さい」

いつの間に背後に、魅弦は指定したビルを降りてこちらに来ていた。まあ場所は分かったからいいけど。二百mかぁ……………虫に刺されなければいいけど。

そして僕らもこの機に乗じて中へ入ろうとしたら――ゴウッ！

と、突如赤い炎が巨大な壁のように僕らの道を遮った。そんな炎の壁が左右に割れ、その向こうから黒服の男が姿を現した。そうか、彼が高美さんの言っていたセキレイ……………」

「セキレイNo.06、焰……………だね？」

「へえ。僕の事を知ってるなんて君、中々情報通だね」

「いや、高美さんから聞いたんだよ」

「ご無沙汰してますね、焰」

「高美さん……………？ それに君の後ろのセキレイは魅弦……………じやあ君が高美さんが言ってた」

「はい質問。白衣で白髪でメガネで若作りの男は嫌いですか？」

「大嫌いだね。いつでも殺したいくらいに」

「僕もだよ」

数秒の空白、後に熱い握手を交わす。彼は覆面だがその上からも解るくらいに満面の笑顔。

僕もまるで懐かしい友人に出会ったかのような嬉しさに表情を綻はらばせる。男性の友達は少なかったけど、まさかその少数に男性のセキレイが加わるとは夢にも思わなかった僕でした。お互いに敵でない事を認識すると、すかさず携帯のアドレスと番号を交換した。

「いやあ、まさかこんな所で御中殺しの仲間に出会えるなんて……運命だね。それに魅弦とも知り合いみたいだし。運命としか言いようがないよ」

「こつちこそだよ。魅弦とはちょっと前まで同居人だったんだ。別れの挨拶は無かったけど……とにかく、高美さんには友人の紹介料でお礼を言わないとね。後でドンペリ空けてもらうけど」

ドンペリって……ああ、夜の仕事がホストなのか。なるほど納得。

だからイケメンでキザで炎使って覆面で顔隠してたりするのか。なるほどなるほど、ちよつとム力つく。でも夜にここに来てるってことは、今頃は順位とかピンチなんだろうねえ。

「では早速メガネの謀略を砕きに行こうか友よ」

「……………そうしたいのは山々なんだけどなあ」

焰は僕達の背後、爆煙の先を凝視する。僕も人並み外れた視力で見てみると――――いた。

かたや黒いメイド服とゴスロリ服を合体させたような、鎌を持った

『不思議の国のアリス』の“黒”アリスみたいな服のお姉ちゃんと、白い振袖を着崩し鎖を巻いた、オレンジの髪的女性。その額には真紅の鵲鳩紋せきれいもんが浮かんでいる。彼女らは僕らに相對すると、その足を止める。

「来たな『元凶』——No.43、夜見よみ」

「ホホホ、いやですわあゝ、元凶だなんて。わたくしはただ葦牙に代わって、緑の少女を貰い受けにただけですのに。これはこれは酷い言われようですわねえゝ」

「ねえ焰君……あのセキレイってひよつとしてブリっ子かな？」

「だろうね。『ホホホ』なんて古典的かつ嫌われやすい笑い方をする辺り、間違いないと思うよ」

「ちよつとお！？」

「二人とも、先に行ってくれ。夜見の葦牙は少々質が悪くてね……手に入れられるセキレイは誰でも手に入れようとするんだ。今回もそうだ……だから頼む。僕の代わりに、緑の少女を守ってやってほしい」

うわあ……キザなのにメチャクチャカッコいい。いや、キザだからカッコいいのかな？

とにかくヤヴァい。こんなイケメンの頼みなんて、訊く以外の選択肢がないじゃないか。背後の通路を確認、一本道——とりあえず別れの挨拶程度に、カッコよく決めてこの場を去ろうじゃない

いか。焰君の一步前に歩み出し、中国拳法の内勁ないけいきこうの要領で体内に氣を溜め、地面目掛け双掌打を放つ。

「虚刀流奥義

『飛花落葉ひなはくよく』 ツツツ！！！！！！」

脇で手を合わせる『溜め』の動作からはじまり、地面に双掌打を打ち込む。

直後。波紋のように衝撃が地面に伝わり、僕と背後の二人を起点に五メートル・百八十度の方向全ての『装甲車や公共物を除いた、地面だけが破壊され』、地割れのように砕けたコンクリートはまるで流水のように隆起する。敵のセキレイ二人は突然の事態に後方へ飛び去り、巻き添えを食らう事を懸念してこちらへ近づこうとしなくなった。そんな事はないのに……これは『指定した一部分だけ』を攻撃するのに特化してるんだから、彼女らが食らう事はまずないが、警戒には十分だ。

おまけに土埃ちちりで互いの視界が遮られ、正確な位置は確認出来なくなつた。

「それじゃ焰君、また今度！」

「またお食事に連れて行ってくださいね」

「ふっ……………ああ、行つてらっしゃい」

最後までキザだなあ……………敬意を表するよ。

葦牙——か。あれが葦牙なのか？ 僕には人外にしか
見えないね。

だってそうだろう。ただの人間、ただの葦牙が『ただの掌底』でコ
ンクリートの地面を五mに渡って碎くなんて馬鹿げてるとは思わな
いかい？ 普通ならまず有り得ない。セキレイと婚くいだ葦牙でも、
まして光と響の葦牙の瀬尾薫せお かおるのように『あの男』から特別な能力を
もらった訳でもないのに。

高美さんは彼を『ただの葦牙』と呼んだけれど、本当にそうなのか。
彼女は何か、嘘を吐ついているのではないのか。それも、この鵲鴿計
画にの根幹にも関わるほど重要な、異常な事を——

「なんですの今は……………けどそれは後！ 秋津、焰は任せまし
たわよ！」

「……………了解」

ズドドドドドド！……！！……！！と土埃が『カマイタチ』に切り裂かれ、その刃は僕へ向かっている。

僕は炎の壁を発生させ、カマイタチを吹き飛ばす——一応だけど、カマイタチは夜見の技だ——。そしてそちらへ気をとられている内に、夜見は僕の頭上を飛び越え、甲高い笑い声をあげて森の中へと消えていった。

すかさずそれを追おうとするが、残った無感情・無表情なセキレイ——名前は秋津だったかな——が地面を伝い、氷の津波を発生させて攻撃してきた。それをまた炎の壁で焼き、溶かして止める。足元には溶けた氷が水となって一面に広がっている。

「額に鵲鳩紋、それに氷……………廃棄ナンバーか!？」

「お前の相手は……………私……………命令、果たせなければ……………また、捨てられる……………」

最近ツイてないとつくづく思ってたけど、本気でツイてないね、僕は。

御中に半月近い努力を水の泡にされて、仕事でナンバーワンから落ちかけて、あまつさえ廃棄ナンバーに遭遇……………ああ、なんだろう。気が楽になってきたよ。今なら大概の不幸もビックリも受け入れられそうな気分だ。

「あーっ、かがりさんだーっ！」

「ツツツ！！！؟؟？」

背後からなんと陽気な、悪く言うなら能天気な少女の声。

おそろおそろ振り返ると、やはり予想通りで思い通り。うちのアパートの新人り、佐橋^{さはし}皆人君^{みなと}のセキレイ、結^{むすび}ちゃんだった。彼女は常に笑顔で、スタスタと僕に近寄るや否やマスク越しに顔を覗き込んでくる。

「あれ、人違い？ あ、篝^{かがり}さんはマスクの人じゃありませんでした」

「（なんだろう、この変装に対する虚しさは……………）」

「お風邪ですか？ 気をつけて下さいねーっ！」

シュダツツツ！！！！！！ と足早に森の中へ飛び込んでいく彼女。たぶん、皆人君を追ってだろう。

そんな嵐のような彼女に、僕も廃棄ナンバーのセキレイ・秋津もただただ呆然としていて。

「……………風邪、なのか？」

「ちつがーっ！ツツツ！！！！！！……………強いて言うなら、風邪を引くのは君と闘った後だろうね」

「ヒラタいかなあヒラタ……………ヘラクレスかコーカサスでもいいなあ。大きいのがいいなあ」

「ヒラタ、ヘラクレス、コーカサス……………あ、クワガタとカブトムシですね。飼うんですか？」

「いや、売るね。たぶんデカかったら十万くらいにはなるんじゃないかな」

「今世間の純粹無垢な子供達の夢を叩き潰しましたよ……………」

え、そう？　ワリと普通な気がするけど……………アレはいい小遣い稼ぎだよ、いやホント。

ヘラクレスやコーカサスは日本にはいないけど、M・B・Iの事だから都内でこっそり繁殖とかさせてそうな気がするんだよねえ。森の半ば辺りで邪な心よこしまを露にした僕でした。それにしても広い、広す

ぎるよこの植物園。

たぶん十分くらい歩いてるけど、いつこつに緑の少女は見つからない。

道らしい道の形は残っているけど、それも何処へ通じているのやら。気分はRPGの主人公だ。

「ねえ魅弦。なんかセキレイ同士のテレパスイミたいなのはないの？」

「セキレイは便利ユニットじゃありませんよ……そこはかたくなは感じるんですけど、これはあくまで『かもしれない』か『虫の知らせ』程度のモノですから。信用性はありませんよ？」

「どうせ道が分からないんだ。ならちよつとギャンブルも悪くないだろ？」

「はあ。では——ここから南南東の方角、距離二十七・九五m先……です」

「分かってるよね？ 絶対位置とか分かってるよね！？ なに、レ——ダー！？ インテル入ってる！？」

パッポー。

それから数分後

「……………いたよ」

「……………いましたね。いちゃいましたね」

森の茂みの中からこつそり覗けば、まるでその少女を囲むように草木が絡み合っている。

そしてその中心に、まるで彼女を隠し、守るように。御中の言う『緑の少女』がいた。彼女は膝を抱えて、寂しそうに泣いていた。緑の、というよりは——黄金の少女。長い金髪に、白のワンピース。緑は彼女ではなく、その周囲が緑なんだ。

とりあえず焰君の頼みでもあるので、少女の保護の為に彼女に接近する。

「こんにちは」

「ひっ……………」

外に出るための穴から覗き込んで挨拶。返答は華奢な悲鳴だった。思わず哀しさで膝から落ちて、さあポーズ。その名は『orz』——

——オーズ。

涙が溢れそうだ……………ああ、魅弦。頼むから横からジト目で脇を

ツンツンしないでくれ。腫れ物をつついてるみたいで、どんどん胸が苦しくなる……………そして頼むから少女よ、僕を嫌わないで。

「……………だれ？」

「えっととりあえず、高美さんって知ってる？」

「……………たかみちゃん？」

「そう。僕は高美さんのおつかいで、君を助けに来たんだよ。君が本当の葦牙に出会えるようにね。僕は君に痛い思いをさせたり、怖い思いはさせない。約束するよ。だから其処から出てきてくれないかな？」

少女は泣きながら、こちらへと少しずつ近づいて来てくれた。

そして手が届く距離、僕からは手を差し伸べるだけで、手を掴もうとはしない。

何度か彼女の小さな指が僕の手を触り、怖がってまた離れる。そして十数秒後に、ようやく彼女は僕に気を許してくれたのか、僕の手を掴んでくれた。それはなんとも華奢な、小さな手だった。

「ありがとう。君の名前は？」

「……………草野くさの」

「草野……………んじゃとりあえず、くーちゃんでもいいかな。くーちゃん、このまま一回外に出るよ。此処に恐ろしいお姉さんが

来てるからね。いいかな？」

「（コクコクッ！）」

「あら、そうは問屋が卸しませんわよ」

くーちゃんをお姫さまだっこ——かなり軽かったのはよく覚えてる。他意はない——して外に出ようとした、このなんとも言えぬタイミングで。

デッデーンッ！ 夜見が現れた！ 相手は鎌を持っている！

「空気読むなよエセアリス！ 自分の国に帰れエッツッ！！！！！！」

「探し回ってようやく見つけたらクレーム！？ わたくしの努力は褒められないのですか！？」

「褒めるかア！ 都合のいい時だけテンプレ守ってんじゃねーよバカヤローッッッ！！！！！！」

「フッ、陰険女は虐められる運命なのですよ……………受け入れなさいな」

二人がかりで一人のセキレイを苛める……………あれ、なんだろう。ちよつと楽しいぞ。

とまあ遊びはここいらにしといて、だ。くーちゃんを魅弦に預け、一歩前に踏み出る。

そして今回の戦闘体勢は式の構え・水仙^{すいせん}。脚を平行に大きく開き、両手を手刀にして脇に添える形の構え。なんで水仙かって聞かれたら、まあ……………気分？　だって相手一応鎌とか持ってるし。ってゆーかセキレイだし。だが夜見はそんな僕をきよとした顔で見つめ、数秒の空白。そして。

「……………ふふふふふ、おーっほほほほほほ！」

「うぬ？」

「はあ、はあ、はあああ……………先ほどの貴方の攻撃。地面を砕いた時は驚きましたが、ですがそれでも！　ただのひ弱な輩牙が、セキレイたるこのわたくしに戦いを挑むと！？」

「ひ弱って……………地面砕いた時点でひ弱じゃないよね……………？」

「お黙りなさい！　いいですわ、そのセキレイを舐めきつた性根、叩き直して差し上げますわ！」

そうして、僕と夜見の戦闘は始まった。

次回、虚刀流対鎌のセキレイ——こつこ期待。

「セキレイが葦牙を攻撃するとは何事ですか！」

……なに、またこの流れ？　そしてなに、この子。巫女さん？
巫女っぽい服なんだけど、魅弦と違ってその袴はミニスカでニーソックスである。僕と夜見の間に割って入ったその少女は、僕に振り下ろされた鎌を白刃取り、ぴたりとその動きを止めていた。
この数十分後に知った。彼女は――
結^{むすび}という。

第五話 刀、夜を貫く（前書き）

のんびり書いてたら時間がかっちゃったよ……………サーセン（汗）。
一部にオリジナルな観点がありますが、何卒ご了承を。

第五話 刀、夜を貫く

過去に一度起こった事が、また起きている錯覚を覚える。人はそれを『デジャヴ』と呼ぶ。

僕は白羽黒人^{はくくろじん}。二十歳の青年だ。住居は帝都に建つ大豪邸。容姿は超・美青年。

そんな僕は今、デジャヴを体験している。場所は帝都都内の植物園——のだが、その植物は『ある存在』によって爆発的に成長し、擬似的な樹海を作り出していた。そんな植物園の中心にて、僕が体験しうる過去の出来事とはなんでしょう？

一、神秘的な美少女に出会う。フラグなし

二、謎の美女に殺されそうになる。手持ちに武器は無し

三、謎の美少女に助けられる。ムチムチのばいんばいんだった

「セキレイが葦牙を攻撃するとは何事ですか！」

総じて僅か、十分未満の出来事でした。どこらへんがデジャヴってるって？

最後の三番、美少女に助けられるの粹さ。他は僕がついさつき体験した事なのさ。

目の前のセキレイの少女、名も知らぬ彼女は僕に振り下ろされた鎌を白刃取り。僕を庇うようにして夜見の前に立ち塞がる。だがやる気を出していた僕からすれば、人の闘いを邪魔されたうえに、それを横取りしようと言ったから、もう不快極まりない。

「むっ、結ちゃん!？」

「あ、皆人さん!」

彼女の葦牙、らしき青年が森の中から飛び出してきた。なんとも頼り無さそうな、普通の青年。

そしてその後ろから続くように、装甲車を破壊したボンテージファッションのセキレイ二人と、その葦牙が姿を現す。後方の三人はまづ夜見を一瞥し、次に僕から後ろの魅弦へと視線を泳がせる。

「無視しないでくださります!？ くっ、このっ、離しっなっさい
いいッッッ!……!……!」

「危ないですよ、こんな物を人に向けて。折っちゃいましょう、え

いつ」

「ぎゃあああああああッッッ！！！！؟؟？」

夜見は悲鳴をあげて、刃先をポキッと折られたマイ・鎌を凝視する。そんな落ち込んで膝を突く彼女を、若干無視しながらセキレイの少女・結は葦牙・皆人君に駆け寄る。それと入れ替わりに三人は前に踏み出し、緑の少女を『所有^{ほし}』している僕らを注視する。別に青年は、力関係で付き添っている訳でもなさそうだし、悪い人間ではなさそうではある。

ならちよつと話し合ってみるのも悪くはないかな。早速魅弦にくーちゃんを……………

「萌〜え萌〜えじゃ〜んけん、じゃ〜んけんポンッ！」

「あいこでもえ〜！」

「……………ナニやってんだよ君は」

「なに、と言われましたら……………じゃんけんですね。なんだかやこしい流れでしたので。しゃしゃり出るのも面倒ですから、くーちゃんと萌え萌えじゃんけんや『プチ・掌^{てのひら}シユレディングー』をしてみました」

「みーちゃんつよいも。くー勝てないもー!」

さっきまでの脅えていた儂げな少女は何処だよ……………魅弦、空気がブレイクし過ぎだろ。

そしてくーちゃん馴染みすぎ。メツチャ楽しそうじゃん、めっさ和んだるやん。なに、僕ら邪魔?

「おい青年、あのガキだよな?」

「はい……………間違いないです」

「くーちゃん、あのお兄ちゃん。たぶんくーちゃんの……………葦牙だよ」

「くーの……………お兄ちゃん」

一瞬の和みを、刹那に緊張に戻す。互いに前へ歩み寄り、向かい合う。

皆人君の後ろにはセキレイの結ちゃんが、くーちゃんの後ろには僕と魅弦が。なんだか家族の再会みたいな空気だね、これ。他人にしてみれば、別にそんな大それた事じゃあないけど、彼彼女にとって運命の出会いに近い。

『出会ってよくして出逢う』——クソ御中の言葉通りだ。
ああ忌々しい、死ねばいいのに。

「あ、えと……………やつと会えたね」

「お兄ちゃん……………」

そして、二人はようやく出会えた。くーちゃんは皆人君に飛びつき、まるで仲の良い兄妹みたいだ。

くーちゃんの反応から、彼がくーちゃんの葦牙でまず間違いないだろうね。なら僕の役目は終わりだ、あとは彼と彼女達の問題、任せとさつさと帰りますか。今日はアニメなにかやってたかな……………

……………

「ゆ……………ゆ、許しませんわ」

ガガンッ！ 夜見は生きていた！ さつきより強くなっているぞ！ 折られた鎌を握りしめ、折られた刃を脚で砕き、ゆらりゆらりと立ち上げる。

そんな彼女には今や殺意しか感じられず、ちょっと気圧されたのは内緒の話。魅弦も一応程度に弓に矢を掛け、戦闘の体勢を取る。皆人君達もそれを感じてか、結ちゃんが皆人君を庇うように構える。

三人は————かなーり離れたところで、観戦を決め込んでいた。

「わたくしの愛しい鎌をへし折り、あまつさえ無視に無視を重ね存在を空気のように扱い……………その上で緑の少女を奪われた？ ふ、うふふふふふふふ————チョーシに、乗るなああああ

あああああッッッ！！！！！！！！」

「ッ——伏せろオッッッ！！！！！！！！」

夜見が鎌を振りかぶると同時、僕は叫んで魅弦に飛びかかり彼女を押し倒した。

結ちゃんもそれに即座に反応してくれて、皆人君とくーちゃんを一緒に押し倒した。

そして、魅弦が引いていた矢がどさくさに紛れて夜見に放たれ、直線を描いて飛んでいく。夜見は振りかぶった鎌を渾身の力で一気に振り抜くが、魅弦が放った矢にはまだ遠い。しかし僕が恐れていた可能性は、そんな事じゃない。

それは彼女が鎌を振り抜いて、数秒後にやって来た。音もなく、静かな攻撃だった。

魅弦が放った矢が『ナニか』に切断され、空中でバラバラにされたのだ。

それは姿なく僕らの頭上を通過し——見えないけど、たぶん通ったんじゃないかな——辺りの木々を斬り倒した。夜見を中心に半径十m程だろうが、その距離にあった木は全て斬り倒され、薙ぎ倒されている。鋭利な刃物で斬ったかのように。

「決めた、決めましたわ……………わたくし、今からあなた方を皆殺しにします。さあ、覚悟なさい！」

「突然のキル発言にドン引きです……………」

「魅弦、皆人君達と一緒に下がってて」

「さあ、まずは誰から死にたいのかしら!？」

「では結がお相手します! 自己紹介を」

すつと、腕を差し出し結ちゃんを止める。そして代わりに僕が前に出る。

構えは漆ななの構え・杜若かきつばた。クラウチングスタートのような、現代的な構え。

「虚刀流想像者・白羽黒人——推して参る」

「は? あはははははは………ただの葦牙が、セキレイたるわたくしに戦いを挑むと!? いいですわ、その舐めきった性根、叩き直して差し上げますわ!」

「同じセリフは死亡フラグだって知らないのかな?」

「寝言は寝て仰いなさい! いえ、わたくしが手ずから寝かせて差し上げますわ!」

「ただしその頃には、アンタは八つ裂きになっているだろうけどな」

わかってたけど、相手はどう足掻いても女の子なんだよねえ………確率から言つと、百八人中・九十人以上が。

となると『対女性非戦闘主義』ポリシーは今後しばらく、無効にしなきゃダメか………やだなあ、めんどいなあ。

だっただけで一瞬で、刹那の内に痛みを感じさせる事なく、夜見を倒す事にしよう。出来るだけ派手に、今後誰も僕に敵意を抱かぬぐらい派手に倒されてもらおう。ならここは一つ、最終奥義でもやってみるか。

「では遠慮なく、肉塊になってしまいなさいな、人間風情がツツツ！！！！！！！！」

再度放たれる見えない攻撃。その衝撃で、攻撃が通ったであろう場所には土埃が上がり、後を引く。

まるで戦闘機の翼が空気を裂いて雲を生み出すかのように、その『行き先』を示してくれていた。方向は真つ正面と左方向下段より、同時のタイミングで。知ってる人は知っている、知らない人のために解説しよう。この構え『杜若』の特性は――

「虚刀流――奥義」

「えっ――」

『移動に関する、前後の徹底的な自由性』と『圧倒的な短時間での最高速度への加速』である。

スポーツにおいてもクラウチングスタートは、屈んだ際の体重を利用した、前方への爆発力を使用する走法。

原作ではこれで、前方に加速した後に後方へ一瞬で後退する、という荒業を成し遂げたが、今はそこまでする必要はない。見えない攻撃――改め加速した視界で認識したが、アレは『カマイタチ』

だ——の隙間を掻い潜り、夜見の真つ正面・足元に潜り込むように飛び込む。

そして左手を照準に、夜見の鳩尾に狙いを定める。あとは——

やるだけ。

「きつ——」

咄嗟に後方へ跳ばうとする夜見の鳩尾に、一撃目を叩き込む。

虚刀流の七つの奥義を一度に叩き込む事から、主人公は“ああ”名付けたが、僕には理由もあると思うのだ。例えば、それぞれの奥義には特定の部位を、徹底して破壊する性能があると、僕は読んでいる。

壹の奥義『鏡花水月』——対象の任意の部位への攻撃、牽制。

貳の奥義『花鳥風月』——対象の胴体を破壊する。

参の奥義『百花繚乱』——対象の脳を攻撃する。

肆の奥義『柳緑花紅』——対象の骨格、及び全身の内臓・血管を破壊する。

伍の奥義『飛花落葉』——対象の皮膚組織及び筋肉を破壊する。

陸の奥義『錦上添花』——対象の四肢を破壊する。

漆の奥義『落花狼藉』——対象の頭骨を破壊し、即死させる。

それらを絶え間無く、続けて打ち込む。

これが今の僕に出来る、最大の技。七つの奥義、これらを合わせて

こう呼ぶ。

「虚刀流

——七花八裂！！！！！！」

掌底での打撃、手刀での刺突、膝を用いて顎への打撃。拳での打撃、
双掌打での発勁、手刀での横腹部への打撃。最後に跳躍からの踵落
としによる頭部への打撃。

その身体が打撃で浮き上がりながらも尚、手を、足を止める事なく
叩き込み、そして終了。嗚咽も悲鳴も、叫びも抵抗もなく、夜見は
力無く地面に顔面から落ちて倒れた。

「お粗末」

「（せ……………セキレイを倒しちゃった……ッッッ……！！
????）」

——皆人君、そんな化物を見るような目で僕を見ない
でよ。

僕も奥義が成功して、かなりビックリしてるんだからさ。こう、ホラー映画見たときくらいに。

とは言うものの、頭の中じゃ形は出来ていた。力加減も、感覚も、打ち込み方も。後はそれを成功させられるだけの、馬鹿馬鹿しい程の筋力・腕力・脚力だけが難点だった——のだが、それはどういう訳か解消されていた。

何もドーピングをした訳でも、チートコマンドを使った訳でもない。付け焼き刃で身体を鍛えても、これほどの力は出せない。まあ間違いない——あの時の、光る翼が関係しているんだろうね。

すたすたと魅弦は僕に歩み寄り、袴のポケットから何かを取り出して、僕の手になに握らせる。

「黒人さま、お疲れさまでした。はい、ご褒美のキャンディ」

「イチゴミルクじゃないとダメだよ」

「チツ、好き嫌いめ……………」

「ほら、それはいいからさっさと帰るよ。長居する理由はないんだから」

握っていたキャンディは、マスカット味だった——とまあ、それはそれで別として。

魅弦は僕の袖を掴み、僕を引き留めようとしていた。なんとも、やるせないような顔で。何故なのか。

「私達は……………セキレイは倒したセキレイを、M・B・Iが回収するまで見守る“義務”があります。それが例えセキレイでない黒人さまだったとしても、御中博士を嫌いだとしても。それだけは守って欲しいんです」

ああ、と。今更ながらに思い出すのは、僕が最初に相対したセキレイ『NO・59・卯月』^{うづき}の事。

彼女は僕に倒されたあと、何処に行ったんだろうと一度、魅弦に聞いてみた事がある。同じセキレイならば敗者の未来がどうなのか、知っているんじゃないかと。それは別になんの事もない、気紛れ同然の質問だった。そしてその答えは。

『負けたセキレイは、葦牙の元を離れ、再び神座島^{かみくらじま}に送り返されます。それが私達セキレイの——神世^{かみよ}より降り立った者の運命^{さだめ}なんです。それが善かれ悪しかれ問わず、です』

という答えだった。つまり、一度負けたら再起不能^{ノーリターン}の、名前通りのサバイバル。

それは例え誰であろうとも、変えられない運命であると言う。魅弦も、あの烏羽^{からすば}も例外ではない。葦牙と添い遂げたければ、闘って戦って生き残れと、御中はそう言っているのだ。『恋は戦争』とはよく言ったものだ。

「……………分かったよ。その代わり、今後は洗った洗濯はちゃんと干す事。いいね？」

「ぶっ……………ええ、はい。分かりました」

事が済み、話の終わりが見えてきたので、僕は彼に接触する事にした。

一羽は羽化していないとはいえ、二羽のセキレイを抱える青年・皆人君。

魅弦の手を振りほどき——離れようとしたら、ワリとガチで腕を握られた。ミシミシとかイッた気がする——皆人君の方へ歩み寄る。結ちゃんを守ろうとしてか前に出るが、僕が手で戦意がない事をジエスチャーすると、なんだかあっさり納得してくれた。家の微・腹黒^{フチゲヘナ}とは大違いだね。ゲヘナとは地獄の——以下略。

「君の名は？」

「あ、えっと……………佐橋皆人、です」

「佐橋皆人……………君か。うん、覚えた。僕は白羽黒人、彼女——僕のセキレイ・魅弦の葦牙だ」

「白羽……………さん」

「『さん』はいいよ。それに、別に僕の事は黒人でいい。面倒ならさんは付けないでくれると気楽かな」

「あ、えと、うん。じゃあ黒人君——でいいのかな」

「セキレイNO・88、結！拳系です！」

「セキレイNO・37、魅弦です。弓が得物——ですけど、今

回今後は闘わないですよ。面倒ですもの」

「はあ……………じゃあ、最後のちょっと前に勝負しましょう!」

「ならまあ……………いいでしょう。受けました」

別になんでも良いって言うてるのに、気の弱い青年だなあ。21世紀には珍しいタイプだね。

そんなこんなで、M・B・Iの回収班が来るまで彼と話をしていた。セキレイ同士なんだか、仲良くなってるようになってないような、微妙な空気も漂っていたけど。ただ彼は『闘う気はない』と、そう言うてくれた。それが救いだ。

お陰で誰かを——結ちちゃんを傷つけずに済む。たぶん僕という人間は、セキレイにとっては天敵に成りうる存在なんだろう。自分でなんとなく分かる。だから高美さんも御中も、僕にはやたらと気を掛けてくれたのか。なるほど、納得だ。

そして回収班が到着するや否や、瞬足で森を駆け抜け、外へ出る。そしてまだいたんだよ、彼が。

「やあ 焰君」

「やあ 黒人君」

「あ、さっきの葦牙」

「焰と知り合いみたいだよ。どうする瀬尾?」

「放つとけ放つとけ。別に危害を加えようって訳じゃねえんだろ?」

「なら極力無視だ無視」

丁度、正面の門のところに、焰君と三人組がいた。三人組は危険物を扱うように、焰君はなんともフレンドリーに拳をぶつけてきてくれた。ヤヴァイ、カッコいい。イケメンすぎる。三人組はそのまま何も言わずに立ち去ったが、焰君はまるで結果報告を——待つてるんだろっね。

ところで、足元がなんかやたらと水でビチャビチャなんだが——
——なにと闘ったんだ？　アイスマン？

「緑の少女は？」

「葦牙に出会った、いや、葦牙を引き寄せたのかな。自分から」

「自分から——……とにかく、無理矢理に羽化、なんて事は無いんだね？」

「保証する。この白羽黒人、名と命を賭けよう」

「……………なら、本当なんだろうね。なら僕の仕事は此処までだ。後はさっさとトンスラするよ」

「また君とは会えそうな気がするよ。ワリと近いうちに」

「フッ……………僕も同感だ」

そっ言い捨てて颯爽と跳び去っていったイケメン・焰君。カッコい

い、カツコ良すぎる。

一度御中をどう効率よく、かつ確実に殺せるかを検討してみたいものだ。酒を飲みながらのんびり。爆殺、射殺、殴殺、刺殺、焰君の能力で丸焼き、他多数。なにがいいかな——と、魅弦が袖を指で摘まんで引っ張ってくる。

「黒人さまお腹が空きました。ご飯です」

「ん、ああ……………そうだね。じゃあ今日は友人が出来た事を祝って、ご馳走にしようか」

「メニューは？」

「ラーメンだね。チャーシュー盛り盛りの、超・肉ラーメン。こんがり焼いた焼豚が食欲そそるねえ」

「その心は？」

「焰だけに焼く、なんてね」

「笑えませんよそれ……………」

第六話 これは新キャラですか？（前書き）

低速なのを読者の方に申し訳なく思い、全速力で執筆……………約・
二日モノ！

多少の手抜きはガマンしてくれえ……………！

第六話 これは新キャラですか？

『これが……………これだけが！ 俺の！ 自慢のオ！ 拳だあああ
あああああああああッッッ！！！！！！！！！！』

「黒人さまパーンチッッッ！！！！！！！！！！」

「げぶろばびぎばべああッッッ！！！！！！！！！！」

魅弦と出会ってはや一ヶ月。時期は既に四月を過ぎて、五月の半ばに差し掛かった頃。

鳩尾にモロにアップ^{うはくろ}パーを喰らい、うっかり吹っ飛ばされる僕こと白^し羽黒人、二十歳。

今日は気紛れで『スクライド』を鑑賞、魅弦はワリとバトルものが大好きでした、そして簡単に影響されやすい十代の女子そのものでした。イエス、ティーン・ガール。日に日に布教、もとい洗脳が進んでいく魅弦さん。ええ、やってるのは僕ですとも。痛みに“のたうち回り”ながらも、成長した彼女を微笑ましく見守る。父親とはこんな気分なのか。

だが――退かぬ、媚びぬ、省みぬ！　このまま見事な
オタ女に育て上げてくれるわ！

「あ、そろそろ昼ドラの時間ですね。私、こつ見えて泥沼モノが好きなんですよ」

昼ドラ……………だと。バカな、ここ最近はアニメしか観て
いなかったじゃないか！

これでも葦牙として、セキレイが同人誌的なやらしい集団に出会さでくわぬよう日々監督しているというのに、まさかの昼ドラだと！？ いっただ、一体いつから！？

県警モノか、弁護士モノか、それとも………ミナミか！
？ お昼によく放送してるし。

「……………冗談ですよ。それよりおやつが食べたいです。今日のスイーツは何ですか？」

「ありません」

「ビキッツツッ……!!!!!!!!!!」

あ、こちら。リモコンを本気で握ったらダメじゃないか。ヒビ入っちゃったよもう……………

そんな彼女を無視しながら、昼食の皿を片付けてすぐに洗い、冷蔵庫の中身を再確認したのち、夕食の考案に移る。これが僕流の生活キム。
グ・クリムソン
作業時間短縮法だ。まるで時間が吹き飛んだかのようなうた。

さて、昼食は和食だから夕食はイタリアンにしようかな、うん。そうしよう、それが良い。

「おおおやあつうううううううううううッッッ!!!!!!」

「ぐおおおおお！！？？？」

「おやつが無いなんて地獄です、生き地獄ですうツ！　せめてお煎餅を、お餅でも構いませんから！　望むならアイスかケーキを下さい！　どうか、どうかお恵みをををおおツツツ！！！！！！！！」

ダメだコイツ早くなんとかしないと……いつから菓子中毒になったんだ。

涙目に必死な形相、まるで子供のような態度。いいや違つ、彼女はまごう事無き子供だ！ ガキだッ！

どちらかと言えばお姉さん属性か同級生属性なのにこの若干及び時折見せるロリ属性……………侮れないな、魅弦。そしてふと、魅弦の服が一着しかない事に気付いた僕はある日、彼女に服を買ってあげた。

今日はそれを着ている――部屋着、タンクトップにシ

ヨートパンツを。他にも色々あるんだが……ええまあ、たゆんたゆんだね。駄々を捏ねて身体を揺する旅にたゆんたゆんだね。並乳だけどたゆんたゆんだね。

「タワーパフェエエ………チヨコフォンデュウウウウウウッ！」

さつきから品のレベルが上がってばっかりなのは、気のせいじゃないよな。

つかタワーパフェとかどこで食べたんだよ。僕もまだお目に掛かった事ないって。

でも関西には多いらしいね、所謂^{いわゆる}ド力盛りってヤツ。本来は五食分程の食材を特注の皿、もといボールやらに盛りに盛りまくって出来上がる、大食い感激の料理。ジャンルは問わず、始まりは、部活帰りの腹を空かせた学生向きに始めたそうだ。

そしてそれはデザートも例外ではなく、ギガ盛りデザートなるものが一度テレビに出ていたのが知るきっかけだったんだよ。コストよりも優しさor遊び心の方が優先される、世知辛い時代の大人の遊び心である。

そんな余談はここいらにして――――まずこの我が儘娘をどうするか。

「……………仕方ないね。魅弦、出掛けるよ」

「ふええ？」

「丁度いいタイミングだね。いや実は――――」

『お——大当たり！ 出ました今日の三等、お米50kg！』

「これぞ、我が奥義——
運命力うんめいりよくッッッ！！！！！！！！」

ガシッ、シュバツッ！！！！！！！！ と、昔からだが、引いたクジは大体当たる。

僕の特徴——無駄に引き運がいい。ゲームにせよくじ引きにせよ、なんせツイているんだから。

場所は御子上デパートタワー。帝都タワーより南に位置する、とにかく巨大なデパートという名のアミューズメントパークでもある。

十階からなる様々な店舗の数々、その周囲に並ぶ小売店から遊園地もどきのアトラクションなど、言っちゃなんだがもうデパートじゃないよねこれ。

時々やつてるくじ引きも、こうやって豪勢な景品を用意してくれるんだから、そりや人気だわな。

こうなる事も踏まえて持ってきた台車に米袋五俵を乗せて、とりあえず車に運ぶ。

………えっ、なんで車に。ってゆーか免許あつたのかつて？ そりやあ持つてるさ君イ。

これでも二十歳の青年だよ？ 車に興味がない訳無いじゃないかあ。十八歳になった当日に教習所に駆け込んだり合宿したりで、半年かけて色んな免許取ったさ。乗れない自動車は———たぶんあんまりないっ！ 好きな乗り物は大型のバイクだ！ ライダー最高ッツ！！！！！！！！

「はああああああああん……………」

米袋を車に運び、再びデパート内に繰り出す僕ら。そして魅弦の喘ぎ声にも似た溜め息。頬をほんのり薄紅に染め、そんな顔を隠そうと頬を手で覆う。それはまるで恋する乙女のように———
に見えるが騙されるな！

コイツは人がデザートを食わせてくれると知るや否や、手当たり次第に注文をする外道だ！ デザート風情に諭吉が翔んだなんて生まれて初めてだよチクショウ！

「黒人さまあありがとうございます……………魅弦は一生黒人さま

の桃色奴隷ですうオンナ」

「公衆の面前で何を言うかこのエセ巫女！ いやさ変態！」

「変態でも構いませんよお……………魅弦は黒人さまに一生お仕えします。一緒に変態になりましょう？」

「なにこの子ちょっと怖いよ！？ お巡りさんっ、お巡りさー…んッッッ！！！！？？？」

「陸奥、ひよつとしてあれかな？」

「だろうな。他の一般人に比べて雰囲気や存在感が違いすぎる。やはり異質だ」

「あーあ、秋津がいれば話聞いてすぐ解るのに」

「お前がセキレイ狩りに行かせたんだろっ……………」

街中の人影、よりも一段高い場所。それは小さなカフェながらも扱う品がバカ高い有名な店だった。

高級カフェの二階のテラス。そんな一席から人混みの中に、異様に目立つペアを双眼鏡で見ている、共に金髪の少年と青年がいた。かたや『お坊っちゃん』といった豪華なシルクの服の少年に、かたや『従者』といった簡素な服の青年。

青年の手には、鞘に納められた刀が握られていた。無論剥き出しではなく、布で隠してはいる。

「噂がホントなら、かなり面白いよね」

「『セキレイ殺しの葦牙』『自由の葦牙』か……………ロクな噂じゃないな」

「ねえ、やっぱりM・B・Iの人間かな？」

「かもな。セキレイを倒せる葦牙なんて、まず有り得ねえ。俺もワリと色々な人間を見てきたが、今までそんな人間はいた事がない。そしてそんな人間を用意出来るのは世界でおそらくM・B・Iだけだ」

「ゲームマスターが用意した『バグ』ってところかな。ちょっと盛り上がったきたかも……………でも」

「でも？」

「夜見を殺されたのは許せないね。よろしくない……………陸奥。ア

イツ、殺るよ」

バンホーテンのココアを飲み干し、カップを置く。実に味わい深く、美味であつた。

少年の表情には先ほどまでの遊びを楽しむ少年のあどけなさはなく、寧ろ敵意に近いモノが現れていた。彼のセキレイ・陸奥にも、心なしかその感情が伝わってくる。葦牙の憤りを、セキレイたる彼はどう宥^{なだ}めるのか。

「（面倒だが……………ま、適当にやるか）」

「アイスにケーキにパイにドーナツ、プリンに菓子パン、羊羹にお餅にそれからそれから……………」

「以上、魅弦の登場シーンは此処までだ。じゃあねー」

「えっちょっ 黒人さま置いてかないでエ!!!!??」

自分が食べたお菓子を言い挙げていく度に苛々が募り、ついに魅弦を置いて車出しちゃった。

食い意地だけは張ってるんだから、ホント。涙目で追い掛けてくるそんな彼女は、いつもの巫女服。

今日の買い出しの本来の目的は当然明解、お菓子を食べさせる事なのでは全くなくて、彼女が服が欲しいと言いつ出したからだ。我が儘なイメージが強い魅弦だが、実際その要求の九割は『冗談ですよ』の一言に片付いており、真に何かを要求してきた事はあまりに少ない。

それ故につい不粹ながらも聞いてしまった。その理由を。

『私だけこんな巫女服だと、黒人さまのセキレイとしては良いんでしょうけど……女の子としては、ちょっと恥ずかしかったり淋しかったりするんですよ？ オシャレな服を着てみたいな、とか。黒人さまと可愛い服でデートしてみたいな……とか』

——可愛かったよ、うん。本気で彼女にこっちから襲いかかりそうになった。

もじもじしながら、そっぽ向いたり俯きながら呟く彼女は、なんとも可愛かった。またちょっ好きになったよ、彼女の事。元から彼

女の事は好きだけど、どちらかと言うと僕のそれは『女友達』としての好き、の方が相当しっくりくる。

結局彼女の事は拾った。運転する僕の隣に座る彼女は、心からウキウキワクワクと言った状態で、早く僕が見繕った服を着て出かけてみたいらしい。そんな道中には、今日の買い物の事を話したり、お菓子を喰い漁った事を謝罪してきたり、あんな店があったよ、とか、今度はこんな物が食べたい、とか。

彼女が僕にこれほど素直に何かを求めてきてくれた事が、嬉しくて堪らなかったんだよ。

×

×

帝都タワーを中心に、最南端に位置する御子上デパートから帰宅、家の玄関前。

三十分の道のりは、今日を語るには短すぎたようだ。たぶん部屋に戻っても話は続くだろう。

「黒人さま」

「うん？」

「今度は……………どこか遠くに行ってみたいですね。二人で」

「……………そうだね。じゃあ今度、海でも行ってみようか。夏も近いし」

「あ……………でも私達、この街から出られないんでした」

そついやそんな話もあつたね、高美さんが言つてた憶えがあるような無いような。

セキレイけいかく
鵲鴿計画に参加した葦牙及びセキレイは、この新東帝都から出る事が出来ない。それは、この帝都から逃げ出す葦牙やセキレイが現れる事を考慮して、御中が下したルールの一つらしい。まずこの鵲鴿計画には段階があり、現在はセキレイ達が葦牙に出会い、羽化をする為の第一段階。

そして一定数のセキレイが羽化した後に、この帝都を覆う包囲網を形成し、街を鵲鴿計画の為の戦場に作り替える。それが第二段階。その際の羽化していないセキレイは高美さんの予想だが、十羽にも満たないと言う。

そしてもう一つ。高美さんにも予想がつかない、第三段階。内容もルールも一切不明との事。

迂闊にも外に出ようとすれば、M・B・I直轄のセキレイが、その葦牙とセキレイを『肅正』しに来るそうだ。

だがたぶん僕なら、そんな包囲網を強行突破出来るだろう。闘うならともかく、逃げるだけなら容易い。なにも正面からぶつかろうという訳じゃ無いからね。それにまだ女の子と闘うのは気が退けるし。

「……………それじゃ、この計画が終わったらしょうか」

「えっ」

「僕はこの計画を勝ち残ろう。そして君と、嵩天こまつてんに辿り着こうじゃないか——不肖の葦牙・白羽黒人。我がセキレイ・魅弦を最後まで守り抜く事を、細さいやかながら此処に誓おう」

「……………プロポーズ、ですか」

「さあ？ 魅弦の好きーなように解釈すると良いよ」

「くっ……………黒人さまぁッッッ！！！！！！」

予備動作無く、問答無用に飛び付かれ、抱き着かれた。胸を押し当てながら。

別に僕はプロポーズしたつもりはないんだよ。今のは『葦牙として』の心意気であって、告白じゃない。

どちらかと言えば、宣言だ。彼女を最後まで守り抜くという、自身に打ち込んだ誓いの楔くわだ。だがこの程度で喜んでくれるなら、易いものだ。何かを、誰かを守る事の無かった僕に、守りたいモノをくれた。守る喜びを教えてくれた。

僕を一人ぼっちじゃいられなくしてくれた。そんな彼女への、細や

かなお礼だ。

「お風呂！ 今日是一緒にお風呂入りましょう！　ね、黒人さま、そうしましょう!？」

「なんだよ今度は逆セクハラですか!？」

「あーイライラする」

声がした。直後——ゴインツツツ!!!!!!　と、僕は静かに背後に迫っていた刃を蹴り弾く。

刃は魅弦と僕を狙っていた。それも傷を負わせようとかじゃなく、致命傷狙いの攻撃だ。

長く延びた刃はまるで蛇のようで、刃と刃の間には金属のワイヤーがあり、それらを一本に繋げている。それらは長さ四mはあるだろうか、豪邸たる僕の家の門の上に腰を降ろしていた女性の手から、左右にうねりながら延びていた。

女性が右手の柄つかを勢いよく引つ張ると、分解された刃は一気に鏢つばに戻り、一振りの剣になった。

二m超の、両刃もろはの大剣。漫画やゲームでは『蛇腹剣じやばらけん』と呼ばれるそれを、女性は肩に担ぐ。

「あーイライラする。人前でイチャイチャしちゃってさあ」

「……………どちら様かな？ 客を招いた憶えはないよ」

「んじゃあたしが勝手に遊びに来ちゃったって事で。お茶と菓子を出しな」

「不躰な方ですね……………名を名乗りなさい」

「はい。んじゃ改めまして名乗りをば————セキレイ
No.90、煌刃^{（うろは）}だ。よろぴく」

女性————煌刃は、剣を地面……………もとい僕の庭に突き刺し、
それに続くように下に降りた。
そしてそれを背凭^{（せもた）}れにしながら、なんとも軽い調子でこちらに話し
かけてくる。大人の女性だ。

袖の無い、褐色・薄手のコート。裾は膝よりも長く、腰まである全
面のボタンを全て留めている。その下は影であまり見えないが、生
足が見えている。たぶん直にパンティかショートパンツを履いてい
るに違いない。

手には穴空きの黒革グローブ、脛^{（すね）}の半ば辺りまでの黒革のブーツ。
そしてかなり目立つ、深紅の髪。
スタイルもかなり宜しくて————ボンツキュッボンツだった。魅
弦はボンツキュッボンツである。

「で、その煌刃さんが僕になにかご用でも？」

「まったくまたあゝ。分かっているくせに」

「黒人さま？」

「……………なんとなくは感じてただけだね。まさかホントに有り得るとは」

「『あり得ない、なんて事はありません』……………グリードさんの言葉通りですよ。なんとなく、私にも分かりました」

「そつ。あたしはアンタに反応してる……………アンタはあたしの葦牙で、あたしはアンタのセキレイだ」

あり得ない、とは思っていなかった。それは少し前、皆人君にくーちゃん反応した時に考えていた事だ。一人の葦牙に一人のセキレイ、とは誰も言っていないし、誰も決めてない。そもそも、決められる筈がない。

セキレイの葦牙への反応は、ただ単に相性なんかじゃなく、遺伝子レベルでの適合がセキレイを反応させる。例えるなら、料理人がスープを作るのに何百何千という調味料を調合し、何億分の確率を導き一つのスープを作り上げると、同じだ。

彼女は僕を探し、僕を見つけてくれたんだ。そんな彼女を、追い返せる訳が――

「いやあ、それにしても偶然だねえ。コンビニ前で夕食の弁当食べたら、目の前の車から葦牙の感じがして追いかけたんだよ。そしてたらほら、大当たり！ あたしって超ラッキーだよなー！」

[illegible]

逆転裁判みたぐ、圧倒的な迫力で指を指した。万感の怒りを込めて、しかし彼女は「にははははあ！」と笑うだけで、全く堪えてないようだ。ああ、この人攻めの「だらしないお姉さんキャラ」なんだ……でも逆に攻められると、異様に受けになったりするタイプ。うむ、嫌いじゃない。

「でもさあ、フツに羽化したんじゃ面白くないじゃん？」

「……はい？」

「ただの葦牙ならキスして羽化してはいOK、あたしは全力で闘えるぜ！ …………… って喜ぶトコなんだけどさあ。アンタはフツの葦牙とは、ちょっとどころかなり違うでしょ？ セキレイを倒せる葦牙、なんてまずそれだけでフツーじゃないし、オマケに金持ちときた」

「……なにが、言いたいのかな？」

「せっかくだしさあ、あたしはアンタと闘ってみたいんだよ。自分の葦牙がセキレイと闘えるんだ、せっかくセキレイと対等に闘える

んだ。自分がまず先に闘らなきゃ損でしょ？」

ガチャリと、剣を引き抜いて構える。腰を落とし、切っ先を前に突き出した、攻めの構え。

ようは彼女は、一度僕の腕を見てみたいんだそうだ。セキレイを倒せる葦牙の実力や如何に、ってとこなんだが——今回ばかりは、交流試合という事で僕も楽しもう。なにも、命を賭けてるんじゃないし。

倒さず煌刃をノックアウトする、ただそれだけの簡単なルールだ。

「ただし！」

「ひょ？」

実に楽しそうな表情で、煌刃は続ける。

「負けたら——アンタは今後闘うのは許さない。戦闘はあたしに全て任せて貰う」

「……………ならこつちも条件だ。君が負けたら、僕の言うことには従ってもらう。そして、今後僕の家事を手伝う事。衣食住は完全保証付きだ。いいね？」

「家事って……………アンタのセキレイはなにしてんのさ」

「すいません、私が家事をすると破壊活動になってしまうので」

「……………アンタも、災難だね」

「……………ありがとう、そう言ってくれるだけで嬉しいよ」

虚刀流、壱の構え・鈴蘭。脚を前後に開き、手刀を対に構える。
これは楽しい勝負になるぞ。きつと楽しい。こんなにワクワクしながら闘うのは初めてだよ。

「「勝っても負けても、文句なしッッッ！……！！！」」

夜は七時、ご近所さまがいない事を喜んだ、何度目かの騒ぎである。

第七話 はい、あまり目立たない新ヒロインです（前書き）

なにやら皆さんが僕の事をかなり褒めてくれているようで……
嬉しい限りですよ、全く以てねえ。

私の小説が面白いと喜んでくれるなら、筆（という名のキー）が
進みますよ。では六話をどうぞ」

第七話 はい、あまり目立たない新ヒロインです

『悪イが——こつから先は一方通行だア！

大人しく尻尾巻きつつ泣いてエ、元の居場所へ引き返しやがれエ！
！……………！』

「キュインキュインしてますねえ……………」

いやあ、黒人さまのDVDは色んなモノがあって飽きませんねえ。
その枚数、実に一万本以上……………なにせDVD保管・鑑賞専用の
部屋があるくらいですから。しかも地下に！大音量でも問題ない
です！

今日は『とある魔術の禁書目録^{インデックス}』を鑑賞中。一方通行^{アクセラレータ}さんがカッコいいですねえ、ホント。
私にもあんな超能力があれば、黒人さまに頼らなくても闘えるんですが………如何せん弓ですから。

「さて、見終わった事ですし………そろそろ様子を見に行きましようか」

最近よく、私はこの地下室で朝を迎えている。起床はだいたい午前七時から八時の間。

今日もそんな感じに朝を迎え、黒人さまに朝食をと起こしに行ったら、部屋にはいなかった。

まさかと思い、七時頃に庭に出てみるとまあ案の定、黒人さまは随分と忙しそうでした。忙しそうなので、しばらく放置しようかと、牛乳を飲んで地下室に戻り、紅茶を飲みながらこうして五話まで見ていた、禁書目録の話を進めていた訳です。

スタスタと階段を登り、キッチンの棚の裏に隠れるように作られた扉から、キッチンに出る。

そして外靴に履き替え、庭に出てみると——二人とも帰っていた。私の葦牙と、私のライバル。

白羽黒人^{しうは くろじん}、二十歳の青年。美形、肉体派の好青年です。流派は虚刀流^{きょとうりゅう}。

煌刃^{くわは}、セキレイNo.90。蛇腹剣を使うセキレイであり、巨乳。年齢は二十歳くらいだろうか。

二人は息も絶え絶え、疲労困憊の状態で庭の芝生に寝転がり、眠る

ように気絶していた。

では昨晚の事を回想してみよう………と思いました。が、面倒なのでやめましょう。簡単に説明します。

一、黒人さまと私を煌刃さんが襲撃、自身が黒人さまのセキレイで
ある事を告白。

二、黒人さまとく婚なぐ事に異論はなし。しかし、勝負して負けたら今後戦闘に参加するのはなし。

三、黒人さまも賭けを提案、了承。対戦開始———と思いきや、
黒人さまが移動を提案。

四、黒人さま、煌刃さん、場所を移動。一晩かけて戦い抜き、『参った』と言わせた者の勝ち。

しかし帝都を駆け抜け刃と拳を交え、一晚戦い抜いても決着は着かず、最終的にこの庭で勝負をする事に。

五、両者ダブルノックアウト。それどころか疲労困憊で危険——
—なんでしょうか。

「生きてますかあ〜？」

「ビクンビクン……」

「みつ、水ウ……………」

これは重症だ、とりあえず煌刃さんには水と……………黒人さまにはアニメでいつか。

一人一人を抱えて、リビングに搬送。目元に冷やしたタオルを当て、とりあえず服を着替えさせる。

二人ともドロドロな上にボロボロでしたよ。黒人さまはご自身の服に着替えさせてあげて、煌刃さんには私のシャツを。身長差とバスト差が仇となったか、シャツの胸元はピッチピチに張っていた。蕾つぼみがヤケに浮き出たりもしましたが。

そしてそれぞれの要求の品を——黒人さまは面倒な注文をしてきそうだから、とりあえず無視で——アニメ持ってくる。煌刃さんには二リットルの水を、黒人さまには劇薬を——

『フンハハハハハハハハハハハア……………強靱！ 無敵！最強オ！』

「粉碎！ 玉砕！ 大喝采イ！ ハア————ハッハッハッハッハ！！！！！！」

「ハッ、僕は何を……………確か煌刃と勝負して、それから……………」

「おお、ホントに復活しましたか……………怖ッ！」

心は身に多大な影響を及ぼすと、社長や高美さんも言っていました
が……………

まさか、エネルギーの無い状態からテンションだけで身体を持ち直すなんて、馬鹿げてます。

トリコですか？ 自食作用オートミールですか？ スゴいですねそれは、黒人さま日に日に二次元に近付いてますよ。まあ私達セキレイが既に二次元に近い存在だから、あんまりアレコレ言えませんがね。いや全く。

しかしそこはやはりほら、どう足掻いても黒人さまも人間という事でした。

黒人さまは立ち上がっても、すぐに力無くソファーに落ちてしまう。一晚駆け回ればそうなりますよ、それがフツ！。コンビ二に全速力で駆け込んで、スポーツドリンク・二リットルを購入。黒人さまの口に差し込むとあら不思議、まるで給水機のようにドンドン飲み込んでいくじゃありませんか。

ベコベコッ！ とペットボトルが潰れるまで吸い尽くすと、黒人さまは空のボトルを掴んで一言。

「やっぱこれだね〜〜、アク。リアス！」

「ト。ポですか」

「ゴメンみっちゃん、あたしにも水お代わり……………ボトルで」

「僕にもよろぴく……………ぐう」

「はあ……………ふふっ、分かりました。では少々お待ち下さいね、ついでにパンでも買ってきます」

×

×

夢見るゝ明日へゝ ♪ 広げる翼はゝ ♪

店内放送では、可愛い女の子四人の歌が流れている。

「おや、なんでしょうこれ……………梅パン？ 夏バテ予防には良さ

そうですね、面白い買いましょう」

馴染みのスーパー三店舗に徒歩で赴いて、それぞれのお店をチェック。

一番遠いスーパーでは、タイムセールで二リットル・アク。リが一本百五十円だった。六本購入。

最初のスーパーに近いスーパー・二では、全商品が二割引。お肉と野菜にちよこつとお菓子を購入。

そして最後のスーパーでは、いつもの事だがユニークなパンが多数仕入れられている。

入れ知恵は黒人さまからだけど、以降は暇を見つけてはここに面白可笑しいパンを探しに来ている。

「あら、魅弦ちゃんじゃないかい！」

「パートのおばさん、おはようございます。朝からご苦労様です」

「いやいや、これがあたしらの仕事さね。また面白いパン探してるのかい？」

「ええ、まあ」

「じゃあ色々買っていきな。店長はアンタにメロメロだから、ちよつとくらい割引しても文句は言わないよ。レジの人なも話は通しくからさ！」

「おばさん……………ありがとうございます、ではちょっとだけ甘えさせてもらいますね」

顔馴染みとは、やはり便利だ。最初は下心丸出しでやって来た店長さんから始まり、それから私を助けようとしたパートの方々に。夕方に買い出しに来たなら、アルバイトの学生の方達にもいつのまにか顔馴染みになっていたり。

人の輪とは、こんなにも簡単に広がるのだと、勉強になっています。両手いっぱいビニール袋を下げて、私は近くの公園で休憩がてら伊。衛門を飲んでいた。五月は終わりの頃、風も暖かい。

「それにしても、買い込み過ぎましたかねえ……………お金はマネーカードでなんとかありますが……………」

黒人さまは基本、マネーカードをかなり、それも重度に使い込んでいます。

御中社長を殺す殺すと言いながら、何故？ そんな問いをした事がある。すると彼はこう言った。

『使えるんなら使えるだけ、使わせてもらっただけだよ。僕は彼を嫌ってるし、殺したいとも思ってる。けどね……………だからと言って、それだけで彼の全てを否定する気はないんだよ。受け入れるべきは受け入れ、拒むべきは悉く拒む。それだけさ』

なんて味のある言葉でしょうか、そう思わざるを得なかった。嫌いでも受け入れるんだ、と。

矛盾しか孕んでいない言葉だったけど、それを口にした彼の表情は、なんだか哀愁^{あいしゅう}——いや、それよりももっと色濃い、絶望に近いなにかを抱えていたように思えた。

私や煌刃さんにすら話せない、酷く重く、暗く哀しい過去の物語。それは黒人さまの過去であり現在であり、そしてこのまま未来永劫続く無限の楔^{くわ}のだと、私は悟った。それは葦牙^かを守るべき存在であるセキレイの私には、死ぬよりも辛かった。

「……………」

見上げる空は、五月晴れの明るい空。暖かな空気は心を落ち着かせてくれる。

彼の心は——黒人さまの心に、いつかこんな空のような平穏が、こんな空のように心晴れる日が来るのでしょうか。叶うなら、私はその手助けをしたい。私だけじゃない、煌刃さんや、今後黒人さまと婚^くぐセキレイ達がいるのなら、その皆と。守られているそのお礼に。私は、彼を救いたい。

「そうしたら……………美哉^{おねえさま}と黒人さまと私と、あと煌刃さんや誰かと皆で仲良く同居——……………愛憎渦巻く恋愛ドラマが毎日繰り広げられ、そんな日々嫌気が差した黒人さまを私が優しく癒す

………完璧だわッ！」

「ハア………何を言ってるんだお前は………」

——くるーりと、背後にゆっくりと振り返ると。何やら見覚えのある顔があった。

金髪に胸元の開いた黒装束、首に巻いたオレンジのスカーフ。手には鞘に納められた刀と、仏頂面。

彼はセキレイNo.05・陸奥^{むつ}。第一期懲罰部隊の末席であり、あの美哉^{おねえさま}と共にあの大戦から私達を守り抜いた、シングルナンバーのセキレイである。そして私にとっても、彼は敵対する存在ではなく、兄に近い存在である。故に私は彼をこう呼ぶ。

「陸奥^{おにーさま}………やはり帝都に出てきていたんですね」

「そりやな。俺だつてセキレイだ、葦牙探して婚^くいで、いまや立派なセキレイだよ。昔と違ってな」

「おや珍しい、というより変わりましたね。面倒くさがりな貴方がこんなに行動派だなんて」

「やあかましい」

ゆつたりと私の隣に腰を下ろし、刀を抱き抱えるように、右膝を立てるように座った。

途端に欠伸^{あくび}をかいて、なんとも面倒くさそうな顔で、私をじっと見つめる。対し私は完全無視で答える。

「……………お前こそ変わったな。昔はもつとやんちゃだった憶えがあるが?」

「色々あつたんですよ。大人になったって事です。色気もムンムンでしょう?」

「そんな事を言ってるうちは、まだまだ子供だな。魅弦」

過去の話です。実は私は、他のセキレイよりも随分と早く取り出され、調整されていた。

私の調整を手掛けたのは、御中社長に並ぶ天才・浅間健人。あさま たけひと美哉の旦那さまである。そして私を外に出したのは御中社長で、シングルナンバー前半に次いで私を出したその理由は、ただただ聞いて呆れるものだった。

『高美くん高美くん、試しに他の個体も調整してみたいねえ。で、私の名前は御中だから……………んじゃ37番を試しに調整してみよつか! さあ頼んだよ高美くん、浅間くん!』

そんな軽い感じに、私は生まれたのです。受精卵から高美さんと健人さんに調整され、誕生。

おぎゃあと泣いて皆に喜ばれ、様々な薬品による肉体の調整を施され、世界に適合していく。

そうして、私は今に繋がっていくのです。つまり、私は他の子達よりもちょっぴりお姉さんなのです。ロリ姉さんなんです。それ

故にか、私は美哉や陸奥達には、大変可愛がってもらっていた。まるで妹のように、娘のように、孫のように。
……ただ一人、からすは烏羽だけは苦手でしたが。それでも彼女にも可愛がってもらえたのは奇跡でしょう。

「……………魅弦。聞きたい事がある」

「なんなりと」

「『セキレイ殺しの葦牙』『自由の葦牙』を知っているか？」

「ええ。それに類する、若しくは近しい方なら存じていますよ」

「……………俺はソイツを倒せと言う命を受けていてな。出来れば事細かに教えて欲しいんだが」

「すみません無理です」

しれっとさらっと、簡潔にそう答える。だって、自分の葦牙を売るなんて出来ませんから。

それにしても『セキレイ殺しの葦牙』に『自由の葦牙』ですか、中々味のある呼び名ですねえ。僕キャラなのに、役回りはドンドン悪役に近付いていってますよ。根っこがちよっぴり変態だったりもしますが。

「フツ……………そうか。流石に自分の葦牙を売るほど、落ちぶれちゃいないって訳か」

「当然です。陸奥は私がそんな軽い女に見えますか？」

「いいや。身も口も堅い女だよ、お前は」

「褒めてくれてありがとうございます」

「……………真面目な話だ。お前は俺とも鬭うつもりか？」

「それはもう。いずれ戦場で出会うのですから、仕方ない事ですし」

此処も既に戦場だ、と言いたかったが、実際に陸奥とやり合うとなれば、私に勝ち目はない。

得物も此処にはない訳ですし。本人もやる気が無いようですから、此方としては有難い限りですとも。

「——用はそれだけだ。じゃあな」

「陸奥」

「なんだ」

「またいつか——昔みたいに、頭を撫でてもらえますか？」

「……………機会があれば、な」

ひゅるりと、暖かな風が吹き抜けた。靡く髪を手で抑え、風がやむと再び陸奥のいた方を見る。

そこに彼はもういなくて、彼がいた場所にはいつの間にか、手元から無くなっていた伊。衛門の代金・百五十円が置かれていた。そしてその下に、小さな書き置きが。内容はこうだ。

『今、俺の葦牙がお前の葦牙を狙ってる。名前は御子上隼人だ。これ以上は自分の葦牙を売っちまうからな、情報は自分で仕入れな。あと——頑張れよ、魅弦』

「.....やさしい、おにいさまだこと」

×

×

「アアアアア.....」

「枯れるウウ.....」

「ひいっ！っ？？」

まるで腐った桃のような、しわくちゃの人間が二人、リビングに横たわっていた。

急いで二人の口にアク。リアスを差し込んでみると、まるでスポンジに水を垂らしたかのように飲み込んでいき、今朝と同じように、ボトルがベコベコッ！ という音を立てるまで延々と吸っていた。ボトルをプラスチックと分けて捨ててから、二人を観察。そして一
分後

「うううううう……ハレルヤアアアアア——
——ッッ！……！」

頭に花が咲いた、ように見えるくらいに元気になりました。つかハレルヤってキリシタンですか!?

なにはともあれ、アクエリマジすげえですね。買ってきたユニークパンをあげて、微量ながらもカロリー摂取。買い出しに出た九時から一時間ほど経った、十時過ぎの事だった。

「いやあー、災難なんて言っただけ、こりやいい嫁さんだわあ！」

あたしが欲しいくらいだよ！」

「私は身も心も黒人さまのモノ……………ですが、貞操を捧げてからならいいですよ？」

「下ネタ厳禁——ほおおあたああッッッ！……………」

ストオオオオオオオオオオッッッ！……………と、額を指で突かれました。

するとどうでしょう、なんだか頭の中がギリギリジリジリと、痛くなってきた……………

「あ痛たたたたたたたたあ……………？？？」

「北斗！ 破頭撃！」

「北斗破頭撃！ それは、相手の額の秘孔『閃穴』^{せんけつ}に全身全霊の氣を撃ち込む事で、相手の脳髓のみを破壊する、まさに暗殺拳の権化のような技であるっ！」

「コマ撮りでどや顔しないでください！ あと煌刃さんも変に解説しなあってだだだだだだ！……………？？？」

「「悪ノリいえーい」」

第八話 ラブストーリーとキスとフラグは突然に（前書き）

想像せよ、その姿！

第八話 ラブストーリーとキスとフラグは突然に

「ぬおっほおおおおお………うおほああああ………」

気絶しながらも、ビクンビクンと動き回り、絶え間無く呻き声を上げ続けている魅弦。

前回のあらすじ——エロワード魅弦が禁句を口にしたので、額の秘孔を突いて落しました。

秘孔については、小さい頃に親から教えられていたんだよ。『これは相手をお仕置きする技だ』と親父の談。他にも『性欲増強の秘孔』とか、『治癒力促進の秘孔』とか色々あるそうだが、当時中学生だった僕にはあまり詳しくは教えてはくれなかったんだ、という話。そしてなう、僕が突いた魅弦の『閃穴せんけつ』の効果が無効にする『鈍孔どんこう』を突いて、彼女を平常時に戻す。すうっと痛みが引いていくように、マッサージで凝り固まった筋肉が解れていくかのように、安らかに眠った。

「いやあー、スゴいねアンタ。そんな事まで出来るんだ」

「なあに、紳士のたしなみさ。それに僕は、“飽くまで”彼女を貪りたいだけだよ」

「なにそれ、あたしにやよく分かんないさね」

前回ほとんど出番の無かった彼女こそ、他でもない僕の第二のセキ
レイ・煌刃^{（はうじん）}である。

得物は蛇腹剣^{（じゃばらけん）}・大蛇^{（おろち）}。刃が多数に分裂し、それらをワイヤーで一本に接続した、特殊な剣だ。

丈が膝まであるノースリーブの褐色・薄手のコートは、腰まである
前面のボタンを全て留めてあり、その内側はおそらくパンティかシ
ョートパンツだと思う。意外と彼女からはパンチラが撮れないのが
特徴だ。そしてそのウェーブと赤みがかかった、ロングの茶髪。

手には黒革の穴空きグローブと、靴は同じく黒革ブーツ。彼女を言
い得るなら『カッコいい女性』だ。

今はグローブとブーツを脱ぎ捨てて、リビングのソファアにて胡座
をかいている。

「でさあ、黒人オ。いつになったらあたしと婚^{（く）}いでくれんのかなあ」

彼女はさつきから、事あるごとにこればかりを口にしている。まるで蓄音機のように。

僕も、それについてはよく解っている。葦牙として、早く彼女を羽

化させてやらなければならない、と。

実は昨晚の戦いは、結果的に僕が勝利していたのだよ。というより、彼女が一方的に敗けを認めた、と言った方がいい。セキレイの中でも強い側の自分が人間に勝てない、それ自体が既に敗けた、とね。だが、それは別として。

正直、僕はもう誰かと婚くぎたくはないのだ。それは、あの夜の事が深く関係している。

「僕はシチュエーションを重んずるタイプなんだよ。もうちょっと待ちなさいな」

「コラー、早くしろよおー。ぶうーぶうー」

身体を駆け巡った灼熱と痛み、全身を隈くま無く襲うあの感覚。未だに忘れられない。

アレはたぶん魅弦と婚くいだからじゃない。セキレイと婚くぐと、ああなるんだと直感的に感じた。

セキレイが羽化するように、僕の何かがどんどん書き換えられていくような、そんな感覚。今まであった僕が一瞬で消し去られていく、そんな感覚。可能性の話だが、それは煌刃と婚くいだとしても、起こりうる事だ。そして今後ずっと。

僕を求めてくれるのは至極嬉しいが、アレだけはもう勘弁だ。もう嫌だ。死んでも味わいたくない。

「ま、あたしもフツーにちゅーして終わり、なんてのもあじけなっ
て思ってたからさ。どうせなら実戦の最中にこう、ロマンチックに
？ ドラマチックに？ キスしたいなー、なんちゃってねー！」

にやはー！ と、顔を赤くしてそんな事を言ってくる。おまけに舌ぺ口。

ちくせう、可愛らしいじゃんか。お色気お姉さんキャラなのに、なんか可愛いじゃんか。ああ、なんだか魅弦がキャラ負けしてるような気分だよ。

……………いや、負けてるのか。

「そついやさ、黒人は自分が他の葦牙になんて呼ばれてるか知ってる？」

「いいや、僕は他の葦牙やセキレイとはほとんど出会であわないからね。そう言うのはあんま分かんないや」

「あたしの姉貴分で情報通のセキレイがいてね、双子なんだけどさ。ソイツらが言うには黒人は『セキレイ殺しの葦牙』とか『自由の葦牙』って呼ばれてるらしいよ」

「うわ物騒、気をつけないとね。煌刃、あんまり夜遅くに歩いちゃダメだぞ？」

「自覚して言ってる辺りがイライラするねえ。まっ、それは追々解るとして――」

シユタツ！ と、胡座の状態から足の力のみで跳躍。空中で一回転し、着地。

今度はなにを仕出かすのやら――とか考えてたら、突如ボタンを外し始めた。

しかもその手の速いのなんの、ものの数秒で十個はあったボタン全てを外し、バサッとコートを僕に向かって脱ぎ捨てた。それは目隠しのように僕の視界を覆い、咄嗟にそれを払い除けたのが間違이었다。

目の前に。赤いレースの、ブラジャーとパンツだけの色っぽいお姉さんが現れた。

「ちよっ、うわああああッッッ!!!!????」

緊急回避コマンド・後ろに振り返るを発動!

「んんん~~~~??? なあにい? もしかして黒人ってさ、実はかなりウブ?」

「うっ、うるさいっ! さっさと服を着なさいこのバカッ!」

「やあっぱりイ~~~~」 いやぁ嬉しいねえ、アンタが魅弦にゾッコンじゃないなら、あたしにも勝ち目があるってモンだよ。それに相手はほら、ムツツリな訳だからさあ……………」

「へっ———— ひiiiiiiiiiiiiiiiiッッッ!!!!?」

「??」

なっ、なにか、なんか当たってる！　なんか柔らかい何かが僕の背中に当たってるうっ！

抱きつくな、頼むから抱きつくなあああッッッ！！　ああそうさ認めるよ、僕はムツツリだよ、ムツツリーニだよ！　実際に僕には女の子に対する免疫が無いんだからしょうがないだろ！　小さい頃から女の子と話したり触れ合う機会なんて微塵も無かったんだからさあ！

お陰で魅弦との生活も毎日がドキドキだよ！　ドキドキで壊れそうだよ1000%LOVE！

「ほら、こつしたら身体がもつと触れ合って――んあ
っ」

「変な声を出すなあああああああああッッッ！！！！」

――十分後。

「じいちゃん」

「……………もう……………お嬢に行けない」

「お嬢に行けないねえ……………じゃ、お嬢に行きたくなくなるくらいに、あたしの虜にしてあげる」

「ひつ……………」

「はあっ、はあ、はあっ……………」

……………どうして、こんな事になったんでしょうか。それはある晴れた日の事。
僕はただ妹を探しているだけなのに。あ、妹って言っても血が繋が

ってる訳じゃ無いんですよ？

番号順の関係で、調整とかのタイミングが近かったのと、能力が真逆だったりした事もあって、皆が僕らの事を兄妹みたいだっけ言うから、今では本当の兄妹同然なんです。仲もスゴく良いんですよ。生まれた頃からずっと一緒。ずっと仲良く、そういわれると思ってた。

でも僕らは――セキレイだから。だから、いつかは闘わなくちゃいけない運命にあるんだと思う。それは無意識に解っている事だから、仕方ない事だと思う。

でももし僕らがそれを拒むなら、それを赦してくれるなら、それを可能にしてくれる人がいるなら。僕はその人と一緒にいたい。それは葦牙だ。その人と一緒なら、僕らは闘わずに済む道を選ぶのかもしれない。いや、僕らに限らず。セキレイ皆が、仲良く平和に過ごせる、そんな世界があるのかもしれない。

だから、あんな人とは――絶対にく婚なぎたくない。

「待ちなさいよコラア―ツツッ！……！！……！！……！！」

「嫌だ……！！……僕は絶対に、あんな人の下には行かないツツッ！！……！！……！！」

走る。ひたすら走る。がむしゃらに、街の中を走り続ける。行き先なんて考えてない。

今はあの人達から逃げる事だけを考えていればいい。あの人達から隠れる事だけを考えていればいい。

高架下、歩道橋、大通り、ビルの間や上、デパートの中。逃げられる場所なら何処にだって逃げた。でも、それでも見つかってしまう。そしてその度あちこちに移動して隠れて、また逃げて。ここ数日はこればかりを繰り返していた。

そして今日も背後には二人のセキレイ。前方には曲がり角。ここで一気に撒いてやる！

そう思つて、勢いをつけて角を曲がり、全速力で駆け出したら――
ドンッ！

「わっ!？」

「きゃっ!？」

とうとう、やってしまった。人にぶつかってしまった。今まで散々注意してたのに。

ああ、これで僕も悪い子の仲間入りだよ、ゴメンねくー……………

……………つてそんな場合じゃなくって！

目の前にはぶつかってしまった女性――黒髪で、ゴシック系の服を着た人だった――が尻餅をついていて、慌てて僕はその女性に駆け寄る。見たところ、怪我とかは無さそうだ。良かった、そう心底安心した。

「あ、その、ぶつかってごめんなさい……………大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だよ。それより膝、擦^すりむいちゃってる！　ちよっと見せて！」

「えっ、あの、僕は……………」

「ほおら、観念しなさいってばもう」

とうとう追いつかれた。僕を捕まえようとしている人の、セキレイ。金髪のセキレイと、オレンジ色の髪のセキレイ。片方は鞭で、片方は氷を使っていた覚えがある。

「あっちこっちと、ちょこまか逃げ回っちゃってさあ。アンタを連れて戻らないとあたしがマスターに怒られるんだからあ、さっさと一緒に来なさいよあ」

「嫌だ、くーをいじめた人のところなんかには僕は行かないッ！」

先日の植物園でのくーの能力の暴走。あれは間違いなく、あの人達の葦牙のせいだ。

くーを無理矢理羽化させようとしたに違いない。僕はそんな人に従

うつもりはない、絶対に捕まらない！　なにがなんでも逃げ延びて、くーを見つける。その為なら、闘う事もいとわない。そう決意した矢先、僕とぶつかった女性が、僕を庇うように前に出た。

「大丈夫、おねーさんが守ったげるから！」

「えっ……………」

「ちょっと、どきなさいよ一般人！　あたまおかしいんじゃないの！？」

「どけるかバカヤロー！　美少年は国の宝なんだぞ！　それに……………
……………　パンツ丸出しの女にあたまの心配されたかないわよ！
まずはテメーのパンツ隠しやがれコンチクショー！」

—————　なんだろう、これ。胸がざわざわする。
まるで幸せな気持ちだが、何処ともなく溢れてくるような、そんな感覚。心が、身体が暖かいモノでどんどん満たされていく。これは、この感覚は。これこそが—————　この人こそが。

「ムカツ……………いいわ。もう一般人だからって容赦しないんだかねツツツ……………！」

「あ、危ないッ！」

しゅるりと、金髪のセキレイが腰につけていた鞭を取り出した。

狙いはこの人とすぐに分かる。なら僕はこの人を守らなきゃいけない。だってこの人は――！

「ノーサンキュー・ハエトリグサアアアアアアアアアアッッ！！！！」

「プリーズユア・ウツボカズラアアアアアアアアアアッッ！！！！」

………なんだろう、この人達。関わっちゃいけない気がする。

でもなんだろう、あの男の人。僕とスゴく似てる気がする――
――セキレイという、その存在に。

「ノオ！ ノオ！ ノオオオオオオオオオオオツツ！！！？」

「ぐへへへ、観念しな兄ちゃん。大人しく貞操をあたしに余越よこしなあ。そうすりやなにもしないさねえ！」

「いつ、嫌だ！　僕の貞操は永遠に守られるべきなんだ！　お前なんか譲るもんか！」

「じゃあ仕方ないねえ…………無理矢理アンタの貞操を喰ってやるよオ……………」

「きゃあああああッッッ！！！！！」

「何を——やってるんだよ、君達はアアアアアアッッッ！！！！！！」

「ボルケイノオオオオオオオオオオッッッ！！！！！！？？？」

煌刃の髪が燃えている！ 急所にあたった！ 効果はばつぐんだ！
枯れ木に水、九死に一生、一蓮托生、ああ、色んな言葉が当てはまるけど、今はこの一言に尽きる！

「ありがとう焰君！ 僕らには出来ない事を颯爽とやってのけるっ！
そこに痺れる憧れるウツツッ！！！！！！！！！！」

「ワケわからない事言わないでくれよ……………なんだか身近に似たような人間を知っているから、あんまり他人事に思えないんだよね……………
……………という事は彼女も、君のセキレイかい？」

「オウイエス、セキレイNo.90、煌刃だ。よろしくセキレイの兄ちゃん」

「「頭アタマ（汗）」」

「ぎゃあああああああ！？ アフロオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「ってエ——いきなり出てきて空気ぶち壊してんじゃね——
——ッッッ！——！！！！！」

ありやりや、それは失礼。こっちは貞操守るために必死だったからね。

では状況整理——焰君がいる。少年セキレイと少女がいる。それを敵視している金髪セキレイと………先日の夜見の仲間のセキレイがいる。整理するまでもなく、敵味方の区別は着いていた。ピツと人差し指で、金髪セキレイを指さす。

「お前はもう、死んでいる」

「はあ？ なに訳わからない事言ってるのよ！ 上等じゃない、やったるわよこの一般人！」

「気をつけて、黒人君。彼女はセキレイ？ 38・蜜羽^{みつは}。武器は特殊合成樹脂の鞭だ」

「ありがとう焰君。だけど心配ご無用、僕にはあんなギャルに負ける気がしないよ」

「秋津！ アンタはあっちの覆面やりなさい！」

「……………分かった……………」

これで一応対戦表は出来た。黒人VS蜜羽、焰君VS秋津。物理対物理、能力対能力の試合である。

本音を言えば、あの秋津というセキレイと闘ってみたかったりする。今後、能力持ちのセキレイとの戦闘は一回や二回では済まない筈だ。ならば、今のうちにある程度能力持ち相手に慣れておきたかった、それだけだ。

背後には少年セキレイと一般人少女が。とりあえずは二人を逃がさないと――

「その二人、早く逃げな！ 羽化前のセキレイの出る幕じゃないよ！」

「あ、え、あの……………」

「ありがとうお姉さん、今度会ったらケーキ奢るねー！ ツツツ！！……………」

「アイライクミルフィーユ！ よろしくねー！」

「（速い……………」

……………おい、僕のセキレイ二号。お前は葦牙を立てる気はないのか。

そしてお前も羽化前じゃないのかよ、棚上げして言ってんなよコラ。いい加減苛めるぞ。そんな事を心で呟いてたら、煌刃は蛇腹剣・大蛇を構え、僕の代わりに蜜羽に相對する。

「なにアンタ、その男のセキレイ？」

「そだよ。そしてアンタの敵だ。だから戦って負ける、争って敗れる、斬られて死ぬ」

コイツ……………僕より目立つ気でいやがるぜオイ。
ふん、だが甘いな。僕より目立つなど、出来る訳がないだろう。見せてやるう、目立つという事を！

「見ておきなさい煌刃よ。これが我が流派——南斗孤鷲拳なんとうこしゅうけんが技の一つ」

「南斗？ なに北斗ネタなのそれ？」

「あれ、君の流派って虚刀流じゃあ……………」

「はあ、遊んでるつもり？ だったらこっちから——」

「と見せかけて——いきなり南斗獄屠拳なんとうごくとけん！」

純粹な脚力+αにより、二階建てのビルの屋上にいる蜜羽目掛け、鋭い跳び蹴りをかます。

咄嗟に頭を下げて回避した蜜羽は、そのまま僕から逃げるようにビルから飛び降りる。続いて秋津も降下。

直進したままの僕の先には避雷針があって、それに当たった訳でも

ないのに。傍を通過しただけで、それが切断されてしまった。着地と同時に避雷針が折れて屋上を転がり、それを見ていた全員が啞然としてしまっていた。僕も含めて。

「……………あちゃー（テヘペロ）」

「あ——アンタ人間じゃないでしょ！？ 絶対人間じゃないわよ……！」

「失敬な！ 僕は生まれも育ちも人間だ！」

「いや黒人さあ……………今のはないわあ」

「はあ！？ お前僕のセキレイだろ！ カバーとかフォーとかしろよ……！」

「すまない、黒人君。今のは流石にフォー仕切れないや……………」

「焰君！？」

「こっつ、こんなヤツとなんかやってらんないわよ！ 秋津、帰るわよ……！」

「……………」

あ、待ってよ！　こんな戦闘の空気から逃げんなよ！　待って、待って、待って——つてくれる訳がないか。さて、この空気をどうしたモノか……………さつきから調子にノッてる煌刃をちよつとイジメよつかなー、と。ジト目で彼女を凝視する。

「……………退散ツツ！！！！！！」

「ほおおおおああああああああたああああツツ！！！！！！」

「ひぐうつ！？」

人差し指でトスンと、首筋の秘孔を突いてやった。
では解説しよう。今僕が突いた秘孔の名は『ごくえつ獄悦』という。その効果は——

「く——ひひひひひひひひひひッッ！！！！！！？？？」

「猛烈な快感が身体を襲い続ける、身の毛もよだ弥立つ技だ」

「いや、それは喜ぶんじゃ……………」

「たっ、たひけ……………む、り——」

「考えてみたまえよ、焰君。四六時中快感が続くんだよ？　それがどんなに恐ろしいか」

「……………言われて初めてわかったよ、その恐ろしさ」

「あひひひひひひひひひひッッ！……………」

「むにゃ……………黒人さまあ……………？」

「た、ただいま魅弦……………」

「ありえ、篝さんがいますよお……………」

「や、やあ魅弦。ちよつと用事でね……………お邪魔してるよ」

「……………そうれすかあ、じゃあ魅弦はもうちよつとお眠りしますねえ——すぴー……………」

「……………」
「ふはあっ！死ぬかと思ったあ……………」
「……………」

何に對してそんな事を、とは言わないでくれたまえよ。いやホント。『獄悦』を突いてやった煌刃はついに氣を失ってしまった。それも愉悅の表情で。

そんな彼女を運ぶだけならなんの事はないのだが、彼女の手持ちの蛇腹剣も持ち歸らねばならない。そんな訳で、焰君に煌刃を運んでもらい、蛇腹剣を僕が持ち歸ったという訳さ。そして今は二階の彼女の部屋。

先日用意したためか、やはり部屋には何もない。殺風景な部屋だが、とりあえずで布団だけは置いてある。それを敷いて彼女を寝かせると、僕は深く息を吐いて壁に凭れ掛かり、魂の底から安堵した。無事に乗り越えられた、と。

「流石にこんな表情の彼女を見たら、温厚な魅弦でも発狂しかねないからね……………」

「いや、ホントに助かったよ焰君。今度焼肉食べに行こうか……………」

煌刃の表情を詳しく説明してみよう。ちょっと、や・ら・し・い・ぞ」

故に一言で表そう——現在の煌刃の表情。まるで事後の愉悅に浸る、濡れ場の乙女のようなだった。そしていまさらな情報だが、僕の服装はジーンズに黒のロングスリーブ、そして黒いスニーカーの、黒尽くし。焰君は言うまでもないが、マスクは外している。

「君のセキレイって、どうしてこう……………」

「はしたないんだろうね……………僕にも解んないや……………」

「……………けど、このまま放っておくのはまずいと思うよ?」

汗だくになっていた彼女の服を二人がかりで脱がせて、僕のシャツに着替えさせる。二人がかりの理由は、僕が女性への耐性がないが為に、焰君にフォローしてもらっただけの話だ。

流石はホスト、女性の身体の扱いを心得ている——と思いきや、着替えの最中、大変な事が分かった。煌刃の身体は現在、剥き出しの神経の状態に近いのだ。そつと触るだけが、愛撫にも似た快感を与える。布の擦れる感触が、極上の絶頂を導いてしまう。

正座で爪先が痺れる感覚を覚えているだろうか。ようはアレが全身で起こり続けている状態である。

「たぶん起きてもしばらく続くだろうから、何か手を打たないと……秘孔を突くのは？」

「ノー。突いたら最後、イキ死にそうだ……高美さんに頼む」

「ノー。高美さんは确实こんなの無視すると思うよ。忙しいからね、あの人………いつそ攻め殺すのは？」

「ノー。彼女はセキレイだ、並の人間が死ぬレベルが続いたとしても、確実に生きている自信がある」

「つまりは——彼女をイキ死なせる事なく、高美さんに頼る事なく、一瞬一回の接触で彼女を助け出す。そんな無理難題………という訳ですか。詰みゲーじゃないですか」

「うわビックリしたあ！？ 急に出てくるなよ魅弦！？」

「すみません、なんだか気になっちゃって………まあ、それはそれとしてですね——」

「——方法は。無くもない」

ビクウウウウウウウウンツツ！！！！！と、解っているが故に反応してしまった。

そう、方法が無い訳じゃないんだ。方法はある。だがそれは今現在、僕が最も採りたくない手段であり、そして今後とも断じてやりたくならない方法——遠回しに言うまでもなく、羽化である。

「羽化させれば彼女の身体は安定するし、ちょっとしたショック療法みたいに治るかもしれない」

「いや、あの……………焰君？」

「アリですね。早速してもらいましょうか」

「み、魅弦さん？」

「じゃあ僕らは部屋から出るとしよう。勝手にお茶もらつとくよ」

「あ、そういえばいい紅茶があると聞いた事がありますね。淹れましょう」

ボタン、扉が閉まり、そして沈黙。静寂は、いたく胸に突き刺さっていた。

眼前には、布団に横たわる我がセキレイ・煌刃。表情は艶やかそのもの。溢れる色気が色欲を誘う。しかし——そんな事はそっちのけで。僕はただキスするという単純な事が、恐ろしくて仕方なかった。

また、あの痛みに晒されなければならないのかと。一度であれだ、二度目はどうなる事やらだ。

「……………黒……………人」

「煌刃……………」

「んへへ……………まあ二人ぼっちだあ」

「身体はいいの？」

「あんまり動けない、かな……………気持ち良すぎて痛いくらいだよ」

「それは悪い事をしたね。謝っておくよ——」
「ゴメン」

「いいよ、別に……………黒人になら、なにをされてもいい」

ドクン。と、胸の中で何かが脈打つのが分かる。まるで彼女に惹かれるかのように、僕は煌刃に顔を近付けていく。互いの息がかかる程度の距離に。

「……………なあに、さっきまで嫌がってたじゃん……………どしたの」

「？」

「さあ……………気まぐれかな。キスしたくなっちゃったよ」

「あたしの魅力にようやく気付いたかあ……………遅いぞ鈍感」

「いいシチュエーションだろ？ それにいい言葉を教えて上げよう。
『じっくり時間をかけた方が恋愛は燃え上がる』——
恋愛マスターの、母さんの名言だ」

「……………そりゃ確かね。あたしも今——燃えてるよ」

その日、僕は人生で母親以外の女性と、出会って二回目の女性と、
二度目のキスをした。

人生で二度目のキスは甘く、激しく。愛し合い、求め合うようなキ
スだった。

そしてついに、彼女は目覚めた。褐色の翼が広がり、部屋は光に包
まれる。

「幾久しく、よろしくね。あたしの旦那さま」

第八話 ラブストーリーとキスとフラグは突然に（後書き）

想像できたかな、ハエトリグサとウツボカズラの形！

第九話 恋心、即ち語るに及ばず（前書き）

そろそろ頭が疲れてきた……………しばらく投稿遅れまーす。

第九話 恋心、即ち語るに及ばず

『あああたあああああたたたたたたたたたたたたあ
たたたたたたああたたたたおわったあああああああ
ああッッッ！！！！！！！！！』

『うばあああッ』

『——北斗・百烈拳』

「『『お前はもう、死んでいる』……………きゃーーケン
シロウーーッッッ！！！！！！！！！！』」

君らホントに格闘系のアニメ好きだよね。北斗の拳は格闘マンガの

第一人者とも言えるし。

実年齢が二十歳の煌刃なんか、研究室^{ラボ}にいた頃にアニメ見たそうだし。というより、見せてもらった。

なんでも、高美さんのお父さんが見てたのを高美さんが見てハマったらしく、それを聞いた煌刃も見せてと要求、見たら速攻ハマったらしい。北斗は好きだが、最強は僕の虚刀流だぜ。暗殺拳もなんのその、こっちは戦国最強の流派だ。そしてモノマネヘタクソだなあ！。

……話は変わるが、キッチンで昼食の片付けと皿洗いをしながら、リビングの二人を眺める僕は、今やお父さんのような気分だ。そして今日はラーメンを作ってみたんだ。麺を打って作ったから、これがまたイイ。スープも自家製だから、オリジナリティ溢れる旨さがあると好評。

「黒人ー、お茶持ってきてー。麦茶ー！」

「あ、じゃあ私も。麦茶をお願いします」

「立ってるヤツは葦牙でも使えって事ですか……………ちょっと待ってなさいよー！」

「「はぁーい」「

訂正、気分はお母さんの方がしっくりくる。主夫だよ主夫。麦茶は冷蔵庫にありましてー、氷をグラスに入れましてー、トクトクと注ぎましてー、出来上がりー。

「はい。お代わりは自分でやりなよ。僕はちょっと用事で出掛けるから」

「黒人！」

「うん？」

「……………夕飯、どうしたらいい？」

「……………ちゃんと夕飯前には帰って来るから、安心しなさい。あと各自、自分の部屋の掃除をする事。それと洗濯物を干しなさい。魅弦はメモ帳渡してあるから、五時頃に煌刃と買い出しに行く事。いいね？」

「「はぁーい。分かりましたよ、お母さん」」

×

×

「随分イライラしてるみたいだね」

「そう見えるかい？」

「うん、スゴくイライラしてる。あの二人はやっぱりぐーたらかな？」

「不答。^{こたえず} と言うか、聞くまでもないと思うんだけど。焰君分かって聞いているよね？」

「まあそれは確かに。そりゃそつか。アハハハハハ」

午前三時頃。場所は帝都南部の駅前。やはりこの時間帯は、学校帰りの学生で賑わっている。

そんな若人の集う場所に焰君と二人、別に遊びに来た訳じゃない。今日は彼の手伝いをしに来たんだ。

「昨日のセキレイ、No.107・椎名^{しいな}だっけ？　なんでそんなにあの子に肩入れするのさ。君も高美さんも」

「ちょっと訳アリのセキレイだね。家の居候……………佐橋皆人君は知ってるよね？」

「……………なに、またあの子と関係あるのかい？」

「正確には彼のセキレイに、椎名の妹のようなセキレイがいてね。その子達は高美さんが最後に調整した個体だから、思い入れもあるみたいで、その子達も兄妹みたいに育ったんだって。そしてその子は毎晩、泣いてるそうだ。『会いたいよ』ってね」

「……………なあるほど、理解した。今回の敵は前と同じ、御子上隼人でいいのかな？」

「ああ。おそらく昨日彼を連れていった少女が椎名の葦牙だから、今頃は婚くいでるだろうけど……………もしもって事があるからね。君みたいに」

僕みたいにつて、つまりはヘタレて一晚音沙汰無しって事がよ……………言うねエ。

僕は事には至らなかったけど、あの後の痛みは——想像を絶した。想像を越えていた。

煌刃の部屋を出て、真っ先に自室に逃げ込み、ベッドに倒れ込む。ひとまず声を抑える為に腕を噛んで、暴れたくなる衝動を『自身を殴って』抑えてたから、ショックで記憶も曖昧なんだ。いや、寧ろ曖昧な方がいいのかもしれないね。あのままだと、危メンタルアウトうく人格崩壊を起こしそうだったし。

そして最後。痛みが去ったあとにはやはり——光の翼が広がっていた。

しかも、前回よりもより大きく、光りもより強く。セキレイを羽化させる度に成長しているかのように。

「さて、No.107の居場所は……………」

すつと取り出したのは、小型のiPhone型の端末。堂々とM・B・Iと書かれた一品だ。

タッチパネル式なのか、焰君が指を器用に動かす度に画面がスクロールし、ものの数秒でこの帝都の現在地の地図が表示された。ご丁寧に、カーソルまで付いてる。焰君が赤、僕が白。昨日のセキレイは灰色で、少女はピンクだった。

「ここから近いな……………急ごうか」

「ねえ、そんな便利アイテム何処で？」

「高美さんに貰ったんだよ。流石に僕一人じゃ手が回らないだろうって」

「あら優しいお姉さまだこと。僕も欲しいね」

「一応最高機密^{コレ}なんだけどね、携帯端末」

横合いから覗き込んでみると、あら不思議。地図にはいくつもの『S』の文字が。

重なっているのもあれば、大半はバラバラに散っている。そんな『S』の一つが、僕らの近くに――

ドクン。

「ぐ……………あ、がああああああッッッ!!!!??」

「黒人君!?!」

ドサリと、膝をついてしまった。人前だが、そんな事はそっちのけで。

グツグツと。ジワジワと。メラメラと。
ギリギリと。ジリジリと。ガリガリと。
ザクザクと。ドスドスと。ブスブスと。どうしようもない痛みと悪

寒と熱が、身体を襲う。

思考が働かない。脳が焼ききれそうだ。神経は何処にある。感覚とはなんだ。

身体は此処にあるか。意識は残っているか。自身をちゃんと理解出来ているか。僕は生きているか？

「おいしつかりしろ、おい！ 黒人君ッ！」

焰君の声が遠い。目の前にいるのに、南万光年も彼方にいるような錯覚を覚える。

身体が重い。僕だけ、地球の重力を何倍にも受けているような気分だ。吐き気がする。

しかし、そんな状況でありながらも。僕の感覚の一つは、鋭敏にソレを捉えていた。丁度僕の前方、距離にして二十mほどか。徐々に集まってくる人混みの隙間から一瞬だけ覗いた『彼女』の姿。彼女は僕をじっと見つめていた。

だぼだぼのシャツにスパッツ、小柄な体躯。子供のような少女は、あっという間に人混みに消えていった。

「黒人君、とりあえず人のいない場所に……………」

×

×

「だ、いじよ、ぶだから……………焔、君」

「なにが大丈夫なんだ！ 息絶え絶えじゃないか！ 待ってる、今高美さんと呼んで——」

ガシッ！ と、携帯に手を掛けた彼を止める。かひゅうかひゅうと、細い呼吸音がいやに聞こえた。ひとまず、痛みは退いてきた。身体も徐々に楽になってきてる。この調子なら、数分で戻る筈だ。

「もう、動けるようにはなってる……………大丈夫だよ」

「——なら、今の君の症状を説明してくれないか。でなければ納得出来ない」

「……………どうやら、僕は他の葦牙よりもセキレイの存在に過剰に反応するらしい。魅弦と婚ぐ前は何にも無かったんだけど、煌刃と出会った時には胸がざわつく程度だったんだ……………」

「それが彼女と婚いだ事によりさらに強化され——近づくだけ

で激痛を伴うようになった、と」

「なにより反応するのは、自分のセキレイの可能性がある個体だけみたいだ……… 焰君が傍にいても反応しないのが、身近ない証拠だよ。そしてたぶん……… 向こうはこっちに無反応だと思うよ」

「—— 大体は理解した。でもこれ以上悪化するようなら、僕は高美さんに助けを求める……… 大事な友人を見殺しにしたとあつては、僕も寝覚めが悪すぎるからね。そこだけは分かっしてほしい」

僕の悩み・友人が過剰に少ない—— それは今となつては過去の話だった。
こんなに優しくて強い友人がいてくれるとは、僕は幸福者しあわせものだね。いやホント。
ひとまず、話を最初に戻すでしょう。焰君の端末には、まだセキレイの信号が表示されている。灰色のアイコンと、ピンクのアイコン。そして先ほどまでと違い、新たな信号が二つ、表示されていた。それは『S』と『A』のペア。つまり——

「焰君！」

「ああ、解っている—— 急ごう！」

逃げ込んだ路地裏から全速力でビルの壁を駆け上がり、屋上を飛び越える。

距離はここから直線で――五km先の市街地。間に合
つてくれと願い、僕は駆け出すのだった。

x

x

キング・クリムゾン――世界は消し飛ぶッッッ!!!!!!

百m先のベンチ。腰掛けているのは昨日のセキレイ、No.107・
椎名^{しいな}。何故か女装で白ロリ。

そして椎名に近寄るのは、先日のセキレイ狩りの葦牙と思われる少
年。椎名に近寄っている。

その後ろにはセキレイが一羽。黒い服を纏った、青年。首の黄色い
スカーフが特徴的だった。とりあえず少年は椎名を羽化させようと
している。近くに椎名を連れて逃げた少女はいない。そして椎名は
どうやら、抵抗しているようだ。

敵——金髪の少年、及び金髪のセキレイ。保護対象——コ
スプレセキレイ。

「虚刀流・薔薇！——！」

「うおっ！？」

杜若^{かきつばた}の超加速、そこからさらに敵のセキレイ目掛け、正面蹴りを接
続。

敵のセキレイ——セキレイには珍しく、男性の個体だった。得
物は手の刀だろう——は仰^のけ反^そるように蹴りを避けて、そのま
ま後ろに飛ぶ。その一連の動作として、キス直前の葦牙を無理矢理
抱えて後方へ下がるというのは、かなり驚いた。器用だなあ。セキ
レイ。

庇^{かば}うように、守るようにして、僕は椎名の前に立った。互いの距離
は短い。

「ちよっ陸奥^{むつ}！ 邪魔しないでよ！」

「放っておいたらお前が襲われてたかもしれなかったんだ。我慢し
ろ」

「ぶーぶー」

「なるほど、君が夜見の葦牙か。なるほどなるほど、確かにセキレ
イと葦牙はよく『似てる』」

「やっぱり、アンタが夜見を殺ったっていう葦牙なんだ」

「殺ったというよりも、真っ当に殺られる要因を作った方が悪い気がするね」

「うわ、大人ってホントやな性格ー。いいよ、やつちゃって陸奥」

「だそうだ。悪いな、葦牙の兄さん。セキレイNo.05、陸奥――
――殺らせてもらうぜ」

ゾクリと、空気が変わった。ざわつく肌が、心底気持ち悪いと感じる。

達人が闘う時は、空気が変わる。換気だとか風が吹いたとか、そんなモンじゃなくて。

気迫、殺気、闘気、覇気、士気、彼から放たれる存在感全てが一変する。彼が見せていた気だるさなど微塵もない、純粹な戦いのための存在へと至る。これが本物の――強い者か。

「椎名！」

「紫さん！」

一步遅れて少女が登場。彼女には早く来てもらいたく、悪いが焰君に探して連れてきてもらった。
焰君のお姫様だっこのから抜け出すと、一目散に椎名に抱きついた。
どうやら完璧なまでに相思相愛な様子。

「……………なるほど。セキレイが葦牙を呼び寄せた、という訳か」

「二人はいいのかい？ このままだと羽化しちゃうよ？」

「俺はお前を倒せと命じられたんだ、今さら急に相手は変えられんさ」

「あら、いい男……………」

カッコいいね、僕の身の回りの男は———虚刀流・式の構え『水仙』。

腰を落として脚を開き、手刀を腰に添えた構え。じつと陸奥を見据えながら、自己紹介。

「改めまして名乗りをば———虚刀流想像者、白羽黒人。自称『セキレイ殺しの黒人』、推して参る」

「あの、白羽さん……………」

白羽さん……………むず痒いな、その呼び方。さん付けは、あまりさ
れないからさ。

陸奥はクスリと笑い、闘気を少しだけ逸らしてくれた。振り向くぐ
らいの時間はくれるという事なのか。

「あ、えと……………助けてくれて、ありがとうございます」

「君は？」

「はっ、はじめまして！わたし、佐橋紫って言います！」

「えと、N O ・ 1 0 7 ・ 椎名です」

「うむ、礼儀正しいいい子達だ。とりあえず二人とも、さっさと婚
いじゃないなさい」

「……………へっ？」

「そこまでだ」

シュンッ！ と、振り返る僕の背後にいつの間にか陸奥がいる。
右手の刀を鞘に納めたまま、僕の脇へ身体の捻りを加えた突きを繰

り出していた。

「虚刀流——！」

「遅い……………はさいてん 破碎点ツツツ！！！！！！！！」

咄嗟に反撃しようにも脇へ、しかも背後からの奇襲な為に、反応が遅れてしまった。

そして、ズドムツ！ と、案の定攻撃を受け、僕の身体は数mほど宙を舞い、さらに数m地面を転がっていた。

いやあ、中々にいい攻撃だ……………身体に衝撃が響き渡ったよ。こんなに身体に響く攻撃は久々だ。というより、今まで攻撃をほとんど喰らわない僕がスゴいんだろうか。セキレイとの実戦経験たった三回しかないけど。

「黒人君！」

「うそ、死んじやった……………？」

「……………なんだ、今の手応えは」

「貴様、よくも——！」

「だあいじょうぶだよ、焰君」

ムクリと、横たわる我が身の上体を起こす。そしてなんだか寝違え

たみtainな感じの首を、コキコキと鳴らしてみる。地面に身体を打ち付けたせいか、微妙に首の骨が歪んで――ああ、ゴキッ！　って音がしたら治ったよ。

そのまま気だるそうに立ち上がり、ゆらゆらと紫ちゃんの方に戻っていく。

「何をした」

「ちょっと裏技を」

僕が用いた裏技――その名を『忍法・足軽^{あしがる}』。我が人生の武の標^{カタナガタリ}『刀語』に登場する、敵の真庭の忍の一人が使う忍法だ。その忍の名は真庭蝶々^{まにわ}（ちょうちょう）、小柄な南蛮出の忍であり拳法家である。

さて、忍法に話を戻そう。この忍法能力は『触れた物体の重さを失くす^な』というモノ。

鉄の塊だろうが、人間だろうが、何であろうとその質量を零にする事が出来る、女性必死の忍法。

その正体は『遠心力や体重移動などを用いて質量を「消す」、物理に則^{のっと}った』実に科学的な忍法である。そもそも忍法とは当時の科学の最先端を取り入れたモノばかりで、実にユニークなモノが多い。少なくとも、僕はこの忍法をそう分析した。故にそれを基点に忍法を実現化してみた。そして――成功。

打ち込まれた『破砕点』の衝撃を、事前後方へ跳び、ヒットした瞬間身体を上手く捻って衝撃を霧散させ、ダメージをほぼ零にした。上手くイクとは思っていなかったがね。しかし今後の改良点は多々ある。打ち込まれた後の受け身や、応用範囲の拡大などが主な課題だ。

因みに先日の『南斗獄屠拳』だけど、アレの超跳躍にも『忍法・足輕』を用いていたんだ。これが+αだ！

「ってゆーか、不意打ちってアリ？」

「アリだ。一応あのセキレイも家のワガママ大将の要求でな、応えてやらんといかんのは面倒だ」

「苦勞人だねえ。ああ、あとそれ気付いてる？」

「なにを……………っ、これは——」

打ち込まれた直後、カウンター気味に『雛罌粟』^{ひなげし}を放ってみたんだが、当たったようだ。

右脇の辺りの服の弛^{たる}みに、すうっと切れ目が入っているのがいい証拠だ。ニヤニヤと笑いながら、今度は『伍の構え・夜顔』^{よるがお}。脚を均一に開き、平手を腰の前に揃えた構えだ。陸奥も少々僕を侮っていたようで、深呼吸の後に改めて刀を構える。腰に刀を添え腰を深く落とした、まるで居合いの構えのように。

「なるほど……………確かにこれなら、並のセキレイぐらいは簡単に倒せそうだな」

「お褒めに預かり光栄の至りだよ」

「御子上、少し離れてろ。危ないぞ」

「はい」

「なら俺も少々本気だ。俺の刀は速いからな、一瞬で殺られないよう気をつけな」

「ああいいぜ。ただしその頃には、アンタは八つ裂きになっているだろうけどな」

と、キメ台詞を放ちあつたはいいんだが——なにやら陸奥の様子がおかしい。

その視線は僕じゃなくその後ろ、焰君に守られている二人に注がれていた。

おそろおそろ振り返ると……二人はどうやらとうとう婚いだらしい。灰色の光が椎名の背から伸びて、翼のように広がる。そして同時に——焰君は二人から一気に離れた。いや、アレは逃げたというべきか。

その理由、僕にもすぐに分かった。椎名からなにか『よくないもの』を感じられるのだ。

「（これは三十六計逃げるが勝ちってかあ!?!）」

「嫌な空気だ………御子上、逃げるぞ」

「ええーっ！っ！？ まだゲットしてないのにーっ！っ！っ！
！……！」

夜顔を解除し、即座に愛用の漆ななの構え・杜若かきつばたに移行。そして一瞬で加速・退避。

忍法・足輕と併用する事で、地球の重力を無視した移動を可能とする今の僕は、とりあえず近場のビルの外壁を駆け上がり、逃げ込む形で屋上に辿り着いた。そしてすぐさま屋上から地上を見下ろす。

「世界の終わりの庭 《ワールド・エンド・ガーデン》……！」

椎名を中心に、力の波動がドーム状に広がり、衝撃と爆発音が、瞬く間に辺りを包み込んでいく。

椎名の力を例えるなら、アレは死の波動。おそらくアレに触れたものはすべからず、生命力を奪われ死人と成り果てる事だろう。故に陸奥も僕も、危険を直観で感じて咄嗟に逃げたんだろう。たぶん、婚いだ葦牙はその耐性が出来るのかもしれない。

椎名が彼女にだけは外したのか、それとも彼女が力への耐性を持っていたのかは別として、椎名と紫ちゃんを中心に数十mの空間は、空気が死んでいただけ言っておこう。そして屋上に逃げた僕を見つけると、椎名は深く頭を下げて、紫ちゃんは元気に手を振っていた。

僕も軽く手を振り、その場から少し後ろに下がって二人の視界から姿を消した。

振り返ると、何処かへ逃げていた焰君がいつの間にか帰ってきていた。マスクは外している。

「これでいいかい？」

「ああ、上出来だよ。ありがとう黒人君、助かった」

「気にしない気にしない。友人が少ないんだ、このくらいの頼みは

聞かないとね」

「君ってワリと社会適応出来てないよね」

「あ痛ツツツ！！！！？？？」

×

×

なんだかんだ探し回って、焰君がお礼にと服を買ってくれたり——
——何故か魅弦や煌刃の分まで買ってくれた——りして、時刻
は午後八時を回っていた。そして今日は電車と徒歩での帰宅。
さあて、家の子は一体どうなってる事やら。大方『腹減った——』
と泣いている事だろう。

「ただいま——」

「お帰りー。モグモグ」

「お帰りなさい。まぐまぐ」

……あつれええええ、なんか普通に食事してるよおゝゝゝ？

以外と大食家な二人の食事量にあつたメニューと言える内容。それは中華料理だつた。

熱々のご飯に炒飯^{チャーハン}、回鍋肉^{ホイコーロー}、青椒肉絲^{チンジャオオース}、餃子^{ギョウザ}、小籠包^{シヨウロンポウ}、焼売^{シユウマイ}、酢豚^{すぶた}、エビチリなど、オーソドックスなモノは大体取り揃えられている。というかフツーに旨そうだ。腹が減ってきたぞい。

「これは誰が？」

「あたし」

本日は晴天なり、本日は晴天なり。午後二。一二時、虚偽を吐く者アリ。

これだけの中華料理を彼女が作ったと？ そんなバカな、そんなのは夢だ、彼女の妄想に決まってる。渡したメニューにはこんな豪華なメニューは無かつたぞ。金はクソ御中から出てるからいいけど。

「煌刃さん美味しいです。また作ってください」

「おうありがとう。気が向いたらねー」

「ばっ、バカな――ガサツなキャラの煌刃が料理が上手いわけが！」

マイ箸を取り出し、とりあえず一品一品口に入れていく。咀嚼、味わい、飲み込む。

肉の食感と瑞々しい野菜の歯ごたえ、割れば溢れる肉汁、しつこくない油加減と胡麻油の風味。気がつけば無言のまま、さらりと茶碗三杯お代わりしたうえに、オカズを手当たり次第に平らげていた。丁寧な箸と茶碗を置いて合掌。そして椅子から立ち――

「……………参りました（土下座）」

「うわかればよろしいのよ。ア―ッハッハッハッハア！」

「あれ？ これって黒人さま初の黒星……………？」

第十話　せめて、友達のように遊びたい（前書き）

こっちにかまけて片方の更新忘れてた……orz
次回もまたしばらくかかるので、のんびり待っててくださいえ

第十話　せめて、友達のように遊びたい

『キラ・ヤマト、フリーダム——行きますッッッ！……！！！！！！』

『アスラン・ザラ、ジャスティス——出るッッッ！……！！！！！！』

『ガンダム、ねえ……あたしはあんまり分かんないや』

「おやそうですか？ では地下室でDVDを見る事をお勧めしますよ。丁度ファーストからありますし」

「てゆーかさあ……………それよかさあ、昼飯まだあー？」

「仕方ありませんよ。今日は黒人さまは焰さんのお宅に、遊びに行かれていますから」

「いいなあー、あたしも混ざりたいなあー……………イチヤイチヤ見せびらかしたいなあー」

「それは許しませんけど……………なら会いに行ってみますか？」

「はい？」

「ほへえ〜〜、ここがあ〜〜……………」

「そ。僕の下宿先の、出雲荘いすもそうだよ」

ボロい、と言えばそれまでだが、これはどちらかと言えば、年期が入っていると言うべきだ。

古い日本家屋のような建築方法で、かつ瓦張りの屋根と和洋の外観を混ぜたかのような佇まい。たたず

外周を囲っている壁はほんの少し色褪せていて、味があると言えるよう。焰君に案内されて敷居を跨またぐとあら不思議、なんだか不思議と心が落ち着いてくる。まるで我が家に帰ってきたかのような、そんな感じ。その名は出雲荘、焰君の下宿先である。

六月はその暖かさ故に、最近の僕は七分丈のシャツにデニムとブーツでシンプルにしているんだよ。

「お邪魔します」

「いらつしゃい」

「あら篝さん、お客様ですか？」

ドドン、玄関にて本日最初の驚き。焰君の下宿先には、超美人のお姉さんがいた。

年齢にして二十代半ばだろうか、しかし少女のようなあどけなさを残す、そんな女性。割烹着がよく似合う。

「お邪魔します。じゃあ自己紹介を——白羽黒人と言います。以後お見知り置きを」

「あらまあ……………じゃあ私も自己紹介ですね。出雲荘の大家をさせて戴いております、浅間美哉と申します」

「これはご丁寧に……………菓子折でも持ち合わせてくれれば良かったかな」

「あら、いいんですゆそんなに気を遣われなくても。それに、うちの主人の口癖でね、『来る人を拒まず』という事なんですよ、家はですから、どうぞごゆっくりなさって下さいな。簞さん、後でお茶を持っていきますね」

「ああ、うん。ありがとう美哉、頼むよ」

大家さんが台所へ向かい、僕らは一階の焰君の部屋へ向かう。だがその前に。

「大家さん、めエーっさ美人やないつかぁーいッッッ！……！！！」

「痛^{いった}アッッッ！……！！……？？？？」

思わずツツコンだ。僕はペチツ、くらいのつもりだったんだが、焰君にはベシッ！　ぐらいの痛みがあったらしい。ううむ、どうにも煌刃と婚いでからと言うものの、力加減が微妙にズレてきている。力加減を忘れたという訳ではなく、僕の力が急に強くなったからズレたんだと思う。

当てられた胸を抑えながらフルフル震えて、キツとこっちを睨んで一言。

「力加減考えろよこの体力バカアツツ！！！！！！」

「あつはつはー……………ホントにゴメン」

「あれ、篝さん。お帰りなさい——」

二階から誰か降りてきた、と思つたら。誰かと思えば佐橋皆人君じやあ、あーりませんか。

同居人の焰君——ここでは篝^{かがり}という名前で通しているようだ。合わせとこ——を見つけるや否やまず挨拶、まではいいんだ。僕を見た瞬間、サアーっと血の気が引いていき、すすすーと後ろに下がっていく。

「（ナンカスゴイ人キターーツツツ！！！？！？）」

「ねえ、こつも露骨に怖がられると胸が痛むのはなんでだろね」

「いや、フツの葦牙からしたら君は怖いんだと思うよ？」

はあ……………そんなに怖いモンかね、僕の存在は。とまあ、そんなこんなで皆人君と再会。

焰君があればこれやと説得し、とりあえず怖いイメージだけは払拭出来た模様。

と、皆人君の後ろにいるのは……………くーちゃんじゃあないか。セキレイNo.108・草野^{くさの}、通称くーちゃん。金髪の少女で、まだまだ発展途上な感じの女の子である。だが――足りない。彼のセキレイは覚えている限りで二羽はいた筈だ。だが此処にいるのはくーちゃんだけ。
あと一羽……………No.88・結^{むすび}ちゃんは何処だろうか。

「むーちゃんね、つーちゃんとお買い物なの」

「お買い物かあ、なるほどなあ（むーちゃんは結ちゃんとして、つーちゃんって誰だ？……………まさかね）」

ふと考えたのは、彼のセキレイがまた増えているという可能性。出会った時には既に二羽。そしてあれから既に1ヶ月は経っているだろうか。1ヶ月で一体何羽のセキレイと婚いだ事やら……………気になるなあ、なんか気になるなあ。僕はまだ二羽だからあんまり言われる事もないだろうしね。
では所変わって皆人君の部屋。焰君の部屋は、話するには向いていないそうだ。くーちゃんも僕と遊びたいらしいし、それなりに広い皆人君の部屋は丁度いいのかもしれない。焰君は部屋が変わったので、手ずからお茶を取りに行ってくれた。

「あ、じゃあ改めまして……………佐橋皆人です」

「改めまして、白羽黒人です。同じ葦牙同士よろしく、皆人君」

正座から軽く会釈。机を挟んで向かい合った状態だ。と言いつつも僕は正座があまり好きじゃないからすぐに足を崩したし、皆人君もくーちゃんが膝に乗っかってるから、すぐに足が痺れて崩していた。そんな感じに談笑開始。

「いえ、もう白羽さんは葦牙ってゆーかセキレイに近い気がして……………」

「んーまあ、間違っちゃいない気がする……………実際二羽倒しちゃってるからね」

「くろちゃんつよいも。くろちゃん、むーちゃんよりつよい？」

「さあ、どっちが強いかなーと。ああ皆人君、その結ちゃんは何処に？」

「えと、お買い物です。夕御飯の食材を買い出しに、月海と^{つきみ}」

「ふうーん」

月海……………聞き慣れない名前だね。彼の新しいセキレイかな、このムツツリ。

とはいえ、これで彼のセキレイは計三羽になった事になる。拳系に非戦闘能力系、三人目の月海はなんだろね。なんだか皆人君^{いそ}も、フ

ツ一の葦牙とはちょっと違う気がするな。

と——なにやら外から気配がする。これは……………

「あ、帰ってきたかな」

「むーちゃんつーちゃん、かえってきたも！」

いや、違う、これは違うぞ。これは買い物から帰ってきた感じじゃない。

これはそう、僕がよく知ってる——闘争の臭いだ。

「へえ、ここがアンタの前の下宿先なんだ」

「ええ、名を出雲荘。まあその……………大家さんが鵲鳩計画につい

て、ある程度の事を認知していますから、言っちゃえばセキレイの休憩所みたいな場所なんですよ。だから私も此処にいたんです」

「はぁあん……………」

とはいえ、美哉おねえさまは優しいようで意外と刺々しい性格ですから、甘えるだけなんて赦されませんけどね。

とはいえそこはやはり優しい美哉おねえさま、働かせると言ってもせいぜい買い出しや家事の手伝い程度でしょう。

うちの黒人さまも大概優しいですが、アレはアレで中々にサデイスティックですから、怒るとなにをしだすか全く分かりませんし……………煌刃さんが良い例でしょう。快感で殺すなんて、DS以外の何者でもないでしょう？

「あ、それと言いましたけど……………中に計三羽のセキレイがいますが、敵ではないのであしからず」

「了解。因みに容姿は？ セキレイ三羽って言われても、誰か特定出来なきゃ意味ないし」

「まず一人は銀髪の男性、女性寄りの容姿です。一人は黒髪で活発、髪を片方結っています。一人はオレンジの髪の三つ編み、メガネを掛けています。これで分かりますか？」

「あい分かったわ。つまりそれ以外は敵って事なんだよね？」

「一様にそうとは言い切れませんが……………まあ、そうでしょうね」

あとは、私が出ていった後に入ったという大学生と、その彼女らしい女性。

焰さんから黒人さま経由なので、あんまり上手く伝わってきていないです。

にしても……………おねえさま美哉、遂にまともな入居者が現れたんですね。出雲荘に入居した時は『この下宿大丈夫？』とか思ってたましたが、大丈夫なようですね。そうそう、その方達にも一応挨拶をせねば。

私と黒人さまの熱愛を、とことん見せびらかすんです。どうです、素晴らしいでしょう？

「ねえ魅弦」

「はい？」

「って事は……………アレは敵って事でいいんだよね？」

煌刃さんが指差すのは、私達が立つ出雲荘の門のその先。約五十mほど先にいる二人の……………二人の、二人……………の……………メイドのような、ウェイトレスがこちらに向かってきていた。

片や金髪の外国人らしい女性、スタイル超ヨロシ。片や黒髪の日本人らしい女性、スタイル超ヨロシ。

「はあ……………全く、買い物間違えるとは何事じゃ」

「うう、すみません……………結、月海さんとお買い物勝負に夢中になって、ネギさんとニラさんを間違えちゃいました……………無念です……………」

「それに気付くのが遅すぎたの。まあ今回はそれに気付かなかった、^{われ}吾にも責がある……………共に頭を下げて、赦して貰えるよう、頼むとしようではないか」

「うう……………月海さん優しいです……………（涙）」

「こつ、こら抱きつくな結！ 買い物袋が破れるではないか！」

なんともかしましい、年頃の女の子同士の会話だった。なんだか羨ま^sゲフンゲフン。

そんな彼女達は、まあ名前の響きからある程度、想像出来る通り――

――セキレイだ。

向こうはメイドorウェイトレスだが、こちらは普通にセキレイとしての制服、袖の無い巫女服に袖の無い褐色のコートを着ている。得物も一応持つてきていますから、故に彼女達は私達の存在にすぐに気付き、こちらへ早足に近づき、身構えられる。

「^{なれ}汝ら、セキレイじゃな？」

「はい。それがなにか？」

「えっと、^{ちよーせん}挑戦って事なんでしょうか？」

「んー、どーだろね。あたしらは偶然アンタらに会^{でくわ}したただけだからね」

「じゃが……………出会したのも何かの縁。汝らも葦牙を同じくするセキレイのようじゃしな。ならばこれも、セキレイとしての運命……………No・09・月海、参る！」

「No・88・結！ 拳系、よろしくお願いします！」

「No・37・魅弦、弓使いです。お相手致します」

「No・90・煌刃。武器は蛇腹剣だ。かかってきな」

背中に風呂敷に包んでいた弓を取り出し、矢をつがえる。長さ五尺の日本弓だ。そして煌刃さんは閉じていたコートのボタンを外し、徐に裾の中に手を突っ込む。その内側、彼女の脚に、蛇腹剣は巻き付けられていた。それを掴むと、まるで蛇を巣穴から引き摺り出すかのように抜き放つ。

ワイヤーに繋がれたその刃は瞬く間に柄に戻り、一振りの蛇腹剣に戻った。

私達は己の得物を構える。準備は完了、いつでも戦えます。

彼女らは買い物途中という事で、買い物袋を門の内側に下ろして

準備完了。

月海さんは能力系——二次元にはテンプレの、水系能力者だった——で、彼女の周囲には膨大な水があちこちからかき集められていた。そして結さんは宣言通りの拳系、深く腰を落として構えている。

「いざ、参る！」

「水のセキレイは私が、拳のセキレイは煌刃さんに任せましたよ」

「あい任された！」

「よろしくお願いしますッ！」

煌刃さんが前に飛び出し軽く跳躍、空中で身体を右回転させてその遠心力に任せて剣を振るう。

だが七尺の蛇腹剣は近接戦闘には若干不向きなのか、結さんには頭を下げるだけで簡単に避けられていた。だがそれだけには留まらず、煌刃さんは下段から打ち上げてきた結さんの拳を左手で受け止め、その慣性を利用して距離を取る。

そして距離が五mと空いた瞬間、蛇腹剣を解体、鎖刃にして展開する。まるで蛇ムチのようにうねりながら、刃は結さんを狙い飛び回る。結さんは頭を下げて、身体を捻って、飛んで刃を殴つてと、あらゆる方法で攻撃を避けていた。

かくいうこちらはというと、一度に二本の矢を放つ私は、常に左右に動いていた。

それは今も私の頬を掠めるこの——水の弾丸があるからだ。名を『水ノ矢』、高圧水流の弾丸だ。それを秒間十発の勢いで撃ち続けてくるから、移動を休めると瞬く間に蜂の巣ですよ。故に今日現

在私は目をフル稼働させ、弾丸を見切っていた。

「くっ、ちょこまかと……………！」

「これが遠当て使いの正しい戦闘方法です、咎められる覚えはありませんよ」

「よかるっ、ならば——すいりゅう水龍ツツ！……………！」

膨大な水が凝縮され、一匹の龍へと姿を変える。月海さんは迷う事なく、水龍を私にぶつけて来た。

私はそれを避ける訳ではなく、弓の端を掴んで、まるで刀のように構えた。示現流、とでも言いましょうか。

弦を正面に、水龍が1mと接近した瞬間、日本弓を一気に振り下ろす。するとどうだろう、高圧水流の塊たる水龍は、斬撃と衝撃で爆散したではないですか。流石はM・B・I製の特殊な弦です、堅く柔らかいいい品ですね。

「（弓を……………刀のように——！？）」

「ばおっとしてる暇はありませんよツツツ……………！」

あまりの突然の事態に戸惑う月海さんを余所に、私は弓に新たな矢をつがえ、放った。

狙いは胸、その心臓。矢は直線のまま、まっすぐに月海さんの方へ進んでいく——

「ねえ、アンタ」

「はい？」

剣を元に戻し、煌刃は結に話しかける。

「アンタの葦牙ってさあ、今何処にいんの？」

「皆人さんですか？ 皆人さん、結のお家は此処ですよ」

指差すのは、真横にある出雲荘。

「…………あたしの葦牙も、こん中にいるんだけどさ。此処に男って住んでるの？」

「男の方ですか？ あ、はい、いますよ。篝さんという方が住んです」

「…………あたしの葦牙、たぶんソイツの連れなんだよね」

「えーと、煌刃さんの葦牙様が中にいて、煌刃さんの葦牙様は篝さんのお友達で……………篝さんは結や皆人さんのお友達で、篝さんは大家さまのお友達で、という事は……………煌刃さんの葦牙様は結達ともお友達という事ですね！」

「（まーわりくどい解釈な上にメチャクチャ言っなこの子……………アホか？）」

「なにをしておる結！」

「あ、月海さん！ この方達、敵じゃなかったです！」

「はあ！？ なにを」

「あ」

バシユツツツ！！！！！と、魅弦が引いていた矢と弦を放す。
月海が後方に振り向いたタイミングで。

距離は僅か五m弱。背後にいる結に振り返ってさらに前方の魅弦に視線を戻す、そんな過程を追う彼女。

例えセキレイであろうとも、こればかりは反応が遅れてしまう。水流を撃ち出す『水祝^{みずいわい}』を構えだしたのが一m半、水分子が圧縮されはじめたのが一m、ようやく拳ほどの大きさの水が出来上がった。だがこの三十cmという超至近距離で『十cmにも満たない点』の矢を、拳程度の大きさの水祝で止められる訳がなく。

月海は『無念』なんて事を思ったのか、ぎゅっと目を瞑っていた。だが聞こえてくるのは、矢が肉を撃ち貫く音じゃあなく、パンツツ！！！！！！という手を打つ音だった。

うつすら目を開けると――黒ずくめの『見た目普通の』
青年が、矢を白刃取りしていた。

「あ――……つぶねええええええええええツツツ！

「！！！！！！」

なにこれ、超運ゲーじゃん！ 僕よく取れたなマジで！ なに、無意識に『THE・WORLD』でも使ったわけ！？

闘いを止めんとし、慌てて皆人君やら焰君やら、皆で外に出てみるともう手遅れ、闘いは始まっていた。

だが玄関に出ると共に、結ちゃんの声が響く。『敵じゃない』と。

お陰で闘いは終わり、ほのぼの大団円で終わるかと思いきや……………

……………うちの嫁・一号が馬鹿馬鹿しく阿呆^{アホ}らしく、とんでもないミスをしでかした。

そつば向いてる人間に攻撃したんだよ、しかも『あ』なんて間抜けな声をあげて。

門前から右へ少し離れた場所で闘っていた彼女達は、今僕達がいる門前から直線距離で十mほど。

「（頼む、間に合え———！）」

最速の杜若^{かきつばた}に賭けて、構えた瞬間、軽い溜めで駆け出す。

構えた時には既に矢は月海———彼女が月海か。なるほど、高貴な感じがする———の目前一mにまで迫り、彼女も矢を叩き落とそうとしたが、そこはやはり能力系。能力の展開が間に合わなかった。そして僕は駆け出し、月海を押し退ける形で矢を白刃取りしていた。

「クウウウルアアアアアアアッツッ！！！！！！！！ぬわぁあにやつてんだよ魅弦ウウウウウウウッツッ！！！！！！！！」

「ひつ！？」

矢をへし折り、鬼のような阿修羅のような、夜叉のような形相で魅
弦に詰め寄る。

そしてすくんだ瞬間に右手を引っ張り、右足で右足を払い、**×**に上半身を掌底で叩いて彼女をこかせた。

技名『桔梗ききよう』、虚刀流で唯一の“投げ技”であり、こういうちよつとしたお仕置きに向いた技である。受け身の取り方だけは教えておいたお陰か、『桔梗』を受けても柔道よろしく後ろ受け身を取つて気だるそうに寝転がっていた。

「うづうづ、頭が痛い……」

「そこで這いつくばってろやクソがアアアアアッツツ！！！！！！」
「ピギャツシャアアアー……ツツツ！！！！！！！」

「（なっ、なんじゃこの男は……あの至近距離で矢を掴んだじやと？）」「

「あ、ゴメン。うちの葦芽ってちよつと変わってるからさ、あんま気にしないでよ」

「あ、くーちゃんの時にお世話になった！」

「やあ 結ちゃん 久しぶり、そしてはじめまして 月海ちゃん。白羽黒人、二十歳で魅弦と煌刃の葦牙だ」

「な、No・09・月海じゃ……………よ、宜しく頼む」

「まったく、ちよつと前に会った結ちゃんの事すら忘れていたとは、なんと愚かさ甚だしい。」

「くーちゃんの一件は結構刺激的に衝撃的だったのに、キレイサツパリ忘れてた。逆にどう忘れたのか教えてほしいもんだよ。謎増殖した植物園で、謎の少女に出会い、以下略。とりあえず、今後魅弦には『バカキング』の座を与えよう。」

「わ、悪^{わり}イ黒人。コイツら知り合いだったのか」

「いにや、気にしなさんな煌刃よ。ただ単に物覚えの悪い、くおんのヴァアカが悪いだから」

「た、タツプタツ……………ぐげえ」

「キヤメルクラッチをしながら煌刃の気を紛らわせようと、軽く魅弦をイジる。」

「そんな風に魅弦達と戯れていると、月海ちゃんやら皆人君やらがなんと奇異なモノを見るように、こちらを見ていた。それもそう、セキレイは本来なら人間の筋力よりも圧倒的に力が強く、また、人間程度に力負けするなど断じてあり得ない事を知っているからだ。魅弦『程度』なら最早筋力負けする事はないのが、僕の現状だ。煌刃とも腕相撲すれば負ける気はない。」

「とつ、とりあえず俺の部屋に……………このまま此处で立ち話もな

んですから。ね？」

「それは有り難い。うちの嫁から君のセキレイ達に、謝罪をさせたかったところなんだ」

「あたしはハナからそのつもりだぜ。非礼は詫びて末永く仲睦まじく、これがサイコーだろ」

「よろしい、君はいい子だ。帰ったらアイスを買ってあげよう」

「わーいやたー」

ピクピクとヒクついてる魅弦を抱き抱え——廊下が広いから、お姫様だっこが出来たぜ——二階の皆人君の部屋へ一同移動。テーブルには焰君が持ってきてくれたお茶が、まだ温かいままで残っていた。だが人数分には足りないので、再び焰君が取りに行ってくれた。

円形のテーブルを半分に分け、テーブルから離れて並ぶように僕と皆人君を基準に話を始める。

結ちゃんと魅弦、月海ちゃんと煌刃。敵対関係が互いに向かい合い、腰を降ろす。くーちゃんは僕と皆人君の間に。美哉さんは夕食の準備で離れられないらしく、上がってはこない。他にも住人がいるそうだが、出てくるかは分からないとの事。

「では改めまして自己紹介を。なお、此処にいる面子は今後敵対する事は赦しません。この禁を破った者には、僕の悪魔のツボ^お押しで“死よりも恐ろしい快感”を与える。いいね？」

『……………（コクリ）』

「じゃ、じゃあとりあえず俺の方から……………えと、葦牙の佐橋皆人です。よ、よろしく……………」

「葦牙の白羽黒人、二十歳。特技は炊事洗濯、趣味は二次元愛好。流派は虚刀流だ。よろしく」

「うわ堅ッ！ 誰ですか貴方ああだだだだだだだだだッッッ！！！！」

邪魔者の腰辺りの痛覚のツボを刺激する。名前は———忘れた。魅弦には、まるで焼き鏝こてされてるみたいな痛みが感じられる筈だ。さてそれは捨て置き。結ちゃんと月海ちゃんはセキレイの正装に着替えていた。ミニス力巫女服と、白黒のヒラヒラしたヤツ。

「No.88・結です。ふつつかものですが、よろしく願いします！」

「No.09・月海じゃ。良しなに頼む」

「No.37・魅弦です。痛みの中でも自己紹介は忘れあぎゃあああああああ———」

「な、No.90・煌刃……………な、なあ黒人？ そろそろ赦してやれば？」

「え、なんで？」

「死んじゃう！ 魅弦そろそろ死んじゃうからやめたげてよぉ！」

「あ、あとこつちの子はNo.108・草野。みんなはくーちゃん
って呼んでます……………」

「むふーッ！」

そんな混沌とした部屋のドアの前では。

「（黒人君……………君も大概大変なヤツだよ）」

「あらあら、仲睦まじいですね」

「うわ楽しそう、けど入りたくないなあ……………」

「ぬふふふ、なにやら新たなドラマの幕開けの予感ですよぉ〜
……………」

第十一話 ようやく会合

「ありがとうございますー」

コンビニで買った弁当。最近はこのどれが当たりかハズレかを見つけるのが暇潰しになっている。

他にはジュースや茶、パンにデザートなど。真つ当な食事に少しでも近付けようと頑張ってみた。

それを持っていくのは帝都内の小さな公園。子供向けの遊具が多数設置されていて、保護者が休める背凭れ付のベンチ、飲み水が出る水道と、中々に整えられた場所である。そのベンチの一席、木陰に重なるそこに、俺の待ち人はいる。

「ほれ、お待たせ。今日はミックス弁当だ、野菜と肉がたっぷりだぜ」

「……………ん」

麦茶は苦手らしいので、彼女には烏龍茶を。ミックス弁当と手渡しで、俺は彼女の隣に腰を降ろす。

五月は末の、梅雨の前。空気が気持ち悪いくらいの湿気を帯び始めた、そんな頃合い。

弁当をひたすら無言で食べ続け、数分で完食。ゴミは纏めてゴミ箱へ。今日は茶を飲みながら、今後について語らおうと思う。まず一つ、俺達は人間じゃない——『セキレイ』と呼ばれる、ある種のミュータントのような存在だ。

物理的な破壊力を持つヤツ、火や水などの能力を駆使するヤツ、得物を持つヤツ。事様々なセキレイがいる。

そんな俺達は、あの塔……………帝都タワーに居座る男、M・B・I社長・御中広人の差し金で、この闘いを始めていた。無論、俺自身闘いに抵抗がある訳じゃない。本能的に『闘う事』を求めている自分がいるのが、いい証拠だ。

だが、力無き者はどう生き残ればいいのか。そんな単純な疑問も浮かんでくる。

神座島にいた頃にも、何体かひ弱な個体を見た覚えがある。アレは相当弱かった。

闘うとかそれ以前に、闘えるのか心配になるくらいだ。なにより、そんなヤツには闘う意志が無かった。

「……………デザート、欲しい。也」

「バナナプリンとマンゴーモース、どっちがいい？　好きなの選べ」

「……………バナナ」

そしてコイツも、そんな『闘う意志の無い』セキレイの一体だ。だが決して、弱い訳じゃない。

寧ろコイツは強い。並みのセキレイなら100%勝てる筈がないほどの、馬鹿馬鹿しい能力を持っている。

だがそれ以前の疑問が一つ浮かんでくる筈だ。何故セキレイ同士が『婚いでないのに仲良くしてるんだ』という疑問が。そりゃ簡単だ……俺はコイツの保護者的な存在だからだ、以上。色々あって今はコイツの保護者っただけで、いつかは闘う………かも知れない。

「さて、今日も探すか。お前の葦牙」

「……………ん」

南にはいなかった。御子上とかいう葦牙もいたが、なんかイケスかない。元からセキレイ持ち持ちだし。

東にもいなかった。氷我ってヤツはなんか、セキレイを道具にしか考えていない。だからこれもノー。

西のヤツは知らない。常にあちこちバイクで走り回っているらしく、見かける事自体レアで、地元民に聞き込んでも知らないとしたか答えなかった。とまあ、こんな風に帝都の各所をしらみ潰しに当たっているんだが、どうにもハズレしか引いてない。となると――

「北にゃあ特に目立ったようなヤツはいないって話だ。なら――
――タワー近辺だな。行くぜ」

ぴょんこと、彼女は俺の背中にしがみつく。身長が小さいかし軽いから、背負っても楽々だ。

公園から次は帝都タワー周辺、その辺りを散策するでしょう。そしていい加減当たりクジを引きたい。そんな淡い期待を胸に街中の上、ビルの屋上を八艘跳びの如く駆け抜けていくのだった。

『いっちょっやっくうっん……………』

「なんかカツコイイよな金髪って」

「そうですね、なんだか高嶺の華みたいな感じがして素敵です。それに静雄と臨也の絡みが……………」

「うちにも男のセキレイがいたら、もちっと妄想とか出来んのかなあ……………」

じつとりとした視線を感じる……………毎日家ではパソコンからアニメを垂れ流しにしてるが、なんで『デユララー!!』にやたらと反応するんだ。腐女子でもないのに腐女子みたいな発言しやがって。

「ねえ、黒人オ？」

「なにかね」

「その、折り入ってお願いがあるんですけど……………後生なんで、叶えて貰っていいでしょうか？」

「ふうむ、後生か……………良からう、叶えてしんぜよう」

「「男のセキレイと婚いでプリーズ!」」

「だが断る」

……………煌刃、何度も舌打ちするのやめなさい。下品極まりないよ。魅弦もじつとり視線で手をワキワキさせて近付かないでくれよ、怖いだろ。だが後悔なんてあるわけない。

「この白羽黒人が最も好きな事はッ！ 相手がyesと答えると思っているヤツに、面と向かってnoと断ってやる事だッ！ そしてなによりッ！ 心の中で拒否すると思っただけなら、その時既に行動は終了しているのだッ！」

とまあ状態混じりに断っている訳だが、拒否しているのはホントで本気だ。

彼女達の頼みであろうとも、こればかりは無理。先日にもあったが、今の僕はセキレイに過敏だ。

婚ぐ可能性のある個体のみだが、およそ二十m前後。たったそれだけの距離に近づかれただけで、あの激痛。それ以上の距離に踏み込まれれば、どうなるか。最悪死ぬかもしれない。そう考えると、可能な限り出歩かないのがベストかもしれないな。

「ったく、これだからヘタレは……………」

「誰がヘタレだ誰g」

携帯の着信音ユッケンフマーズが鳴り響き、メールの着信を告げる。送り主は不明。とりあえずメールを開いてみよう。そうしなければ、話が始まらない。ウィルスなんか怖くない！

『葦牙諸君、ご苦労！ M・B・I社長・御中広人である！

そんな葦牙の諸君に朗報だ。現在帝都タワー近辺に、未羽化の個体のうち二羽が確認されている。ひよっとしたら羽化させられるのはあなたかも！？ なお、その個体は私のお墨付き、早い者勝ちだ！』

232

メールを読みきると共に即刻削除。続いて新たなメールが二件。送り主は焰君と高美さん。焰君はそのセキレイの保護に向かうそう。高美さんは御中をシメるとか。

「ぬぬ、なにやら美味しそうな話の匂いが……………黒人さま、今のメールはなんですか？」

「（首↓貝）」

「視線反らすなよ。でもって言葉遊びにもなつてねえから」

「ふつ、遅かったな。既にメールは削除した！ 君達に話題を知る術はない！」

チツ――
また舌打ちかよ。

「はい、この話はおしまい。ほら、さっさと掃除するよ。今日は天
氣いいんだから」

「ブーブーブー」

だが心の欠片ほど残っている疑問はある。それはあの時、街で出会
った、一羽のセキレイの事。

幼さを抱えたままの彼女に『僕は』嗚咽を感じるほどに反応してい
た……………だが彼女は？

セキレイたる彼女は、人間であり、葦牙である僕に反応していたの
だろうか？ ひょっとしたら、ただ僕が誤反応を起こしたただけなの
ではないか？ 気付かなかっただけで、実は別のセキレイが近くに
いたんじゃないのか？

断っておきながら、洗濯物を干しながら、今更そんな事を考えてしまった。

×

×

それから少しして、買い物がてら街に繰り出した時の事だ。

「いっつが——ッあ……………」

僕は苦しみながら一人、地面に這いつくばっていた。

「あークッソ、なんでハズレしか引かねえんだよ……………イライラ
すんぜ、ったく」

適当に公共物でも壊してスッキリするか……………と思ったが、アホ
らしいのでキャンセル。

既に葦牙探索を始めて約三時間。未だに相方に反応はなく、俺にも
ピンとくるヤツは現れない。

やはり都心は都心、数多の人が行き交う此処でも、八十億と何分の

ーは中々に見つからないモノだ。歩き疲れた脚を休めんと、スーパーに近い公園を探しだし、相方を先に休ませてから自分はドリンクを買いに行く。

M・B・エマネーカードは、本気で便利だと常々思う最近の俺だった。上限なしとかマジでVIPだよな。

「ほれ、買ってきたぞ」

「……………ジンジャー、好き。也」

「そうかい、あそりや良かったな。おやつはバニラアイスでいいか？」

「（コクコク）」

なら俺はS。a1とハーゲン。ツツのバナナミルクを、一人じつくりいただくとするか。

。。。は見た目は十代前半のガキなのに、好きなおやつや食べ物かなり年期入ってるんだよな。

根菜の煮物が好きだったり、ゴハン党だったり、ネバネバ系の食べ物が好きだとか、チョコやクッキーよりも煎餅せんべいや餅だったり。普通の子供の趣味趣向よりも、二十代三十代の感性寄りなのが。。。の特徴でもある。

「で、お前にはなんの反応も無しかよ？」

「……………いない。たぶんこちら辺とは違う。也」

「キャラ造りに語尾に『也』とか付けんのやめろ。マジウゼエから」

「……………影、薄くなる」

「知るかボケ」

あーイライラする……………そんな時だった。視界の片隅に、一人の青年が映る。

黒髪を肩辺りで切り揃えた、美形の青年。身長は高く、身体も細いが、ひ弱なイメージは一切無い。

二十数m先を歩く彼に、一瞬だが———胸が、心臓が熱くなるのを感じた。気温とか太陽光とか、そんなんじゃないやなくて。内側から発せられた熱に、胸がざわめいた。そんな心臓を服の上から抑えながら、遠くに消えた青年を思い出す。

「……………アタリだ———」！

ダッ！ と、地面を蹴りだし青年を追いかけた。

この葦牙探しなんて面倒な日々に、終わりを告げる為に。

それは、僕が地面に這いつくばるなんて不様極まりない状態になる、約十数分前の事。

自宅に掃除をさせる為に魅弦と煌刃を置いてきて、一人夕食の買い出しに出向いてきた。

タワー近辺には、大方の生活に必要なモノが揃っている。これは以前言った覚えがあるね。スーパーもあればゲーセンもあり、コンビニもあるしそれなりに大きい家電店もある。故に僕は、地元からはあまり出歩かない。

そんな今日、久しぶりに家電店で安売りの電球を買いだめし、スーパーで夕食を買った。その帰路にて。

「あれ、君達……………」

「あー、あの時の!」

「う、ご無沙汰してます……………」

いつぞやに出会った二人。佐橋紫ちゃんとそのセキレイ、No.107・椎名君だったか。

二人の手にも買い物袋が。最近の女子大生も、どうやらちゃんと自炊出来てるらしい。yesジャパニーズガール。そんな感慨深い光

景に感銘を受けつつも、彼女らに出会った事に、久しぶりな感を感じざるを得なかった。

「そうか、もう一ヶ月か……………二人は仲良くやってるの？」

「そりゃもう！ あたしは椎名が大好きだし、椎名もあたしを大好きって言ってくれますし！」

「ちょ、紫さん……………恥ずかしいですよ」

「きゃーッッッ！……………！ 椎名きゃーわゅーッッッ
！……………！（o）ノシ」

うつわバカップル……………うちも大概バカだが、ここまでラブラブとは。恐るべし美少年。綺羅星……………！！

「あの、黒人さん」

「うん？」

「その、変な話なんです……………最近、身体がおかしくなったりしてませんか？」

——何を言い出すんだこの子は。身体が変だって？
それは今まさに僕が抱えている悩みそのモノじゃないか。なに君、エスパー？

だがそんな訳はなく、恐らく精神感応——セキレイ間の微弱なテレパシーとでも言うべきモノ。虫の知らせ程度らしい——やセキレイの直感で、僕の身体の“異常”を感じたんだろう。やはりセキレイというのはスゴい。

長話になりそうなので、とりあえず場所を変更。近くの公園のベンチにて。

「……………若干ね。婚ぐ可能性のある個体に近づくと、身体に激痛が走る。僕がセキレイに反応するんだ」

「やっぱり……………」

「うえ、なんの話？」

「……………たぶん、黒人さんは高美さんが言ってた“最適合者”だと思っています」

なにやら思わせ振りの表情で、椎名はそう言った。『最適合者』——恐らくその言葉通り。

「『最適合者』は、理論上葦牙に一人いるかいなか、現実にはいないとも言われていた、言ってしまうば《偶然》の存在なんです。その名の通り、葦牙とセキレイの互換性が五対五なのに対して、最適合者は『十対五』の比率でセキレイに反応するんです」

紫さんが言ってた『プリンにお醤油』と同じですね、と椎名は付け

足す。

「本来なら互いに身体が微弱に反応する程度の筈が、最適合者『だけ』は身体を越えて神経にまで影響を及ぼします。五感から痛覚まで、およそ身体の全てに働きかける……最終的には、セキレイと婚げば婚ぐ程にその感度は増していく、倍々式の探知機のようなモノ……らしいです。僕も高美さんが『暇潰し程度に話してやるう』って言って聞いてたくらいですから、詳しくは……」

「……つまりは。最適合者というのは、自身と婚ぐ可能性のある個体に対しては『剥き出しの神経』と変わらない——
そう言いたいのか。なるほど、自分の身体が無闇あたりに痛みを感じていたのにも、ようやく納得がいった。

なら最初魅弦に出会った時の一瞬の脈動、煌刃に出会った時の身体の疼き。

街中で少女に出会った時の全身を這いずり回る激痛、婚いだ後の身体の熱と痛み。全てが繋がった。

「というか、高美さんもそこまで調べてるんなら、何かしら手打って欲しいモンだよ……」

「最適合者に関しては全くの未知の状態だから、迂闊には対策を練れない、とも言っていました……下手をすれば、最適合者の人間とそのセキレイを殺す、もしくは実験動物にもしかねないって……」

それも得心がいく。やはり高美さんは優秀な女性だ、惚れ惚れするよ。

婚げば婚ぐ程に感度を増していく……………言ってしまったえば、これはエンドレスじゃあないか。

互いに反応して魅弦と婚いだ。魅弦と婚いで感度が増して、煌刃とも婚いだ。続いてその少女と婚いだら、また次が待っているのかもしれない。これは有り得ない推論だが、最悪……………『既に羽化した個体にすら反応するかも』 shouldn't. それだけは避けたい事態だ。そんな事になれば、僕は一〇八分の一〇五羽に反応する事になるかもしれないから。自意識過剰とか言われても怒らない。だってここまで納得いく理論を言われたら、何が起こつても文句はないし、驚く事も無いからさ。腹もくくれたよ。

「ありがとう椎名、勉強になった……………今度は二人にお礼がしたいな。紫ちゃん、アドレス教えてくれるかな？ 出来れば住所とか———あ、悪意は無いよ？ 気まぐれにサプライズでもしてみようかってくらいだから」

「もうサプライズじゃ無くなってます……………」

「しまったアアアー……ツツツ！！！？……」

「ま、まあまあ。アドレスくらいなら全然いいですよ。今度遊びに来てください。いいよね、椎名？」

「僕はもちろん構いません。是非遊びに来てくださいね、黒人さん」

「じゃ、ちゃちゃっとアドレスを交か」

ズグンと、心臓を握り潰された気分がした。

「が——あ、っは——ア!？」

「くっ、黒人さんッ!？」

ほら、言ってる側から………ああクソ、いつ来てもいいように覚悟したばっかだったのに、その途端にコレだよ。なんたる、鵲鴿計画に参戦してからこのところ、ろくな事がないや。

なんて心で語ってはいるモノの、思考は全く働かないし、理性が保たれてるのかも心配だ。

——訂正、あたふたしている紫ちゃんが三角座りしている。その隙間から見える三角形に過剰反応しないあたり、まだ僕に理性は残されているようだ。スゲエや僕、女子大生の生パンツ見るだけで頭が冴えてきた………

「これは……………黒人さん、反応してるんですね？」

「ら、しいね……………たぶん近い……………」

「なあんか胸がザワザワすつからよオ。相方の言つ通りこっちに來てみりゃ、ホントにいやがった」

その声を聞いた途端、身体の痛みがすうっと引いていった。まるで今までのが嘘、夢幻のように。

若い、男の声。年頃の青年らしい声は、公園の入り口方面から聞こえてきた。三人がそちらを向く。

其処には、背の高い金髪の青年と、その後ろにくっついてゐる少女がいた。痛みの引いた思考回路は、その少女を鮮明に思い出していた。彼女は間違いなく、あの時の少女だ。街中の人混みに見つけた、ダボダボシャツの少女、その人だった。

「アイツだな？」

「……………ん」

「アンタ、葦牙だな？　それも既にセキレイ持ちの。何羽持つてん

だ？」

袖の無い黒のインナー、腕には包帯で革の穴空きグローブ。
大胆にスリットの入ったゴシック系のスカートに、中には黒のレザ
ーパンツ。

靴は黒革のロングブーツで、ベルトアリアリ。ほんの少し長い金髪
を結っていたり、その顔立ちから彼をビジュアル系と勘違いするか
もしれないが、彼らは間違いなくセキレイだ。僕の『あしかび最適合者』と
しての直感がそう叫んでいる。

「オラさっさと答えるよ。ほおら」

「……………あー、君は。人に質問するなら先に名乗るという事を知
らないのかな？」

「んん？ あっははア、悪イ悪イ。んじや自己紹介させてもらっわ。
オラ、ついでにお前もしとけ」

青年はそう言うが、少女は寧ろ離れて近場のベンチに腰を降ろして
しまっていた。

青年は呆れ返ったかのような溜め息を吐いて、一人寂しくこちらに
歩み寄ってくる。距離にして二m。

「はアじめまして、葦牙サマ。セキレイN O・100・地^じ天^{てん}——
—アンのセキレイだ」

第十二話 大地（だいち）礼賛（らいさん）（前書き）

ようやく出揃った、黒人のセキレイ達……………十二話、始まります。

第十二話 大地（だいち）礼賛（らいさん）

前回のあらすじ――公園にて、僕の新しいセキレイが現れた。名をNo・100・地^じ天^{てん}。

ビジュアル系の容姿と服装が特徴の、珍しい男性の個体である。身長も高く、顔立ちなんかもうサイコー。

そしてそんな彼に着いてきたのは、もう一羽のセキレイ。名前は知らないが、少女は近くのベンチに腰かけて傍観を決め込んでいる。そしてすぐ後ろには、先程まで談話を繰り広げていた、佐橋紫ちゃんとNo・107・椎名もいる。

最後に追記。僕は『最適合者』と呼ばれるセキレイに過剰反応する人間らしい。たかだか二十m以内に近付かれるだけで全身に激痛を催すほどに敏感なのだが、どうやら十m以内に入られると、痛みは無くなるようです。

以上、前回のあらすじ――なう、地天と対峙中。

「No・100・地天だ、ヨロシク。アンタは？」

「しうへい くろじん白羽黒人……………人よりもちょっと強い葦牙さ」

身体の痛みが引いてくれるだけで、ここまで余裕が出るとは思わなかった。

互いの距離は二m弱。別段構えたり、攻撃の予兆のようなモノも無い。ただ立つてるだけだ。

目配せで紫ちゃんと椎名には下がってくれと頼み、これで状況は出来上がった。たとえ戦闘になったとしても、迷う事なく戦闘が出来る。場所が都心ど真ん中の公園ながらも、周囲にも人はいないようだった。

「で、僕のセキレイたる君は、一体何を思って思わせ振りな登場をしたのかな？」

「ベエつにイ。ただ出始めが肝心と思って、最初はキャラ強めにしてみただけだよ」

「なるほど、納得……………あの子は？」

「さあ、たぶんアンタに反応してんじゃないか？ 今は俺の番だから引っ込んでるだけだろ」

これはこれは……………ホントに二羽とも僕のセキレイなんだね。うわぁ、大所帯だなあ。

ただでさえ大喰らいが一人いるのに、そこに更に二人って、マゾだな僕は。あと煌刃は小食なんだぜ。

「が」

「が？」

「それだけじゃないだろ？ 君は何か別の用事で僕に大々的に接触してきた——違うかな？」

「ンン~~~~……まあアタリ。なんかアリガちな展開だからあんま気は進まないんだけどよお、噂で『セキレイに相對出来る葦牙がいる』って聞いてた。本人に会ったらさ、そりゃ確かめねえといけねえっしょ？」

「まあまあ、それはいいだろう。僕はなんだか有名らしいようで、あんまり知られてないみたいだし」

正確には、アンタの顔が割れてないってだけなんだがね。彼はそう付け足して構えた。

空手の有名な構え、『天地魔闘の構え』をご存知だろうか。両手を上下前面、対に突き出し、脚を前後に開いた構えだ。下手に拳を握る構えよりも有名で、今彼はまさしく『それっぽい』構えを取っている。本流のピシツとした構えじゃなく、若干気だるそうに力を抜いた状態。なんか『壱の構え・鈴蘭』すずらんに似ているな。

カタナガタリ刀語の世界では、壱の構えが後の時代に空手に組み込まれる、とかなんとかって話を聞いた希ガス。

「セキレイN o・100・地天！ 行かせて貰うぜ！」

「虚刀流想像者・白羽黒人——来ませイ！」

構えから彼は近接格闘タイプと判断。なら僕に利がある。伊達に十年も修業してた訳じゃないからね。

相手が如何に速かろうとも、狙う場所が解りさえすれば攻撃を往^いなす事など簡単極まりない。

それに戦闘中は自然と、視線が狙う部位に集中してしまうものだ。これは生物である以上、反射的に仕方のない事である。だから相手の目線だけを正確に読んでいれば、何処に来るのが分かる。分かっ^いてしまえば、対応が楽になる。

初動は決まって『壺の構え・鈴蘭』から。後の先を取らんと、地天を待ち構える。

バキヤツツッ！！！！！！！！

「が——ッは……………アツツツ！！！？？？」

——のだが、どうやら読み違えたみたいだ。失態無念。

目前一mに迫った途端、地天は掌を正面の僕に向けた。そして一秒経たずに手を振り下ろす。

直後だった——頭上から『見えない力』に押さえつけ

られ、身体ごと地面に這いつくばっていた。それも並の力なんかじゃない、まるでKONISHIKIやマツコDXが頭上から飛び降りて来たかのような、突然の衝撃だった。

だがそれはホンの数秒で消え去り、即座に身体を起こして地天を凝視する。

「こ、れは……………衝撃波——！？」

「ほおら、あんまボオっとしてっ叩き潰しちまうぞコラアツツ……………」

更に続けて掌を翳す。狙いは間違いなく僕だ。的を絞らせない為に、とにかく走り出す。

案の定僕がいた場所には小さなクレーターが出来上がり、如何に強烈な衝撃が襲ってきたのかを証明していた。それは間隔的に僕の後を追いつけて、その度にクレーターを作り出している。だがな

により恐ろしいのは――

「（攻撃方法が見えない、って事なんだよねエ――ッ
！）」

全くの無色透明、予備動作は掌を翳すだけ。音もなければ、座標理論も分らない。

ただ掌を基準にしているのか、彼が掌を向けた方向のみに衝撃波は発生していた。つまりはアレが基点。なら掌を中心に置かれる前に接近し、胴体を叩く――踵を翻し、反復横跳びの如く地天の背後から円を描いて突撃する。

能力系との戦闘経験は積んでおきたいが、あまり長丁場は厳しい――
――故に一撃必殺！

「虚刀流、陸の奥義・錦上添花！」
きんじょうてんか

背後をとった。間合いは三m始動、だが地味に脚の速さには自信ありなのさ！

ギリギリこちらに振り向いてきたがもう遅い。掌がこちらに能力を発動する前に、技が決まる方が速い！

「って思ったかイ？」

間合い一mに踏み入った瞬間――ドゴッッッ！――！！！！と、身体ごと叩き伏せられた。

「ぶふッッッ！……？？？」

肺を鷲掴みにされて、中の空気をまるごと押し出されたような気分だ。

しまった、説明は古今東西ヤレフラグだった………しまった、僕とした事が。

地面に叩きつけられた身体を起こして周辺を見回すと、潰されているのは僕だけじゃなかった。地天を中心に地面が全方位一mほど、丸ごと潰されていた。これは範囲系の攻撃………だがいつ掌から攻撃を？

「アンタの疑問は解るぜ。そんなアンタの代わりに答えてやんよ。アンタは俺を中心にグルグル回ってた、攻撃に捕まらない為に………って言えば解るかな？」

「置き攻め………時間差攻撃か！」

「ピンポン！ その通りだ。俺の能力は応用利くんだぜ？」

なるほど、納得。僕が彼の周囲をグルグルと旋回していた時には既

に、能力の爆弾を配置済みだったと………ずいぶんとまあ利口な闘い方だなこれは。ギャル男っぽいのに利口だとか、裏切りすぎる。

だがなんとなく、能力については理解出来た。攻撃方法、範囲、方向性———これらを統計すると。

「君の能力は……………重力だ」

「オオツ、スゲエ！ 初見でそこまで見破られたの初めてだぜ！
けどよお、なんで俺の能力が重力じゃなくて『重さを操る能力』って勘違いしなかったんだ？ 結構似てるのに」

「———簡単だ、君の攻撃はまず範囲攻撃だ。そして君の攻撃が『対象の質量を増加させる』能力だと仮定しても、平面の地面がクレーター状に潰れる原因にはならない。そして質量を操るのなら、攻撃は僕の頭上からではなく身体の内部から比重を加速させて行われるモノ。だが実際は身体が重くなるのではなく『僕は頭上から何かに押し潰された』……………そこらへんから統計すると、君の能力は『重力』に絞れたという訳だ」

「正解正解！ いやアンタマジスゲエわ！ こんな葦牙見た事ねえよ！」

そりやどうも、とは言わない。如何せん、初有能力持ちの相手が『重力』とは、なかなかどうして。
置き攻めアリ、範囲不明、最大威力不明、弱点不明、速度不明、最大弾数不明、不明だらけの相手だ。とりあえずバク転して再度距離を取る。互いの距離は5mとそれなりに広がった。依然余裕なのは、

自身の能力に絶対的な自信があるからだろう。

「椎名、どうにか出来ない？」

「ダメです。セキレイの闘いは本来一対一……それは相手が葦牙の黒人さんでも、変わりません」

出来れば助けて欲しいんだけどね……まあそれはさておき、どうするか。
攻撃に関する八割が不明な相手に、どう闘いを挑む？ 接近戦一択しかないが、どう攻め崩すというのだ？

「まあ関係無い——やるだけだ！」

「おつ、開き直りやがった。でエどうすんのさ、葦牙サマ？」

「至極簡単——トゥ・イーズイ 君が僕を捉える前に、君を倒す他無い」

「ご愛用、漆の構え『杜若』かきつばた。だがいつものクラウチングではなく、両手は拳を作っている。

それを地面を殴るように立てて、クラウチングの構えを取る。そこまでは変わらない。

変化するの、この後の速度だ。拳は地面を殴るためのモノだ。高威力の拳の打撃による反発力を利用し、元から速度のある『杜若』かきつばたに更に速度を加える。だがこの平地だ、移動してもたぶんすぐにバシる。

「いいねこの空気！ やる気出てきたぜ！ かかって来オい、だが俺が勝アつ！」

「ああ——行くさ」

前のめりになり、両腕に力が込められる。ないけいきこう内勁氣功——中国拳法に伝わる、秘伝の体法。

呼吸に始まり、身体の氣の流れ、筋肉の動き、骨の捻り。静から動への一瞬の反転。

それら全てを総動員し、この一瞬かそくに用いる。こんな素敵な舞台に、手加減なんて無粋で不様で無作法なモノは必要ない。向こうも、徐々にその重力の力が増していくのが解る。いい証拠が、彼の周囲の小石が、次々に宙に浮かんでいるという点だ。

だが迷う事など何もない。ただ、突き進み、打ち倒すのみ——

「いざッッッ！！！！！！」

瞬間、音もなく僕は駆け出した。正確には、音が立つ前に前に出たというべきか。

ソニック・ムーヴ音速移動

——人間の身体で擬似的な音速を出せるなんて、中々にスゴい体験だね。

流石にこれほどの速度を出されては、彼も焦らざるを得ないようだ。当初は一気に突っ込んで叩いて終わり、なんてシンプルな作戦だったんだけど、『前面から突っ込んだらアウト』と心の中の何かが叫

んだのを感じた。そしてそれに従い、迂回する形で公園を駆け回る。ベンチ、遊具、電灯、木々、ゴミ箱。自身の反射に使えるモノは全て使う。公共物の破壊などお構いなし！

そう、さながら今の僕は——超・スーパーボール！ スーパーが二個付くくらいにスーパーだ！

「オイオイマジかよ……………！？

（チツ、砂煙が視界を……………だが罨は張ってある、問題はない。周囲には、コンマ数秒で反応する特殊な空間型の爆弾を仕掛けてある。来れるモンなら来いよ、一歩でも踏み込めば、一瞬でタタキ肉だぜ！）」

百%、彼の周囲には爆弾が仕掛けてある。それも、モーションセンサー並の精度を誇るヤツが。

範囲を仮定するならおよそ二m。彼を中心として、その全方位に高濃度の重力の爆弾が敷き詰められている。

なら僕がすべき打開策は、たったの一つ——『アレ』しかない。

「（行く！）」

「（来る！）」

加速力を一切落とさず、急速反転。『真正面から』^下弩ストレートに突っ込んでいく。

そのまま一気に突っ込んで——とりあえず、罨に引っ掛か

つてみた。案の定、一瞬動きが止まってしまふ。範囲にして予測通り、周囲二m全てに強烈な重力の結界が発動された。コンクリートは砕け、小さな範囲で気圧が変わり、地響きが轟き、身体全体に通常の五倍近い重力が押し掛かる。

「かかったア！」

勝利の笑みを浮かべる。

揺るがぬ勝利を手にした、油断の表情だ——だが僕は、それを尽く覆す。

「——と、思うだろ？」

なんて吐き捨てて、五倍のGの中を『駆け出して、隙だらけの腹部に後ろ回し蹴りをお見舞いした』。

表情が油断の笑顔から驚愕に変わったのは、蹴り技『虚刀流・牡丹』ぼたんの衝撃で吹っ飛ばされて、ブランコの柵に背中を打ちつけてからの事だった。苦痛と驚愕に、表情が歪んでいるのがよく分かる。

それと同時に、彼が放った重力の結界は解除され、僕の周囲は通常のGに戻る。

「じっ……なに、っが——！？」

「賭けは五分五分……いや、七対三の負け側だったんだけど、今回は勝てたみたいだね」

「賭、け……………!?!」

「忍法足軽にんぼうあしがる——重さを無くす忍法だ」

「な——そんなバカなツツ!!!!????」

そんなバカな事があるのだよ、青年。これも現実なのだよ。重力の結界。それは対象の『重さを増加させる結界』であって、『対象を叩き伏せる結界』じゃあない。

なら早い話、重さを無くしてしまえばいいのだ。習得期間、僅か半年の忍法。体重移動の感覚と葦牙として覚醒した僕の身体能力もっを以てすれば、このくらいは造作もない。いや、何にでも手は出しておくモノだね、いやホント。

けど、彼の重力が僕の推論通り『重力による衝撃波』だったなら、立場は逆だっただろう。

「勝負あり。能力系の君の事だ、身体は近接系よりも弱いんだろう?」

「っ……………ぬかせ、や……………コンの——俺エ、立てよコラ
アアアアアアツツ!!!!!!」

震える脚を奮い立たせ、再度構えた。だが五秒と経たずに力無く崩れ落ち、地面に寝そべってしまう。結論——能力系は身体が弱い、これは中々の鉄板らしい。数度の深呼吸を経て、改めて地天を見据える。

「クッソ…………マジで負けちまったじゃねーかよ。情けねえなあ、
ったく」

「自分を過信した事が、君の敗因だ。次からは能力を過信せず、真面目に闘う事だ」

「オイオイ待てよ」

立ち去ろうとする僕を、何故か引き留める地天。
勝負は着いたのに、まだ何か用があるのだろうか？ 因みに僕には無い。

「肝心な事忘れんじゃねえよ。俺とアイツの羽化だよ、羽・化！
セキレイの最重要事項だっつーの！」

「（b ポンッ）ああ、羽化ね、羽化。すっかり忘れちゃってたよ
アハハハハ」

「お前なア……………まあそれは後だ。それに、あっちの葦
牙も俺を狙って来たんだろ？ だったら他のヤツに奪^とられる前に、
俺とアイツ共々、早く羽化させてくれよ。俺達はアンタに反応して
んだからさ」

「え——あ、ああうん、そうね。羽化ね……………そうだね」

「……………???」

——さて、どう誤魔化したモノか。『僕は君達と婚いだりはしたくない』なんて、とてもじゃないが言えんよ。ならたぶん彼はこう返すだろう——『ならなんで戦ったのか』と。
僕はこう答える——『能力系との戦闘経験を積んでおきたかったんだ』と。

「（プルプル）……………んんんん、むむむむ無理イイイイイイイイ
イイイイッッッ………！！！！！！」

「うおおッッッ………！！！！！！」

「悔やしいイ！ 自分の卑^{いや}しさが妬ましいイイイイイイイイッ
ッッ………！！！！！！」

「だ、バーロー！ んな事はいいから！ さっさと俺らを羽化さs」

「むっ！？」

上空より飛来する物体を感知、人型と認識した。落下予測地点——
——頭上。

「虚刀流・向日葵^{ひまわり}ツツ！……！！！」

上段に向けて、後ろ回し蹴り上げを繰り返す。『打撃の蹴り』ではなく、『斬撃性を持った蹴り』だ。

故に直線に蹴り上げるのではなく、袈裟斬りの逆の要領で蹴り上げる。居合いで刀を抜き放つように。

弧を描いたその蹴りは、飛来する誰かに当たった————当たりはしたが、止められたという意味での当たりだ。脚に感じるのは、なにか堅い感触。上空から差す日光に遮られ、その姿は見えないが——

——敵である事は間違いないだろう。
僕の足を踏み台に、数m後方へと下がり、じっと僕を見据える——
それは、誰とも知らぬ少女だった。

「ありや、止められた」

「ありや、外しちゃった。君はだあれ？」

「私？ わたしはねえ、No.29・平坂^{ひらさか}。ミコさまのセキレイよ」

「ミコ………ああ、御子上隼人か。なるほど、懲りない子供だね」

ボブカットの黒髪、右のモミアゲに金のメッシュを入れた、ギャル風の少女。

両手には、刃をあしらった真っ赤なトンファーが握られている。服装はタンクトップ・スパッツっぽい黒服に、ロングブーツ。平坂は、トンファーをヒュンヒュン回しながら辺りを見回し、何か得心がいったように鼻を鳴らした。

「なあるほど、あっちの男とそのチビッコがメールのセキレイね。じゃ悪いけど——もううわ」

「おおーい、俺らの意思は無視かー？」

「当然。まあそう言うと思って、今日は数で攻めに來たわ。ミコ様、レアな個体に興味津々なのよねえ」

平坂が指をパチンツ！と鳴らすと、樹の影からさらに二人のセキレイが姿を現した。

かたや緑のロングヘア、十文字槍を持ったナイスバディの女性。スーツ風の服とタイトがよく似合う。

かたや栗色のツインテール、狼牙棒ろうがぼうを携えた小柄な少女。チェックのスカートとカッターシャツが学生らしい雰囲気きふきを醸し出している。そしてその三人、その誰もが殺気のようなモノを放っていた——

——僕に向けて。

「N O ・ 4 5 ・ 阿須波。あすは悪いんだけど、そっちの男の子くれないかしら？」

「N O ・ 6 8 ・ 金屋子。かなやこダメならダメでいいよ。アタシが代わりに、アンタを黙らせてOKにするから」

「二連戦か……………まあ、大丈夫でしょ」

「あら、余裕ね？ さっきの闘いのダメージ、結構響いてそうだけ

ど？」

「いやぁ嬉しいね、歳上属性に目覚めそうかも」

耳元で空気の爆^はぜる音がした。直後、阿須波は槍を振るい、音の正体を叩き落とした。

僕の耳元を掠めたモノ——それは矢だった。白と赤の羽をあしらった、豪華な破魔矢。

それを再確認すると、僕は携帯を取り出してその射手に連絡を取る。相手は一秒経たずに、まるで掛けたのを見ているかのようにすぐに通話に応じた。その声にはなんだろう、怒気を感じた。

『……………浮気ですか？』

「違います。ただの趣味趣向の問題です！」

『……………次に同じ事を言ったら、頭を射ちますからね』

「弓のセキレイだと！？ どこだ、何処にいる！？」

『黒人さま、すいませんが私に代わって名乗ってはもらえませんか？ 此処からだと聞こえませんか？』

コイツ、人をパシらせる気が……………淑女設定は何処に行った何処に。

まあこれも、セキレイの主人としての通過儀礼の一種だろう。甘んじて引き受け、後で必ずイジメル。

「『セキレイN.O.37・魅弦。悪いが射させて貰います——
御免』」

ドスツツッ！！！！！と、慌てふためいていた阿須波の右肩に矢が刺さる。

続いて間も無く金屋子の右大腿に、そして唯一平坂だけがその胸を狙った矢を叩き落とした。

順を辿れば自分だと、警戒を強めていたからだろうか。射られた二人は矢を強引に引き抜いて投げ棄てると、三人は背中合わせになつて公園の中央に集まつた。互いの死角をカバーし合うよう、三者三方向に気を張り巡らせている。

『黒人さま、続けて』

「はいはい……………」

「くつ、姿を見せないなんて卑怯だとは思わないのかしら!？」

「『いいえ微塵も。これこそが私の闘い方ですから、恥とは思いませんとも』」

「ちょっと！ 御託はいいからさっさと出てきなさいよ！ アタシら勝負にならないじゃない!」

ごもつともだが、それは逆も言える。魅弦は近接格闘が極めて苦手

なのだ。出来ない訳じゃないが。

だからこそ、わざわざ現場から二kmも離れた場所から狙撃をしている。弓は相も変わらずM・B・I製の超特殊素材の弦。弓の大きさ二mを超え、射程は全力でならば最大二km。セキレイとしてのしなやか且つ強固な筋肉であるが故に可能な技だ。

だが何故全方位から狙撃されているのか―――――簡単だ。

此处を何処だと思っている。周囲を高層ビルに囲まれた公園だよ？

ビルの外壁から外壁へ、屋上から屋上へ跳び移れば、あらゆる角度からの狙撃が可能ではないか。つまりは、この公園は彼女の独壇場という事だ。

「『そんな事知りませんよ。私と闘いたければ、早く私を見つける事ですね』」

「いけしゃあしゃあと好き勝手言いやがって……………でも、私達の目的はあくまで『回収』。阿須波、金屋子！ そっちの未羽化の二人さつさと連れ帰るわよ―――――って」

「この白羽黒人、よもやこの生涯で野郎と口づけを交わす日が来ようとは……………」

「うつせー。俺も美人のネエチャンが良かったってーの」

「あああああッ！　ちよっ、ちよっと待――」

ええ、ストーリーもドラマも、イベントも無しと無視で羽化させちゃいました。ゴメンちゃい。

この際アレだもん、数分痛いの我慢したらいいんでしょ？　それに痛み慣れってのもあるし。

このままアレコレと騒がれて毎日つけ狙われるくらいなら、進んで飛び込む他内。まずはとりあえず面倒事を一つ解決――

――羽化の証である、鋼色の翼を広げた地天は、抱き抱える僕の腕を振り払って一人で立ち上がる。魅弦も煌刃も羽化の際には色つばさが滲み出ていたが、彼の場合はイケメンらしさが倍増といったところか。白羽黒人、此処で男を見せにやあいつ見せるんだい。

「うっそ……………」

「こら平坂！　羽化されちゃったじゃないのよ、このバカ！」

「う、ううううっさい！　阿須波だって矢にビビってたクセにえらそーに言わないでよ！」

「ど、どっちでもいいから！　ほら来たアアアアアッツッ……！！……！！」

「我が誓約の大地。葦牙が道、標し導かん――」

『うわヤバあ……………逃げるが勝ちッッッ！……………！』

「逃げるモンなら逃げてみるよ——『大地の轟渦』」

「マズイ……………椎名、紫ちゃんこつち！……………！」

パンツ！ と両手を合わせ、地面を叩くように踏む。拳法でいう震脚きやくというヤツだ。そして合わせた掌を対に擦り合わせる——

——彼がとつたのは、たったそれだけの動作だった。

僕と間近にいる地天以外の、周囲の空間全てが震動し——およそ半径五十m全てが押し潰されていた。ゴミ箱も、アスレチックも、石ころも、地面も、草花も。ありとあらゆる全ての物体が、重力によって押し潰されていた。

敵セキレイ三羽は全速力で退避、辛くも脱出したようで、迷わずにこの場を離脱した。

「くう~~~~ッ！ 祝詞のりと気持イ~~~~ッッッ！……………！」

「あーそ、そりゃ良かった良かった

（僕はこれからの激痛に憂鬱な気分だよ。ああ、クソッ……………つてあれ、もう一人は何処に）」

ガバッ！——からのちゅー。

「ふむぐツツツ！！！？？？」

「んんん~~~~」

「ぬおツツツ！！！？？？」

「うひゃあ~~~~」

「ゆ、紫さん見すぎですよ.....」

あ、ありのまま、今起こった話を話すぜ！ 『少女を探してたらい
つの間にか少女にキスをされていた』

.....何を言ってるのか分からないだろうが、僕にも分からない。
頭がおかしくなりそうだった.....だが、フラグだとかイベント
だとか、そんな御大層なモンじゃ断じてない。もっと馬鹿馬鹿しい
モノの片鱗を味わったぜ.....

「む、むぐ、む.....ぶはあッ！」

「んっ.....」

唇が離れると共に、少女の背に光の翼が広がる。それは見た事のない
——虹色の翼だった。

あまりの事態にキョドる僕は、つい腰を抜かしてしまった。一つ目
は、これから二羽分の激痛に苛まれる事になるとは、という感想。
さいな

二つ目は――僅か一日に、しかもほとんど同時に。
二羽も羽化させちゃった自分に驚いていたからだ。
哑然、呆然、偶然か必然か。僕の日々が崩れ去る音が聞こえた気がした。

「は、はははは.....こりゃビックリたまげたや」

「ま、そんな事もアンだろ。人生は永ながエんだからよ」

「（コクコク）」

「つー訳で――幾久しく、ヨロシクな。黒人」

「.....幾久しく」

「あれ、君って名前なんだっけ？」

「.....また後日にご紹介。也」

第十二話 大地（だいち）礼賛（らいさん）（後書き）

なんか書き足りない気がするが、まあいいか……………
そしてオリジナル勢初の祝詞登場。近々他のメンバーも出すつもりだから、期待しないで待っててね。

第十三話 身内、増加（前書き）

なんか頭が回らない……………少々手抜きっぽいのはご容赦のほどを

う事もあり、僕は場所を変えていた。

帝都内のホテルに一泊、という名目の、現実逃避だ。無論、魅弦達には何一つ伝えてはいないし、伝える気もない。それ以上に、この『現実』を教える事など、出来る筈がない。伝えれば、彼女達は僕を――

「――ッはア……………あ、が、ガガが……………」

……………」

昨日、僕は二人と婚いだ直後にその場を逃げ出した。まるで臆病者のように、子供のように。だが誰も追いかけては来なかった――ただメールが一通だけ。魅弦のアドレスで、一通に全員分の文が書かれていた。

『魅弦・何も言いませんが、早く帰って来て下さいね。お茶淹れて待ってます』

『煌刃・早く帰ってこーい。訓練したいぞー、美味しい飯を待ってるぞー（笑）』

『地天・野郎とキスしたぐらいで落ち込むなよ（笑）○○○のキスでチャラだろーが。マジで気イ悪くしたんなら土下座すつから、素直に言ってくれや。じゃな』

『○○○.;……………ラブ。也』

時計を確認。時間にして三時間以上——僕はなんとか死なずに耐え抜いた。

時刻は午前六時を指していて、窓からは朝日が差し込んでいる。シヤツを脱いで激痛に臨んだから、着替えは一着黒の七分丈のみ。シヤワーを浴び、服を着替え、顔を確認——よし、苦悶の表情は型になってないな。

朝一速く、僕はホテルを後にする。此处から一時間はかかる、我が家へと——

×

×

——にしても眠い………もうただひたすらに眠いんだよ。

一晩激痛と闘い抜くのがここまでの疲労とは、恐ろしや恐ろしや。我ながら発狂せずに済んで何よりだ。

帰路の途中コンビニでパンをとコーヒー買って、軽く朝食を済ませる。その際備え付けのトイレで改めて顔を見ると、苦悶の表情こそ無けれ、疲労の色や不眠の隈は色濃く現れていた。理由はそうだね………焰君の仕事にに付き合って、一晩あんまり飲んでないけど呑み明かした帰り、でいいか。

そんな道中、僕は疲労の事もあつて電車を利用する事にした。一時
間以上歩くのは流石にもう無理だし。

そしてこの早朝からなのに、M・B・Iの私設兵団は毎日警備を怠
つてはいない。あのクズの為にご苦労な事だ。

身分証明書を提示し、憲兵二人が行きしなに付き添う事になる。ど
うやら本格的にセキレイと葦牙を逃がさない為に動いているようだ。
御中は言つた——『これは神代を蘇らせる為のゲーム
だ』と。

逃げるなどというのは元々許さないという事か。なんとまあ我が俤
な……………

「オイ兄ちゃん」

憲兵の中年の人が話しかけてきた。顔立ちは非常に気さくそうで、
話しやすかった覚えが。もう片方の憲兵はなんとも無口そうで、話
しかける気にもならなかったが、彼だけは別だった。

だがその表情は気さくに話しかけたりとかではなく、まるで僕の事
を心底心配しているかのようにだった。

「顔色悪いぞ。なにかあつたのか？ 病氣かなんかか？」

「……………大丈夫です、ただの疲労ですよ。一晚頑張ったら死にか
けただけです」

「一晚つて……………なにしてたんだよ？」

「若気の至り、という事で……………秘密にしといて下さい」

「まあ俺も『鵲鳩計画』なんておかしなモンに携わってるから、偉そうな事は言えねえけどよお……………兄ちゃん、葦牙^{あしが}つてのだろ？なら忠告だ。俺も詳しくは知らないからアレだが——帝都を出ようとは考えるな。セキレイごと殺されるぞ」

……………殺される？ 殺されるだって？ 何が彼にそう言わせるのだろうか。

決して冗談ではない事は、彼の表情からすぐに伺^{うかが}える。殺されるという事は本当らしい。

「ありがとう、おっちゃん。覚えとくよ、ソレ」

「ああ、気をつけな——つと、そろそろ指定の駅に着く頃だな」

おっちゃんがそう言っつて一分も経たず、駅に到着。足早に僕は電車を出て、改札口で別れた。

時刻は午前七時前、朝日はもう登りきっている。朝日を眺めるのは好きだが、とりあえず今は帰る事を優先する。早く帰らないと、うちの嫁や婿に何をされるやら……………あれ、なんだろう。馴染みの我が家なのに、帰るのが怖くなってきたや……………

「……………」

「ん？ んんんんん？」

—— 駅前になにやら、見た事のある少女がいるじゃないか。

少女としか呼ばないのは、僕は彼女のNo.1と名前を知らないからに過ぎない。知る機会も無かったし。

そしてここで一つ、報告すべき事がある。僕の身体はやはり、羽化させたセキレイには反応しないらしい。魅弦達然り、。。。や地天然り。この様子なら、他の葦牙が羽化させたセキレイにも反応しないだろう。

—— でああ、そこらへんはさておき。

「あ、あの……………おはよう」

「……………ん」

ピツと手を立てて挨拶のつもりだろうか。少女は駅前のベンチでの三角座りの体勢を崩さない。

ダボダボの男モノのシャツにショートパンツ。その先に見えるのは他でもない、白い桃源郷だった。

—— ここいらで彼女について語っておこう。まずは容姿。首が隠れる程度に切り揃えた猫っ毛の茶髪に、小柄な体躯。身長は150cmあるだろうかくらいの小柄、手足も細く肌も白い絹

のよう、そして黒のタレ目。

さらに普段は普通の少女なのに、なにかあると姿がデフォルメされ、三頭身のキャラに変わる特性を持つ。おまけに身体から滲み出ているヒロインオーラは驚異的で、なにもしなくてもフラグを起ててしまいそうになるほど。養女に見えなくもないし、少女に見えなくもない。どっちつかずな感じだ。

「えと、迎えに来てくれた……………のかな？」

「……………此処にいたら会える、気がした。也^{なり}」

「そ、そう……………じ、じゃあとりあえず帰ろっか。お腹も空いてるでしょ？」

「（コクコク）」

—————なんなんだこの他所^{よそ}他所^{よそ}しさはアアアアアッ
ツ……………！

名前呼べないってこんなキツイモンなの！？　っーか接し辛い、話が続かない！話題が見つからん！

「そ、そうだ。み、魅弦^{ミゼ}達はなにしてるのかな？」

「……………留守番。私、此処に来る事、言っていないけど」

「それは夜遊びの部類に入るんじゃない……………」

「……………早朝出迎え、嫁の仕事。也」

えっへん、と胸を張る。だがデフォルメだ、どう足掻いてもデフォルメだ。……………デフォルメと言え、出雲^{いずも}荘のくーちゃんもよくデフォルメしてたなあ。小さい子はデフォルメするのがマナーなのか？

「そつか。うん分かった、じゃあお礼に喫茶店でも行こうか。朝ごはんまだでしょ？」

「……………喫茶店、お店、入るの久し振り。也」

「久し振り、って事は地天と一緒に入った事あるの？」

「……………バイキング」

「ああ、そういう事。じゃあわかった、今朝は僕が喫茶店の楽しみ方を教えてあげよう。手取り足取り、教え込んであげようじゃないか——その身体にね」

「……………はよーござーます……………」

「はよー、魅弦。とりあえず顔洗ってきな」

「うゝあい……………あ、地天さんも、はよーござーます……………」

「はよーさん」

他にセキレイいるたあ聞いてたが、二人もいたのか、コーヒーを飲みながら内心で呟く。

しかもかたやムチムチで、かたや清楚な大和撫子。俺が連れ回してるチビツコとは大違いだ。

俺と。。。を羽化させたあと、黒人は姿を消した。正確には、俺達が追い付けないほどの速度でどっかに行った。それから呆然としていた俺らの前に、魅弦と煌刃が現れて『自分達は仲間だ』と言い出す。

二人に言われるがままに導かれ、寝間着に黒人の服を着せられ、テレビじゃあ朝のニュースを見た後にアニメを垂れ流しにしていたり。分かんのは、此処の人間の趣味趣向は黒人にかなり影響を受けてるって事だった。

「つつか、ここの家事担当ってアンタなのか？」

「うんにゃ、家事は黒人の担当だよ。今朝はあたしが代わりにや
てるだあけ」

「代わりに、ねえ」

代わりにってレベルじゃないんだがなあ “コレ”……………コレって
のは朝食の事だ。

立ち読みしたなんかの雑誌にノッてた『世界一美味しい朝食』ってヤ
ツのそのまんまがそこにあった。『世界一美味しいスクランブルエツ
グ』、煌刃が作ったのはそれだ。つかコイツ、見た目“出来ない
女”なのに、メチャクチャデキるじゃねえか。なにより美味え。
気がつけば完食、あまつさえガツガツとお代わり連発しちゃった。

「ゴチでした」

「お粗末様」

「あれ、魅弦のヤツ遅いな……………なにしてんだアイツ？」

「たぶんいつものクセだよ。着いてきな、運ぶの手伝って」

「すぴー……………すぴー……………」

「（ね、寝てる……………だと！？）」

洗面所に来たら、なんか洗面台にもたれ掛かるように寝てる魅弦がいた。

鼻に風船作って涎垂らして、美少女なのにだらしなさで美少女らしさが完璧皆無になっていた。

「コイツ最近二度寝が激しくってさあ。こうなったら一・二時間は目え覚まさないからさ、部屋に運ばなきゃ邪魔でしゃあないのよ。ほら、運んで」

「それは手伝ってじゃなくて任せた、じゃねえのかよ？」

「いいじゃんいいじゃん。アンタ能力で重さ無くせんだからさあ」

それを言われたらやるしなくなっちまうじゃねえか……………やむ無く魅弦を抱き抱える。

今更……………つかこの歳になってお姫様だっこをする事になるなんて、考えてなかったわ。

ではでは自己紹介——No.100・地天、男性個体のセキレイ。能力系で、能力は『重力』。格闘もそれなりに得意で好きで、ボクシングとムエタイとサバットをM・B・Iが雇った特別講師に習っていた。汗を流すのが好き、つてのもあるんだけどな。

でもって、俺が連れていた少女……。は俺が色々あって預かって

た個体だ。^{セキレイ}預け主は最終調整を担当した佐橋高美。俺を調整したのも彼女で、俺は彼女曰く『シングルナンバー並になんちゃ』だったらしい。細かい事は知らん。

で、最終調整って言葉の通り、本来。。。を調整してたのは――

――アレ、誰だっけ？

記憶を掘り返すが、全く思い出せない。なーんか大事な事だった気がするんだけど……………

「ま、いつか。にしてもいい布団だなあ。畳もキレイだし」

ぼいっと魅弦を布団に投げ落とし、部屋をあとにする。なんかメチャクチャ和風な部屋だった。

俺と。。。はまだ部屋貰ってないから、昨日はリビングのソファで寝てた。野宿が多かったちよつと前と比べれば、寝床が柔らかいってだけで文句なし。しかも。。。は妹分だから、特に気兼ねなく一緒に寝れる。後々部屋も貰えるんだろうか、なんか心配だな。

「ん？ そいやアイツどこ行きやがったんだ？」

朝から姿が見えないが、どっか出掛けてるんだろうか。それとも買い出し？

そんなタイミングに玄関が開く音が聞こえた。丁度階段を降りきった時の事だ。

壁掛け時計の示す時刻は午前八時。昨日黒人が姿を消したのが午後三時か四時くらいだから、約二十八時間ぶりの再会って事になるのか。なにしてたかは知らないが、目元の隈と疲労を浮かべた顔色は

隠す気はないらしい。

「おかえり、って言うんだっけか？　こーゆー場合」

「合ってるよ、それで。で僕はただいま、と返すのさ」

「ソイツは？」

ソイツとは、。。。だ。なんか疲れきった子供みたく黒人に抱きついて寝てるヤツ。

「僕を迎えに来たらしくてね、心配であまり寝てなかったみたいなんだ。疲れてたみたいだからご飯食べさせて、そしたらすぐに寝ちやってね。ホント子供は可愛いよね」

「……………ロリコン、じゃねえよな？」

「失敬な、これは父性に近いモノだよ。愛娘を見守る父親の心とはこんな感じなのか、ってさ」

「ならいいけどよお……………マジでロリコンはやめろよ？」

「はいはい、しませんよ絶対そんな事。ほら着いてきて、君の部屋案内するから」

おっ、やっぱり用意されてたか、念願のマイルーム！　待ってました

ア
!

ゆっくりとした歩調で俺は再び階段を登り、俺の部屋へと案内される。位置は屋敷の端の方だった。

そこは少し広そうだが、男一人が過ごすには十分過ぎる生活空間が広がっていた。畳九畳、フローリングで家具は無し。大きな窓はベランダへと繋がっていて、外には木製の床で出来たベランダがあった。風もよく通るし、天井も高いから気分がいい。

「
どうか
かな？」

「文句無しだ。アングとな、黒人」

「どういたしまして」

「ん、って事はソイツは？　まさかそんなチビッコに部屋一つくれてやるとか言わねえよな？」

「そうしたいのは山々なんだけど、生憎部屋に空気がなくてね、魅弦と同室になつてもらう事になつたんだ。あーほらっ、部屋の話はおしまい。下でテレビでも見てなよ、僕も疲れたし、二度寝するか
ら……………おやすみ〜〜〜」

寝ている。を魅弦の部屋のベッドに寝かせると、そう言い捨てて自室に入ってしまった黒人。

俺はまだ白羽邸^{ユコ}に来て日が浅い。だから言い付け通りこのまま一階でテレビを見るのもアリだろう。

だが——イッコだけは、どうしたって気になる事が一つあった。それはさっきの黒人の発言「部屋に空気が無い」って点だ。

ここの部屋のドアにはそれぞれ、部屋の住人の名前の掛札がある。

神社の絵馬っぽい、シンプルな掛札には『魅弦& a m p ; ○ ○ ○』と書かれていて。

盾に二つの剣と、西洋騎士を連想させる掛札には『煌刃』と書かれていて。

太陰玉の白い方に黒文字で俺の名前である『地天』と書かれていて黒人の部屋の掛札はホワイトボードで、ただ一文字『黒』と書かれていたり。

掛札の無い部屋は、目に映るモノだけでも三つはある。流石は大豪邸、数が普通じゃない。

だが俺が疑問を持ったのは、別に部屋数が多いとかじゃない。掛札の無い部屋がこれだけあるのに『部屋に空気が無い』と言った黒人の言葉の矛盾。その矛盾を否定するべく、適当に一室のドアノブを捻り、中を覗いてみた。そこには。

何十何百という凶器が、武器が、闘器が。

まるでコレクションのように部屋のあちこちに飾られていたのだ。

「……………一般人？」

ドアを閉めると共に、そう呟いて。今の出来事を忘れる為にテレビを見に行ったのだった。

「皆の者、今宵は宴ぞ！ 存分に騒ぎ、楽しむが良い！ ワシが許

す！」

「イエース、ウィーラーヴュー・スキヤキニクワイエーイッツ
!!!!!!!!!!!!」

「アホか……………」

「……………プスッ（笑）」

白羽黒人公認、午後六時より開催！ 新入居者二人を歓迎して焼肉
パーティー！

ノリの分かる先駆者二人はもう楽しみまくってて、新人二人はノリ
に着いて行けない様子。だがしかし。あだがしかし！ たとえ真つ
当な人間であろうとも、この焼肉様の前ではただの獰猛な獣でしか
ないのだ！ 見よ、あの魅弦の姿を！

「あ、煌刃さん次カルビ行きます？」

「うんよろひふー」

他人に次の肉を誘い勧めるという手口……………アレは自分は焼きに
徹すると見せかけているだけだ。

見てみたまえ、彼女の右手を。さりげに肉鋏で自分の取り皿に肉を
モリモリと取っているではないか！

煌刃はアホだから食べ専なのは分かる。地天もあんまりはしゃぐタ

イブじゃないのも分かるし、。。。はちまちま食べるタイプだ。だが魅弦は……………あの子は狡猾な虎だ！ 燃費の悪さを理由に、手当たり次第に肉を焼いて勧めて自分が人より多く喰う。あれこそまさに虎だ！

「（ん？ なんだ、取り皿に取るのを止めた？ 何故……………ハッ！）」

「

な、んだと……………取り皿に取ること無く、そのまま肉を空中に放り投げて食べただと！？ ……………バカな、淑女設定はホントに何処に消えてしまったと言うのだ！ なにより手も使わずに肉を口に運んだだと！？ あれぞまさにフォース！！！」

「じっ……………」

「な、なにかな魅弦。僕の顔に何かついてる？」

「人が食べてる処を見るのはマナー違反、ではなかったのですか？」

「あ、そ、そうだねそう！ ゴメンゴメン、僕が悪かったよ！」

くっ、何故か彼女にだけはたじろいでしまうクセが……………！
だが僕も一家の大黒柱、改め一家の一本刀！ ここは注意して、もっと協調性を持たせるべきだ、いざ！

「ん、どしたの。。。。」

「……………黒、イジメられてる」

「あー、アレはイジメじゃないよ。バカ二人の、ただの夫婦漫才さね」

「……………夫婦？　煌刃と黒は夫婦じゃない？」

「あたしはどっちか言ったら幼馴染み、そしてお姉キャラなのさ」

「……………分からない。也」

「おつきくなったら分かる話。ほら、食べな食べな。早くおつきくなつて黒人をメロメロにしてやれ」

「（プルプル）ふおおお……………いただきます。也」

「高美くん、私は心底嬉しいぞ！ まさか私が五年も掛けて調整した個体が、よもや彼の手に渡るとは！」

「ふん、飽き性のお前が五年も掛けるなんて、それほどに優秀な個体なのか？」

「優秀、の一言では片付けられんよ。あれこそ私が生物に求める究極体だ」

「究極体だと？」

「そうとも」

生物とは、学習する生き物だ。何百年経とうと何千年経とうとも、変わらぬ生物としての習性だ。

見たもの、聞いたもの、触れたもの、食したものの、嗅いだもの、感じたもの、考えたもの、思ったもの。

今挙げた五感を代表として、人生には人間が感じ入るべき点がそのままそのまま無限に存在している。生きている限り思考から逃げられないのと同じようなモノだ。羽化したセキレイのリストに彼女と葦牙の名前が載っていたのを見た瞬間、私は運命を信じてしまった。過学者らしくもない、非科学的な運命という言葉信じざるを得ないほどの数奇な巡り合わせだ。

「人の運命とやらは生まれる前に神が与え、そして絶対として決ま

第十四話 増加、数日後、街にて（前書き）

はい、どーん。

仕事上がりにうpですよー、良い子は寝る時間だぞーっと。

第十四話 増加、数日後、街にて

鵺^{ぬえ}

——という妖怪が存在していたらしい。昔も昔、平安時代後期の話だ。

頭は猿、胴は狸、四肢は虎、尾は蛇。幾つもの獣の入り雑じった姿をしている、らしい。

『ヒョーヒョー』という奇怪な鳴き声、一説では妖怪ではなく神の類、雷獣であるともされる。

一部ではその吐息や羽根は猛毒を持ち、触れただけで即死するほど

とされる。『鵜の声で鳴く』とはとある名のある小説では有名な例えだ。

国外のモノで例えるならば『キマイラ』が妥当だ。

何種もの生物を人為的に合成し産み出した生物、それがキマイラ。対して鵜や他の妖怪は自然に産まれた怪異、もしくは人が産み出した偶像や妄想に過ぎない。だが問題は鵜や妖怪の存在の有無などではない。

問題は何故人は鵜という『曖昧な存在を名付けたか』にある。

妖怪は意外にも、各地で見られている。四国の四十八ヶ所巡り、京都の霊園や神社、富士の樹海など。

そのどれもが昔から変わらない空想の存在だった。故に疎^{まば}ら、大きくまとまっても全く別の扱いをされる事もしばしば。至高の美女で女神ともされる人魚が、一説では人喰いとされているのがいい証拠だ。

だが、いるかどうか分からない存在に『幻の妖怪・鵜』なんて名を割り当てるなんて、非常に言葉遊びを楽しんでいるとしか思えない。だってそうだ、過去今まで鵜を目撃したなんて話は“物語の中だけでしか”聞いた事がないからだ。

他の妖怪は地方で目撃例があるのに、鵜だけに関しちや一切の目撃例が無い。

だから鵜とは『幻、もしくは空想』を意味する造語にもなりつつある、だが。

もし——生物が鵜という存在を模したら、どのような生物になるだろうか。物真似をする妖怪か、姿の見えない存在か、生物の混ざり合った化物か、それはもう色々想像が膨らむだろう。

そして僕が^{でくわ}出会した鵺とは決して化物なんかじゃなくて、妖怪なんかじゃなくて、もうどうしようもないくらいに——美少女だった。

最近は美人との出会いの場が増えている気がする。自宅でも、外でも。

それが敵であれ、味方であれ、僕は美人とよく関わり合いになる。月に数回の間隔で。

おはようございます皆さん、黒人さまの肉奴「——もといセキレイの、魅弦です。

はい、今日は早起きです。朝日の昇る、午前六時。天候は極めて晴天です。窓を開けると、朝の涼しい風が吹いてきて、それと共に気温が徐々に上がっているのを肌で感じられる、六月も末の事。

梅雨は瞬く間に過ぎていき、最近の天気は晴ればかり。心地好い事この上ないですよ。

そんな時期に、我が家もとい白羽家に新たな住人がやって来た。黒人さまの新しいセキレイです。

一人は男性、名を地天^{じてん}。少し長い金髪を結っている、ビジュアル系の方です。

もう一人は少女、茶髪の小柄な少女で、人形のような顔立ちでとても大人しい子供、名を鵯^{ぬえ}。

地天さんは私の部屋から出て、左の廊下の突き当たりに部屋を貰ったそうで、自室があるだけでも満足らしいです。家具に関しては、今度買い物に行ったときについてに買うんだとか。

鵯ちゃんは私と同室、ベッドも共用していて、今は最近ふくよかになってきた私の胸の中ですやすやと眠っています。しかしまあなんと、可愛らしい寝顔でしょうか。このままずっと抱き締めていたい程ですよ。

なのに——窓の外、白羽家の庭からなにやら気配が。気になつてしょうがないじゃないですか。

鵯ちゃんを引き離し、乱れた寝間着の浴衣の襟を直し、一階の窓から庭を眺める事にした。黒人さまは朝一に家の換気をする習慣があるので、今朝も今朝とてリビングの窓は全開だった。おかげで良く見える。

「ふっ、ふっ——ハッ！」

まあ予想とかそんな事するまでもなく、家主で私の旦那様の黒人さまでした。

活動的なスポーツシャツに短パンと、ニヒルな黒人さまが珍しく子供みtainな服装をしています。

ですがその動きは……私が過去一度も見た事の無い、初めて見る動きでした。まるで円を描くかのような、柔軟な身体の動き。しかし無駄の無い、綺麗な体捌きでした。それを数分繰り返し、最後に合掌しながらの深呼吸。それまでが一連の動作だったのか、とても深い深呼吸だった。

「……………おはよう、魅弦」

「おはようございます。気付いてたんですね、集中されてましたからてつきり気付かないものと」

「そこまで気は抜いちゃいないさ。でも珍しいね、君が早起きなんて」

「たまには、ですよ。それで黒人さま、今の動きは何ですか？」

「うん？ ああ、ちょっと復習をね」

復習、とは。質問の答えになってないじゃないですか。だが即席の変な動きでないのは確からしい。

その日その時の会話は、ひとまずそこで終わった。いや、黒人さまが一方的に終わらせてきたのだ。

『復習』、それだけ答えて、黒人さまは再び鍛練に戻られました。今度は私も見た事のある、空手の動き。それに続けてあの踊るような動きは……カポエイラでしょうか。まるで世界の武術を取り揃えているかのように、黒人さまはコロコロと型と動きを変えていきます。

そんな黒人さまを眺めていたら、いつの間にか一時間も経過、朝は七時になっていた。

となれば普通に早起きな煌刃さんは起きてくる訳で。Yシャツにジーンズと、寝辛そうな恰好の寝間着で煌刃さんは二階から降りてきた。続いて地天さんも、短パンにTシャツと若者らしい寝間着を着用していた。

それからさらに一時間ほどして鶴ちゃんが起きました。寝間着と私服として黒人さまのシャツを欲しいと言うと、黒人さまは別段躊躇う事なくシャツを数着プレゼント、着ていると彼女はご機嫌だ。

そんなこんなで、五人家族の日常が始まった――

「第二回！ 白羽家私服購入会を――開催しますツツツ！！！！！！」

「「うううイエーイツツ！！！！！！！！」」

「おおー」

「……………パチパチ（無表情）」

説明しよう！ 私服購入会とは、本来私服を持たないセキレイの彼女達の為に私服を用意しようという、主人らしい心遣いより生まれたイベントである！ M・B・エマネーカードを用いて上限額無しの買い放題、まさしく購入会である。

ようやく私服やら家具やらが手に入るという事で、地天はハイテンション。

煌刃は家具が少ないとかよく呟いてたから、まあまあ納得のノリの良さである。流石は元氣屋である。

前回は南方面に買い出しに行った……………だが結果として、敵対チームの御子上隼人とそのセキレイ・陸奥と接触してしまった。ならばこそ、二回目はダブリを避けるのと御子上一派を避けるのを兼ね

て、東方面に出掛ける事に決定した。

僕はオシャレは面倒だから、いつもの七分丈にジーンズの黒染め一色で。

魅弦は白のロングスカートに紫のカーディガン、なんかF a t eの桜みたい。中身のアレとかも含めて。

煌刃は寝間着とあまり変わらないが、デニムに黒革のブーツ、Yシヤツでカッコいい女性をイメージして。

地天には僕のお下がり。ジーンズに赤・黒ストライプのカッターとパーカー、白のスニーカー。

鶴にはとりあえず、朝一開店と同時に駆け込んだ近所のユニ。口で買ったシンプルな白のワンピースを。

形だけは普通にしておくべきだね。だってかたやダボダボのシャツに短パンだろ？

かたやゴシックっぽい服装にビジュアル系の顔立ちだろ？ ちよつとした変人の集まりじゃないか。

セキレイなんて“社会的に”異色の存在が無闇に目立ったところで、メリットなんかがある筈もない。ならばどちらかと言えば普通、より人間らしく溶け込むべきだ。セキレイはセキレイ、と割り切る葦牙もいるだろうが、僕からすればセキレイも葦牙も、結局は一緒の人間なんだ。

人と違う者は人から遠ざけられ、疎まれる――時代の常じゃないか。僕は出来る事なら、彼女達をそんな目にはあわせたくない。彼女達の主として、彼女達の友人として。

少なからず、この白羽家では人種差別なんてみみっちい事は起こさ

ない。

過去に出雲荘の大家・美哉^{みや}さんが言っていた通り、これが『来る者を拒まず』というヤツなのだろうか。今の僕の姿を父さんや母さんが見たなら何と思うだろう、たぶん僕を本人かと疑いながら涙するだろうね。

昔の僕はそう――『孤独こそが人間の美德だ』と公言しちゃう、痛い人間だったんだから。

×

×

という訳で現在東方面に出向いた我ら白羽家ご一行。午後の一時、本日は晴天なり。
で、今更なカミングアウトだが、この帝都はワリと方東西南北の面で色々と分かれている事がある。

東方面は医療関係や事業。代表格としては医療・工業共にM・B・

Ⅰの敵の氷我財閥が中心となり、纏め挙げられている。敵、と明確に分けられるのは、過去に御中がニュースにて『氷我財閥は我々のライバル企業だ。よって、同盟などは断じて有り得んよ』と明言している事からくる。

南方面は御子上財閥を中心とした、デパートやショップなどの小売・販売関係が非常に盛んである。小規模・大規模を問わず、数多の店が並び連なり、日々賑わいを見せている、活気のある街である。

西方面は主としては工業地帯。他には地方から伸びる高速道路が多数走っていて、外部から物資が持ち込まれる場合には大抵は西方面を通過する事になる。それに工業地帯とあつて住宅は少なく、暴走族の溜まり場が多数存在している事でも有名だ。

昔、中学の友人から『シメて』と頼まれて、数十人単位のチームを五、六団くらい潰した覚えがある。

最後に北方面。スーパーや郵便局、銀行など生活に最低限必要な場所は存在しているし、こちらは住宅地が集中していて、買い物・仕事の為に地下鉄が各方面に向けて多数走っているのが有名だ。佐橋皆人君や美哉さん、紫ちゃん達も揃ってこっち方面に住んでいる。

と、大まかに帝都を評価してみた。なにせ元東京だ、盛況っぷりは昔から変わらないよ。

で、今日は東方面。こちらは医療や事業ばかりなのだが、実は洋服などで一部のブランドが軒並み店を開いている事を、事前にググっているで迷わず到着。地元民の情報はやっぱり正確だ。

まずは服を購入する事にしよう、の筈なのに――

「迷子ってなんじゃそりゃああああああッッッ！！！！？？」

「……………黒、うるさい。也」

「つつか隣で叫ぶな耳が……………あー痛エ^{イデ}」

言わずにいれるか！ 自家用車を駐車場に適当に駐車して、僅か三分だぜ！？

たった三分で迷子になる二十歳の女が何処にいるよ、えエ！？ バカなの？ 煌刃バカだから死ぬの！？

「落ち着いて下さい黒人さま、なんにも誘拐されたという程でも無いんですから……………」

「いいや、あのやんちゃ娘が騒ぎを起こさない筈がない。早急に発見せねば、ろくな目に会わんぞ」

「お前絶対身内の事信頼してねえよな！？」

「……………くああ（眠）」

「くっ、已む無し……………魅弦、『眼』を使いなさい」

「ええ〜〜〜」……………やですよお」

「ほっぺにチューでどうだ！？（どや顔）」

「少々お待ちを（キリッ）」

我が家の交換条件では、僕を差し出した場合はほぼ100%勝てると大分前から調査済み。ので即実行。

で、知らない人ばかりなので解説を挟むとしよう。我が白羽家の長女、No.37・魅弦には固有能力^{レアスキル}がある。

と言うのも、地天や紫ちゃんのセキレイ・椎名のような『セキレイとしての』能力ではなく、彼女のみが持つ『特異体質』にも似た能力の事だ。前提に彼女が“弓のセキレイ”である事を添えておくと、この能力には何故か納得がいく、そんな能力。

『場所が悪い』と、魅弦は近場のビルを駆け上っていく。別段高くない、五階建ての株式のビルだ。

そんなビルの屋上を中心に、魅弦は脚を開いて深く呼吸をする。手はぶらりと下げたままで。

「……………いぬ」

すうっ………と眼を開ける。日本人特有の黒い瞳は、今はない。彼女が能力を発動する際、彼女の眼は深紅に染まる。血のような、真っ赤な眼。

この眼を彼女はカッコよく『魔眼』とか『邪眼』とか呼びたいらしいが、あまりにありふれてなんか微妙。という事で、あえてシンプルな名前を付けてみた。その名は『神の眼 《オウル・レンズ》』

と言っ。

「……………っ、くっ……………」

莫大な集中力、膨大なカロリー消費。それらを巻き込んで、彼女の能力は発動する。

『神の眼 《オウル・レンズ》』は、簡単に言えば“眼”を爆発的に強化する能力の事だ。

が——ただ眼が良くなるという訳じゃない。例えば、視力が良くなったところで動体視力が上がる訳じゃない。この能力の驚異的な点は、彼女の眼が『捉えられないモノ』が無くなるという点だ。およそ、人間に見えないモノが見えるようになる、と言えるは分かるだろうか。

紫外線、X線、γ（ガンマ）線、放射線、光の波長、電磁波、電流、音や衝撃の視覚化。

風の流れ、空気中の塵芥、物体の温度、微生物の微妙な動き、人間の動き、自動車の動き。

果ては物体の内部、人間の内臓まで、自分を中心としたありとあらゆる物体・物質・存在の全てを観測する事が出来るのだ。実験の結果、現在の最大観測範囲は全方位、上下左右問わずで約二十km。

その範疇ならば、全てを観る事が出来てしまう。

だが、全てを見ては彼女の脳が持つ訳がない。

だからまずは能力を調整し、視認する物体を絞るのだ。

対象が人間ならば疲労も馬鹿にならないが、相手がセキレイなら話は別。すぐに見つかるだろう。

イメージはクリーチャー系の洋画『プレデター』の視界に近いと本人は言う。

アレは温度差を映すが、彼女の目には通常的情景の中に異物が混ざっているように見えるのだろう。そう、ここが便利な点。視界に映すモノを自分で選択する事が可能で、それ以外は通常通り。まさしくプレデター、鉤爪は無いよ？

「ッ—— はあっ、はあっ、見つけました……………」

…………… 後方、二kmの方向です」

「ご苦労、魅弦。少し休むといい」

「い、いえ、まだ動けますからご心配なく」

ふらつと身体が傾く。ほら言わんこっちゃない、すぐに彼女の身体を抱き抱える。

魅弦をお姫様だっこし、目指すは後方二km先の迷子の二十歳の女。しかし軽いな、流石は女子。

「…………… (たまには頑張ってみるモノですねえ。役得役

得♪」

「……………チツ、ビツチが。也」

「（ガバツ！）そんな言葉どこで覚えたんですか！？」

「あー、たぶん『ウサビツチ』だろ。でググって分かったって感じ」

「あー。ググったんなら納得だね。Yahooでググれ、だよねー」

「納得しないで下さーーいッッッ!?!?!?」

第十五話 彼女の昔と、彼女の今（前書き）

煌刃の過去の話を書いてみた。作者が『書いてみた』ってのも変だけれど、まあどぞ。

第十五話 彼女の昔と、彼女の今

ちよつと昔の話だ。アレはそう、今から二年ほど前の事で、あたしがこの帝都に来る前と後の話。

帝都に来る前の話と来れば、そこはあたしらの実家になる、かみくらじま神座島の事に他ならない。

あたしのNo. は後半の90。だから、調整を受けたのもそれなりに後の方だった。

で、あたしは調整者から武器を手渡され、身体の調整を施され、そのまま帝都にぱーんと放り出された。なんか藪から棒だけど、実際にこんな感じなんだよね、あたしの調整者は。

それでも人並みの常識は教えられたし、人間の社会での生活もある程度は理解出来た。

この世界は基本にお金で動いていて、多少汚ならしかろうとそれが現実の人間の生き方なんだと、割り切っていた。

だからあたしは普通に生きる事にした。鵲鴿計画がどうした、そんなモノ知った事が。あたしは自由に、セキレイとしてではなく“一人の人間の煌刃”として生きるんだと、胸に誓っていた。

そんな風に生活を始めて約一ヶ月———そこであたしは、あたしの人生に関わる最大の出会いをした。それはあたしが今後、姉として慕う二人のセキレイとの出会いである。

「光ー、響ー！」

「ん？」

「アレって……………まさか煌刃！？」

再会は、別に大した事はない街中での事だった。二人は、何故かウイトレスっぽい服を着ていた。

両手には買い物袋をぶら下げて、買い物の帰りのようである。だがウェイトレスだ、たぶんメイドだ。

セキレイNO・11・光。^{ひかり}響の双子の姉で、能力は雷撃。勝ち気な姉貴肌の持ち主。

セキレイNO・12・響。^{ひびき}光の双子の妹で、大人しいながらも芯の通った心の持ち主。

二人はあたしの義姉妹。^{ねえちゃん}帝都に出てきたばかりの頃のあたしに良くしてくれた、怖優しいセキレイである。

「いやー、久しぶりだね二人とも！ 元気だった!？」

「アンタこそ元気みたいね。で、その様子だと葦牙は……」

……」

「おう！ 一発かましたぜ、ぶちゅーつと!」

「もう、はしたないよ煌刃。女の子なんだからもつと慎みを……
…って、元気つ子な煌刃には無駄か」

「うつさいわね、響こそ瀬尾の兄ちゃんとはどーなのよ？ いい加減光を出し抜いたのかしら？」

「そ、それは関係ないでしょ！ それに瀬尾はあたしだけのモノじゃなくて、あたしと光のモノなの」

まあなんと仲の良い姉妹だ。セキレイは本来闘い合う存在なのに、そんな気は微塵も無いらしい。

それに瀬尾の兄ちゃんも『俺の女はコイツら二人だ。どっちか欠けたら意味ねえだろ?』とかカッコいい事言ってたけど、聞き方間違えたらバカにしているみたいなんだよね!。だから二人が即座に兄ちゃんを黒焦げにしてたし。

二人で一人のセキレイ。双子のセキレイ、光と響。二人揃って雷撃の能力の使い手。二人とも同じ葦牙。

二人はいつも二人だし、あの時も二人揃ってあたしと出会った。たぶん、ずっと二人は一緒なんだろう。

「アレ、でもアンタ達って住んでんの北方面じゃなかったっけ。なんで東に?」

「そ、それはその……………色々あんのよ、色々!」

「色々?」

「大人の事情よ、だからあんまり聞かないでね……………」

スーパーの買い物袋、遠出、街中……………ああ、安売り目当てなんだ。主婦業、ご苦労さまです。

「ちよつ、そんな目で見てんじゃねーよ! 別に今日こっちのスーパーで一円セールがあるとかじゃねーんだよ! 肉がタイムセール

で198だとかじゃなくてだな、アタシらはただ……」

「光……、なんか言っけて哀しいよお、やめよおよお……」

「にやはははは……でもさ、やっぱあたしもアンタ達も変わんないね。あん時から」

「「……………」」

人間らしく生きる、それがあたしこと、セキレイNo.90・煌刃が望む生き方だった。

だが人間以上の力にこの無駄に突出した容姿、それに何故か手放せないこの蛇腹剣^{へびはらばり}。

これが、あたしがあくまでセキレイである事の証明に他ならないモノだった。どう足掻いたところで、どう望み抗ったところで無駄なんだと、そう言葉なき意志で告げているのだ。だが抗った、無駄に

抗った。

「痛ッ！」

.....クソッ、なんでこんなに出会すのさ...

.....！」

行く先行く先の殆ど、確率で言えば約八割で、あたしは他の個体に
出会^{でくわ}していた。

まるで神様に『お前の逃げ場、ねーから！（笑）』と言われてるよ
うな気がしていた。

だが全身ズタボロになりながらも、あたしはセキレイと闘う事を善
しとはしなかった。だってそれは、当時のあたしに言わせれば“敗
けを認めた”のと変わらなかったからだ。今では全く価値観も考え
方も別人だけど。

マネーカードだけは手放さず、住居は固定ではなくビジネスホテル
を転々として。

食事は外食のみ、コンビニからファミレスからあちこちを巡った。
寝床は最悪野宿をした、変態が寄って集ってきた事もあったなあ...

.....（涙）

面倒な時は、店の中でバツタリ相対しちまった時さ。ありや逃げら
れないし、闘っても店に迷惑がかかちまう。そうなたら出入り
禁止どころじゃない。だからあたしはまず、人前も気にせずに土下
座をした。

「いやっ、ちょっ、なにしてんの!？」

「此処じゃ闘えないし、あたしは闘うつつもりはない.....今日は

見逃してくれ」

それが、あたしの常套手段になっていた。出会うヤツ出会うヤツ全てに、一度はこうしたモンだ。

平謝りでその場をやり過ごす。惨めとでも不様とでも、なんとも言え。闘わずに済むなら易いモンさ。

けど一人、いや。一組だけ、これが通じない相手がいた――
――そう、あの双子だ。

「「雷^{いかずち}ツツッ！……！！！」」

「うひゃあツツッ！……！！？？」

最初に頭を下げた、のだが――何故かキレられた。かなり本気で。

二人はどうやら雷の能力者らしく、バンバンビリビリ雷を撃ってくる。

コンクリートは砕けて弾け飛び、その破片も周囲の空気も微妙に帯電してたり。さっきから静電気がチクチクして痛いなの、攻撃は当たってないから痛くはない。雷を避けながら、あたしは叫ぶ。

「ちよつ、あたしは闘いたくないって言ってんのよ!? なんで雷攻撃しゅ」

「「黙^{だま}らっしや雷^{いかずち}イイイイイ……ッッッ!……!……!」

「ぎゃあああああぁーッッッ!……!?……?」

モロに直撃。なんか背負ったままの蛇腹剣が避雷針の代わりに以下略。あー痺れる……

「おいコラ! 闘いたくないだぁ!」

「そ、そうひょ! なんは悪ひの!」

「アンタさぁ、じゃななんで外に出てきたの? こっちに来るのは基本、葦牙に会いたいヤツか闘いたがつてるヤツばかりだよ? それともないに此^こ方^ちに來たタイプ?」

「…………… (フルフル) 」

「じゃあなんで?」

ああ、この赤い方の姉ちゃんは優しいなあ……………なんか話しやすい。

黒い方の姉ちゃんは歯をギリギリ鳴らして、露骨にイライラを表してるし——で、告白タイム。

「普通に暮らしたいだけエ！！？？？」

「こ、声大きいって……………あたしってなんか変なの？」

路地裏万歳。人がいないってマジ有難いよね、騒いでもあんまり何も言われないから。

涙目に尻からへたり込むあたしを、二人は愕然・啞然の表情で見下ろしていた。怒ってるってゆーより、なんか珍獣を見るかのような呆れた目をしている。互いにぱちくりぱちくりと、大きく瞬きをする。

「普通にとってアンタ、それってつまり『人間みたいに生きたい』って事？」

「（コクコク！）」

「アンタさあ……………バツカじゃねーの！？ この計画がどーゆーのか、アンタも聞いてんだろ！」

セキレイいかく

鵜鴒計画、M・B・Iが秘密裏に行くバトルロワイアル形式の闘い

！一〇八羽のセキレイは最後の一羽になるまで闘わなきゃならない、アタシらもアンタも！そこに“人間みたく生きる”なんて選

沢枝は無いんだよ！」

「ちよつと光……………」

「分かつてる……………でもあたしは、それでもあたしは。人間みたくに生きてみたいんだ」

「でもソレ、たぶん普通に闘うより辛いよ？」

「それは分かつてる、だからあたしは意地でも闘わない。あたしは“闘わないセキレイ”だ」

それだけが、いまのあたしの望み。強くななくていい、ただ自由^{自由}に生きてみたいだけ。

セキレイとかM・B・Iとか、帝都とかそんな縛りもなく。空を舞い、流れる風に乗り、自由に飛ぶ鳥のように。

叶うなら、あたしは葦^{あしかひ}牙にも会ってみたい。あたし達セキレイが心の中で、セキレイとしての本能で求める、その存在を。一目、見てみたいのだ。自分の葦^{あしかひ}牙が、どんな人間なのかを。

結果が絶望だったとしても、あたしは受け入れる覚悟がある。受け入れて、バネにして、前へと進む。現実を受け止めて、真っ向から立ち向かっていく。それが、人間らしく生きるって事だと思うから。

「……………なんか癪^{シヤク}だけど、それなりに覚悟はあるみたいだね。コイツ」

「どうする、光？ 悪い気するけど、倒す？」

「いや……あたしらで、コイツを守る」

「……はい？」

「あっひゃっひゃっひゃ、やっぱ兄ちゃんは今でもヒモか！ お疲れさま二人ともオ……！」

「否定できない自分が悲しい………」

「まったく、だからさっさと就職しろっつってのに！ あのエセ浪人がああ……！！！」

二人と話したいのもあるし、ちょっと走っちゃったから疲れた。てな訳で、休憩がてらアイスを食べる。

商店街にあったお菓子屋で適当にアイスを購入、その手前のベンチで、三人座って食べるしてるなう。だが流石に美女三人とあつてか、道行く一般人はこっちに釘付け。若い連中はナンパすらも考えているようだ。

話といつても『最近瀬尾の兄ちゃんどう？』とか『あんたの葦牙どんなヤツ？』とか、いわゆる恋バナ。お互いの葦牙の自慢大会といつてもいい。兄ちゃんに自慢できるトコなんかないだろうけど。

「でも話聞いてると、いい葦牙みたいだね。料理もできるんだって？」

「そう、これがメチャ美味しいんだって！ ジャンルは問わず、創作料理も余裕で作るし、炊事洗濯も性格もルックスも完璧、文句なしのパーフェクト葦牙だよ。ヲタクって点を除けば。でもそれも個性かねえ」

「あーあ。家の瀬尾^{ウチ}にも、そんな風になんか特徴欲しいなー……結局アタシらも、あんたが居候してる間はアンタに料理任せてたし。一人暮らししてたから、出来ない訳じゃないって言ってたけど」

「いんやあー、まさかあそこでの生活スキルが後に役立つとは思わなかったよ！ ハッハッハッハア！」

あたしが二人に保護されてからは、あたしは二人とその葦牙、瀬尾^{せお}
薫^{かある}の自宅に厄介になつていた。

期間にしてみれば二ヶ月ほどだったけど、いろんな意味で充実した

二ヶ月でもあったと振り返る。

ただもうそれは頻繁に、あたしは三人にコキ使われてたからなんだろうけど、家事スキルが異常に鍛えられてしまっていた。ビジネスホテル泊まりで磨いた他人任せな癖も、三日で直した。コンビニや料理店巡りで鍛えた味覚や知識を活かし、失敗という経験を重ねて美味しい料理を作れた。

社会的な事で教えられた事もたくさんあった、人間としての普通な生き方を教えられた。間違ったら怒ってくれたし、頑張ったら褒めてくれた。あたしは、二人に育てられたと自信を持って言える。そして今更でも、こう言いたい。

「……………ありがとう。光、響」

「……………はあ????」

「あたしの姉ちゃんできてくれて、ありがとう」

「……………バツ、バカか！　いまさらなんだよバカ煌刃！
もっと早くに気付け！」

「（プスッ。光、照れてるの隠せてないよ……………（笑））
ハア……………でも煌刃も、随分大人になったね。あたし達はもう卒業——お別れかな」

「そうだね……………煌刃、アンタももう一人前のセキレイなんだ。
その時は……………分かってるね？」

「んー、分かってるけど……出来れば闘いたくないかな。あたしは二人の事好きだし」

「わがまま（笑）」

「そだね。あたしはわがままだ……そろそろ行くよ。あたしの旦那を待たせてるから」

「おう、行つてらっしゃい。またな」

「またね。今度会ったら一緒になにか食べよ」

「うん、その時は瀬尾の兄ちゃんも一緒にね。じゃ——バイバイ」

「煌刃やーい！」

「煌刃さーん！」

「煌刃ー！」

「（クルクルキョロキョロ）……………いない。也」

全く、家の人間はどうしてこう迷惑をかけたがるかなあ！？ 迷惑
つてゆーか面倒を！

駐車場よりさらに2km先に到着、しかし近辺には煌刃の姿は見当
たらない。近くの人にも聞いたが、これもハズレ。影も形も無い。
探し始めてもう二十分は経っているだろうか、走り回りっぱなしだ
から流石に疲れてきたよ……………

「おおおーーい、黒人ーーツツ！……………！」

「あれは……………煌刃さんです、無事です！」

「んだよ、誘拐とか戦闘に巻き込まれたとかじゃねーのかよ……………
……………」

「……………元気なまま。也」

「煌刃……………」

「くーろとー……………」

「ドラマが………ドラマがねえええええええッッ！！！」

「ビクウツツ！！！！？？？」

僕の本気の叫びに、全員が硬直した。走り寄っていた煌刃すらも、ぴたりと止まった。

「なんスか、フツに再会ってなんスか！？　ありえないんですけど、マジありえないんですけどオ！！！！？？？」

「テーマはギャル男かツツツ……！！！！！！」

「ちよつ、ちよつと、ちよつとちよつと！　煌刃ちゃんよオ、いくらなんでもココはさあ！」

「……ゴメン、心配かけた」

「気にしないの。僕は君の事信じてたからね。おかえり」

みたいなテンプレでもいいからドラマ作っとくべきっしょ！　なのにナニそのフツーな帰り方、デイスってんの！？　マジ情弱なんですけど、マジKYなんですけど、マジありえないんすけどオ！！！！「????」

「だから誰なんですか貴方は！？　もしかしてキャラ入ってます！？」

「……………黒、なんかキモい。也」

「ほら、チビッコにもキモいって言われてますからやめて下さい！
流石に恥ずかしいです！」

「そんな事知らねーよ、アイドンノウ！　煌刃、もっかい走って来い！　今度は僕の脚本通りに！」

「……………ぷっ」

「あぁん？？？」

「ぶくくっ……………あーいや、何でもない。OK、もっかい走って来るわ」

「よしレッシンゴー！」

「よくやるわ……………一抜けた、俺しーらね。コンビニでアイスでも食うか」

「……………ボクも食べる。也」

「あ、私もお願いします。バナナ味を希望です」

「アレ、か……………噂の『セキレイ殺しの葦牙』は」

「その様ですね、とてもそうは見えませんが……………一応、プロフィールです。」

都内在住、白羽黒人。二十歳のフリーター、男性。帝都タワー近辺

に豪邸を所有し、両親は海外でM・B・Iの系列に勤務。学歴は中卒で、高校には行つてませんが大卒レベルの学力あり、だそうです。現在保有しているセキレイはNo・37・魅弦、No・90・煌刃、No・100・地天、No・49・鶴の四羽。

格闘技をたしなみ、セキレイとの戦闘では肉弾戦を基本としています
——以上です」

なるほど、確かにある意味で曰く付きの葦牙だ。『セキレイを倒せる』だなんて、噂だろうと思つていたが………存外本当かも知れないな。こんなビルの上から覗き見のような事をしていて、正解だよ。

何故なら——彼の傍にいるセキレイの一羽が、くると此方に振り返る。

巫女服を着たセキレイは『迷う事なく』此方を向き、私としっかり目線が合った。

私が見えているのか、彼女には。彼女の眼は血のように深紅に染まつていて、不意に此方にニコリと笑いかけてきた。そんな彼女に、私は背筋に嫌なモノが蠢くのを感じてしまった。

「面白いな………試してみるか」

「………氷我様？」
ひが

「柿崎、連絡だ………No・10に彼らを襲撃させる。腕試し程度で構わないが、No・10よりも弱ければ全員倒しても構わない——そう伝えろ」

「^{かしこ}畏まりました」

さあ、どう闘うのか見せて貰うとしようか。
空想と理想を抱いた子供^{あしかひ}と、現実を生きる化物^{セキレイ}と
どちらが強いのか。

第十六話 三種肉の為に（前書き）

タイトルに意味は——あんまり無いッッッ……！！！！！！
書き上げホヤホヤ、誤字脱字報告受け付けなう……………

言ってて哀しいや（涙）

第十六話 三種肉の為に

——今日も一人、名も知らぬセキレイを倒した。彼女は短刀を使っていた。
だが倒した——いや、殺した。それほどに私は彼女を完膚無きまでに叩きのめした。

私としては、心底不快ではある。セキレイとして名乗る事も許されず、助けを求める事も出来ず、相手に“逃げろ”と告げる事も出来ない。ただ言われるままに、あの男の言う通りに動く事しか出来ないのだ、今の私は。

プルルルル、プルルルル……………ピッ。

「……………もしもし」

『No.10、ご苦勞様です。そして次の依頼ですが———今か

ら送る写真の葦牙を襲撃しなさい』

「は？」

何を言っているんだ、この男——あの男の秘書、柿崎とか言っ
たっけ——は。

『葦牙を襲撃しろ』だって？ 何を馬鹿な事を……葦牙を襲う
のはルールで禁止されている筈だ。
それが最初に脳裏に浮かび、次に頭に浮かんだのはコイツらがある
種の『無法者』であるという事だった。彼らはそう、鵲鴿計画に非
常に否定的なのだ。M・B・I社長がいくらルールを提示しようと
彼らはそれを平然と破るだろう。しかも、最悪な形で。

『ああ、拒否権があるなどとは思わないように。貴女にはこれ以外
の選択肢が無いのですから』

「……………分かってる」

『よろしい。では写真を送ります』

それが最後、柿崎からの通話は切れた。そして間もなく、一通のメ
ールが届いた。件名は『襲撃対象画像、及び個人情報』。苛立ちを
抑え、メールを開く。文章はそれほど長くは書かれていなかった。
だがその写真を見て——私は驚愕した。

「ウソ……………これって」

『襲撃対象の名前は「白羽黒人」^{しろはくじん}、二十歳の青年。現在四羽のセキレイを保有。
二羽は物理戦闘系、二羽は能力系のセキレイと確認済み。可能ならばセキレイも倒して下さい。以上』

「白羽君……………それに——
魅弦^{ミッシェー}」

「な、ん……………だと——!?」

「お？ どしたの黒人」

「これを見たまえよワトソン君」

「誰がワトソンだ誰が。ナニナニ……………品数超・限定！ 豚、牛、鳥、各種300gが——百円！？」

そう、百円だ。夢のワンコイン、絶対の銀貨、小学生のライフライン。それこそが百円！

300gって言えばそれなりの量だ。お一人様各種2パックまでだから、好きな肉を600g買えるという計算になる。そう、“お一人様”だ———今ほど家族が多い事を喜ばしく思った事はないよ。

「煌刃、各員招集！ これより北に出向くぞ！」

「あ、ゴメン。あたし今日知り合いと食事の約束してるから」

「ワッツ！！！？？？」

「あ、あその他の連中……………魅弦達は今日は南に買い物に行ってるって。さっきメールで。南は行った事無いからって、眼の利く魅弦が案内で一緒に。帰り遅くなるってさ」

「ノオオオオオオオオオオツツ！！！！！！！！」

バツ、バカなツ！ この僕の完璧な作戦が…………… たった二回のセリフで打ち碎かれた！？

「そつ、その食事は日程ずらしたりは出来ないのかな！？」

「あー、ちよつとムリ。向こうもあたしも予定噛み合わなくてさ、今日は偶然噛み合った日なんだ。だからゴメン、今日は勘弁してくんないかな？ あ、次は絶対一緒に行くからさ！」

「あ、あ、ああ…………… そうね、そんな日もあるよね。女の子だし、人間なものね。そうね、あるよね…………… うん、仕方ない。ならあんまり気は進まないけど、彼を頼るとしよう」

「彼？ なに、アンタの友達かなんか？」

「知合以上、怨敵未満。つてところかな」

×

×

『で、僕に声かけたって訳か』

「いやあゝゝゝ、昼間ならホストは暇かなーって思ってたさあ？」

『生憎だけど、今日は予定あるんだ。悪いね』

ドタツ、と身体ごと床に倒れ込む。まさかこうも完璧に敗北するとは……………

呪いの魔方陣でも描いて呪ってやろうか。エロイム・エッサイム、我は求め——なんだっけ。

『ああ、それとこれは忠告だけど。最近あちこちで名乗らないセキレイが出てるらしいんだ』

「名乗らないセキレイ？　なにそれ美味しいの？」

『姿は見えない、声も性別も分からない。通称「比礼ひれのセキレイ」

——既に三羽が倒されてるから、実力者なのは確かなんだ。君は葦牙としては一、二を争うほど有名だから、気をつけてくれ。もし何かあれば呼んでくれ、すぐに行くよ』

わあ、やっぱりイケメンだこの人。惚れちゃいそうだよコンチクショウ！

「ご忠告痛み入る。肝に命じとくよ」

『うん。じゃあ切るね、また今度』

「焰君……………サラダバー…ッッッ!!!!!!!!!!」

×

×

「おお、見た目は普通なのに人の数が少ない」

北方面にある、極々普通のスーパー。大手チェーンでもなければ、有名という訳でもない。

だが品質と安さは他のスーパーを抜いており、商品には抜群の鮮度と品質、安さを追求した地元民ご愛好のスーパーである。安く仕入れ、安く売る——それで毎月黒字なんだから、営業としては文句無しなんだろうね。小売店の理想形とも言えるそこに、僕は突入した。

「さて、お肉売り場は……………ぐっツツツ！！！！……」

漬物・豆腐コーナー、角を曲がった瞬間——霸氣が僕を襲った。

気圧された……………だがそれはただの錯覚だと気づき、落ち着いて冷静に状況を確認する。

認識した——そこは最早一介のスーパーなどではなく、欲望渦巻く『肉の戦場』と化していたのだ。何十人という主婦が散り散りに棚を見ている。だがその意識は全て、お肉売り場の側にあるスイングドアに注がれていた。

意識を越えてそれは霸氣と化し、5mほどのお肉売り場はまるで死合いの様な空気を漂わせていた。

「（タイムセールまではあと十分はある……………なら今のうちに）」

今日の夕食は肉祭り。ならばサンチュやコールスローは常備しなければ。

野菜売り場に早足に向かい、目標を速やかにカゴに投入。続いてカットカボチャにタマネギ、ジャガイモ、ピーマン。焼肉の王道たる野菜達を次々にカゴに投入していく。ジャガイモは『ジャガバター』の為だ、他に意味はない！

野菜を確保し終わると、時間は一瞬に過ぎ去っていた。あと一分……………早足に再びお肉売り場に向かうと、既にスイングドアの前には“ある程度”邪魔にならないように主婦達が詰め寄っていた。だがその目は主婦ではなく、戦士のそれに近いと僕は感じた。

そして間も無く開幕――白衣の店員が姿を現した。台車に肉を乗せて。

それを確認すると、僕はカゴを邪魔にならない端の方へ置いて手ぶらで腰を落として構える。

「ではこれよりタイムセール、タイムセールを開始致します！ 本日
のタイムセールはなんと驚愕！ 300gのお肉が百円、なんと
百円です！ 品数はごく僅かですので、お早めにお立ち寄り下さい
ませ！ それではタイムセール開始！」

「（いざ――GO!）」

店員がマイクで放送すると同時。僕は真っ正面、二m先にある台車
に向かって駆け出した。

僕は自分が人より桁外れな筋力を持ち合わせている事を自負してい
る。だから負ける気は無かった。

――そう、人間以上の速度で駆け出した僕と、主婦が
並ぶまでは。

「（そんな……………そんな馬鹿な事が！？）」

「ハアッ！」

「ぐふっ！」

嫌味つたらしく二人のパンチパーマ・主婦が笑い、僕よりも速く台車に辿り着いた。

そして気付いた、二人だけではない。他の主婦全員が一斉に、僕より速く台車に駆け寄っていたのを。

全員スタートは同時だった。つまりこの主婦達は、僕と同じタイミングでありながらも僕よりも遥かに速く前に進んだと。そういう事になる。そして僕は出遅れた、それはつまり——完全なる敗北を意味する。

「馬鹿な……………僕が、負けた？」

蠢く主婦達が去った後には、何も乗っていない台車だけが残されていた。

それを見た瞬間、胸の内に何かが溢れ出した——これが、悔しさなのか。

「くっ、読み違えた！ 彼女達は主婦なんかじゃない、彼女達はウォーマザー——戦闘主婦だったんだ！」

戦闘主婦^{ウォーマザー}——それはあらゆる時代において、武術の達人に近いとされる存在。

武術の達人が極めるのが武術であるならば、主婦が極めるのは主婦業。どちらもその一点を極める。

万人を退け、欲する物を奪い合う『買い物』。武術の毎日の鍛練にも似た『家事』。世界を相手取るよりも遥かに険しい道程^{みちのり}『育児』、十数年の月日を掛け、それらを極めた者だけが得られる絶対にして究極の称号。それこそが戦闘主婦^{ウォーマザー}なのである！

「（と、御託を並べても負けは負けなんだよなあ……………とほほ。恐るべし戦闘主婦^{ウォーマザー}）」

ちよんちよん。

「うん???」

「あの……、お肉要ります?」

振り返るとそこには女神様がいた——じゃなくて。

「君は確か出雲荘^{いずもやうす}の……………結ちゃんだっけ?」

「はい！ N o . 8 8 ・ 結、拳系です！ お久しぶりです、白羽さん！」

出雲莊ではミニスカの巫女服だったから一瞬分からなかった。^{アッチ}

今の彼女はフリルの多いピンクのウェイトレスの格好をしている、手にはカゴいっぱい野菜や調味料やら。そして肉が何故か多めに入っている。牛豚鶏、三種類がそれぞれ六パックずつ。

「結、頑張り過ぎてお肉たくさん取りすぎちゃったんです。でもお返ししようにもどうしたらーって考えてたら、白羽さんが丁度いたんです」

あの死地を潜り抜けた、だって………これが女子力なのか。どう足掻いても男子でしかない僕には、とても辿り着けぬ境地だと魂で悟る。

「なあるほど。頑張り過ぎて、か………頑張るのはいい事だ。でもホントに貰っていいの？」

「はい！ お一人様つーぱつくまで、ですから。ルールは守らないと！」

生真面目な子やなあ………お兄ちゃん、清纯過ぎて泣きそうやでホンマに。

「結——ッッッ！——！！！！！！」

ギューイイイイイイイッッッ！——！！！！！！ と、全速力ダッシュしてきたのは金髪の……… 確か月海ちゃんだったかな、結ちゃんと同じ青いウェイトレス服を着ていた。手には結ちゃんと同じくエコバッグが。どうやら結ちゃんを追いかけきたらしい。

「どうじゃ、お肉は確保したのか！？」

「バツチリです！ 鳥さん豚さん牛さんひとはつくずつで、ちょっと余分に取りすぎちゃいました」

「ならば良い。時間ギリギリじゃったから、体力バカの汝に先に行かせて正解じゃったの、くわばらくわばらのじゃ。 ……………

………で、汝は確^{なれ}か篝の知り合いの」

「白羽さんです。お肉余っちゃったから、お裾分けしてるんですよ」

「なるほどの、まあ良い。では吾^{われ}らは速^{はや}う帰るとするか、大家殿が待っておる」

「あ、はい。それじゃ白羽さん、さようならです！」

「うん、お肉ありがとう。今度お礼するねー！」

結ちゃんが先に色々買うものを取っていたのか、店内を周りはせずにそのまま帰って行った。

僕もお肉が手に入ったから用は済んだ。ならさっさと帰って夕食の仕度をせねばなるまいて。

そして各種2パック、という点でお気付きだろうが……僕は一人で買えない量のお肉を買っている。豚2パック、鶏2パック、牛2パックといった具合にだ。何故かって？ 世の中には変装・女装という言葉があるのを知らないのかね。恥を忍んでやった甲斐が……あつたというモノオ！！！！！！ by 仮面の人

今日は歩きたい気分だから、わざわざ徒歩三十分の道のりをマジで徒歩で来ちゃった。しかし疲れない、疲労を感じる訳がない。そんな風に歩き続け、丁度北区を出ようかという時の事だった。

なにやら、頭上から落ちてくるモノがある。

それは白い布で覆われていて全貌は見えない。

が、地上に落下する際に身を翻していたからおそらくは人間——セキレイである。まるで正体を隠す為に身体を覆うその布は、まるで魚介類の持つ鰭ヒレのよう。いや、ここ比礼ひれと言い換えるべきか。そう、そして思い出したのは焰君との通話内容。『正体不明、通称「比礼のセキレイ」』。

——まさしくアレではないか。よもや話を聞いた当日

に出会すとは、我ながら不運なモノよ。

「……………どちら様かな。僕の知り合いに、君みたいな不審者はいない筈だけど？」

「……………先に言っておく——ゴメン」

その一言で十分だった。たった一言で、僕は彼女の意味と目的を理解する。

予備で貰ったビニールを下敷きに、重い物袋を電柱の元に置いておく。そして数度の深呼吸。

「虚刀流想像者、白羽黒人——を受けて断とう」

「……………」

彼女は言葉もなく戦闘を始めた。初手は比礼による面攻撃。

無論ただのヒラヒラだなんて訳がない、数十kgの質量を持った布の壁が僕に迫る。

……………いやあ、今日はツイてる。まさか気まぐれに持ち出した“コレ”が役立つとは。

ズオオツツツ！……………！ と、僕の“得物”で比礼を斬り裂いた。

「ツツツ！！？！？」

突然の事態に彼女は比礼を引き戻し、その元凶を確かめんと僕を凝視する。

顔は見えないが、その視線が僕の手に注がれているのはいやほど分かる。

僕が担うのは一振りの日本刀。昔も昔、両親が何処かの誰かに頼んで作ってもらった逸品。だが僕には未だに、当時の両親が僕の趣味を見越して作らせたとは思えないのだ。そしてそれ以上に、この刀を作る人間がいた事に心底感銘を受け、心底驚愕しているのだ。だれが作ったのか、今でも分からない。だがこれは完璧に再現されている、空想が現実になった証拠。

——この薄く脆い刀。針のような刀。

向こう側が透けて見えるほどに薄く。

振るうだけで粉々に砕けそうなほどに脆く。

そして針のように細く——故に美しいこの刀。

「刀……………なのか？」

「そう、刀だ。僕の刀だ——だから今日は少し名乗りを換えよう」

服の内側、背中から右股^{みぎもも}に掛けて刺すように身体に隠していたこの刀。

比礼が迫る瞬間に左踵で鞘を小突いて鞘ごと刀を抜き出し、一瞬で抜刀。そして比礼をバラバラに斬り裂いた。薄い刀を横合いに構え、鞘を左手に逆手に握る。キザったらしい柔和な笑みを浮かべながら。

「全刀流想像者、白羽黒人——僕に、ときめいてもら
うよ」

第十七話 時には昔の話を（前書き）

いつかは語られる、型無（刀）き物語

第十七話 時には昔の話を

「いやあ~~~~、アンタらが物覚え良くて助かるわあ~~~~」

「一応“居候”だからな、家事の一つや二つは手伝わにゃあよ」

「……………家事、嫁の仕事。也」

「おつ、言っねえ~~~~。じゃあ鵜には料理教えてやるよ。おいで」

「（地天を見て）……………むふー（鼻息）」

「（だから何だっただよ……………アホらし）」

わあ~~~~、皆さん元気に家事をしますね（棒読み）。人手があると速さも段違いですよ。

そんな中、私はリビングのソファに腰掛けて茶を啜ってます。だって家事が破滅的に苦手ですから。

手伝えは十中八九、手伝いではなく荒らしになってしまいますから、下手に手を出したくないんですよハイ。買い物や洗濯干しなら出るんですが、掃除や料理や洗濯はデメリットしかありませんから無理ですし。

「（と言うより、皆さん予定が無くなったんですよ。黒人さまには大変…………——あんまり悪くない事をしてしまいました。後で謝っておきましょう）」

今日の私の予定は、地天さんと鵜ちゃんに南方面の洋服店を案内する——予定でした。

が。地天さんのセンスに来るモノが無く、鵜ちゃんも同様で一気に冷めたらしく、甘いものを手当たり次第に食べてから帰って来ました。お土産に葛餅くずもちを買って冷蔵庫で冷やしてあります。

煌刃さんも同様。なんでもお食事の予定だったそうなのですが、相手の方が用事で来れなくなったらしいので帰って来たそうです。なんだか寂しそうにもしていましたが、すぐに立ち直ってましたね。

で肝心な黒人さまは現在北方面——おねえさま美哉みさのいる地区に出向いているそうです。

なんでも『肉祭り』を開催する為に、超・特売のスーパーに行ったとか。しかも歩いて走って。私達が着いて行けないと分かるや否や、友達の方に連絡を取っていらしいです。そこまでするのか、と聞くのは野暮だ。あの人は『家事サイコー！』と素で言っちゃう

人ですから。

「……………友達、ですか」

「なに、魅弦。アンタ友達いないの？」

「います……………——いえ、いませんね。友達と言うよりは、家族。親戚の方がしつくり来ます」

「へえ、それって誰よ？ 聞かせてよ、黒人みたくイケメンなワケ？」

「そうですね、一人はイケメンです。後の四人は女性、まあ言うまでもありませんが全員セキレイです。これは随分と昔の話なんですが……………今からそう、八年近く前の話ですね」

これはそう――？ 37・魅弦が葦牙・白羽黒人と出会
う、約八年前の出来事。場所はセキレイ達の実家、ではないが生家、
でもない場所。名を『神座島』^{かみくらしま}。洋上にどういう訳か、地学的にあ
りえない隆起で現れた謎の島。当然の如く、この島は出現してから
十年たった2020年であつても地図には表記されていない。言っ
てしまえば幻の孤島、まさに神の座す島である。

その神座島には、とある研究施設が建設されていた。

その島の中心には座すかのように、一隻の巨大な舟が座礁していた。
とはいっても、漁船や船舶などでは断じてない。第一、そんな都合
よく船が島の中央に打ち上げられる事など、万に一つもないだろう。
形状にしてSF、存在にしてアニメの如し。“宇宙船”という呼び
名こそが相応しいその船を覆い隠すかのように建設された、巨大な
施設。そんな施設の中で、ドラマは繰り広げられていた。

「やーいひつかかったー！ー！風花のバーカア！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」
^{ねえちゃん}

「コオラ待ちなさいこのガキンチョオ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

すばしっこく廊下を駆け回る少女。長く伸びた髪は膝よりも丈のあ
る、キレイな黒髪だ。

それを追いかけるのは、成熟した豊満な胸の女性。少女同様に長い
黒髪で、それに合わせてか服も黒づくめにしてある。だが女性は大人
らしからぬ形相で、少女を“本気で”追いかけていた。

だが角を右に曲がると、其処にいた筈の少女は姿を消していた。さ
らに走るが、その先には三方へと伸びる十字路がある。その壁全て

に赤ペンで『こつちだよ〜ん』と挑発の言葉が書き込まれていた。

「あんのガキンチヨ何処行つたのよ……………すばしっこさだけはセキレイーなんじゃないの!？」

「おやおや、かぜはな風花たんどうしたですか？」

その後方から、なんともゆったりとした歩調で歩み寄る、ナイスバディな女性がいた。

茶色とオレンジ橙色の中間くらいの明るさ、そう例えられる長髪。それを左右三つ編みにした、知的な女性。手にはノートパソコン、風花と同じ黒装束、そしてメガネ。どう見ても非運動系の人間である。

「まつ松……………ちよつと聞いてよ! あの子ビッコ、また私のお酒に悪戯したのよ!？」

「ハア……………今度は何入れられたですか? 前は確か一升瓶の日本酒にクエン酸500gでしたっけ?」

「今度は缶ビールにどうやってか、バカみたいにカフェインを混ぜてたのよ。おかげで今もちよつと舌が麻痺して……………ガキンチヨめ、見つけたらあのビール飲ませてやるわ!」

「風花たんもなかなかどうしてあの子に遊ばれてますですねえ。かいう私も……………『また』パソコンにちょちよいと悪戯されておつむに来てるですが(怒)」

ふふふ、と黒い笑みを浮かべる。松は割と大人しい方なのだが、実際に動くとなると一番面倒極まりない人間でもある。如何せん、周囲への迷惑などを一切考えない事ばかりしでかすからだ。

風花もその被害を被った事がある。あれは巻き込むというレベルを超えて、狙ってるんじゃないかというくらいに派手にやらかしていた。最終的に“彼女”が本気で怒ってようやく落ち着いたという逸話すらある。

「アンタも同じ目にあってるって訳ね…………でもなんでか、探してる間は怒り心頭なんだけど、見つけたら見つけたで怒る気にならないのよねえ。そこが不思議ってゆーか何てゆーか…………」

「松達も、根っこは随分とあの子を甘やかしている、という事なのです。でもちよつとは怒つとかないと、あとあと反省しない悪い子になっちまいますからね。大人として、時にはガツンと言わないと」

「それはいいけど、目星はついるのかしら？」

「流石に『此処』で能力を使うと色々五月蠅いですから、正確な場所是不分らないですが…………あの子が行きそうな場所は、何となく予想はついてるですよ？」

×

×

「ふっふっふ、この魅弦^{みじる}を甘く見るからそういう風になるのよ」

「で、なんでお前は俺の部屋に来てるんだ。ついでに烏羽^{からすは}、お前もだ」

「いやね、魅弦^{みーちゃん}がまた悪戯してるみたいだから。今度は何をしたのか気になっただけさ」

風花達二人がいた場所から随分と離れた其処は、セキレイ専用居住区画。

魅弦が逃げ込んだその一室は、陸奥の部屋だった。その押し入れの中に、烏羽共々隠れていたのだ。

陸奥の特徴を捉えてか、和室を軸に特に家具や装飾と言ったモノは飾りつけてはいない。殺風景と言えはそれまでだが、素朴故の風情と言えは味があるというモノ。

廊下の科学的な概観とは違い、六畳の個室には襖や窓がある。彼の部屋は居住区画の外側にあるので、窓から外の景色も見ることが出来る。だが外は見渡す限りの岩床地帯と変わらないので、これだけが

陸奥の不満なのは秘密の話。

唯一、卓袱台ちゃぶだいの上のポットが近代の利器であり、彼が茶を飲みたくなつた際のご愛用の一品。それと彼が通販で購入したお気に入りの湯呑み。何処のメーカーが作ったのか、それには『侍』の一字が書かれていたり。

さて、話を戻そう。

現在風花から逃げ延びた魅弦は、陸奥が押し入れに隠していた煎餅を烏羽と共にかじっていた。

「へえ、今度はカフェインをねえ。それはさぞかし苦かつただろうね」

「そうなの！ 風花ねえちゃんつたら舌を出して『ゴージャア！！！！？？？』つて叫んでたの！ やっぱ風花ねえちゃんは面白かつたよ、烏羽ししゅうも来れば良かったのに」

「自分がそんな事をしたら皆大慌てになるだろうから、遠慮しとくよ。それに自分だけ『師匠』呼ばわりは寂しいんだけど……………他のみたいに親しげに呼んではくれないのかい？」

「だって烏羽ししゅうはしようだからなあ……………かーちゃん、つてのはどう？」

「ハハハ……………遠慮しとくよ。なんかお母さんみたいだ」

「だから————人の部屋で部屋の主を無視して話をするな。でもって煎餅食うなよ」

“ いい加減にしろ ” と言いたげに、声をホンの少し荒くして陸奥が口を開いた。

だが実際は怒ったりはしておらず、ただ単に煎餅勝手に食うなど言いたかっただけである。

それ故に口を開く前に手だけは煎餅の袋をしっかりと掴み、懷にソレを取り戻していた。だが二人は襖の中でも食べていたのか、袋の中にはたった二枚しか残されていなかった。煎茶を啜りながら、ごちそうさまと二人が呟く。溜め息をつきながら、陸奥は残った煎餅を再び押し入れにしまう。

「 もお、陸奥^{おにいさま}のつんでれめ。好きなら好きと私に告白すればいいのに 」

「 誰が誰を好きだってエ……………? 」

「 いたたたたたたたたた！? やつ、アイアンクローやめてえええええッッッ！！? ?? 」

「 ははは、二人はホントに仲が良いなあ。自分ももうちょっと仲良くして欲しいものなんだけどねえ 」

「 あー痛かったあ……………んー、じゃあ烏羽^{くろは}。ハイッ 」

ぎゅうーっ！ と、魅弦が右隣の烏羽に抱きつく。当時の彼女にはおよそ胸と呼べるモノは無かった。だが少女らしさは毛先から爪先まで溢れていた。物語のヒロイン、伝承の少女、そんな存在だった。

烏羽を見た者の多くは、その存在に恐怖する。その恐ろしさに腰を抜かす。だが少女は至極普通に――いや、寧ろ友好的に、親愛を込めて烏羽を『ししゅう』と呼んでいる。それは彼女が烏羽から剣術を学んでいる事も関連しているのだが、それはまた別の話。実際は魅弦が初見の際に、彼女からただならぬオーラを感じたらしく、それから彼女を『ししゅう』と慕う原因となっていた。本人も魅弦の事はそれなりに気に入っているのです、烏羽も逆に魅弦を『みーちゃん』と呼ぶほどに仲良くなっていた。

「私は烏羽うはの事すきだよ。カッコいいし強いし、優しいし面白いし」
「自分は面白い事をした覚えはないんだけどねえ……………」

「そりや同感だ。烏羽が面白くなったらアイツが真っ先に飛びついてくる筈だしな」

「ああ、そりや言えてるね。でもって何かしら実験とかもされそうだ」

「その時は私が烏羽うはを守る、私は皆の弟子だから健人けんせいにだって負けないのさ！」

「ふふふ、それは有難い。じゃあ自分は席をみーちゃんに譲って隠居しようかね」

「おう、任せなさいってのよな！」

「見つけたわよガキンチョオ!!!!!!!!!!!!!!」

「げえッ、風花^{ねえちゃん}！……！！？？？」

自動ドアが開くと、其処には鬼の形相の風花がいた。

その後ろには頻りにニヤニヤ笑っている松もいる。二人の共通点は『魅弦、お仕置き』である。

「くつ、ここは戦術的撤退！ 烏羽^{しじょう}、陸奥^{おにいさま}、さらば！」

「おう、とつとと行け」

「じゃあね、また今度面白い悪戯話を聞かせておくれよ」

「はいっ、では！」

「あつ、待ちなさいコラ……！！」

部屋の窓を開けて、そこから元気に外へと飛び出す。

素足で岩床地帯は、と普通なら心配するだろうが、セキレイたる彼女にそれは必要はない。

魅弦は『三階から飛び降りて』身体を翻し、落下の慣性を消して見事な着地を見せた。風花もそれを追おうと窓から身体を乗り出すが、魅弦はすぐさま下の階の何処かの部屋に逃げ込んだため、また見失ってしまう。

「魅弦のヤツ、また逃げたわね…… ホントネズミみたいにすばしっこい奴め」

「ははは、楽しそうで何よりじゃないか」

「あなたはあの子の悪戯を受けた事が無いからそう言えるのよ!」

「どうでもいいが……俺の部屋でドタドタ騒ぐな。埃が舞^{ホコリ}つてしようがないんだが」

「それはすいませんですよ、陸奥たん。でもこれで捕まえるチャンスは無くなっちゃいましたですね」

「はあ? なんでよ?」

「たぶん次は『アソコ』に逃げ込んでるからですよ。知恵を巡らせるまでもないです」

「ああ、あそこか」

「あそこならしょうがないよね。自分もあんまり好きじゃないし」

「はあ、今日は諦めましょう……………疲れたから部屋でまた飲み直すわ」

シングルナンバー余人が揃いも揃って“苦手”と評する一室と、その主。

唯一魅弦と“彼女”だけは彼を苦手とはしていない。その彼とは、彼女達の調整者であるあの男。

「『『『『マッドラボ
浅間健人研究室』』』」

×

×

「とうっ、窓からお邪魔します！」

「こらっ、魅弦。窓から入るなとあれほど言っているでしょう」

こつんと、彼女が偶然持ち合わせていた長刀の鞘で頭を小突かれる。実際は特に痛くないほどなので、魅弦はとりあえず『痛そうなフリ』だけは欠かさないようにしている。

それは魅弦が逃げ込んだ陸奥の部屋からさらに距離のある、セキレイ専用の研究室。部屋の主である浅間健人^{あさま たけひと}はなんとも面白おかしく笑うが、彼女はあまりそれを善しとはしない。

「健人さんも、魅弦を叱ってあげてください。甘やかしすぎると、

礼儀を知らぬ子に育ってしまいますよ？」

「クククククツ………いつ、いやそれはないよ。美哉^{みや}がいるならそれだけは絶対にないって！」

「そうだよ美哉^{おねえさま}！ 私は淑女なんだから、大きくなったらちゃんと礼儀正しい女の子になるもん！」

「じゃあ今度から窓から部屋に入らない、って約束できますか？」

「そ、それはちょっと難しいかなあ………（汗）」

およそ、毎日こんなノリツツコミを繰り返しているのが、彼女達の日課だった。

しかし彼女——美哉は最近変化が表れていた。そう、簡単。彼女が笑うようになったのだ。

それは『神座島侵攻』という大戦争が起こった後の話だが、魅弦はそれ以前に彼女が笑う処を度々見た事がある。その時の殆どは彼女が一人で笑っていたのだが、魅弦は一度『何が面白いの？』と聞いてしまった。

そして彼女はこう答えた——『大人の秘密ですよ』と。

「さ、それはさておき——魅弦、調整の時間だよ」

「はい」

ぱぱっと服を脱ぎ、ベッド——とは言ってもシーツなどは無く、

機械的な診察台と呼んだ方がいい——に寝転がる。余談だが健人は彼女達の身体に欲情した覚えがない。美哉も、松も、風花も、烏羽も、魅弦も。相手がどれほどの美女であろつとも、彼は何故か欲情しないのだ。陸奥はそれに対して『お前男色なのか?』と問うた事があるが、健人の答えは至極真つ当だった。

『仕事とプライベートはちゃんと区別してるよ』

調整は早ければ数十分、遅くて二時間程度はかかる。だからその間、やんちゃな頃の魅弦いまはと言うと——

「すぴー……………ぐーすかぴー……………」

寝る、ただこの一択だった。何故なら暇だから。魅弦にとって暇は兵器にも勝るモノらしい。

昼間のやんちゃな悪戯に疲れたのか、完全に爆睡中な少女。自分が裸だつて事を完璧忘れている。

美哉は風邪を引かないようにと、持ってきたシーツを掛けてあげた。その姿は母おか——ではなく母性溢れるお姉さんだったと、健人の談。斯くして一時間と経たず、本日の魅弦の調整は終了した。

「それにしても、不思議な子だね。本来なら彼女のような、普通のセキレイに能力は無いのがセオリーなんだけど……………この間見せてくれたアレ、間違いなく固有能力レアスキルだよな」

「『神の眼 《オウル・レンズ》』……………本人も正確な制御出来
てはいません。発動の感覚も掴めていないようですから、あまり期
待は出来ませんよ」

「それは彼女のお姉さんとしての辛口か、それともいずれ闘う相手
への示唆か。どっちだい？」

「どちらでもありませんよ……………ただ、その様に思っただけです」

嘘つき——健人は小さくそう呟いた。

美哉は魅弦の事をまるで他人の様に話していたが、それは真っ赤な
嘘だ。

他人の事をとやかく言う人間は、そんな優しい目をしない。

他人の事をとやかく言う人間は、そんな風に温かく微笑んだりはし
ない。

それは慈愛、母性、友愛、親愛。愛する者を見守る目だった。そう、
彼女はとうしようもなく魅弦の事を——否、全てのセ
キレイの事を愛しているのだと。健人は無意識にそう悟った。

「あ、そうそう。今度から新しい子が来るんだ」

「新しい子……………他のシングルナンバーですか？」

「うん。とりあえずNo.6からNo.10まで全部覚醒させた。
うちNo.09は宮島さんのとこに」

「そうですか……………それはまた——災難ですね」

「だねえ。僕もあの人のトコにだけは行きたくないよ（汗）」

宮島——それは月海の調整者の事なのだが、それはまた別の世界で語られる事もあるだろう。

丁度その折。自動ドアが開き、一人の少女が入ってきた。魅弦と同じ年くらいの、幼い少女だった。

「こ、こんにちは……………」

「こんにちは」

「やあ、^{ユウ}鈿女。時間通りだね」

鈿女と呼ばれた少女は、始めて見る美哉に何処か脅えていた。だが美哉から邪気や悪意、そういった類のモノを感じられないのか、すぐに怖がりはいしなくなった。

そしてこのタイミング、魅弦はゆったりと身体を起こし、とりあえず目の前数m先の鈿女が目に入った。互いに視線が合い、そのまま十数秒後の事。

「初めまして、あなた誰？」

「な、No・10・鈿女です。よろしく……………お願いし

ます」

「さあ、そこからどうするんだい？」

「ぐ、っは——あッッッ………!!」

比礼はボロボロ、身体中血だらけ切傷だらけ、満身創痍の体現者。彼女を評価するならそうなる。

心なしか、胸元の布すら千切れそうでちょっとドキドキしてたり。き、期待なんかしてないぞ!?

だがこんな状況でありながらも、顔を隠す比礼だけは決して脱ごうとしない。比礼は最初はそれなりに大きかったが、今や二mとないただのバスタオルだ。

「あたし、は——負けられないんだ………ッ!」

「ほう?」

「名乗る事も許されず、倒した相手を見送る事も許されず………
そんなでも、やらなきゃいけない事があるんだ。アンタには分
からないだろうけどね」

「それはセキレイとしての覚悟かな。出雲荘在住、セキレイNO.
10・つぎの細女ちゃん?」

「ッ!？」

「あれだけアクロバットに動いてたんだ。顔が見えない訳がない」

「ッ……………」

ほらほら驚いてる驚いてる、そういう顔が見たかつたんだよ。
素直な、彼女の——細女としての表情を。にしても理由、か……
……………聞きたいトコではあるな。だがしかし。

「今日はここいらでお開きだ。じゃね」

なんと言つか、やる気にならない。シラケるし、ノラない。
隠れてた表情に出てるんだよ。『嫌々やってます』ってのが。そん
なヤツ相手に真面目に闘うのがおかしいよ。僕は『闘いたいヤツ』
としか闘わない、だって面白くないもの。だからさっさと帰る。帰
って刃牙^{バキ}を見る。

「まっ、待ちなさい！」

「うん？」

「私は……………あたしは、アンタを倒さなきゃいけない。あたしの為に、そして……………千穂の為に！」

「葦牙の為に、か……………なるほど、セキレイらしい覚悟だね」

彼女の事情は察するに、葦牙が何かしら不自由をしているんだろう。それも命に関わるほどに。

彼女はそれを救うべく、巨大な勢力に媚びへつらい、力を借りる代わりに已む無く闘っている。

全ては愛する葦牙の為に、ただその為だけに彼女は今まで奔走してきたのだろ。名乗らないという不義理を堪え、容赦無く叩き伏せる不快を押し込めてまで、彼女は葦牙の為に……………

「笑わせんじゃねえよ」

第十八話 和解、と呼ぶべきか否か（前書き）

なんとものんびり執筆中なわたしです、ハイ。
段々クオリティが下がっているのが自身でも分かるこの頃……
お恥ずかしい。

×

×

見よう見まねで虚刀流を覚え始めた頃に、僕は『バカ』『オタク』と、非常に無下に、そして異端の様にイジメられていた事があった。だが僕は一度としてやり返したりはしなかった。当時から自分の力が強いのはよく理解していたから、不用意に暴力は振るわなかったからさ。それで迷惑するのは僕以上に両親だと、それも理解していた。だから徹底して我慢した。

しかし一度だけ、友達が僕を庇ってくれた事があった。そしてその友達は『僕を庇った』という訳の分からない罪状でイジメの対象になっちゃった。その時だった。

おそらくそれが最後であろう、僕という人間の——白羽黒人という人間が魂の底から憤怒を覚え、自身を抑えられなくなったのは。そして今でも思わずにはいられないんだ。

“なんで僕に助けると言わなかったんだ”と――その結論として。

僕はイジメをしていた学校の先輩後輩同級生全員を、『殺人的な暴力』で叩きのめしたのだった。

×

×

「ナニ？　なによなによ、もしかして君って自分に酔っちゃってる痛い人なの？」

『誰にも頼らず一人で闘い続けてる私カッケー……………（哀愁）』とか素で言っちゃう人なワケ？

うつわ痛った~~~~い！　そして可哀想~~~~（涙）　気持ち悪いよそーゆーの、マジ勘弁してほしいんですけど。有り得ないっつーかアホらしっつーか、現実見やがれるな？　ナルシストとかマジ勘弁♪

葦牙の為に、ってのと一緒に自分のナルシズムも満たされて嬉しい？　ねえねえどんな気持ち？」

怒涛の語り。多少の脚色は許しておくれやす。
そして鈿女ちゃんは、それを聞いて本気で怒ったらしい。怒気が溢れ出してるよ。

「なっ——何言ってるのよ！あたしは千穂の事だけを思っ——ずつと——誰にも助けなんて求めたりしないで……一人ぼっちで……ずつと——」

「嘘だツツツ！——！！——！！——」

「ひツツツ！——！！——！！——」

「………君、出雲荘に住んでるんだよね？ 焰君のトコ遊びに行ったとき、二階にいたの覚えてるよ」

「………だからなに。それがなんなのさ」

「あの出雲荘に住んでる人間が、一人ぼっちな訳がない。大家の美哉さん、友達の焰君。皆人君に結ちゃんに月海ちゃんにくーちゃん。それと見てないけどあと一人。これだけの友達がいるのに、君が一人ぼっちだという意味が分からないよ………何故、助けてと言わないんだい？」

「……………言える訳ないじゃん。だってあたし、比礼のセキレイなんだよ？ 礼節を弁^{わきま}えない、友達の友達すら平然と襲う、最低のセキレイなんだよ？ そんな事……………絶対言えないよ」

スパツと。前触れも無く、鉦女ちゃんの胸元の比礼を斬り捨てた。なんかイラッてきたから。

薄刀・針が限定剣技が一つ、速^{そく}遅^ち剣^{けん}。『脆い』という点を活かした、“剣を伸ばす”技。

ちゃんとした理論みたいのはあるにはあるんだけど、一々説明してたらキリがないから以下略。とりあえず距離の概念が無い刀、と認識しておいてほしいかな。鉦女ちゃんの比礼を斬り捨てると、僕は闘いの意志が無い現れとして薄刀・針を鞘に納めた。

「ちょッッッ！……？？？」

「わお、巨乳」

「へっ、変態ッッッ！……！！！！！！ シリアスな空気で普通こんな事する！？」

「我が生涯に、一片のシリアス無しッッッ！……！！！！！！」

「北斗！？」

閑話休題——改めて、僕は今後の事について語りだす。

「鈿女ちゃん、君の葦牙……………僕が助けよう」

「……………えっ？」

「もう一度言おう。僕が君の葦牙を助ける」

「……………出来る分けないよ。千穂は……………あたしの葦牙は、不治の病なんだ。そこいらの病院じゃ治せる病気じゃない、今入院してる病院でも治るかどうかも分からないんだ。そこから連れ出したって、すぐに死んじゃう……………あたしには、もう選択肢はないんだ」

「ある！」

断言した。もう茶化したりとか、まどろっこしい事一切なし。キリッとした真顔での叫び。

そうと分かれば、動かざるをえまい。何せ僕は有名人だ、有名人らしく堂々と振舞おうじゃないか。

それに友達の友達、という言い方にもちよつと壁を感じちゃってる……………寂しいなあ、普通に友達って言ってくれたら理由は聞かずに何でも助けてあげるのに。こう、物理的なアレコレ限定だけ。流石に僕には病気を治す技術とか軍資金なんてのは存在しない。つつーか医大とかも行きたかったけど学力が（汗）

だがしかし。この世には、目に見えている腹黒い男がいる。

ちょうどここから見える、この帝都のど真ん中に聳え立つあの忌々しいロンドン塔風の本社ビル。

「というか細女ちゃん、なんで“アレ”に気付かないかな」

「あ、アレって？」

「アレ—— M・B・Iだよ」

「……いやでも、社長はそんな事で動かないと思うよ。あの人、なんだかんだで傍観者みたいだから。それにあたしはその、色々あってお尋ね者で、動くとしたらよっぱどの事じゃないと………」

「じゃあよっぱどの事をするまでだ」

×

×

「お願いします」

「……………」

ポロリと、高美さんが啜えた煙草を落とすのが視界の端で見えた。場所はぶっ飛び、M・B・I・本社ビル内、社長室。つかこんな馬鹿デカイフロアいらないよね絶対。

その壁の一面は全てガラス張りで、それを背にM・B・I・社長・御中広人は社長の玉座に腰を降ろしていた。高美さんは事業報告のようで、手にはバインダーにまとめられた大量の用紙。僕には到底理解しえない事が書き込まれているんだろう。僕の後ろには一緒について来ると、鈿女ちゃんも一緒なのだが。

なぜ土下座しただけでそんなに驚かれるんだ。

「お、おい。君は本当に白羽黒人君か？」

「はい、そうです。お願いします」

「いや待て。待ってください、君は本当にあの御中広人嫌いの白羽黒人君なのか？」

「はい、紛れもなく白羽黒人ですお願いします」

眉間を摘まんで、まるで夢を見ているかのようにしばらく目を閉じる。

そして改めてタバコを取り出し、火を点けてすうすうと吸い込む。吐き出して、高美さんは一言。

「よし御中、いっぺん死んで夢かどうか確かめてこい」

「ちよつ、高美くん！？ それ私のせいじゃないよね、絶対死ぬ必要ないよね！？」

「あー……………ゴホンッ！——人に頼み事をしに来たんだ。ちゃんとした礼儀は弁^{わきま}えてるつもりですよ。例え相手が“クソクズ御中”であっても、ちゃんと筋は通しますよそりゃ」

「頼み事？」

「それはまずはこのNo.10・鈿女ちゃんから話を聞いてからだね。鈿女ちゃん」

斯々（かくかく）然々（しかじか）ダイワのシカさん。数分の説明で説得中。

「なるほどな、葦牙が不治の病でそれを治してほしいと。細女、具体的な病状は？」

「えっ？ あ、えと……………分かんない。あたしは『治らない』っただけ聞いてたから。カルテとかは病院にあるけど、警備とか嚴重だと思う」

「そこらへんは僕にお任せを。データの回収から葦牙ちゃんの保護まで、なんでもかんでもお任せ御座れの白羽黒人！ 細女ちゃんがキスしてくれたら無限に頑張ってみせよう」

「えっ、それでいいの？ じゃ……………ちゅー」

目を閉じて、肩に手を添えて。身体をぴったりとくっつけて。身体を乗り出すように、柔らかそうな、ピンクの唇を立てて――

「ちよっ、待つ待つて！ 冗談、冗談だから待つてエッツッ……！
……！」

くっつかないで、胸が、胸がアツツッ……！！！！！！ あ、柔らかい……………（赤面）

ってかデジャヴじゃね？ いつの事だかゝ 思い出してごらんゝ
ゝ って余裕無いわアツツッ……！！！！！！

ああ柔らかい、柔らかいったら柔らかい。サイズにして90以上は

あるか、ハリのある乳房を僕の胸板に押しつけてきて、形が変わっている。これが……おっぱいなのか——うちには煌刃しかないからなあ、お色気担当。
しかし本人はあんまりお色気担当のつもりが無いし、根がサバサバしてるからあんまり……ね？

「ちえっ、冗談かあ。ワリと本気だったのに」

「なん……………だ、と？」

「あいや、なんでもないよ。アハハハハ」

「さて、黒人君」

御中がようやく僕に話しかけてきた。いつもの不敵な笑みを浮かべ、なんとも不遜な態度で。
高美さんと紺女ちゃんは邪魔になると思ってたか、脇へ下がってくれた。間合いにして二m、僕と彼の距離はそれだけ。他には何も無いし、誰もいない。

「話は分かった。では早速だが、条件を出させてもらおう」

「おい御中！」

「高美くん、これは私の『ボランティア』だ。いくら私でも、人並みに善心はある。だがそのボランティアに私がどのような条件を付けても、文句を言われる筋合いはない。それにゲームマスターは平等でなくてはならない、ならば依怙^{えこひいき}鼻^{はな}屑^{くせ}ではなく、平等に条件を出さねば」

確かに、真つ当だ。審判及び主催者兼スタッフが依怙鼻屑なんて、あつちやならない事だ。それを踏まえれば、クソ御中の言い分には納得がいく。だからどんな条件でも飲むつもりだ。

少なくとも『死ね』『殺せ』『裏切れ』以外なら大体は許容範囲内だ。御中の腹いせに何処かの誰かを襲えと言うならやるし、仕事の邪魔になるヤツがいるなら殺す以外の方法で始末する。

「なに、大した事はない。最初から最後まで、ただ君一人で全てをこなして欲しい」

「それは『侵入』から『強奪』『保護』そして『逃走』『隠蔽』まで全て一人で、という事かな？」

「そうだ。それが私から提示する、君への唯一の条件だ。ああ、知り合いサービスでカルテだけはこちらが勝手に検査させてもらおう。どうかね？」

そんな事無茶だ――そんな顔をしてるよ二人とも。

彼女らの知る僕はあくまで一般人だから、急にそんな事が出来る訳がない。そう思ってるんだろう。

だが――何事にも可能性がある。小柄なバスケット選手が自身の倍はある選手からボールを奪う事もあるように。最下位のマラソン選手が終盤一気に追い上げて一位に舞い上がる事があるように。

しかしてそれらは決して偶然などではなく。歴れっきとした『努力』と確固たる『自信』より生まれる結果なのだと、僕は理解している。ならば、僕もそれに等しく努力をせねば叶わないだろう、今回の一件は。

「白羽黒人――その条件。承った」

「ね、ねえってば！　ちょっと待ってよ！」

本社ビルを出てすぐ、あたしは黒人くんに突っかかるように話しかけた。

言うまでもなく、さっきの滅茶苦茶な条件の事だ。相手はあの氷我、そう簡単に事が進む訳がない。

ひよつとすれば、今のこの会話すら盗聴してるかもしれない。だがそれならそれで、あたしは堂々と裏切る事が出来る。面と向かってあの男をぶっ飛ばせる。最悪千穂に手を出すなら、半殺し以上もいとわない。

「あんなの無茶だって！　あたしも影からバレないように支援するし、あたしの友達にパソコンに強いヤツもいる！　だから一人なんて無茶は——」

くしゃりと、頭に手を置かれて——グシャグシャグシヤ——ツツツ！——！！！！！！

「ぎゃあああああ——ツツツ！——！！！！！！」

「や——い髪の毛サボサ魔神——（笑）」

うう、せっかく直毛だって自慢だったのに………完璧グシャグシ

ヤだよ。

手櫛で適当に乱れた髪を直していると、黒人くんはあたしを乗せてきた車に乗り込む。道中歩くのが面倒とレンタカーに乗ってきたんだ。とりあえず答えを聞いてないから、あたしも助手席に乗り込む。エンジンを掛けると、黒人くんは行き先は何処ともなく告げる事なく走り出した。しかし目的地はあるようで、ハンドルに迷いが無い。赤信号で車を止めると、今度は逆に黒人くんから話しかけてきた。

「細女ちゃん。ねえ細女ちゃん？ 君は“助けを求められる幸せ”って分かるかな？」

「なにそれ、おかしいし。助けを求められて幸せなんて、フツー逆でしょ。助けられる側が幸せになるだけで、助ける側に幸せな事なんてフツー無いじゃん。デメリットだけ、って言えば変だけど」

何故かグローブボックスに入っていた櫛と手鏡を発見し、速やかに髪をとかしていく。

ついでに本社に戻った時に貰った、着替えの予備を後部座席で着替える事に。

胸元と腰のスカート状の比礼、そして白のハイソックス。ついでに新しい比礼も貰ってきた。今着ている比礼がボロボロ、それを見かねてか——もっとも、それは黒人くんがあのだ硝子細工みたいな刀で斬り刻んだからなんだけど——黒人くんはグローブボックスから新たに取り出したボディタオルをくれた。

「そうだね。普通ならそこはデメリットを優先して処理していく筈だ。でもね細女ちゃん、助けを求められない事がどれだけ辛いか——

——知ってるかい？」

そこはやっぱり男子だからか、メンソールの聞いたヤツだった。女性向けのヤツよりはあたしは好きだから、手早く腕や胴やと身体中を拭き回していく。そして着替え完了。

その間も車は進んでいて、今はあたしもあまり知らない住宅街にやっ
つて来ていた。

「……………なんとなくは。つまり、今のあたしを言いたい
んだよね」

「遠からず近からず。でも合ってる事に違いはない……………そうだ
ね、じゃあ例え話をしようか。」

ある町に、二人の少年がいました。少年達は大変仲の良い、地元で
も有名なコンビでした。

仲の良い二人は『二人なら何でも出来る』と心から信じて止まなか
ったのです。

だから二人は、イジメをしていた上級生にケンカを売って、見事に
それを成敗しました。

当然、二人は両親と先生に怒られましたが、同時に褒められもしま
した。『正しい事をした、良くやった』と。二人が通う学校ではイ
ジメ問題が非常に大きく、どの学年でも年間イジメの報告が絶えな
い学校でした。その一端を成敗した、その事に二人は心底感激し、
以来二人は“絶対に嘘は吐かない”と互いに約束を交わしました。

しかし、それは彼らが大事に巻き込まれる引き金でしかありませんでした。

上級生のイジメを成敗した、それは同級生と後輩のイジメ連中にしてみれば、由々しき事態でした。

上級生を成敗した二人は、次は自分達を成敗しに来るのではと。故に、同級生と後輩は手を組みました。そして成敗された上級生もやられて黙ったままという訳ではなく、リベンジという名の復讐に燃えていました。

そしてある日、事件は起こってしまいました。放課後に二人が別々に別れた後に、イジメ連中は集団で二人を“シメ”にかかったのです。ですが連中には予想外の事が一つだけありました。それは片割れが、実は格闘技の達人だったという事を知らなかったのです。

連中はイジメに来た筈が、逆にシメられた。そしてその場で土下座を強要され、今後反抗及びイジメ行為の一切をしないと契約を結ばされました。これで一件落着、とはいきません。

少年は相方のいる場所へ全速力で駆け出しました。

二人が別れてからまだ五分と経たずの襲撃、ならば距離はそんなに離れてはいない筈だ。

少年は肺が悲鳴を上げている事など何のその、さらに脚を早めました。そして見つけた、辿り着いた。路地裏にあたる場所にて、相方がバットで殴られているのが見えました。小学生ながら、中々ハイなイジメだったのでしょうか。

まだ見つかっていない少年は相方を助けようと駆け出しました。しかし、相方はそれを視線で御します。

『来るな、これは俺の勝負だ。まだ負けてない』——相方の鋭い目はそう語っています。

だが誰が見ても勝敗は明らかだ。だが勝ち負けじゃない、気位の問題なのだ。少年は理解していた。二人は仲が良い、だからお互いの言いたい事がよく分かる。少年が自分を助けたがっているのは分かってても、相方はそれを善しとはしませんでした。

いくら殴られても、蹴られても。相方は反撃のチャンスを窺っていました。しかしそれは無惨に終わる——金属バットが、相方の右足に振り下ろされました。ボキツという、嫌な音が聞こえました。そしてそれがスイツチでした。

少年はとうとうキレて、イジメ連中二十人以上を本気で叩きのめした。

それはもう、鼻が折れたり頬骨が陥没したり、四肢が変な方向向いたり、かなり危ういレベルで。

辺りは連中の鼻やら口やらから飛び散った血糊がこびりついていて、凄惨な状況だったと発見者は言います。少年は相方を抱き抱え、病院に向かいました。すぐに入院確定、少年は相方が痛みで気絶している事を心底感謝しました。

これで相方に咎められずに済むな、と。

以来少年は相方を避け続けました。クラスが違うのが幸いか、学校でも出会う機会はありません。そんな風に、二人の小学生時代は過ぎていきます。ですが、少年は相方に未だに一つ、聞きたい事がありました。

なんであの時、自分に助けを求めてくれなかったのかと。自分達は“嘘は吐かない”と約束したんじゃないのかと。

何故大丈夫なんて嘘を吐いたのかと——少年は今でもその答えを知りません」

……異常にリアリティのある例え話だった。

聞き入っていたから気付かなかったけど、車は何処かの脇道で停車していた。

人通り話し終えると、黒人くんは外の自販機で爽健。茶を二本、あたしと黒人くんの分を買ってきてくれた。それを適当に口に含むと、黒人くんは更に話を続けました。

「鈿女ちゃん、もし君が少年の立場なら。君はどうする？ 相方を助けるか、相方の氣位を取るか」

「あたしは………助ける。それ以上傷つくよりはずっといい」

「でもね、そうすると後に『なんで助けてと言わなかったんだ』と考えるんだよ。言ってくればいくらでも助けたのに、ってね。この話のオチは“お互いの矛盾”ってトコなんだけど………ゴメンね、変な話しちゃって」

なんだか申し訳無さそうなんだけどそれはあたしがしたい表情だ。これからあたしは“助けてもらう”ってのに、一方的に助けてもらってばかりだ。何かお礼がしたい。けど黒人くんはそのまま車を出ると、少し先の一軒の豪邸に入って行きました。つい釣られて追いかけてきたけど、勝手に入るのはアウトだと門の前で踏み留まる事に。それから出てくるのに、五分ほど。

手にはトランクケース、それとなんだか黒い布を持っていた。ウインクであたしに合図すると、あたし達は足早に車に乗り込み再び何処かへと走り出した。

「さ、とりあえずは東方面かな。細女ちゃん、葦牙ちゃんの病院つて何処？」

「氷我財閥系列の、医大なんだけど……………場所分かる？」

「それだけわかれば。帝都の地図は目ばしい場所は全部覚えてるから」

なんちゅー記憶力してんのよこの人。頭の中はコンピュータか何か？でもって今気付いたけど彼、地味に着替えてるんだよね。買い物袋も持ってたし。

黒のシャツに黒のパンツに黒のブーツ、グローブに後はトランクケース。それとあの黒い布、アレって実はコートだったんだ。運転しながら、黒人くんは手早く慣れた感じでコートを着ていく。

「細女ちゃん、車運転出来る？」

「えっ？ まあ、適当には……………流石に黒人くんみたい
に上手くはないけどさ」

「アクセルとハンドルが切れれば問題ないよ。じゃ、作戦だけど――

そうして黒人くん主催。

あたしと千穂の為に、彼の救出作戦が始まった。

第十九話 闘い奪うは、ただ彼女の為に（前書き）

作者の好きな漫画家

大暮維人（OH・GREAT）

イメージしづらかったらゴメンだぜ……………（汗）

第十九話 闘い奪うは、ただ彼女の為に

六月は末。早めに梅雨が明けた、ほんのり涼しい深夜の事である。場所は東方面、氷我財閥系列の医大病院。広大な敷地と優秀な医療スタッフ。

現在はM・B・I.に出し抜かれているが、それ以前は世界的な権威を持つ名の知れた病院でもあった。そんな病院の周辺には、特異な衣服の女性が多数巡回をしていた。別に彼女達はSPではない。とある男の命で此処を警備しているに過ぎないのだ。正確には、この病院のとある一室の少女を。

そこからさらに距離の空いた、東方面最大のビル。これもまた氷我財閥系列のモノだ。

その最上階、社長室。そこに主犯格はいた。今は書類の処理を済ませ、コーヒータムである。

「ふう……………やはり、彼女は裏切ったか」

「はい。見張りに出していたセキレイから連絡で、No.10と白羽黒人はM・B・I・本社に出向いた模様。おそらく御中広人に直談判しに行ったものと思われます」

「となると……………やむを得ないな。柿崎、No.10の葦牙の警備にセキレイを二羽追加しておいてくれ。あとデータバンクのカルテも此方に移して削除しろ。おそらく来るぞ——今日明日にもな」

「畏まりました。早速連絡を取ります」

柿崎は部屋を後にし、医大病院に連絡を取りに行った。

そして氷我は自分のパソコンのキーを叩き、とある画像を拡大する。それは先日、東方面に買い物に來た際の黒人達の画像だった。黒人を中心に、四羽のセキレイ。彼は白羽黒人という人間について、並々ならぬ調査を行っていた。当初それは彼が“御中広人と何らかのラインを持つ”と予想しての調査でしかなかった。

だが現在は全く違う理由がある。それはラインなんてモノではない、もっと巨大な——そう、鵜鴎計画全体を動かしかねないほどの、巨大な問題だった。故に、彼は白羽黒人については徹底

して調査を進めているのである。

「まさか、彼があのおの御中とそんな関係だったとは………いや全く。世に“偶然”と言っ言葉はあれど、真に存在したためし無し」——
——全く以てそうだな。利用価値は十分にある、今後は彼を利用して」

「氷我様ツツ………!!!」

氷我の秘書・柿崎が物々しい表情で部屋に戻って来た。
手にはよほど慌てていたのだろう、携帯を握りしめたままだ。そして柿崎は口を開き、驚きの発言。

「No.10の葦牙が——連れ去られましたツツ………!!!」

「………なん、だと——？」

そうして、話は今から十分前に遡る——

「なるほど、あの病室か……………確かに厄介ではあるね」

彼女の病室はそれなりに高い階にある。まずは地上入り口付近に三人。そして周囲に三人。

屋上に四人。中にはさらにいる事だろう。しかし病院だ、それほど大きな騒ぎは起こせない。

ならどうするか――簡単だ。忍び込めばいい。優しいな、道がいくらでもあるじゃないか。警備も中々に“ずばら”だし、これほど容易いとは思わなんだ。こんな発言から分かるだろうが、僕はもう忍び込んでいる。

語りながら確認しながら、しかし身体は止める事なく、中にあつという間に侵入。

「（母さんに隠密技術習つといて良かったよ。まさかこの歳で侵入とかやるなんて思わなかったけど）」

うちの母親は、とにかく人を騙すのが得意だった。息子も旦那も、

家族も平然と騙すのだ。

だが基本的にはいい人で、僕があれこれ教えて欲しいと頼めばあれこれ教えてくれる、優しい人。

M・B・I・所属という仕事の関係上、命を狙われた事も多々あったらしく、自身を守る術だけは徹底して鍛え抜いていたそうだ。隠密技術もその一環、『忍べる』という事は『見つからない』、人から逃げる事を得意とする。元々武術も得意なんだけど、母さんはこっちの方が好きだったらしい。

曰く――『ボンドみたいでカッコいいじゃない♪』。

今回は僕が白羽黒人であると気付かれない為に、わざわざ正体を隠して隠密に動いている。だから今回だけは虚刀流も封印する。並の人間ならともかく、セキレイ相手となれば動きを覚えられる可能性があるからだ。その為に、今日はわざわざ家にしまつてあつた、変装用の衣装と短刀を持ち出した訳で。なにとはともあれ経験は生きるモノだね……………母さん、ありがとう愛してるよ。

さて、とりあえずは千穂ちゃんのいる階に来た。彼女の部屋は目の前なのだが――いる。

ドアの前に二人。知らないセキレイが二羽。他の階の巡回は無かったが、あの部屋は別らしい。

単純に千穂ちゃんを守るというのもあるんだろうけど、千穂ちゃんが『誰かに連れ去られる』事も考えてるようでもある。なるほど、氷我泉……………優秀だな。それを考えつくとは、中々に平和ボケはしていないらしい。

しかし深夜で、しかも病院だ。あまり騒いでは患者に迷惑だし、病気に障る。だったら……………

×

×

カンッ——カッカラッ……カラカラカラカラ……

……

「見てくるわ」

警備のセキレイの一羽、No.35・安曇野^{あずみの}は様子を見に行った。千穂がいる病棟は中心に空洞のある四角形型に出来ている。正面入り口とは正反対、裏側にあるその一辺の真ん中の部屋が彼女の病室。そこから左右には長い廊下が延びている。

安曇野は音のした方向、右側の廊下へと歩を進める。音は左の角の向こう側から聞こえた、安曇野は得物であるショールを構え、素早く角を曲がる。だが其処には空き缶が一つ転がっているだけで、人の影も形も無かった。

「気のせい……か。全く、ゴミはゴミ箱に捨てろ」

落ちている空き缶を拾おうと手を伸ばす。この時、彼女は完璧に警戒を怠っていた。

深夜の病院というのは、“其処にいる”というだけでかなりの緊張感を要するモノだ。

だから彼女は一瞬とはいえ、安心してしまった。そして脱力し、空き缶に手を伸ばす。それが、彼女の敗因だった——空
き缶に触れた瞬間、キュツ！ という“何かの擦れる音”が聞こえた。遠くはない、そう、それは耳元で聞こえた。

ナニがいる——だがもう遅い。次の瞬間安曇野の首には何かが強烈に巻き付いていた。

「が、ツ——ワイ、ヤー……………ツツツ！！！？？」

声が出ない。安曇野は引つ張られる方向へ、視線は自ずと天井へと向いてしまう。

そして安曇野は見た——天井に張り付く“黒”の中に
一点浮かぶ、笑う白い仮面を。

意識はそこで途絶えた。だが死んではいなかった。幸い、仮面は彼

女を殺そうとはしなかった。

ワイヤーから腰に付けた発電装置を介し、人間なら即死する電力を一瞬で放電して気絶させたのだ。

そして扉の前のセキレイ、No.45・羽曳野^{はひきの}は丁度その死角にいた。安曇野は音もなく気絶させられ、あまりに戻るのが遅いので羽曳野も様子を見に後を追う。そして今度は倒れている安曇野を起こそうとして――以下同様の手順である。

「（セキレイってひょっとしてバカばつかなのかな……………」
…）」

×

×

「（堂々とお邪魔しますよ………あー、寝てる寝てる）」

ベッドの上には、なんとも病弱そうな少女が寝ていた。今にも死にそうに、その身体は細い。

ドアは極力静かに閉めたつもりなんだけど、やっぱり深夜に物音は

まずかったか。起こしてしまった。

「……………どちら様？」

「紺女ちゃんの友達、なんだけど……………今日は用事があったきたんだ」

「うずめちゃんの……………？」

「今君の病気を治そうとある人が動いている。今から君を其処に連れていくんだけど、いいかな？」

「うずめちゃんは？」

「外で待つてる。時間が無い、いいかな？」

「はい」

彼女は一瞬の迷いもなく yes と答えた。肝が据わってるのか、ただ単に寝ぼけてるのか。

深夜は身体が冷える、白い寝間着が目立たないように僕の黒コートを防寒も兼ねて着てもらった。

で、ここからが本題だ。如何^{いか}にして病院の外、M・B・I・へ彼女を連れていくか。一人ならいくらでも忍び込めるが、外へ人間一人抱えて出るとなれば別だ。だが考えてはある。千穂ちゃんを木陰に隠し、今度は堂々と正面に姿を晒す。

「なんだ、貴様は？」

正面玄関を警備していたセキレイの一羽が問いかけてくる。
そして今更だが…………… 氷我という男は南の御子上と同様に複数のセキレイを所有しているようだ。

深夜だからか、その小さな騒ぎすらも聞きつけて、各所を警備していたセキレイ達が続々と玄関に集まる。総数は十羽といったところか、しかし焦る事は無かった。もう忍ぶ必要がないから。

「離れて、コイツたぶん……………」

「氷我様の言っていた『セキレイ殺し』、か…………… 気をつける」

「なんでもいいからちやっちゃんと殺っちゃおうよ。十羽がかりなら一瞬だつての♪」

全員が武器持ちだった——— つか、武器持ちがこんだけ並んだら結構壮観だよな。

デュアルランス、モーニングスター、ブレード、シュラ、ベリン、
双頭槍、鉄球杖、剣靴、騎馬槍、トマホーク両手斧、なぎなた薙刀、トマホーク両手鎖鎌、ボウガン、青龍刀、あまつさえ一人は西洋鎧と来た。なんだっけ、鎧専用の格闘術つてのがあったっけか。

「しかしこう武器持ちばかりだと…………… ねえ」

「かかれッ！」

ダッツッ！！！！！！ と、全員が僕を目掛けて得物を構えて駆け出す。

普通のセキレイなら、こんな状況ならまず一目散に逃げる筈だ。数はそのまま戦力であるとも言う。

けどさ、相手は皆武器持ちなんだよね。でもって昔頃から対武器戦闘の訓練を積んでたんだよねコレが。

理由を聞かれたら『時代の風潮』だ。銃や化学兵器が流行してるこんな時代に、わざわざ肉弾戦だけで闘うヤツが何処にいるよ、いなってフツ。だから僕は鍛練で何より優先したのは、対武器戦闘だった。

短刀、直刀、長刀、曲刀、銃剣、重剣、西洋剣、その他 e t c。剣だけでこれだけの種類があるんだ、対武器戦闘は確実に無駄にはならないと信じていた。でも翌々（よくよく）考えたら僕って平成っ子だからさあ、こんな風に武器を持った相手と闘うなんて有り得ないって思ってたんだよね。

戦国でもあるまいし、そんな必要あるのかって考えた事もあった。けど、意味はあった。

バギイイイイイイインツツ！！！！！！！と、一合目。迫り来る両手斧と青龍刀を拳で粉々に砕いた。

「「なツツ！！！！？？？」」

まずは二人を殴って吹っ飛ばす——生憎、僕は武器を使う相手に負ける気がしないんだよ。そもそも虚刀流でなくとも、武術の大半は『そういう様に』出来ている。弱者が強者に立ち向かうための、弱い者が強い者から身を守る為の術、それが武術の本来のあるべき姿。

空手は世界的な格闘技だが、本来は“侍相手に闘う事を前提に”作られた武術。

故にその型や技には『刀を相手にした』受け技が今も残っている、日本が世界に誇る武術だ。

中国ならば珍しいが、心意六合拳というのものもある。武器術を多く取り入れた武術なんだが、それは逆を言えば『武器への対処法』を心得た、“対武器戦闘のスペシャリスト”であるとも言つ。

「ならこれはどうだ！？」

ボウガンの矢が放たれる。回転弾倉式の、なんとも効率性を重視したいボウガンだ。

しかし、使うのが人間なら厄介だが、セキレイが使うのならば僕の敵じゃない。

解説をしよう。セキレイの筋力は基本的に人間の数倍はある。結ちやんは拳系だからアレだけど、焰君も鈿女ちゃんも等しく人並み以上の力は持っているものだ。

「なんで、当たらない——ッ……………!?!」

だから、そんな両腕でボウガンを支えたら『射った反動で射線軸がズレる』訳がない。

つまり矢は文字通り、この距離でなら直線で飛んでくる。で、相手は図体のデカイボウガン。その照準が何処に付けられているのかなんて、正面から見れば丸分かりである。なら身体の動きを最小限に、しかし脚は素早く動かし。一気に間合いを積めていく。拳法における縮地しゅくちという歩法だ。

「このッッッ……!!」

「疾ッッッ……!!」

ゴシャアッッ……!!……!!……!! と、ボウガンを正面からの掌底で粉々に叩き潰す。

丁度矢が放たれる瞬間だったのか、出かけた矢はそのまま逆行してセキレイの少女の額に当たった。脳を揺すられてボウガンのセキレイはグラリと気絶し、僕はそのまま次の相手へと意識を集中する。

今度は槍のセキレイ。双頭槍だけでは分かりにくいだろうが、とにかく刃が普通よりも大きい。先端に付けられた刃は、文字で言えば中央を貫通した『H』の形状である。突く事よりも斬り払う事を主に置いていた槍だ。

分かる人は『冒険王ビート』の“バーニングランス”を連想してはくれまいか。彼女はそれを捨二無に突いてくる。対し僕は身体を半身反らし、摺り足で回避する。

「コイツ……………ッ！」

掠りもしない。そんな見え見えの攻撃が当たる訳がない。

人もセキレイも同じだ。攻撃の際には自然と視線が『狙い』に集中してしまう。視線を合わせしまえば、彼女が何処を狙っているのかは文字通り一目瞭然。そして連撃をすり抜けるように、槍が突くと同時に前に滑るように踏み出す。

「しまっ——」

シュカンツツッ！！！！と、腰の短刀を右逆手で抜き、斬り上げるように槍の柄を切断した。

突然刃が無くなった事により重心が崩れた彼女の横合いに迫り、側頭部を握り直した短刀の柄で打つ。

倒れたセキレイ・槍と入れ替わりになるように、さらに続けて僕の背後。^{モニングスター}鉄球杖を振りかぶった少女がそれを一直線に叩き下ろす。コンクリートを粉々に粉砕する一撃^{それ}を手を使わずの側転で後方へ回避。四散するコンクリートの破片の中、ワイヤーを伸ばして少女の首へ絡ませる。

向こうもこちらを潰した気でいたのか、難なくワイヤーは絡む。締めつけ、スイッチを押す。

「きゃあああああああッッッ！！！！؟؟？」

ベルトのスイッチを入れ、人間なら即死する電力を垂れ流す。

時間にして五秒、ワイヤーを引きほどいて次の戦いへと思考を切り替える——あと五羽。

『コイツ……………人間じゃないッ！』

「疾ッ！」

再度縮地で、次は鎖鎌のセキレイに狙いを定める。間合いは目測十m。

対して彼女は鎖鎌を柄ではなく、鎖を握って高速で振り回し始めた。甲高い風切り音が響く。

「やあああツツツ!!!!!!」

鎖鎌を水平に、正面の僕を刈り殺そうと一閃する。鎌自体が大きくある意味での『面制圧』だな。

彼女の身体に巻きつけた鎖を伸ばすと、それは5m近く伸びていた。それを屈んで回避し、前転で勢いを殺さずに前へと進む。右手に短刀を握り、一層前へ前へと加速する。

それに続く連続的な鎖鎌での面攻撃。飛び跳ね、転がり、飛び込み、距離を詰める。そして眼前。

「ちいッッッ!!!!!!」

「刃ッッッ!!!!!!」

短刀を振るうと同時。少女は自身の脚に鎖を絡ませ、盾のように正面に鎖の壁を作り出す。

僕は“あえて”そのまま短刀をぶつけ、そのまま彼女のなすがまま、彼女は短刀に両手で掴んだ鎖を絡ませる。『短刀に鎖を絡ませ、動きを封じた今なら殺れる』という狙いだろう。それを見越して空中、ジャベリン左右後方から騎馬槍と薙刀が串刺しに、そして剣靴ブレードシューズが跳び蹴りで迫る。

「くたばれええええええええええッッ!!!!!!」

「風の面を——掌で——叩きつけるように」

「「「へっ?」「」」

左掌を広げ、仰げば一陣の風が吹き抜け、鎖鎌のセキレイがすつとんきような声を上げる。

感覚的には真空接着——冷蔵庫に貼りつけるホックで分かるかな——の用量で空気の面を押す。

そう。度重なるセキレイの羽化、それに伴う肉体の異常強化。日々の虚刀流の鍛練と、妄想現実化の為の病氣的な二次元再現の鍛練。近日二次元を極めた僕に、使えぬ技は——あんまり無い（と思う）ッッッ!!!!!!!!!!

「それを脚で——叩きつけるよおーに!!!!」

ボヒュウウウッッ!!!!!!!!!! と、突風以上の爆風が空中で身動きの取れない三人を吹き飛ばした。

『出番これだけえええええッッ!!!!!!!!??』とか聞こえたんだが……………ま、いっか（真顔）。残るは未だに鎖を絡ませたままの少女と、鎧を纏ったセキレイだけ。

「さて……………」

「ひっ——」

「このまま私を見過ぐすのであれば、君達には手出ししないでいこう。どうする？」

「（コクコクッ！）」

鎖鎌の少女は有無を言わずに僕を開放し、そのまま僕は背を向けて茂みに隠れている千穂ちゃんの回収へと向かう。だが一人だけ返事をしていないのがいるのもわかっている。

鎖鎌のセキレイは戦意喪失、となれば残っているのは鎧のセキレイ。すっかりとした全身装甲、しかし無駄な装飾などは一切なく、彼女の体にフィットする形で作られたそれは軽量ながらも十分な防御力を搭載した現代的な鎧と言える。

「ふっ……………はあああああああッッッ！！！！」

鼻で笑って、そのまま声を上げて突撃。肩を突き出した前屈み、体当たりでもするつもりだろうか。

『賊刀・鎧』みたく頑丈で隙間無く、肩に攻撃用の螺_ネ山があるわけでもあるまいし、恐れる事はない。

ちよっと手加減しようかと『虚刀流_{すずらん}の構え・鈴蘭_{もも}』の基とされる、

空手の構え『天地魔闘の構え』を取る。大体似たような構えだから、想像するに難はないよね。で、結果は――

「流形氣功鍛針功

真伝」

「は？」

ギョッ！ と眼を見開く。まるでイヤなモノに出会したかのような、そんな声。

だが軽いとはいえ、それなりに重さを抱えた鎧だ。もはや自身を踏み止める事は出来なかった。

説明の感覚的には虚刀流『肆の奥義・柳緑花紅』が最適だろう。

だが鍛練も無し、ぶつつけ本番でもある。体内で発した氣功を全て拳に注ぎ、同じ発勁である柳緑花紅を放つ感覚で撃ち出す。形は龍をイメージ、身体を渦巻く龍が氣という名の咆哮を上げる。全身を駆け巡る氣は螺旋を描き、拳へと辿り着く――

我王双龍炎烈掌

「っていやなにそれ」

叫ぶ時間も無く、鎧を木っ端微塵に粉碎されたセキレイは地面に倒れて気絶した。

いやあ、我ながら神がかった技であつた……………最早この身は人にあらず、二次元である。

さて、ビビって腰を抜かしてるヤツは無視して——茂

みの中にいる千穂ちゃんを迎えに行くと、あれだけドンパチやつてたのに、これまた随分ぐっすりと眠っていらつしやつた。そんな彼女を抱き抱え、走り出す。行き先はM・B・I・本社裏搬送口、高美さんのいる所へ——

そして舞台は十分後の氷我のビルへと戻る。表情こそ冷やかだが、彼は確実に焦っていた。

優秀な手駒であるNo.10を失った事、人質であるその葦牙を失った事、そして明らかな自身のセキレイ達の損失。これを総計するまでもなく、氷我は圧倒的な被害を受けていた。

「氷我様。一つ追加のご報告、いえ、訂正が……………」

「……………なんだ、これ以上何かあるのか」

「今回氷我様のセキレイは……………ただの一羽も機能停止していません」

「なに……………？」

警備に出していたセキレイ、計十二羽。それら全員が武器を破壊されるかそれなりの傷を負っているものの、誰一人として機能停止はしていない。幸いなのか、ただの狙い通りなのは分からないが、氷我の損失はこれでチャラに近くなった。

「これは……………やはり『セキレイ殺し』の仕業か？」

「それが……………違うようで。これは無傷だった個体から得られた情報です。」

侵入者は『黒衣に白の仮面。30cmの短刀と鋼鉄製ワイヤーを武器とした、空手と気功の使い手』との事です。噂のセキレイ殺しは我流の武術を使う筈ですから、おそらく他人かと……………」

「それはつまり……………誰かのセキレイが変装して襲撃を試みたという事か？」

「可能性は他にもありますが、それが最有力かと思われます。そして最も留意すべきは……………そのセキレイは、“たった一

羽で”十羽のセキレイと真っ向から渡り合えるという事です」

そんな個体はどれほどいるのだろうか。南か、西か、それとも噂の北か。だがいずれにせよ、氷我にとってはそれらは全て敵でしかない。いずれは闘う、彼にとってはそれだけでしかなかったのだった。

「（駒が必要だな。手順を繰り上げるうえに少々手荒にはなるが――
――仕方ない）

……柿崎、セキレイを集める。これから少し出掛けるぞ」

カタカタとキーを叩くと、ディスプレイには一組のカップル、もといセキレイと葦牙が表示された。黒髪ショートカットの少女に、銀髪の少年セキレイ。先日より氷我が考えていた、対M・B・Iの切札になりうる存在。

「彼らを――此処に誘拐しょうたいする」

第二十話 再びの語らい

「あー……………遅いなあ」

昼頃にさ、黒人君に『車運転できる？』って聞かれたじゃん？
アレの意味って『鈿女ちゃんレンタカー返してきて』だったんだよねえ。

わざわざ私服に着替えて、わざわざ車走らせて。わざわざ歩いて帰ってきましたよ、M・B・Iへ。

その裏搬送口にて、黒人君が千穂を連れてくるのを待ってるんだけど……………時刻は深夜三時。

千穂の事をずっと待ってるんだけど、流石に深夜の三時間はきつい……………コンビニで買ってきたコーヒートブラックガムが生命線と化している現在のあたし。

昼間の空き時間、あたしと黒人君はファミレスで時間を潰しがてら、

ずっと喋っていたりした。好きな食べ物とか、どんな服が好きとか、黒人君の趣味のアニメで何があたし向きだとか、なんか友達みたいな話をしていた——そう、あたしって今思えば真つ当な友達いないんだよね。

結ちゃん達とかは友達だけどセキレイとしては敵同士だし、佐橋ちやんは友達っていうか同居人だし、
松や焰や美哉は家族に近いし。世間でいう『普通の友達』がいないんだ。その点じゃ黒人君はあたしにとっては初めての『普通の友達』になるのかもしれない。

なんだっけ、黒人君のオススメのアニメ、えーっと………“僕は友達が少ない”だっけ。
友達を増やしたいなら、このアニメを見ればいいんだって。よく分らないけど、今度借りてみよう。

「どうだ、まだかかりそうか？」

M・B・I・セキレイ鵜飼計画主任、さほし たかみ佐橋高美。

千穂の治療を担当してくれる事になった、科学者兼医者の人。リラックス中だったのかジーンズにTシャツで、寝癖がついてる。流石に四六時中起きていると治療に差し支えるとの事で、仮眠室で寝ていたらしい。

「分かんない………此処から病院は距離あるから、人間が人間一人抱えてなら二時間かかるかな。警備のセキレイとかもいるだろうから慎重にやって二時間、たぶんあともう一時間くらいだと思う」

「そうか……………なら私は、もう少し寝させてもらおうしよう」

「……………でも先生もよく助けてくれる気になったよね。あたしがお尋ね者なの、知ってるでしょ？」

「フツ、歳を取ると敵だの味方だのってのは薄れてくるものさ。『あんまり知らないけど、善意で助けていよう』ってくらいにしか私は考えてないよ、だから気にしない事ね。それと、私は中の警備室にいるから用があるならそこにおいで。わざわざ登り降りするのも面倒だ」

……………カッケエ、これが大人の女ってヤツなのかな。あたしには無理かも。

そう吐き捨てて（なのかな？）高美さんは中へ戻っていった。あたしは新たなブラックガムを口にする。

刺激的な味が舌を刺激し、また軽く眠気が去っていく。ふと頭上を見上げると、なんとも綺麗で神秘的な満月だった。あたしと千穂が出会った緑溢れる昼間の庭とは違う、真っ暗な闇夜に金色の光。

初夏の蒸し暑さを肌身を感じる、そんな夜———月の中から誰かが飛び出てくる。

いいや違う、誰かがあたしの視線で月と同じ高さから落ちてきたんだ。こっちに向かって。

そう———紛れもない。二人が帰って来たのだ。

「千穂……………！」

ふわりと。なんとも軽い着地で黒人君は戻ってきた。人間一人、千穂を抱えて。

だが人間抱えて跳んできたにしては随分動きが軽かったが何故だろう——とは今更問わない。

彼に不可能は無いのだと、あたしは本能で理解した。セキレイでもそれなりに強い自信のあるあたしに一方的に有利に闘って、今夜は十羽近いセキレイをはね除けて彼は帰還してくれた……………それが、何よりの証拠で絶対の証明になっていた。

「うずめ……………ちゃん？」

「千穂！」

「うずめちゃん……………うずめちゃんきゃッツッ！！！！……？」

「千穂ッツッ！！！！……！」

急にグラリと、黒人君の身体が傾いたのだ。彼に抱き抱えられていた千穂は、そのまま正面に放り投げ出されるようにその華奢な身体を宙に浮かせる。

あたしは間一髪で千穂をキャッチし、逆にあたしがお姫様だっこをするハメになっていた。

そして倒れた本人は息を荒げ——そのままコンクリートに前のめりに倒れていた。

「ちよつ、黒人君!？」

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、あー……………っは、っはあ……………はあ、はあ——ッ
ハ……………ギリ、はあ……………かな」

息も絶え絶え、昼間持ち出していた真つ黒な服とその顔を覆う白の仮面。

あたしと違つて黒人君は正体を隠すのには余念がないようだった。とりあえず苦しうなので服を脱がせる。そして仮面を外すと――

――顔中に尋常じゃない量の汗を掻いていた。ひとまず深呼吸、息を整えると黒人君は何があつたかを話し始めた。

「病院にいた警備のセキレイ、全員で十二羽なだけどさ……………とりあえずソイツら倒して帰つてた訳。でその道中にさ、いきなり追つ手が来たんだよ、新たに五羽も。

闘つても良かったんだけど、流石に千穂ちゃん抱えてつてのは無茶が過ぎるから、全速力かつ全力で逃げてきたんだ……………全く、一時間の道程が二時間に伸びちゃったよ」

「(っつか十二羽も倒して五羽から逃げきるってどんな体力してんの……………)」

やはり彼は普通じゃない、あたし達セキレイにも並ぶ珍種の人間だ。ひよつとしてセキレイなの? とも考えるが、セキレイがセキレイ

を羽化させられない事は知ってる。

なんか遺伝子的なレベルでの無理な話で、別にキスしたら死ぬとか
そう訳じゃないが絶対に羽化は不可能だそうだ。あたし達の力の源、
鵲鴒基幹セキレイ 基かん自体がセキレイに対して反応しないらしく、またあたし達
が葦牙を見つけられるのもこの鵲鴒基幹のお陰。

セキレイがセキレイたり得るのはこの鵲鴒基幹があつてこそ。だが
もし似たようなモノがあつて、それが黒人君の力の源であるとした
ら……………んにゃ、そんな訳がない。鵲鴒基幹以上のエネ
ルギーを持つてて、かつ人間に耐えられる代物なんてある筈ないよ
ね。

「ってこんな事してる場合じゃないや。ちょっと待つててね千穂、
お医者さん呼んで来るから！」

×

×

「成る程な、病状は分かった。鈿女、あとは我々に任せろ。この程

度ならすぐに治してやる」

氷我の病院で治らないとされた病気に対して『この程度』――
やはりM・B・Iは格が違う。

時刻はもう早朝四時を指していて、高美さんは医療スタッフ数名を引き連れて奥に籠った。千穂はキャリアに乗せられて同伴、『治つたら連絡するね』と一言言つて二人は別れた。そして今あたしと黒人君は――

「いやぁお見事お見事！ 見事な活人拳術絵巻だったよ黒人君！
ハッハッハ！」

「そりゃどーも」

最上階に位置する社長室、そのソファでテーブルを挟んで社長と向かい合っていた。

差し出された飲み物であたしはオレンジジュースを、黒人君はミネラルウォーターを飲んでいる。

しかしこの社長、随分とご機嫌だった。普段からテンション高いのは知ってるけど、今日はまた一段と機嫌が良い。何か悪巧みを成功させた子供みたいな、嫌味つたらしい笑い声である。

「で、実際千穂ちゃんの治療期間はどのくらいなんだい？」

「長期間の入院で減退した体力や筋肉、その後の様子見で半月か一ヶ月程度だ。ま、我がM・B・Iにかかればこの程度は朝飯前の
リハビリ

夜食前だよ。ああ、それとその間はNo.10・細女くん、君も見舞いに来ても構わんよ」

「うえ！？ あ、いやでも社長、あたしが何したか知ってる……………
……………んですよね？」

何故か疑問形で敬語になってしまった。らしくない言葉を口にされると、なんかむず痒いな……………しかし社長はより一層高い笑い声を上げてピツとあたしを指差す。

「今日の私はご機嫌だ、よって君の過去の一件は不問とする。今日からは堂々と日の下を歩くといい」

「……………マジで？」

「うん、マジで」

「ただ嫌がらせと憂さ晴らしが成功してご機嫌だけじゃないのか、お前は」

色々終わってか、高美さんが帰って来た。早朝四時過ぎだというのに、なんでこの人達こんなに元気なんだろう……………ってか今なんか気になる単語が——嫌がらせ？ 憂さ晴らし？

「（ギクツ！？） や、やだなあ高美くん！ M・B・I・社長、稀代の天才たるこの私が昔色々嫌がらせされた氷我財閥に対して嫌がらせが成功した程度で喜ぶだなんて、そんな大人気ない人間な訳がないじゃないか、いやホント！
どうせならビルとか病院とか経済破綻起こせばいいと思ってる訳ないじゃないか全くだホント！」

「……（やっぱり中身ガキだコイツ………）」

つまり、氷我への遠回しな嫌がらせの為に黒人君を差し向けたって事ね………

千穂の事もいいように使われたって事だよね、それって。でもま………
………いつか、そのくらい。

正直あたしには、今回の一件はメリット以外は何もない。一番大事な千穂を救えて、M・B・I・社長から直々に免罪符を貰って、あの氷我に一泡吹かせる事にも成功して、そして友達が出来た。

全てを引き起こしてくれた本人は、なんとも暢気^{のんき}にミネラルボトルにストロー注してちうちうと水分を補給している。あたしがじつと彼を見ていたのに気付くと、黒人君はニコツと笑い返してくる。

「（……………ヤバイ、浮気しちゃいそうかも……………ゴメン千穂、あたしダメな子だよ（涙）」

「さて、高美くんにはしばらく紺女くんの葦牙の治療に専念してもらうとして——とりあえず紺女くん、君にも一応お咎めをしておかねばならない。ゲームマスターとして、M・B・I・社長として」

「……………はい」

ゴクリと、生唾を飲み込んだ。あたしや高美さん、場の者に緊張が走る。しかし黒人君だけはこんな状況でも平然としていて、やはり只者じゃないと——ただ疲れて眠いだけかもしれないけど——

——思い知らされる。

そして社長は再び手袋に覆われたその指をピツとあたしに向けて——
——言い放つ。

「一週間葦牙とは面会禁止で、あとVIPカード使用禁止で、あと何があるかな……………あ、そうそう！ 治療が終わるまで葦牙とキスも禁止！ 以上！」

「軽ッッッ!!!???」

紺女ちゃんはとりあえず、本社^{ココ}の仮眠室で仮眠をとる事にしたそう
だ。

高美さんはそのまま仕事に向かい、最終的に社長室には僕と部屋の
主たる御中だけになってしまった。その御中もなんだか眠^あそうに欠
伸^{くひ}をしている。だが急に彼は前のめりになり、テーブルの向こうの
僕に話しかけてきた。

「どうかね、白羽黒人くん。闘う葦牙としての日常は」

「あん？」

「刺激のかね、情熱のかね、衝撃のかね、快樂のかね、爆發のかね、衝動のかね、狂のかね、劇のかね、病的のかね、慢性的のかね。君は今を——この世界を、鵲鴿計画を楽しんでいるかね？」

………なんとも言えない氣迫があつた。いつものおちゃらけた雰圍氣は何処へやら。

しかし不敵な笑みだけは絶やさずに。彼はいつも必ず誰に対しても上から目線で接しようとする。

にしても、今を楽しんでいるか——か。それを聞かれると、僕は yes と答える。家族には両親を筆頭に。魅弦みづるがいて、煌刃こうはがいて、地天じてんがいて、鶴ねえがいて。友人には焰君ほむらがいて、鈿女ゆめめちゃんゆかりがいて。知り合いには佐橋君やその妹の紫ちゃん、彼らのセキレイ達、さらにその友人。人の輪は、無限に広がっている。

「ああ。僕は今を楽しんでいる。心底ね」

「では問いを変えようか。白羽黒人くん、君は——過
去と今に満足しているかね？」

「否」

「——ほう。俯きもしなければ答えに一寸の迷いすらないとは………」

「解りきつた事を聞かないでくれよ奇人。そんな事を今更聞いて何になるんだよ」

僕は確かに今を、未来を楽しんでいる。今にも満足はしている。だが過去は別だ。あの日には、“あの頃から”全ての過去に満足した憶えなんか、一度だって無いさ。

他人から見た僕の過去が栄光に包まれた華やかな一生だったとしても。

身内から見た僕の過去が、他の人間の誰より強く雄々しく、目映く輝いていたとしても。

僕から見た自分の過去の全ては、そこらへんの道端の汚泥とさして変わらない。『過去の他人』という綺麗な硝子細工に、『僕』という汚泥を塗りたくっている。その程度の価値しかないんだよ、僕には。

魅弦達と婚^くいで、うつすら思い出した僕の昔。
今から十五年ほど前の、僕が五歳の頃の記憶
—— 忘れ
ていた、僕の始まり。

「御中」

「なにかね、黒人」

「お前はあの時、あの日の僕に——僕の身体に何をした？」

「何も。私は君には何もしていない。私は科学者として、一人の医者として、一人の人間として。私は“君の怪我”を治した以外には何もしてはいない……………約束しよう。なんなら此处で首を賭けても構わないが？」

「なんだよ。貴方だって即答じゃないか、人の事をどうこう言えたモンじゃない」

「似た者同士、という事だろうね。私と君は」

「よしてくれよ気色悪い。僕は僕で——貴方は貴方だ。同じ人間はいない」

×

×

「怪我を治した以外は何もしていない、か……………」

嘘だ。あの時、眼鏡の奥の瞳は、僕を見ていた。だがその眼は真実を語る目ではない。嘘を語る目をしていた。だが自分の事なのに、何一つ思い出せない。十五年前、自身が大怪我を負ったのは覚えている。だが御中がそれをどうやって治したの

か、それを僕は知らない。両親も知らないのだから、知るのは御中だけになる。

「（この馬鹿げた身体秘密……………いい加減知りたいたコだったんだよ）」

コンクリートを素手で破壊する人間なんて、マトモに考えたら有り得ないだろう。

なら答えは必然的に、御中が僕の身体に“何かを施した”という点に行き着く。

それに魅弦達を羽化させた時の、あの翼——セキレイ

と同じ光の翼、その謎とその正体。魅弦達を羽化させた時の、その後を感じた激痛。自身の事は分かっていたつもりなのに、実際は全く以て理解していなかっただけのようだ。

外で地表から見上げたタワーは、やはり巨大だった。そして自分の謎の答えはその頂上にある。あの男が、全てを知っている、全てを握っている。ならば問わねばなるまい。

「いつかは答えて貰うぞ御中……………僕がなんなのかを」

第二十一話 妄想（前書き）

なんか寝ぼけてたら、無意識に指が動いてこんな事に――

おや誰か来たようだ。

第二十一話 妄想

「えーっと、ちょっと間居候いそする事になったNo.10・細女こめです。
とりあえずヨロシク」

居候いそ。他人や知人、人の自宅に仮住いする者の事を指す言葉である。
その居候が、とうとう我が白羽家にもやって来た。そう、先日の一
件で知り合った細女ちゃんだ。

いつかは来るとそれなりに覚悟してはいたものの、まさか知り合っ
て二日の人間、もといセキレイを我が家に泊める事になるとは誰が
予想出来ただろうか。いいや出来る訳がない、つか出来たら怖い。

「とりあえず諸般の事情がありまして、彼女をしばらく家に匿う事
になりましたのでヨロシク」

「「「「」」」」」

「「（ま……………まさかのノーリアクションだってエ！？）」」

多少は反発喰らうかと思ってたのに、一切反論がない。むしろ反応がない。

これは怖いぞ、ゾツとするくらいに怖いぞ。まともなリアクションされないのが一番怖いんだよ！

いつも通りにただいまと言って、適当に雑談から入り、鉦女ちゃんを紹介。別に下手こいた覚えはないよ？ 鉦女ちゃんが言うには魅弦は幼なじみらしいし、せめて『久しぶりー！』な会話の一つや二つがあってもおかしくないんじゃないかと思ってた。

だが返ってくるのは視線ばかり……………それも『なにコイツ？』みたいな腫れ物を見る目。

「（ちよっ、鉦女ちゃん！ 魅弦と幼なじみってひょっとして嘘！？ お兄さんが許す、言いなさい！）」

「（う、嘘じゃないってば！ あたしは魅弦とは神座島かみくらじまにいた頃いずもころからの知り合いだし、その後の色々で出雲荘いずもそうと一緒に厄介になつてたし、とにかく知り合いで幼なじみなんだって！）」

クワツ！！とアイコンタクト会話も虚しく、リビングにはただただテレビの音声が響くのみ。

「黒人さま」

スコオオオオオオオオオオッ！！！！！！！と、飛んできたナイフが壁に突き刺さった。

冷や汗、なんてモンじゃなくてこれはそう——魂が汗になって流れていくような感覚。鈿女ちゃんも一緒に、身体が心なしに震えているのが分かる。

「（プルプル）ナ、何ノ真似カナ此ハ」

「は、ハイイツツツ！！！！！！」

「浮気……………ですか？（旦那怒）」

「めっ、めめめめめめ滅相も御座いません！セキレイ全羽との殺し合いや世界大戦を起こす覚悟はあっても、皆様を裏切つて浮気をするような勇氣なんかは一切合切粉微塵も御座いませんマスですよハイ！！！」

「いや逆にそっちの方が勇氣いるんじや」

「うずめ」

「ほひッッッ！！！！؟؟？」

今度は細女ちゃんに嫉妬の矛先が向けられた。つか呼び捨てかよ仲良いなオイ。

細女ちゃんは細女ちゃんデビックリし過ぎて声裏返ってるし、態度もなんだか奇抜になっている。

「貴女に問います。決して嘘は吐かぬ様に」

「は、ハイッ！」

ギラリと鈍い光を放つ魅弦の瞳。

有無を言わせぬセキレイ問答の始まりであった。

「問・壹。貴女は黒人さまと友人以上の関係は持っていない」

「い、イエス」

「問・貳。貴女は黒人さまよりも必ず自身の葦牙を優先する」

「や、ヤア」

「問・参。貴女は黒人さまに——恋愛感情は抱いては
いない」

「圧倒的イエスと言え！ 鋤女ちゃんそれだけは断固としてイエス
と言ってくれエッツ！……！！！！！！」

「んー……………ハーフ and ハーフ、かな」

「黒人、さ、ま」

「く、ろ、と」

「……………クロ」

「……………南無三。さよなら黒人、俺はお前を忘れない」

一分後、ソファで裸にひん剥かれてビンタされまくった僕がいた

「うずめ、本音を言いなさい。今なら許します」

「だ、だからアンタ達から黒人君は取らないってば！　あたしの葦牙と本妻は千穂なの！！」

「……………嘘、ない？」

「あたしはあんまり嘘は吐かない！」

「あんまりなのね……………まあいいや。ほら鵠、動かないの」

「ん……………」

ワシャワシャーツ！　と、力強く鵠ちゃんの頭を洗う煌刃さん。当人はなんとも気持ち良さそうです。

浴室前に地天さんを警備に当たらせて、現在女子全員で夕方のバスタイムをお楽しみ中です。

「ふおお……………メロン（。□。）」

「へっへー、おっきいでしょ？　ほればふばふーってね」

「んぶうー……………（至福の表情）」

「ケツ、デカけりやいってモンじゃないっての。大きさ、形、感度、肌艶！ 全てが合わさってこそ真のおっぱいである！——

——と黒人が言ってた」

全くあの人は……………一度や二度では反省しないようですね。なら今度は——

にしても、やはりうずめの胸は異様に成長しますね。妬ましい、妬ましいったら妬ましい。

日に日に私も成長してはいるものの、それでもまだ85……………クツ、巨乳には『巨乳になる遺伝子』でも組み込まれているのでしょうか。あるなら是非とも私に入れて下さい是非。

「にしても魅弦、アンタの葦芽ってスゴいね。セキレイ相手に全くビビらないし、メチャ強いし」

「ええまあ、黒人さまですからね」

「あ、確かに。黒人だからビビらないのかもしれないね」

「……………クロ、闘う事、楽しんでる。也^{なり}」

「おつ、久々の『也』いただき。お返しに背中をゴシゴシだー！」

「ふおお……………気持ち良い。也」

だが改めて振り返っても、今まで黒人さまが誰かに勝負を挑まれて逃げたところは見た事がない。

いや、逃げようという気がないだけなのかもしれない。あの人は今を、一瞬を楽しみたがるから。

快樂主義者、とは言えないが、楽しめるモノは徹底して楽しみ尽くす。それが白羽黒人の主義だと私は考える。目の前にゲームがあればすぐにプレイするし、美味しそうなモノがあるなら食べて自分で作る。

なにはともあれ、大抵は自分を中心に考えるのが白羽黒人なのだ。その辺りは、烏羽ししゅうと似ているのかもしれないですね。昔はそうでした、今は――よく分からない。

「あ。ねえねえ、ちなみに気になってただけだよ」

「なんですか、しょうもない事を聞いたら怒りますからね」

「黒人君ってさ。この中で誰が一番好きなの？」

『黒人君つてさ。この中で誰が一番好きなの？』

「ぶツツツ！！！？??」

なつ、ナニ言い出すんだあの新規居候は！^{はつとで} それは絶対禁句だろうが！？

我が家の禁止事項、全体的にまとめるとそれは『独占的な競争意欲の刺激』である。

“アレは自分だけのモノ” だの “ナニナニだから自分一番” だのと
言った事はココでは禁止されている。

これは黒人が決めた事ではなく、黒人の両親が昔から教えていた事であるという。曰く『独り善がりの強さは誰より弱い』と、若干七歳のガキに教え込んでいたらしい。英才教育も目じやないスパルタである。

無論黒人はそれを俺達にも教え込んでいる。抜け駆けや独り占めはダメだぞ、と。

だが今のはアウトだ。完全に細女のミスだ、これで我が白羽家のバ
ランスは崩れてしまった。

『皆は平等』という皆の価値観が崩れ去る音が心で聞こえる……

……………そしてドアの中からバタバタという物音。慌てて浴室のドアから身を退かす。すると――

「いいですか、唇を一番に奪った者が勝者です」

「抜け駆け以外はなんでもアリ、戦闘もアリ」

「……………ルール無用。也」

黒のストレート、ウェーブがかったブラウンのロング、栗色のセミロング。

どれも少し濡れている。だが三人はそんな事は気にもせず、タオル一枚でリビングへと向かった。

「あちゃー……………なんかマズイ事しちゃった？」

「無駄に競争意欲刺激すんじゃないよ、まったく……………」

「ていうか、今までこの話題が出なかった事にあたしはビックリしたり」

「お前らバスタオルで出歩くなよ、恥じらいがねえのかよ」

「いやあ、見られて恥ずかしいモノなんて持ってないし」

「うちはまだマトモだったか……………」

「ハッ、殺気!？」

と思ったが、ただの気のせい――

「あ、脚があ……………」

「しっ、痺れるウ……………」

「……………助け、て……………也」

――では無かったようです。いや、“無い”とは言い
きれないかな。

眼前にはフローリングに正座する三人娘。ヒロインズ 余程長時間座っていたの

か、苦悶の声を上げている。

三人とも何故か“不埒な”^{ふらち}バスタオル姿で、ソファに座する僕は更に不埒なトランクス一丁。そういえばと、鉦女ちゃんの失言により襲われて脱がされたと数十分前を思い出す――おのれおっぱいめ。

「で、君らは何を理由に正座してるのかな？」

「そ、それはですね……………」

斯々（かくかく）然々（しかじか）ダイハツなんたら♪

「ふうん、鉦女ちゃんがねえ。で、地天が能力で今しがたまで無理矢理正座をさせていたと」

「とっ、とりあえず正座を崩しても宜しいでしょうか……………痛くて痛くて仕方ないんです」

「うん？ んふふー……………だめ」

「なっ！ この鬼、ドS！ あたしらを助ける気は無いのか！」

「……………ほう、煌刃よ。君は僕をドSと呼ぶのか。ならば教えねばなるまい、ホンモノのドSを」

「え、いやあたしはノリで言っただけで——やつ、ちよつ待て」

「ご想像にお任せします。エロいので見せられないよ！」

「うあ、ひ、あ……………うう」

「ククク、どうした。（足の裏を）くすくす擦って（指の）ワレメをこす擦っただけだ。まだまだイケるだろう？」

「も、許、ひ……………堕ち、るウ……………」

「ふんっ、いい身体をして堪え性の無いヤツめ……………なら次は鵒
お前だア」

だが鵒はいない。煌刃に構いまくってた隙に逃げられたみたいだ。
代わりに綺麗な字の置き手紙が一枚、そっと置かれていた。『――

――さらば。僕はしばらく旅に出る。也』――ほう、
面白い。

「脚が痺れているのに、ただの子供がそう遠くに逃げられはしない
……………」

×

×

ハア……………ハア、ハア……………

「鵒よ、やアはり此処にいたか」

「ぴいつツツ！！！？？？」

ガチャリと開けたのは、M・B・I・製・業務用ドラム型洗濯機のフタである。

中には鷓が膝を抱える形ですっぽりと収まっていて、逆に他に逃げる事を考えない隠れ方だった。

「自分が遠くに逃げたと思ったから、此処に隠れたんだろうが……
……甘アい。僕は二次元の化身、君のような子供が隠れそうな場所など一目瞭然、刹那の閃きよ」

「あ、あ………あぁ——」

「丁度いい。元から痺れているのに今度はその体勢だ、まだ痺れているんだろう？」

中から僕を見上げる鷓に対して、ニタリと下卑た笑みを浮かべる。洗濯機の中の鷓は、徐々にガタガタと震え始めている。痺れが残っているからか、時折ピクピクと身体が反応していたりもする。そんな彼女に僕は——

「僕の責めに耐えられたら、キスしてやる」

ガチャリ……………ギイイイイイイイイ

「お待たせた、魅弦ウ」

震えてはいけない……………恐れているのを悟れたら最後、私は死ぬ。

そう腹をくくり、必死に痺れる脚を耐えながら黒人さまが眼前に来るのをひたすらに待つ。

そして現れた——彼の腕には、なんとも言えない愉悦の表情を浮かべる鵜ちゃんがいた。

「では魅弦、君が最後だ……………覚悟はいいね？」

「ど、どうかお許しを……………今後は二度とこの様な真似は致しま

せん。何卒お許しを……………！」

身体は動かせないから、上半身のみを動かして謝罪する。
頭を下げて、膝に手を添え、完全な服従と懇願の体勢。これ以外に
出来る事など何もない。

「ふうむ……………よかるつ、赦す」

「ッ！ では！」

「だが弄る」

「ぎツツツ！！！？？？」

コツンと、爪先で私の膝を小突いた。その衝撃は、言うまでもなく私の脚に響く。

衝撃が痛み、痛みは瞬く間にあの瞬間の“言い様の無い痺れ”が身体中を駆け巡る。痛いのか気持ち良いのかも分からない中で、私は見下してくる黒人さまを見上げる。

「いい表情だ魅弦……………もつといい顔を見せておくれ」

「く、黒人、さま……………何故」

「うん、何故と？」

「何故この様な、酷い、事を……………」

「そうだね」

指が動けない私の背後、足の爪先へと迫る。
黒人さまの顔は鼻先に、互いの吐息がかかりあう距離で、彼はこう
言った。

「愛してるから——それに他ならないからさ」

「ぶるおおああああああッッッ!!!!???」

ドゴオッッッ!!!!——と、咄嗟に自分の顎を殴ってしまった
……痛エよクソッ!
ヤバい夢を見てしまった。つい反射的に自分の目を覚まさせようと、
ワリと本気で額を殴った。

……が、あんまり変わらんみたいだ。ただ痛いだけで、現実に

はとくになにも起きてはいなかった。ただし、僕が全裸にひん剥かれていたのは事実である。今もリビングのソファアーの上で裸一貫だ。

「い、いかん……………危うく夢精してしまうところだった。二十歳にもなって恥ずかしいぞオイ」

時計を見る。時刻は夕飯時、またはテレビで談笑タイムである。しかしリビングには僕だけ、なんとなく携帯を確認すると地天からメールが一通。

『アイツら全員風呂だ。逃げるなら今だぞ——ガンバ』

アイツ、いいやつだったのに……………と、過去形にしたなら殺されそうだから口にしない。
とりあえず服を着て、キッチンに向かう。食材は……………ああ、珍しく冷蔵庫に食材が全く無いや。

「……………逃げるついでに買い物行こう」

新規居候のデビュー初日は、なんとも言い難い——度し難い流れで始まった。

第二十二話 己とは何ぞや（前書き）

のーんびり書いてた。

たぶん内容グツチャグチャだと思う。

そしてF a t eマジヤベエ……………なんだかんだ今期N o . 1確定
だろアレ。

なによりキャスターコンビマジで狂気だったwww
アサシン先生マジ先生だったし、ギル様マジギル様だったし。イリ
ヤとウェイバーがせめてもの救いだったか……………しかしロリの後
にアレはねーよ（涙）

あとホライゾンがダークホースだったり、ベン・トーが初見殺しだ
ったり、まじこいが謎だったりと、なにかと波乱の秋である。今の
ところこの四作を中心に観てる感じ、寝る間を惜しみながら……………

……………

——— そんな、十月半ばの事だった。

第二十二話 己とは何ぞや

とある家族がいました。父と母と、一人の息子の三人家族です。父と母は共働きで、ともに大手企業の重役という裕福ながらも多忙な家族でした。

誕生日に両親が揃った事は今まで一度もなく、よくて生まれた年と翌年の一歳の誕生日くらいのものだと息子は後に思い返す。だが息子はそれを咎めようとはせず、寧ろ両親を鼓舞し励ましていました。それは全て家族の為であり、自分を裕福に育てようとする親なりのちよつと変わった愛情表現なのだと、息子は何となく悟っていた。出来れば一緒にいて欲しいのだが、我が侘を言う勇気がありませんでした。

寂しくはないか、と聞かれれば寂しい。が、辛いかと聞かれればそれは違う。

息子は都内の中央に立つ大きな自宅に、一人ぼっちではなかった。

たまに遊びに来る母方の叔父が、息子の遊び相手になってくれたからだ。どんな文句も我が俣も、叔父はなんなりと叶えてくれたのを息子はよく覚えていた。金銭も、遊びの面もだ。

それだけじゃない。勉強も、遊びも、世情も、叔父は息子に教えられる事は全て教えてくれた。

息子は叔父を心底好いていた。単なる叔父と甥なんて域じゃなく、もはや父と子、兄と弟のように仲睦まじい関係であった。両親も、息子が叔父といえるのを知って安心して毎日を過ごしていた。

だが安心は、一度の事故で不安と悲哀に変わる。

「討伐対象のリスト？」

「うん。あたしが氷我から渡されてた討伐対象セキレイのリスト。前にメルで送られてきた」

スチャツと開いた携帯には、見せるの前提で既に画面が用意されていた。

セキレイとその葦牙、それらが一件一件別々に送られている。写真は勿論付いている。

「どれどれ……………ほう、結構数があるね。十羽くらいか」

「たぶん邪魔なヤツを先に潰すか、服従させようとか考えてたんだろね。今写真見せた三羽は“終わった事”だけど、これは別。黒人君倒したら行く予定だったセキレイの写真」

ピピピと素早く操作。そして表示されたのは、いかにも弱そうな金髪ののセキレイだった。

その葦牙も並んで写っていて、葦牙はなんというか……………
…そう、童顔だった。

「No.95・久能くのと葦牙の鷗しぎハルカ。帝都を脱出しようとしてるペアだよ」

「脱出ウ？」

なんと、それは驚いた。まさかこの期に及んで帝都を脱け出そうと

考えるヤツがいるとは。

どうでもいいからあまり触れてはなかったが、帝都は下手な城よりずっと堅牢な城塞と化している。

つい先日移行した第二段階で、この帝都の“セキレイと葦牙”に対する警備はおよそ二倍近く強化された。だがそれは他国や他社からの攻撃に対してではなく、セキレイと葦牙の『内からの脱出に対して』である。つまりは檻の代わりなのだ、この街は。

陸は勿論の海に空、果ては宇宙まで手が延びているとか何とか。武力に経済に政治と全般的に。

「でね。あたしも噂でしか聞いた事ないけど、M・B・I.には直属のセキレイがいて、鵲鴿計画に反対的なセキレイや葦牙を討伐するのが主目的の部隊がいるんだって。確か名前は――
懲罰部隊」

「懲罰部隊……………御中や魅弦から聞いた事はある」

「氷我情報だと『M・B・I.の狗』とか『紅・蒼・黒の鵲鴿』とか『殺戮部隊』とか、とにかくいろんな通称があつて、どれもよくないのばっかなんだよ。とにかくメチャクチャ強いらしくて、会ったヤツは皆殺られるって話。だから間違いない、この二人は殺られる」

黒―――その言葉に、思い当たるセキレイがいる。いや、彼女以外思いつかない。

あの日、M・B・I. 本社の治療室で魅弦と会話した後。御中と一緒に現れた、あのドス黒いセキレイ。

銀灰色の長髪に、濁りきって濁りしかないような瞳、細い四肢と、

狂人的な笑み、そして長刀。

あれ以来一度として出会^{でくわ}す事のない彼女。いつでも死臭を撒き散らしていそうな彼女。殺氣と狂氣を振り撒き、誰も彼もを巻き込んで皆殺しにしてしまいそうな彼女。僕と殺し合いたいと言った彼女、その名は――
烏羽^{からすば}。

「僕は……………黒い鵲鴿と会っている」

「……………マジで？」

「はい、マジです」

しかし面識はたったの一度、彼女が覚えているかどうかは分かったモンじゃない。
だが覚えているならば――次に会えばおよそ必ず、闘う破目になる。殺し合いだ。

「とにかく――氷我が僕の目論見^{もくろみ}通りに動くなら……………」

「目論見？　なにか作戦でもあんの？」

「ある。氷我という葦牙とその一味^{セキレイ}を倒す、絶好の理由と機会がね。その為には久能ちゃんと接触する必要があるんだ……………」
細女ちゃん、その久能ちゃんは今は何処にいるんだい？」

「確か……………北方面のと真ん中。出雲荘からは遠いけど、佐橋ち

「やん達の圈内かな」

「北か……………」

紺女ちゃん曰く『自分が北でセキレイ狩りをしていたのは、氷我が自分の負債を最低限にする為』。

しかし、北にはそれほど有力なチームがいただろうか。南には御子上、東には氷我、詳細不明の西。

思い返しても北エリアにいるのは焰君に瀬尾くん、せいぜい皆人くと紫ちゃんに——はないか。

だって彼どう足掻いたってヘタレだし、彼のセキレイはうち二羽が非戦闘向けだ。結ちゃんと月海ちゃんが強いのは認めるが。紫ちゃんはあんまり闘いには興味なさそうだし、椎名も闘いは苦手そうだ。焰君はセキレイの守護者^{ガイディアン}としてある程度は名前が知れてるし、なにより自身もセキレイだから調べればすぐに分かる。瀬尾くんはあんまり闘いには興味が無さそうだが、実力は確かだ。なんせ、あの双子と婚いでるんだから。

「紺女ちゃん、西と北の有力者って誰？」

「西は確か真田^{さなだ}って男だったと思う。セキレイの持ち数は分かんないけど」

「西は分かったけど、もう一つの北は？」

「……………」

「……………北は？」

「えっ、きつ、北！？ あ、いやー……………あ、えと、それはちょっと言えないかなー。アハハ（汗）」

「……………言いなさい」

「あ、えとね？ あたし実は口止めされt」

「言いなさい」

「いやだからあたしは迂闊に喋った」

「言え。さもなくば昼・夜食と睡眠時間を嫌がらせのように削つてやる」

「ぐぬぬぬ……………」

「可愛い顔ネタは効かんよ。言わなければ——おやつも抜きだ」

「ハイッ！ 北には『般若』^{はんじゃ}と呼ばれてるヤバい人がいます！ 時々脅されますッッッ！！！！！！！！！！」

『般若』に脅されます——あ、なんか分かった気がする。でも言ったらなんか不幸になりそうな気がする……………やめろ、この事は意識から外すんだ僕よ。これは恐らくだが、そのうち何かの機会に分かるだろう。それまでは知らなくてもいいだろう。

「と、適当に北の情報は手に入れた訳だが……問題は“いつ”“どれ程の数で”来るかだね」

「……………まさかとは思うけど、氷我がこのままセキレイ狩りを続けるとか思ってる？」

「思ってるよ」

会った事はないが、氷我は非常に自意識過剰なうえに、自分に多少なり酔っているナルシストだ。

自身の能力と才能、権力と名声を持ったが故か。氷我は恐らくだが、僕への挑発としてセキレイ狩りを続けるだろう。少なくとも、僕に関して何も調べていないなんて事はない筈だ。

そしてそれを止めようと、大々的に正面に僕が乗り出したところで、自身のセキレイをフル投入して一気に殲滅、とかだろうか。とりあえず一方的にはなく、『自身のセキレイに手を出された』という大義名分が欲しい筈だ。それなら鵲鴿計画に則^{のっと}って戦うことができる。

「なら、氷我はセキレイ狩りを続ける。それを逆に利用させてもらう事にしよう……………僕は知略謀略の探り合いは苦手だが、意地の張り合いは負ける気はないんだよ」

「え、なに？ 『男には、負けられない時がある』——
——ってヤツ？」

「みたいなモンさ。さて、僕はまた技の鍛練でもするよ」

「なんだかんだ話してたらもう早朝かあ…………ふああ、ゴメンあたし一回寝るわ」

「そ。お話ご苦労様、しっかり寝るんだよ」

昨晚二時、ふと部屋にやって来た鈿女ちゃん。その話題は自身の悪行についてだった。

罪滅ぼしでもあるのだろうが、なによりこれ以上氷我に好き勝手させるのが癪しやくなんだろう。

千穂ちゃんを人質に、鈿女ちゃんを利用して弱者をいたぶるような真似を平気で行い。他人を利用するだけで、自分は影に隠れながら常にほくそ笑んでいるようなあの男が許せない。

面識は無くとも、僕はとりあえず氷我を叩きのめしたくなってきたトコだ。

庭に出て身体をほぐし、まずは虚刀流の技の鍛練から。

キレのある体捌き。突き、袈裟斬り、斬り上げ、一刀両断。一通りを踏襲する。

全刀流の刀捌きを練習、あえて“薄刀・針”ではなく普通の刀でするのがミソだ。次に先日使った風を操る『風の道』《ウイング・ロード》の訓練に入る。掌で風の叩きつけるように――
ん？

「
僕はなんで一度も練習つかったしてない技を使えたんだ
?」

「柿崎、では手筈通りに頼む」

「はっ」

不快だ。不愉快極まる。あの男――白羽黒人。

病院に忍び込み、No・10の葦牙を誘拐したのは間違いなくコイツだ。それ以外考えられない。

身内にすら自分の事を話さなかったNo・10だ。おそらく戦闘中になんらかの理由で正体が判明、それをきっかけに救援を求めたんだろ。白羽黒人が我流の格闘技を使うのは調べていたからいいが、まさか武器も使えるとは――それにしてもこの報告書、メチャクチャだ。

「伸びる刀に瞬間移動、斬撃を撃ち出す、レーザー……………」
…本当に人間の技か？」

監視に付けたセキレイですらも、白羽黒人を人間とは思えなかったそうだ。

曰く『自分達とさして変わらないか、それ以上の化け物』――
全く以て同感だ。

「大義名分……………か。まあいい、向こうが私に釣られるならそれも良し。いずれは闘うんだ、今か後かの違いしかない。なら先に潰させてもらおうか」

とりあえずエサは――No・10に出していた情報の
個体、No・92が丁度いい。

私がこの個体を狙うと踏んで調査に踏み出したところを、全羽で袋
叩きにする。

元々この鵲鴒計画に正直に従ってやるつもりなど無いのだ。なら最^ハ
初^ナから一対一で勝負させる必要などない。それに、私はやられたま
ま引き下がるような安いプライドは持ち合わせてはいない。

だから、最低限で最高の仕返しをする。

前回敗北した十二羽全てを使い、No・10の持っていたリスト全
てのセキレイを襲撃、可能ならば撃破。白羽黒人が現れたのならそ
ちらを最優先に討伐する。厄介者は先に潰そう。

「運が良ければ、御中お抱えのセキレイも倒せるかもしれないな…

……懲罰部隊、か」

噂では最強のセキレイを集めた、対セキレイの駆逐部隊と聴く、武
器も数も実力も不明の存在。

だが、どの噂でも必ず『紅』『蒼』『黒』の三色が挙げられる事か
ら、おそらく三羽であろう。

「フツ………これが上手くいくなら、私は皮肉にも神に愛されて
いるという事になるんだろうな」

神を疎んじる私が神に愛されている、か………滑稽だな。だがあ

の怨敵たる御中を……………M・B・I・を潰せるなら、私は神にも
悪魔にも頭くぶを垂れよう。それが私なりの、この計画に対する“覚悟”
”というモノだ。

「白羽黒人……………悪いが、早々に退場してもらおうか」

現在、リビングのソファーにて放心&思考中。
すると隣に鵜が来たが、あえて無視をする。

「……………クロ、なにしてる？ 也」

「うん？ 何をしてるかと聞かれれば……………ぼーっとしながら
考え事してる」

「……………考え事？」

ゴメン、反応しちゃった……………クソ、yesロリータン
oタッチの筈なのに。

今果てしなく頭を駆け回るのは、先日の病院襲撃事件の際の事で、
つい今朝は早朝の事である。

ただの一度も鍛練をしていないのにも関わらず、僕は『風の道』を
使えた……………この事実。

自慢だが、僕は記憶力はいい方だ。一年前くらいの事なら全て覚えて
いる自信もある、禁書目録^{インデックス}ほどじゃないがね。だがここ一年前後
の記憶を洗っても、僕が『風の道』に関して鍛練をした覚えは全く
無い。

そもそも、この一年前後に『エアギア』に関しては一切触れてはい
ないのだ。コミックもアニメも、その情報についてもだ。それど
ろか、自分が使った事で“そんなのあったなあ”と思い出したくら
いなのだ。

だが意識して『風の道』を使おうとすると、何故かあまり使えない、
使えなくなる。

掌を叩きつけるように——とイメージするが、全くの無理。そ
よ風すらも起こらない。

拳圧で風は起こるが、風を意識的に起こすのは何度試しても無駄と
知る。だから次に『我王双龍炎烈掌^{がおうそうりゅうえんれつしょう}』もとい気功の一種である『鍛^{たん}
針功^{しんこう}』を放とうとするも、これも失敗。『肆の奥義・柳緑花紅^{りゅうりょくかこう}』や
発勁^{はつけい}の超劣化版しか出せない。

「（自身が認識していない技を何故か体得し、あまつさえ実戦に投
入……………だが僕自身には記憶は一切なく、再度使用する事は何故
か不可能——……………訳が分からんよ）」

今更この二つや他の技については鍛練する気はないし、北斗関係の技は気まぐれ程度のモノだ。

つまるところ近接系サイコーである。『レベルを上げて物理で殴ればいい』もいいところだ。

虚刀流、全刀流、昔ながらで鍛練していた中国拳法、空手、柔術、合気道、ムエタイ、ボクシング、サバット、カポエラその為の武器術や格闘技などが僕の主流。『刀語』^{カタナカタリ}の忍法は優秀だから昔から“モドキ”の練習はしていた。

「鵠」

「???」

「鵠には……………僕はどう見える？」

「……………クロはクロ。也」

「ん……………ハハツ、確かにそうだ。僕は僕だね、そりやそうだ」

僕は僕、自身はどこまで行っても自分でしかない。

我^がであり己^こであり一^{ぼく}である。それが白羽黒人だ。

流派は主流は虚刀流、サブで全刀流、その他真庭忍法及び世界の格闘術。

ビジュアル系っぽい顔立ちと、肩にかかる程度の黒髪と黒い瞳、身長は187cmで72kg。体重の殆どは筋肉が占めている、細くガッチリした身体。自宅は帝都内タワー付近の大豪邸、地元じゃ有

名な豪邸。

四月に魅弦との運命的な出会いを果たし、めでたくなのか葦牙となる。

葦牙になる前に既にセキレイを一羽撃破、殺意をもつての戦闘であるため見事に機能停止。

その後M・B・I・本社内の医療施設で二日間の睡眠、目覚めた後に高美さん及び“我が敵”御中から鵲鴿計画についての講義を受け、自宅へ帰宅。我が家の前で、これは本当にめでたく魅弦を羽化させた。

五月の半ば、魅弦との初デートに臨む。とても楽しかった。

その帰宅直後、自宅前で二羽目のセキレイ・煌刃と出会う。一晚の試合のちに和解、イチャイチャとあれこれがあつてめでたく羽化させる。我が家に足りない、家事要員の増加に胸が震えた瞬間だった。

その後の五月は末、地天と鵜に出会う。二羽同時に、その他も交えて。

地天とは腕試しと噂になっていた『セキレイ殺し』の真相を確かめるために手合わせ、隠し玉の多さで僕が勝利を納める。その後突如現れた南の御子上のセキレイ達に襲撃を受け、魅弦のサポートを受けながら地天をノリで羽化させ、三羽を撃退。その後鵜も羽化させ、合計四羽のセキレイを抱える事になった。

そうして六月の末、今に至る。

そして僕は彼女達セキレイではなく、自身に向き合わねばならない。

「クロ」

「うん？」

「稽古………したい。也」

「稽古、か………よろしい。じゃあ着替えて庭に集合だ」

「ブ・ラジャー！ 也」

オチがしんちゃんってどうなのよ………まいつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9062u/>

セキレイ 翼と拳と恋物語

2011年10月12日02時22分発行